黄昏に香る音色

dig

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黄昏に香る音色

【Ｎコード】
Ｎ１０９１Ｉ

【作者名】
ｄｉｇ

【あらすじ】
【音楽をテーマにしたストーリー】黄昏の時。夕暮れは…すべてを赤く染めて…夢か恋なのか…わからなくする。でも、迷わないで…あたしの恋心。渡り廊下の出会いと、一枚のＣＤが、織り成す物語。そして、少女は、旅立っていく。

たれそれ

日が沈み、
夜が支配する…
ほんの少し間の刻…
夕暮れが好きだった。
でも、黄昏という言葉は大嫌い。
テレビのキャスターが、スキャンダルで人気が落ちた役者に対して、
使っていた…
人生の黄昏。
すべてのものを、万遍無く赤く染める夕陽に対して、そんな扱いは、
ひどいと思う。
でも、あたしは知らなかった。
黄昏という言葉が…誰それからきてることを…
夜になる前、
夕陽に照らされ、
顔が、誰かわからなくなるから…

そこにいるのは…

たれそれ…？

誰それ▬▬黄昏。

黄昏の中の憂い

体育館と南館をつなぐ、広い渡り廊下に向う為、
香月明日香は全力で、走っていた。
いつもより遅れている。
渡り廊下は正門から離れている為、放課後はほとんど人が、寄り付かない。
でも、そこからは、夕焼けに照らされたグラウンドを、一望することができた。
部活を眺める為。
特にサッカー。
躍動するリズムは、どこか音楽を想像させた。
いつのまにか興味を持った…音楽。
明日香は、グラウンドの動きを眺めながら、
リズムの中から、メロディを探すことが、日課となっていた。
校舎内を走りぬけ、

激しい鼓動を抑えながら、渡り廊下に着いた。

校舎から飛び出すと、

夕焼けに染まった体育館と、目の前に広がるグランド。

その少し向こうに広がる山々さえ、赤い。

美術の授業の時、明日香はこの景色を描こうとしたけど…描けなかった。

いつも見ている癖に、毎日照らされてる癖に、

単なる赤や、オレンジとは違う光の色…。

いや、光が大気に反射して、色を出しているなら…

空気というキャンパスに、太陽が塗った色という光。

夕陽に照らされてる自分も、キャンパスなんだ。

明日香は、大きく息を吸い込んだ。

目をつぶると、聞こえてくる…

グランドに響くバットの快音に、駆け抜ける足音。

すべてが想像できる…

いつもと、変わらない風景のはずだったのに。

目を開いた明日香の、動きが止まってしまう。

いつも一人のはずのその場所に、誰かがいた。

男の子。

吹き抜ける風と、照らす夕日が、男の子を…淡く浮かび上がらせていた。

それは……

明日香にとって、幻想的で、近寄り難く感じさせた。

男の子。

手摺りの佇む男の子の周り…そこだけが、周りのオレンジの光より、さらに濃く…

まるで、夕陽のスポットライトに照らされてるように、輝いていた。

それは、手を伸ばせば、掴める…夕陽そのものに、思えた。

男の子の表情は、わからないけど、

なぜか…

とても切なく、

泣いているように感じた。

それは、もうすぐ沈んでしまう夕陽のように…。

消えることを、おそれているみたいに。

夕陽はまた、明日もあるというけど…、

昨日と今日が同じとは、限らない。

ただ…男の子は、グランドを見つめながら、悲しげだった。

だけど、その悲しげな姿に、

どこか切なさと、美しさを、明日香は…感じ取っていた。

ほんの少しだけでも…立ち止まってしまった自分に驚き、戸惑いながら、

明日香は、男の子から少し距離をとり、

グラウンドを、眺めることにした。

渡り廊下は大体、マンションでいうと三階くらいの高さがあり、広々としたグラウンド上の人々の動きを、眺めるには、ちょうどよかった。

歓声が、一際熱くなる。

サッカー部のエース…高橋にボールが、渡ったからだ。

明日香とは、同じ学年であり、クラスはちがうけど、その人気、知名度は…学校中で、知らない者は、いないくらい有名だった。

リズムが変わる。

明日香は、古くて少しガタガタする手摺りを引きちぎるような勢いで、

体をぶつけた。

足元を見ず、ただ相手と、ゴールだけを見据えた動きは、

まるで音の旋律のように、

次々と人を抜いていく。

そして、自らのソロは終わったとばかりに、

隣を併走していた味方の選手に、絶妙なパスを出す。

チッ。

ボールを奪おうとした選手の舌打ちが、きこえてきそうだ。

ソロは終わらなかった。

ほんの少しのアクセント。

ボールは再び、高橋の足元に引き寄せられるように、戻っていく。

甲高い声がした。

ゴールネットが、天に帰ろうとするかの如く、ボールは、ネットに突き刺さった。

高橋の足から、煙でも立ち上っているような…錯覚を覚えるシュート。

ゴールキーパーは、一歩も動けず、しばらくして、推進力を失ったボールが、キーパーの足元に転がった。

高橋は、シュートが決まっても、当然とばかりに、表情を変えず、クールにゴールに背を向けて、歩き出す。

やることは終わった。

その姿は、自分のパートは終わったからと、

観客に背を向けて、ステージを去る…帝王マイルス・ディビスを彷彿させた。

マイルス・ディビス…。

明日香の目指す…音を奏でる音楽家。

クール過ぎだ。

と…普段の明日香なら、知ったかぶって、分析するところだが、

「あっ…。ゴール…決まったんだ…」

シュートが決まったことさえ、認識できなかった。

見ていても、見ていない。

（どうしたんだ！あたし！）

自分の頭を、叩いてしまった明日香は、

近くに男の子がいることを思い出し、手を止めて、

徐に…隣を見ようとした。

グラウンドでは、

高橋が、ハーフラインに戻るところだった。

明日香の視線が、男の子をとらえようとした瞬間、

校内にチャイムが鳴り響き、部活の終了を告げた。

グラウンドから引き上げてくる高橋と、一瞬、

明日香は目が合ったように感じた。

首をひねり、

もう一度、高橋の方を見たけど、

もうこっちを、見てはいなかった。

明日香は、グラウンドにある時計に目を移した。

（やばい！）

明日香はいきなり、慌て出した。

（五時半だ！）

手摺りから慌てて、体を離した明日香の目が、

勝手に、意識を離れて、男の子を映し…明日香の記憶に、焼き付けようとする。

クローズアップされたかのように、夕陽に照らされ、あどけなさが残る…

少女のような綺麗な横顔が、明日香の頭に、飛び込んでくる。

睫が長く、憂いを帯びた表情。

明日香の心の奥が、観察し、報告する。

この男の子は…特別だ。

戸惑い、惹かれる明日香の目が、男の子から離れない。

その刹那、

古い…手で回す映写機が、映し出す映像のように、スローモーションで、

男の子はゆっくりと、明日香の方に、顔を向けた。

綺麗な少年…から、明日香に向けられた

やさしい眼差しと微笑み。

先ほどの悲しげな表情とは違い、…とてもうれしそうに…。

明日香は驚きながら、

映写機の回りが、突然よくなった…早回しの映像のように、

明日香の意識の上で、再生される。

（なんて…綺麗な人）

明日香の全身が、駒送りのような動きとなり、

スローモーションのように、渡り廊下を後にした。

温かい場所

渡り廊下から、南館に戻らず、グラウンドのそばにのびる階段を、小走りで駆け下り、

ドキドキしている心臓を押さえ、一度深呼吸した明日香は、渡り廊下の下をくぐり、

正門まで歩こうとする。

真下から、渡り廊下を見たけど、少年の姿は見えなかった。

角度の問題か。

明日香は諦め、とぼとぼと歩き出す。

俯き…正門までの真っ直ぐな１００メートル程の距離を歩く。

「遅い！」

遠くの方から、声がした。

顔を上げた明日香の視線の先に、正門にもたれる少女がいた。

親友の里美だった

ショートカットの髪に、男の子のように、精悍な顔立ちが、

思いっきり、明日香を睨んでいた。

「いつもより遅いぞお。ああ…親友が、男に見とれている間…健気に待つア☆タ☆シ！なんて…かわいそうなの」

大層な物言いに、明日香は呆れた。

つかつかと早足で、里美に近づき、

「あんたも、部活の帰りじゃない！」

里美は苦笑すると、明日香を見ずに、呟いた。

「高橋君…いた？」

明日香は、里美の微妙な変化に気づかない。

「いたわよ。シュート決めてた」

「ふ～ん」

里美は、正門から離れると、歩き出した。

遠く夕陽が沈む前に、一段と輝いていた。

駅までの道のりは、遠い。

一本向こうに、土手があり、階段を登ると、川にそってのびる道がある。

テニス部などが、走り込みをする場所だ。

その土手から、風が吹き込んでくる。

風に、髪を靡かせながら、明日香と里美は歩く。

タイミング悪く、踏み切りが閉まった。

2人で、踏み切りの前で待っていると、

里美が、ぼそっと呟いた。

「今日…いくんだ…」

電車が目の前を通った為、明日香には聞こえなかった。

「好きなんだ…」

次の電車が、通り過ぎるまでの、少しの間の中、

里美はまた口を開いた。

「えっ？」

微かに聞こえた…好きという言葉に、

明日香は、里美を見た。

里美は、明日香を見ない。

次の電車が、通り過ぎるまで、里美は前を向いたまま、

決して、明日香を見ようとしなかった。

少しして、次の電車が前を通り過ぎようとした時、

「音楽！」

里美は、大声で叫んだ。

電車が通り過ぎる風と、踏み切りが上がる音に、

里美の言葉は、かき消された。

踏み切りが開いた。

多くの人が行き交う。

歩き始める２人。

明日香は、並んで歩きながら、里美の横顔を見つめた。

淡々と歩く里美。

ふっと明日香は、後ろからの視線を感じた。

振り返ろうとした明日香と

里美を、自転車が追い抜いていく。

すれ違う視線が、

一瞬…

明日香に絡みつく。

じっと、見つめられているように、感じた。

永い一瞬。

「高橋くん…」

里美が、去り行く自転車の背中を見つめた。

「え？」

明日香は、思わず里美の言葉に反応した。

里美の切なく、見送る瞳。

明日香も、高橋が去った方を見た。

すれ違った…高橋のあの瞳。

明日香を見ていたと思う瞳。

それは、とても強い意志をもった瞳だった。

駅についても、里美は、あまりしゃべろうとしなかった。

里美とは、反対の車線に乗る為…明日香は別れた。

俯いたままの里美が、先に電車に乗って、

ドアにもたれるのが、確認できた。

明日香は、手を振ってみたけど…里美は、こちらを見ようとはしなかった。

明日香の乗る電車も来た。

明日香も飛び乗ると、向こう側のドアに走る。

ガラスとガラスの向こうに、里美がいる。

俯いたままの里美を乗せた電車は、発車した。

明日香を乗せた電車も、動き出した。

1駅向うで、地下鉄に乗りかえ、2駅目で降りると、

もう山は、目の前だった。

改札をでてから、2分程…山頂向かって歩くと、

一軒のＢＡＲがあった。

ＫＫ…と書いて、ダブルケイ。

明日香は、クローズと…まだプレートがかかっている扉を開けた。

店は7時オープンの為、店内にお客はいない。

「おはよう」

少しけだるいが、

凛とした声が響く。

「おはようございます」

頭を下げた明日香の向こう…カウンターの中にいる女性。

ショートカットに大きな瞳。

化粧気はないが、

どこか色っぽいかった。

恵子ママ。

明日香の音楽の師匠だ。

「今日は、遅かったわね」

少し厚い唇の端に、ねじ込んでいた煙草を、灰皿に置くと、

恵子は、いつものようにコーヒーを入れてくる。

少し苦くて、ビターなコーヒー。

これでも、甘くしてくれているみたい。

恵子から、カップを受け取り、一口コーヒーを啜った明日香は、思わず顔をしかめた。

そんな明日香を、優しく見つめる恵子。

店の奥にあるステージ。

決して広くはない。

ドラムとピアノが置いてあるだけで、ギュウギュウになってしまっている。

だけど、その狭い空間が、明日香にとって、特別な空間だった。

ステージ上では、ドラマーで、無口な武田が、小刻みにリズムを刻んでいる。

小太りで、愛敬のあるクリッとした目をした原田は、ピアニスト。

そして、

「明日香ちゃん。時間がもったいないから…あわそうか」

トイレにいってたらしく、阿部がステージ左奥から、でてきた。

１８０以上ある身長に、細身のすらっとした体型が、まさしくベーシストだ。

明日香は、コーヒーを飲み干すと、

少し舌を出し、顔をしかめたまま、

急いで、ステージ右横の通路に、置いてあるトランペットを取りにいく。

古びたケースから、取り出したトランペットに、マウスをつけると、

ステージに上がった。

家にあった一枚のＣＤ。

カフェを経営していた祖母が、もっていたものだった。

ＫＫとだけ書かれたシンプルな黒一色のアルバムは、

ジャズアルバムだった。

高校受験の間…何となくかけていたアルバムは、いつのまにか…

流れていなければ、落ち着かなくなる程の…なくてはならない音になっていた。

無事に受験が終わった…ある日。

明日香は、決心した。

CDのジャケットの裏に、載ってある電話番号を見つめながら。

アルバムの中にある1曲。

マイフーリッシュハート。

という曲に、心を奪われていた。

恋は、まるで夢のようだから…

夜と夢の間で迷わないで、

あたしの恋心。

恋の痛みなんて知らない。

ただ、夜と夢の間というイメージが、

明日香には、大好きな夕暮れを思わせた。

電話をしたら、長いコールの後…どこかの事務所に通じた。

電話に出た事務的な社員に、ＫＫについて尋ねると、その事務員は知らず、

次にかわった社員が、少し考え込んだ後…もう解散したことを告げた。

だけど、

歌は聴けるかもしれない。

思い出した社員は、名簿をめくり、確認すると、

今、ＫＫがいる場所を教えてくれた。

電話番号は分からなかったけど、ＫＫが解散する前に、演奏場所として建てた…

ＢＡＲの住所を、ゲットすることができた。

ネットで検索すると…明日香の通う学校から、そんなに離れていないことが、わかった。

次の日。

授業の上の空で、家から持ってきたＫＫのＣＤを…机からチラッと出すと、下を見ては、

明日香は、軽い興奮状態になる。

我慢できない。

明日香は、授業がすべて終わると、

胸にＣＤを握り締めたまま、教室を飛び出した。

「明日香！どこ行くの！」

今日は、部活をさぼろうと考えていた里美をおいて、明日香は走り出した。

里美の声など、耳に入っていなかった。

廊下を駆け抜ける明日香は、慌てていた為、

角から出てきた生徒と、ぶつかりそうになる。

しかし、生徒は身軽な動きで、それをかわした。

「す、すいません！」

立ち止まり、頭を下げる明日香に、
生徒は微笑みながら、
「大丈夫」
と、一言だけ言った。
また頭を下げ、走り去っていく明日香の後ろ姿を、生徒は見送った。
「明日香！…って、もういない！」
追いかけて来た里美は、
見送っている生徒に気づいた。
「高橋くん…」
もしかしたら、学校で一番最初に、駅に着いたかもしれない。
帰る方向とは、反対方向の為、切符を買おうとするけど、
小銭を、なかなか出せない。
それ程、興奮し過ぎて、気が焦っていた。
電車が来た。
何とか買えた切符を、改札に通し、

明日香は、電車に飛び乗った。

次の駅で、地下鉄に乗り換え、

降りた駅から、改札を出た明日香は、

目の前に聳える山に、圧倒された。

こんな所に、ＢＡＲという所があるのだろうか。

まだ、比較的なだらかな道を、明日香が歩いていると、

山に夕暮れが訪れた。

オレンジの光のシャワーに、あらゆるものが、満遍なく染められる中、

一際、輝くものがあった。

明日香は、光り輝くものに、引き寄せられるように、山道を歩き出した。

それは、木造の扉にかかった…一枚のプレートだった。

クローズとなっている扉。

其処こそが、ＫＫだった。

深呼吸をし、意を決して

開けた扉…ＢＡＲという空間に、呆気に取られてしまう。

扉を開いたまま、立ち竦む明日香に、

誰かが、後ろから声をかけてきた。

「何か、御用？」

はっとして振り返ると、長身の阿部がいた。

阿部の高さに、見上げながら、さらに呆気に取られてしまう。

そんな明日香のことを、訝しげに見ていた阿部は、あるものに気付いた。

明日香が、ぎゅっと抱き締めているＣＤ。

阿部はああと納得すると、店内に向って叫んだ。

「ママ！ママのファンが来たよ！」

その声に、カウンターの奥から、姿を現した人物は…

ＣＤのジャケットよりも、年は取っているけど、

紛れもなく、

あの人だった。

明日香を、ここまで導いた歌声の人。

「今は歌ってないの」

明日香の腕の中のＣＤを、目を細めて見つめながら…

恵子は、呟くように言った。

しばらく続く、長い沈黙…。

そんな空気に気を使って、慌てて阿部が、言葉を切り出した。

「ここＢＡＲだけど…ママ、コーヒーあったよね」

「コーヒーはあたし用」

恵子は視線をＣＤから、明日香に向け、じっと瞳を見つめた。

そのあまりにも強い視線に、明日香は俯き、無言になってしまう。

「ブラックだけど…いい？」

恵子の言葉に、

明日香は顔を上げた。

恵子は微笑み、

「まずは座って」

「は、はい！」

慌てて、明日香はカウンターに座った。

恵子は、コーヒーカップを棚から取り出した。

カップに、コーヒーが注がれる。

「はい。どうぞ」

明日香は、置かれたカップを、両手で持つと、

緊張して、震えながら飲んだ。

苦い。

思わず顔をしかめる。

恵子は苦笑すると、

「歌を聴きにきた…だけじゃないわね？どうして、ここがわかったの？」

明日香は話しだした。

昔、祖母が経営していたカフェに、あなたが、来られた時、

祖母が、このＣＤを手に入れたと。

恵子は…

ＣＤを明日香から借りると、じっと無表情に見つめていた。

やがて、フッと笑うと、

ＣＤを明日香に返した。

しばらく、無言が続く。

恵子は、徐に煙草を取り出すと、火を点けた。

煙がゆっくりと、店内に漂う。

「昔の話よ…」

恵子の指先、に挟まれた煙草の先…

赤い炎が、明日香には、暗いカウンターの中で、とても悲しげに思えた。

恵子は語り出した。

やっと出せたCDは、まったく売れなかった。

自主制作に近い為、アルバムは、自分で売らなくてはならなかった。

商店街で、ダンボールのステージの上で、歌ったけども…。

忙しい主婦たちは、見向きもしてくれない。

疲れ果て、いっしょに付いてきた…メンバーの健司とともに、帰路につく。

両手に抱えた紙袋が、重たい。

自分たちのアルバムだから、捨てるわけにはいかなかった。

まったく減らない重さが、自分たちの限界のように感じ、恵子の気持ちは沈んでいった。

目の前に、カフェがあった。

流れてくるジャズが、心地よくて、

疲れ果てた2人は店に入り、少し休むことにした。

テーブル席が7…後はカウンターという狭い店内。

奥のテーブル席には、女性が1人。

後は、若いカップルばかり。

カウンターは、ほぼ埋まっていた。

２人は、あいている一番入口寄りのテーブル席に、座った。

注文を取りにきた…優しそうなおばあちゃんの笑顔が、さらに心地よかった。

商売なのは、わかっているけど、さっきまでの冷たい視線に、比べると、

どれだけ優しいことだろうか。

これこそ、接客業だなと、恵子は受け取ったおしぼりで、手をふきながら、

感心した。

店内は、シンプルで余計な装飾がない。

ただ、壁に飾っている数枚の、ブルーノートのレコードジャケットだけが、空間を演出していた。

「ケニー・バレルか…」

健司が呟いた。

ケニー・バレルのミッドナイト・ブルー。

レコードジャケットの中では、最高にクールなデザイン。

恵子は、コーヒーが来るまで、その淡い色のジャケットを眺めた。

ジャケットを眺めていると、コーヒーを運んできたおばあさんは、
恵子の足元にある紙袋から、覗いた大量のＣＤに、気付いて…

このＣＤは、何かときいてきた。

恵子が説明すると、

おばあさんは、コーヒーをテーブルに置いた後、じっと恵子の顔を
見つめた。

程なくして、

おばあさんは、笑顔になると、

一枚買うと言いだした。

恵子は驚いた。

嬉しい言葉であるけど、

自分の分身であるＣＤを、同情で買ってほしくなかった。

断る恵子に、おばあさんはこう言った。

「出会いは、一期一会だよ。それに…いい歌手は、顔を見ればわかる」

おばあさんの顔はさらに、優しくなり、疲れた恵子を包む。

「あんたは、いい歌手だよ。間違いない」

その後、おばあさんは、恵子の手を握ると、

ぜひ買いたいと、力強く言い、満面の笑みを見せた。

「それじゃ悪いから…。その場で、歌うことにしたの…」

恵子は、煙草の灰を落とした。

「健司と2人だったから…ペットと歌声だけで。そしたら…そこにいたお客さんまで、買うって！今までで、一番売れたわ」

恵子は笑う。

明日香は、唇をきゅと引き締めると…カウンターから身を乗り出し、

「このアルバムの！…歌に寄り添うような…やさしい音が知りたくて…。トランペットと書いてあるから、他のアルバムも調べたけど…音が違うんです！やさしくて、消えそうなのに、暖かい。あたしは、この音が知りたくって…」

感情が、溢れてきそうな明日香の言葉を、
ただ黙って、きいていた恵子は、
一言だけ…。
「ペットよ」
発すると、再び煙草を吹かした。
明日香は、目を見張る。
「ミュートをつけたペット」
煙草を灰皿にねじ込むと、
恵子は、カウンターから出た。
ステージの右奥から、何かを持ってきた。
それは、古びた楽器ケース。
カウンターの上、明日香の横であける。
トランペットが入ってあった。
「あのアルバムで、使ったペットよ」
恵子は、それを明日香に差し出す。

「知りたければ、これをあげる。言葉では伝えられないから…あなた自身が感じるしかないわ」

「え・・・」

「もう歌ってはいないけど…教えることはできるわ。明日からでも、教えてあげる。店が開くまでなら、時間があるから」

突然の恵子の言葉に、戸惑い、言葉がでない明日香。

中に入ってあったトランペットは…きちんと、手入れされているからなのか…

ものすごく綺麗に、輝いていた。

シンデレラのガラスの靴は、多分…こんな風にキラキラしてるんだろうなと、明日香は思った。

恵子は、トランペットに見とれる明日香に、自然と微笑んでいた。

あたしも昔は…。

恵子はそんな感傷が浮かんだ自分に、苦笑した。

「ただし…マウスだけは、自分のを、買ってちょうだい」

恵子は視線を、明日香とトランペットから外して、

呟くように言った。

「マウスは…あいつの口づけだから」

まだ、あまり吹けない。

原田が、イントロを軽快に弾くと、

いきなり、リズムがスウィングする。

曲は、ＣＭで昔聴いたことがあるとの理由で…

ＢＹＥ　ＢＹＥ　ＢＬＡＣＫＢＩＲＤ。

お小遣いをためたお金で、マウスピースを、楽器店に買いに行った。

初めて入る楽器店に、ドキドキしながら、明日香はマウスを選んだ。

興奮状態のまま、明日香は帰りに、その隣にあるＣＤショップを飛び込んだ。

真っ先に、ジャズコーナーを覗き、ジャケットが気に入ったという理由で、

１枚のＣＤを購入した。

そのアルバムに入っていた曲。

マイルスディビスのラウンドアバウトミッドナイト。

赤と黒の中でトランペットを持ち、佇むジャケットは、

まるで、夕焼けのように綺麗。

それが、理由だった

恵子は呆れた。

阿部がアルバムをみて、

「名盤ですね。全部スタンダードだ」

「スタンダード？」

明日香の問いに、阿部はこたえた。

「音楽。特に、ジャズをやっているやつは、みんな知っている曲のこと」

恵子は、曲名を見ると、

「これからやりましょう」

本当は、ＫＫのアルバムからやりたかったけど…

恵子の言うことには、逆らえない。

拙い音で、明日香は吹き出す。

あっという間に、時間は過ぎ…練習は終わった。

明日香がステージを降り、カウンターでトランペットをしまうのと、同時に、

音を立てて、扉が開いた。

7時ちょうど、開店時間だ。

お客さんが入ってくると、店の雰囲気が、一瞬にして変わる。

それは、雰囲気だけではなく…阿部たちの演奏も。

営業の始まりを告げるかのように、原田が鍵盤を激しく叩き、ピアノがいきなりスウィングする。

3人の先程までと違う本気が、店内に響く。

軽快な音だ。

明日香は、ステージに微笑みかけると、カウンターでドリンクを作り出す恵子に、頭を下げた。

「またね。気をつけて、帰りなさいよ」

「はあい。おやすみなさい。ママ」

扉を開け、外にでた明日香は、今聴いていた3人の音の余韻にのるように、

軽やかな足取りで、駅へと向った。

駅までの真っ暗な道も、

音楽にのっていれば、不思議と怖くなかった。

学校という場所

朝の教室は、うるさい。

特に…いつもよりうるさいのには、理由があった。

ざわめく生徒たち（特に女生徒）を横目に、教室に入ってきた明日香は、

席で呆れながら、頬杖をついている里美に、近づいた。

「おはよう」

「はあ～」

里美の溜め息が、朝の挨拶だった。

「みんな…新しいもの好きだよねえ」

里美は、浮かれている生徒たちに肩をすくめた。

チャイムが鳴ると、ざわめきは最高潮になる。

やがて、ドアが開き、担任が入ってくる。

その後から、

一人の男の人が、入ってくる。

歓声が、わき起こった。

クラス中、いや学校中の話題の人物。

教育実習生。

牧村優一。

少し茶色い大きな瞳が、印象的で、

顔を伏せたとき、それは、とても淡く憂う表情になる。

悩んだときや、困ったときの…その瞳の感じが、

いいと、女生徒の間で評判だった。

まだ実習2日目だから、優一は、緊張して、生徒の前にいるだけで、

軽く震えている。

その姿が、年下である明日香から見ても、

可愛い。

だけど、本人は至って真剣で、表情を…何とか保とうとしている姿

が、さらにかわいい。

今日から、朝礼は、優一がやることを、担任が告げる。

「牧村先生」

はっとして、優一は背筋を正すと、ガチガチになりながらも、教壇に向かう。

担任は少し心配そうに、優一を見た。

優一は教壇の上で、書類を整え、咳払いをすると、

「しゅ、出席をと、取ります」

優一が、口籠もるだけで、女生徒は楽しそうに笑う。

「先生！」

1人の生徒が、手を挙げた。

雪野麻里亜。

ボリュームがある髪に、少しつり上がった目が、気の強さを示していた。

そんな麻里亜が、猫撫で声で、

「せんせぇってぇ～かのじょいるんですかぁ～」

「か、か、かのじょうお…えっと…か、彼女は…」

真面目に答えようにする優一の姿が、引き金になる。

「先生！」

「真剣に答えなくていい！」

担任の先生が、助け船をだしたけど、女生徒たちの質問は、止まらなくなった。

次々に、手が上がる。

女生徒の黄色声に、パニック状態になる教室。

担任は、頭を抱えた。

「あ…それは…」

どうしたらいいのか、おろおろし出す優一。

それが面白くて、さらに質問は飛ぶ。

「てめえら！いい加減にしろ！」

激しく机を叩いて、里美が立ち上がった。

里美の剣幕に、一瞬にして、教室は静まり返った。

「ごちゃ、ごちゃと！んなことは、休み時間でもきけよ！」

里美は、立ち上がりながら、周りを睨む。

女生徒は殆どが、里美と目を合わさない。

里美はそれを確認すると、席に座ろうとした。

「別にいいじゃないんですの。少しくらい、質問しても」

みんながびびる中、麻里亜だけが立ち上がり、里美に詰め寄ってきた。

「はあ～」

里美は、後ろの席にいる麻里亜に振り返り、睨む。

「それに、相変わらず…汚い言葉遣いなこと…」

至近距離で、里美と麻里亜は、激しく睨み合う。

「あ、あのお…」

どうしたらいいのか…優一は、教壇から出たけど…生徒たちの前で、ただおろおろするだけだ。

いきなり、険悪になったクラスの雰囲気に、

担任は、頭痛を覚えてきた。

１７０はある身長の高い麻里亜は、里美を見下ろしながら、言った。

「あたし達は、先生と仲良くなりたいだけですの。コミュニケーションの1つとして、先生に、質問してるんです」

里美は、麻里亜の言葉に鼻で笑う。

「しつも～ん！彼女がいるとか、きくことが質問かよ！」

里美は下から、顔を突き上げた。

麻里亜は、顔を背けながら、

「それは…皆さん。興味ありますもの」

「興味なんてあるかよ」

少し驚きながら、麻里亜は顔を背けたまま、里美を見た。

やがて、麻里亜は、にやっと笑った。

「そうでしたわね。有沢さんみたいな…女か男か、わからない人には、興味なくてね」

麻里亜の言葉に、里美はすぐに切れた。

「何だと！てめえ」

里美は、麻里亜の胸倉を掴んだ。

「野蛮人」

麻里亜は、余裕な表情で、せせら笑った。

「里美！」

殴ろうと拳を上げた里美に、

慌てて、席を立った明日香は、里美の手にしがみついた。

「離せ！明日香」

「駄目！」

2人が揉めている間に、

麻里亜は、里美の手を振り解くと、

「あらあ？奥さんが来た」

麻理亜の言葉に、思わず周りは、吹き出した。

その笑いに、里美はさらに切れた。

「ぶっ殺す」

里美は、力ずくで明日香を振り解くと、麻里亜に襲いかかろうとする。

明日香は、里美に後ろから抱きつき、全力で止めようとした。

「離せ！明日香」

「やめないか！」

突然、厳しい注意の声が飛んだ。

その鋭い口調に、教室の空気が変わった。

声をした方を、みんなが一斉に見た。

声の主は、優一だった。

教壇の横に立つ優一の…さっきとは一転して、あまりの迫力に、みんな驚いた。

優一は一歩、３人に近付く。

「雪野さん。有沢さん。か、香月さん。席に、着いて下さい」

有無を言わせない…その迫力に、

３人は頷くと、それぞれの席に戻った。

それから、授業は何事もなく進み、

無事に、昼休みを迎えた。

体育館の裏にあるベンチ。

明日香と里美の、いつもの昼の憩いの場所だった。

校舎から離れているし、食堂の反対側になる為、生徒は殆ど来なかった。

「麻里亜の野郎！ムカつくぜ」

並んで席に座り、おにぎりをパクつきながら、愚痴る里美の隣で、

明日香は、サンドイッチをパクついていた。

「昔から、気に入らないんだよ。あいつのこと」

里美の愚痴は、止まらない。

誰もいないから、結構大声で、里美は愚痴っていた。

おにぎりの食べかすが、里美の口から飛ぶ。

「食べてる時は…話すのやめたら…」

「やめられるか！」

里美が、新しいおにぎりに手を伸ばした時、
思いもよらない人が、現われた。
「有沢さん。か、か、かづきさん！」
優一だった。
優一は明日香を見て、目を丸くした。
「かづきじゃなくて、こうづきですよ。この子は」
なぜここにきたとばかりに、里美は、おにぎりを手に取ったまま、
優一に、冷たい視線を浴びせた。
「ごめん。注意してるんだけど」
頭をかく優一に、
里美は大袈裟に、聞こえるようなため息をついた。
「どおして！先生が、ここにいるんですか！」
「せ、生徒から逃げてきたんだ！昼休みになると、みんな追いかけてきて…」
優一は、里美より深いため息をつくと、
2人が座るベンチを見つめ、

「それに、この場所は…。高校の時、僕の定位置でね。昼休みは必ず・・・1人で、ここにいたんだ…」

優一はそう言うと、右側に見えるグラウンドに視線を移した。

一番グラウンドの端であり、簡易テニスコートがあった。

遥か向こうに、野球が使う金網が見えた。

明日香には、遠くを見つめる優一の視線が、

どこか…

恵子に、似ているように感じた。

ダブルケイのアルバムを、見つめる恵子の目に。

それは、遠い過去に思いを寄せる…思い出を探る目。

だけど、とても悲しげな目。

じっと見つめる明日香の視線に気づき、

優一は、我に返った。

「ご、ごめん。邪魔したね」

優一は、深々と頭を下げると、2人の前から立ち去った。

「何よ、あれ？」

里美は、おにぎりを掴んだ手で、優一の後ろ姿を指差した。

「さあ…」

明日香は、優一を見送りながら、ただ首を傾げるだけだった。

いつもの如く、

放課後はやって来る。

明日香は、渡り廊下に来た。

南館から飛び出すと、綺麗な雲一つない空が、オレンジ一色に染まっていた。

明日香は思い切り、深呼吸をした。

視線を空から、普段の高さに、真っ直ぐ戻すと、

体育館よりの手摺りに、寄りかかる少年の姿が、飛び込んできた。

山の方から、吹き降りてくる風に、髪を靡かせながら、

少年は、静かにグランドを見つめている。

結構…髪が、風で舞い上がっているのに、少年は気にせず、ただグラウンドだけを見つめている。

明日香は、唾を飲み込むと…少年を見ないように、意識しながら、南館の入り口近くの手摺りに…もたれることにした。

グラウンドでは、いつのように、サッカー部が練習し、

取り巻きの声援も、聞こえる。

いつもより強い風の吹き付けに、明日香は髪を押さえた。

少年と明日香を包んで、風は…吹き抜けていく。

直ぐに、止むと思った風はなかなか止まず、

やっと風がおさまり、明日香が、髪を押さえていた手を外した瞬間、

「…さん」

明日香の耳に、声が飛び込んできた。

「何?」

明日香は、声がした方を見た。

少年が、明日香に微笑んでいた。

明日香は思わず、見とれてしまった。

淡く、茶色い瞳が、明日香に向いていた。

そして、この世のものとは思えない…まだあどけなさが残る笑顔。

それが、明日香に向けられていた。

少年との距離が、縮まったように、明日香には感じられた。

「違う…。香月さんだね」

少年は、なぜか…言葉を言い直したようだけど、

明日香には、聞こえなかった。

少年は、はにかみながら、

言葉を続けた。

「あなたが…いつも、ここにいることを知ってました。何が見えるのかなって…気になってた。とても真剣で…」

少年は、明日香を見つめ、

「まるで、大切なものを見守ってるみたいな感じが・・・した」

グラウンドから、笛の音が鳴り響き、歓声がわく。

どうやら、ゴールが決まったみたいだ。

だけど、今の明日香には、気づかなかった。

目の前にいる少年の瞳に、捕らわれていた。

それは、あまりに綺麗と、

あまりに、優しい目。

すべてを包み込んでしまうような…瞳の強さに、

明日香は、夕暮れであることさえ忘れそうになった。

淡く、やさしい瞳は、

少年こそが、夕暮れではないかと思った。

この瞳が曇るときこそ、

夜なのだと。

そんな明日香の心なんて、わかるはずもなく、

少年は、視線を明日香から外し、グラウンドを校舎を、そばの体育館を、３６０度…すべてを見回した。

「やっと来れた。やっとこの場所に…」

少年は、泣いてるようだった。

少年の瞳が、涙で曇った瞬間、夕日が少し落ちた。

少年は見回すのをやめると、明日香にきいた。

「香月さんは…ここから何を見てるの？」

「え…あ…」

いきなりの質問に、明日香が戸惑っていると、

少年は激しく、首を横に振った。

「今の言葉…忘れてくれ。どうでも、いいことだ」

自嘲気味に笑う少年に、

明日香はききたかった。

なぜ、自分の名前を知っているのかを。

だけど、それよりも、

少年の悲しげな笑いが、なぜか…心に突き刺さり、

明日香は、胸を押さえた。

そして、思わず・・・・声を荒げた。

今、

言わなくちゃ…いけない気がした。

「あ、あたしはここから、グラウンドを見て、サッカーの動きから、リズム感を養ってるだけです！」

「リズム感…」

そう呟くと、少年は何やら考え込んで、しばらくして微笑んだ。

「リズム感…だったら…サッカーはいいね」

少年の優しく温和な笑みに、

何だか…明日香も自然と、笑顔になった。

そんな自分が、恥ずかしくって…

視線を外した明日香。

それを見て、少年も視線を外した。

少年は、左横の山の向こうに沈んでいく…夕陽を見る為、明日香に背を向けた。

太陽は、見つめられないけど、
沈む夕陽は、見つめられる。

「いつも…この場所にいたね。ここから、グランドを眺めていた」

沈み夕陽に照らされ、逆光の中、少年の黒い制服が、浮かべ上がる。

「いつも、ここにいた。ぼくも、いつも…ここに来たかったんだ」

そう言うと、今度は体を明日香を向け、少年は、
軽く会釈した。
顔を上げた瞬間の少年の微笑みは、
やはり、
少し泣いているように、明日香には感じた。
少年は、そんな表情を隠すかのように、空を見上げた。

「やっと、ここに来れた…。あなたと、話せるんだ」

夕陽の中で、

少年は、限りなく綺麗だった。

でも、

どうして…

あたしのことを知っていたのだろう。

それとも、いつも放課後に、こんなところにいるから…目立っているのだろうか。

明日香の疑問を、かき消すかのように、

チャイムが学校中に、響き渡った。

それは、部活の終了を告げる合図でもあった。

少年はちらっと横目で、練習をやめるサッカー部を確認すると、ため息とともに、

「どうやら…あなたも僕も…終わりのようだね」

「で、でも」

明日香は、少年に一歩、近づこうとした。

「明日香あ！」

近くから、里美の叫び声が聞こえた。

「里美…」

明日香が、声がした方に振り返ると、

少年は肩をすくめ、寂しげな笑みを浮かべた。

どうやら、里美が迎えに来たみたいだ。

「あ、あのお…」

明日香は、バツが悪そうに、少年を見た。

少年はニコッと、微笑むと、

「友達が来たんだね…仕方がない。また明日、ここで会おう」

「でも…」

そんな約束…。

あなたが、誰かもわからないのに、

できないと、明日香は言おうとしたけど。

「明日香！いるんでしょ」

里美の声は、すぐ近くまで迫っていた。

「明日香あ！」

うるさいくらい何度も、里美は叫ぶから、

仕方なく…

声がする方に、行こうとして、明日香は、体を反転させる。

だけど、気持ちは気になって、顔だけが、少年の方を向いていた。

「あのお…あなたのお名前は…」

「名前…？」

少し驚いたような表情を浮かべた少年は…、

唇を噛み締め、戸惑いの表情に変わった。

風が再び、２人の間を強く吹き抜けた。

髪が舞い上がり、頭を明日香が押さえた時、

少年は呟くように、口を開いた。

明日香には、聞こえなかった。

「え…」

聞き返す明日香に、

少年は目をつぶり、少し考え込む。

そして、ゆっくりと目を開け、まっすぐに明日香だけを見て、

「裕也。ゆうでいいよ」

ゆうはそう言うと、

ゆっくりと、明日香から離れた。

「明日香！いるんでしょ」

痺れを切らした里美が、階段を駆け上がってくるのが、音でわかった。

グラウンドから、直接渡り廊下にのびる階段は、南館への出入り口のすぐ、そばにある。

息を切らしながら、上がってきた里美の姿を認めて、

明日香は慌てて、妙に取り乱す。

「ご、ごめんなさい！ちょっと、話し込んじゃって…」

里美は、キョトンとした。

「誰と？」

「誰って…後ろにいる…」

明日香は、振り返った。

だけど、

そこには、誰もいなかった。

「階段上がる時から、見てたけど…あんた、1人しか見えなかったけど」

里美の言葉に、明日香は絶句した。

さっきまで、ゆうがいた場所。

今はただ…

沈みかけた夕陽が、照らしているだけだった。

ゆうはもう、いなかった。

渡り廊下からの階段を降りながら、

明日香は一度足を止め、振り返り、見上げた。

やはり、いない。

いつのまに、消えたのだろうか。

先に、里美が下についた。

そこは、グラウンドと中庭の間のコンクリート。

階段を降り、渡り廊下の下には、水飲み場がある為、必ず部活を終えた生徒が使用していた。

グラウンドの方から、練習を終えたサッカー部が、やってきた。

当然、取り巻きも周りにいた。

特に、高橋の周りには。

近づいてくるサッカー部に気付き、

里美の足が止まった。

足を止めた里美は、俯きながら、明日香が降りてくるのを待つ。

取り巻きの中には、麻里亜もいた。

里美は体を強ばらせ、

けっして顔を上げない。

下を向き、自分の足元しか見えていない。

そんな視界の中に、

ワインレッドのスニーカーが、飛び込んでくる。

「あらあ～。有沢さんじゃない」

里美の耳元…至近距離から、声をかけられた。

知っている声だ。

里美はがばっと、顔を上げた。

「こんな時間までいるなんて…珍しい」

里美の目の前に、不敵な笑いを浮かべた麻里亜がいた。

麻里亜は偉そうに、腕を組み、里美を見下ろしている。

「雪野…」

里美の顔色が変わる。

さっきまでの、どこか恥じらっていた里美と違い、いつもの勝ち気な里美になる。

麻理亜は、そんな里美を無視して、顎を上に向けた。

笑みは絶やさずに、

「あらあ～香月さんも。今日も、いつもの場所で、御観覧で～」

明日香は、降りる足を止め、麻里亜を見た。

麻里亜はクスクス笑い出し、

「香月さんも…。サッカー部の練習を、観たいんでしたら～。近くで、あたし達といっしょに、観たらいいのに」

麻里亜は、すぐ後ろにいる取り巻き仲間に、振り向き、

「ねえ～皆さん！」

「そうよねえ～」

嫌みぽい麻里亜の言い方に、他の取り巻きも、大袈裟に頷く。

麻理亜はニャッと笑い、大袈裟に何度も頷いた。

「てめえ！一体、何が言いたい！」

里美は、麻里亜に食ってかかろうとするけど、

麻里亜は、そばをすり抜けた。

そして、階段の前に立つと、麻里亜は、階段の中段くらいにいる明

日香を睨んだ。

「あまり遠くから、ストーカーみたいに見られてると…迷惑なのよね」

「え?」

思いも寄らない言葉に、明日香は思わず聞き返した。

「わからないの?それとも、自覚してないのかしら?」

麻里亜は大袈裟に、肩をすくめ、

「これだから…ストーカーは嫌よね」

麻里亜は、明日香を睨み、

「迷惑なんだよ!あんな所から見られたら、高橋君の練習の邪魔になるんだよ」

麻理亜の言葉に、

里美の怒りは、頂点に達した。

里美は振り向き、後ろから、麻里亜の肩を掴んだ。

「てめえ!何、言いがかりつけてんだよ!明日香は、ただ動きを、観察してるだけだ!ストーカーじゃあねえよ」

里美は無理やり、腕を引いて、麻理亜を自分に向かせる。

麻理亜はジロッと、里美を睨んだ。

「あなたに、言ってませんわ」

「てめえ。いい加減にしろよな」

里美と麻里亜は、睨み合う。

だけど、すぐに、

麻里亜は吹き出した。

これ以上ないくらいに、笑い転げる。

「な、何がおかしい！」

麻里亜の胸倉を掴もうとした里美の手を、逆に掴んだ。

「ねえ～有沢さん」

麻理亜は、楽しくてたまらないみたいだ。

凄んでみようと、笑うことを抑えたけど、口元の笑みは消えない。

「あなたが…高橋君のこと好きなのかしら？」

「え」

絶句する里美。

胸倉を掴もうとしていた手の力も、弱くなった。

麻里亜は、掴んだ手で、里美の手を振り解いた。

里美の反応に、

麻里亜の笑みは、止まらなくなる。

「あら？図星かしら」

顔が、真っ赤になり、動けなくなった里美に、

麻里亜は、追い討ちをかけた。

「皆さん～有沢さんは、高橋君が、好きみたいです」

その声に、取り巻きが一斉に、

「ええ！！」

と大袈裟に、驚く。

麻里亜は、うんうんと何度も頷き、

「そうですよね～。男みたいな癖に…生意気なんだよ！」

麻里亜の言葉をきいた瞬間、

里美は、その場から走り出した。

「里美！」

明日香は急いで、階段を駆け下りたけど、

里美は、渡り廊下の下をくぐり、一目散に走り去った。

「あら！逃げた！」

麻理亜の馬鹿にしたような言葉に、取り巻きが爆笑する。

明日香は、走るのをやめ、麻理亜の前に立つ。

麻里亜は、そんな明日香を思いっきり睨む。

「何か…文句でもありますの？」

パチン。

激しい音がした。

一瞬にして、周りの笑いが凍り付く。

明日香が、麻理亜に平手打ちをしたのだ。

「な…」

痛みより、今起こったことが、信じられないように、目を見開く麻里亜に、

明日香は一言、こう言った。

「最低」

麻里亜を睨む明日香の迫力に、気負とされ、

麻理亜は言葉がでない。

下手に何か言ったら、もっと殴られる。

普段温厚な明日香からは、感じられない……激しい殺気。

麻里亜は、無意識に後退った。

明日香は一気に、振り抜いた手を下ろすと、

もう麻里亜たちには、目もくれずに、駆け出した。

勿論、里美の後を追う為に。

渡り廊下をくぐり、右に曲がると、長い直線の道が、正門まで続いている。

里美は、もう正門を通り、学校を出たみたいだ。

明日香は、全力で走った。

正門を走り抜け、

左に曲がり、駅へと向う一本道を、ただひたすら走る。

駅までは、３００メートル。

明日香は走りには、自信があった。

右側に並んだ家屋を越えると、マンションの3階位の高い土手があり、

そこから、風が強く、吹き抜けてくる。

風に髪がなびき、セットが乱れようが、今の明日香には、関係なかった。

夕陽はもう沈んだ。

辺りは、すぐに暗くなってきた。

踏み切りが見えてきた。

閉まっている。

いつも嫌いなこの音も、今日は救いの音に聴こえた。

ここの踏み切りは、開かずの踏み切りとして、有名だ。

いた。

まだ、踏切を渡れない里美が、遮断機の前に立っていた。

「里美！」

やっと里美に、明日香は追い付いた。

息を切らしながらも、明日香は反射的に、里美を

抱き締めようとする。

だけど、

明日香の手を、里美は擦り抜けた。

「里美…」

踏み切りが、ゆっくりと開いていく。

俯いたまま、里美はとぼとぼと歩きだす。

その隣を、心配そうに、里美の横顔を見つめながら、明日香が歩く。

里美は無言で、踏み切りを渡り切った。

後ろで、また踏切が鳴りだし、ゆっくりと閉まっていく。

閉まり切る前に、里美は足を止め、

明日香の顔を見ずに、話しだした。

「好きじゃないよ」

里美は下を向いて、俯いたまま、呟くように話し出す。

「好きじゃないから…大丈夫だよ。心配しないで…明日香」

そう言うと、里美は自分に言い聞かすように、深く頷き、

今度は、早足で歩き出した。

「心配しないでって…心配するよ。あんなこと言われたんだから」

後を追いかけようとする明日香に、

里美は歩きながら、

「だから、心配しなくっていいって。あたしは、大丈夫だから」

妙に真剣で、思い詰めた顔で、何度も頷く里美。

「全然大丈夫じゃないよ」

追いかけてくる明日香に、

里美はいきなり、足を止めて、振り返った。

もう駅の改札近くだ。

切符売り場の前まで来て、

里美は叫んだ。

「好きじゃないから！高橋君なんて…あたしは！」

「里美？」

里美は、泣いていた。

泣きながら、叫ぶ。

「あたし…親友が好きな人を、好きになんてならないから！心配しないで」

「何言ってるの…」

里美の手を掴もうとしたけど、

振り解くようにして、改札に消えていった。

追い掛けようとしたが、

定期を出すのに、手間取ってる間に、電車は来て、

里美が飛び込むと…ドアが閉まった。

「里美」

無情にも、電車は出た。

明日香は初めて知った。

里美の気持ちを。

そして、誤解していることを。

あたしは…誰も好きじゃない…。

誰も。

そう思ったとき、

心の奥が痛んだ。

明日香は、胸を押さえた。

あたしは、

高橋君のことは好きじゃない…。

「香月さん！」

1人ホームの端で、立ち尽くす明日香に、

誰かが後ろから、声をかけてきた。

明日香は振り返った。

そこにいたのは、優一だった。

優一は、もう見えなくなった電車が向かった方を見つめながら、

「どうかしたの？有沢さん」

明日香にきいた。

「何でもないです」

明日香は、素っ気なく答えると、優一を無視して、このホームから、去ろうとする。

明日香の電車は、隣のホームに来るからだ。

「雪野さんは、連れていかれたよ」

優一は、明日香の背中に話しかけた。

「え？」

明日香は、立ち止まった。

「きみ達が去った後。サッカー部の男の子と、雪野さん達がもめているのを、誰かが通報したらしい。生徒指導の先生が来て、連れていかれたよ」

優一は、ゆっくり明日香に近づく。

「きみ達は、大丈夫だと思う。心配しないで」

優一は、そっと明日香の肩を叩こうとした。

けど、寸前でやめた。

優一は、明日香のうなじを見つめ、

すぐに顔を背けると、叩こうとした手を握り締めた。

「じゃあ。気を付けて」

優一は、明日香に背を向けて、今滑り込んできた里美と同じ線の電車に、乗り込んだ。

明日香は、電車が発車し、通過するのを、横目で感じながら…ぼそっと呟いた。

「心配するわよ」

明日香は、何とかＫＫにたどり着くことができた。

いつもより、足取りが重かったから…着くのが遅くなってしまった。

いつもより、重く感じる扉を開けた。

「おはよう。少し遅かったわね」

いつものように、カウンターからの恵子の笑顔。

ため息混じりに、明日香がカウンターに座ると、

恵子はいつも通り、コーヒーを出してくれる。

深いため息をつくと、明日香は、コーヒーを一口啜った。

いつも通り…苦い。

やっぱり、顔をしかめてしまう。

そんな明日香の様子を、見つめながら、

恵子は、肩をすくめ…煙草に火を点けた。

「何かあったの？明日香ちゃん」

「え？」

明日香は顔を上げ、恵子を見た。

「来てからずっと、ため息ばかりついて…らしくないわね」

「あ…それは…」

明日香を心配そうに見つめる…恵子の瞳に、吸い込まれるように、明日香は、重い口を開き、今日あったことを、話し始めた。

恵子は静かに、ただ明日香の話をきいていた。

煙草を挟んだ指先から、煙がカウンターに漂う。

恵子が、ため息ともつかない息を吐き、煙草を灰皿にねじ込むと同時に、

明日香の話は、終わった。

「…ったく、どうしてそんな、勘違いするんだろう！全然、わからないわ！」

明日香はカウンターに、頬杖をつき、コーヒーカップを手に取った。

恵子は再び、新しい煙草をくわえ、火を点けると、明日香を見つめ…徐に口を開いた。

「明日香ちゃん」

明日香は、コーヒーカップを持ったまま、恵子を見た。

恵子は、煙草を一度吹かし、灰皿に置いた。

「明日香ちゃんって…人を、好きになったことある？」

恵子は、見上げる明日香の瞳の奥を覗いた。

明日香は、恵子の探るような瞳に驚き、

慌ててコーヒーカップを置くと、恵子から顔を背け、

「あ、ありますよ！これでも、初恋は早かったんですから！」

恵子は、今度こそ深いため息をつくと、明日香の言葉に呆れた。

恵子はまだ、吸える煙草を手に取ると、灰皿にねじ込んだ。

「早いとかの、問題じゃないの」

恵子は、もう煙草を吸う気にもなれなかった。

「早いとか、どうでもいいの！どれだけ深く、どれだけ好きに、なったのか…。どれだけ真剣になれ、どれだけ不安になり、どれだけ悩んだのか…」

いきなり熱くなった恵子の言葉に、唖然としている明日香。

恵子は、明日香を見つめ続け、

「あたしなんか…絶対に、あの人に、振り向いて貰えない。あたしの友達は、かわいくて、素直で、女の子らしい。かなわない…絶対に」

里美の気持ちを代弁するような恵子の台詞に、明日香は思わず、カウンターから立ち上がった。

「あたしなんか、かわいくないです！」

恵子はもう…

熱くなることも、ため息をつくこともなかった。

ただ新しい煙草を取り出すと、

「明日香ちゃんの次の練習曲…決まったわ」

火を点けた。

「Ｉ　Ｆａｌｌ　Ｉｎ　Ｌｏｖｅ　Ｔｏｏ　Ｅａｓｉｌｙ…恋するなんて簡単。今の明日香ちゃんに、ピッタリだわ」

恵子はカウンター内から、ステージ上でスタンバイしている阿部に、指示を出す。

明日香は無理やり、ステージに上げられた。

原田が、イントロを奏でる。

明日香は頭がパニックになり、あたふたとトランペットを吹き始め

る。

恵子は、その姿を見つめながら、

「Ｉ　Ｆａｌｌ　Ｉｎ　Ｌｏｖｅ　Ｔｏｏ　Ｅａｓｉｌｙ…」

呟くように曲名を口にすると…煙草をくわえた。

そして、火が点いていないのに気付き・・・・・再び、煙草に火を点けた。

「恋するなんて簡単…だけど…」

拙いトランペットが、どっしりと安定したバックの演奏の中をさ迷う。

「永遠の愛を得るのは、むずかしい」

そう…簡単なはずがない。

精神的にも、肉体的にも、クタクタになった明日香は、真っ直ぐ家に帰ると、

自分の部屋に入り、ベットに倒れ込んだ。

ＫＫから、家までが…こんなに遠いなんて…

初めて知った。

しばらく、ベットの上で、じっとしてから、明日香は徐に起き上がると、

携帯に、手を伸ばした。

やはり気になる。

明日香は、里美に電話した。

だけど、出ない。

留守電にもしていない。

しばらくコール音をきいてから、電話を切ると、

ベットの端に、携帯を放り投げた。

深いため息をつき、またベットに倒れ込む。

枕元にある、リモコンに手を伸ばし、ＣＤラジカセをつけた。

音楽が流れる。

ＫＫ…ダブルケイのアルバム。

曲は、マイフーリッシュ ハート。

恋はまるで、夢のようだから…夜と夢の狭間で、迷わないで…

あたしの恋心。

恵子のやさしくて、切なくて、

それなのに、力強い歌声。

恵子のように、歌ってみたい。

だけど、あたしには無理だわ。

たぶん歌えても、歌えてない。

歌詞の心が、理解できない。

上っ面の表面だけをなぞり、深い思いまでは、届かない。

恵子の歌声に、寄り添い…包み込みような音。

とても、やさしい音。

知りたかった音。

恵子を守るような…健司のトランペット。

こういう…誰かを守るような音が、

愛なのだろうか。

明日香は黙って、耳を澄ましていた。

健司の音。

そう言えば、

あたしは、彼のことを知らない。

明日香は、徐にＣＤを手に取り、

ケースから、ジャケットを取り出した。

ジャケットを開けた。

そこに載っていたのは、若き頃の恵子と、健司の写真。

寄り添うとも、離れてるとも、言えない微妙な距離で、

２人は、微笑みながら写っていた。

明日香は、ページをめくり、メンバーの名前が書いてあるページを探す。

あった。

武田隼人。原田幸喜。井守高次。
そして、速水恵子に、阿部健司。

「阿部？」

明日香は思わず、名前を口に出した。
大好きなアルバム。夢のような音を奏でるアルバムだったから…
明日香は、あまり歌とトランペットの音以外、興味を持っていなかった。
明日香にとって、名前なんて…音よりは重要ではなかったのだ。

唐突に、
恋するなんて簡単がかかる。
あっと呟き、明日香はジャケットから顔を上げると、目を瞑り、ただ流れる健司のトランペットの音に、身を任せた。
恵子の歌声が、響く。
明日香には、

恵子の歌声が、恋するなんて簡単には、聴こえなかった。

むずかしい。

そんな単純な言葉では、ないような気がした。

難解で複雑でもないけど、簡単でもない。

勿論、普通でもない。

この曲はタイトル通りの、単純な意味じゃない。

単純に、訳したけど…それは、正しくないんだ。

でも、今の明日香にはわからない。

うっすらとしたイメージは浮かぶけど…それには、痛みも切なさも感じない。

それを感じさせるだけの経験が、明日香にはなかった。

だけど、もしかしたら…。

もしかしたら、

あたしが、泣かせたのかもしれない。

恋なんて、

わからないから。

もしかしたら、

無神経なあたしが、泣かせたのかもしれない。

里美を。

あたしは、親友の気持ちさえわからない。

人の気持ちなんて、他人にはわからないというけど、

あの涙は、あたしに向けられていた。

あたしが、泣かせたんだ。

里美を。

明日香の頬を、涙が流れた。

里美の恋する気持ちは、わからないけど、

友達が悲しんで、それを理解してあげれない自分。

愚かな自分はわかった。

明日香は涙を拭いながら、決意した。

せめて…誤解だけは解こうと。

気持ち&気持ち

朝は、来た。

あまり眠れなかった夜。

いつもより早く、家をでたのは、

里美と会う為だった。

明日香が、電車を降りるとちょうど、

里美が、改札を出るところだった。

里美は、一本早い電車に乗ってきていた。

何でも、少し早く通学する癖をつけておくと、ちょっと寝過ごしても、遅刻しないからしい。

里美流の遅刻防止策だった。

「里美！」

明日香はかけ寄り、改札をでると、里美のそばまで行き、おはようと明るく声をかけた。

一応…

おはようと返ってくる。

朝は、電車の往来が激しい。

すぐに、踏み切りがしまる。

明日香は、ここぞとばかりに、畳み掛けるように、昨日のＫＫでのことを話した。

いきなり、新曲であたふたしたこと。

いつもなら、笑いながらきいてくれるのに、

反応がない。

すぐに、話すことがなくなり、２人は黙り込む。

踏み切りが開いた。

人混みと車とともに、歩きだす２人。

「昨日のことは気にしないで。すべてうそだから」

踏切を渡る途中、いきなり里美が、話し出した。

明日香は、里美の横顔を見た。

明日香の方は、見ていない。

「あたしこそ、ごめんなさい！あのね、里美…誤解してるよ」

明日香は、里美を見つめながら、強い口調で話し掛けた。

「あたし。今、好きな人なんていないから！誰も、好きじゃないから」

明日香の言葉に、里美は足を止めた。

そして、今日初めて、明日香に顔を向けた。

「本気で、そんなこと言ってるの？」

里美は驚きの中に、少しの怒りを混ぜた口調で、明日香にきいた。

明日香は、力強く頷いて見せ、

「本当よ。あたしは、誰も好きじゃないの」

「本当？」

里美は、疑いの眼差しを向ける。

「本当よ」

明日香は、里美から目をそらさない。

「本当に…誰も好きじゃないの？」

里美は言葉を切り…明日香から目をそらした。

「あの人のことも…」

「好きじゃないわ」

呟くように言った里美の言葉を…明日香は、きっぱりと否定した。

「ふ～ん」

里美は、そう言うと、

歩きだした。

先程までの重い足取りではなく、いつの里美の……いつも以上に、

軽やかに歩きだした。

とても嬉しそうだ。

明日香は少しほっとして、

笑顔を浮かべながら、里美の横を並んで、歩いた。

何事もなく、

放課後を迎えた。

里美は…

用があるらしく、先に帰ると一言告げると、そそくさと教室を後にした。

麻理亜達は…

やはり、昨日…職員室で、何か言われたらしい。

時折、明日香を睨んでいたけど…直接は、何も言ってこなかった。

麻里亜達なんて、どうでもよかった。

ただ出ていく時の、里美の様子だけが、少し気になった。

でも、あまり気にし過ぎても、仕方がない。

明日香は気を取り直し、教科書を鞄に詰め込むと、

教室を飛び出し、走り出した。

渡り廊下へ。

ただ無性に、会いたかった。

（会いたい！ゆうに！）

こんなに、人に会いたくなるなんて、初めてだ。

この気持ち…

何かはわからないけど。

そう…明日香にはまだ、

それが何なのか…これまで経験したのない湧き上がる気持ちを、説明することが、できずにいた。

それはまだ、痛みも悲しさも伴っていない…始まりなのだから。

いつものように、夕陽に照らされた…指定席に、ゆうはいた。

「やあ」

少し手摺りに、身を寄りかかりながら、明日香に向かって、見せた…やさしい笑顔。

明日香は、笑顔を見ただけで、安心し…力が抜けた。

そして、泣きそうになった。

あれほど好きだった夕陽の輝きも、今の明日香には、見えてなかった。

ただ目の前にいる人だけが…明日香には、特別だった。

「どうかしたの？」

ゆうは、視線をグラウンドに戻した。

「何か…悲しそうだから…」

ゆうには、今の明日香を正視することができなかった。

赤く輝く夕陽も、学校内に残る生徒たちの熱気も、

渡り廊下の２人には、関係のない世界となっていた。

明日香は涙を流さず、ゆっくりと微笑みながら、

渡り廊下を歩き、手摺りに近づくと、大きく深呼吸した。

昨日より、ゆうの近くに…もたれる。

それだけで、少し落ち着いた。

明日香の目に、耳に…周りの様子が飛び込んでくる。

明日香は口を開いた。

「昨日。いろいろあって…友達とちょっと…もめたんだけど…」

明日香は、ちらっと左横を見ると、ゆうがこちらを見ていた。

思わず、顔を背け、

「…あっ！そう言えば…昨日、すぐいなくなったね」

少しの沈黙が、2人の間に走る。

グラウンドから、サッカー部監督の激しい指示が、聞こえてきた。

取り巻きの声は、聞こえてこない。

ゆうは顔を前に向け、

「ちょっと…用があったから、急いでいて…」

ゆうは少し口ごもり、

「それより昨日…何があったの？」

今度は、明日香が視線を外した。

「べ、べつに大したことじゃない…」

ゆうの憂いをおびた瞳が、ずっと…明日香を見つめていた。

「友達とは、仲直りしたの？」

明日香は、目を伏せたまま、軽く頷いた。

「うん。一応は…」

「よかった」

ゆうは微笑んだ。

明日香は手摺りを、ぎゅっと握りしめた。

ゆうの笑みが、消えた。

しばらく、話すことがなくなり、沈黙が続く。

明日香は、自分から積極的話すタイプではない。

だけど、話すことにした。

少し雰囲気を変えたかった。

「ゆうくん…ゆうさんは、何年何組ですか?」

明日香は名前以外…ゆうのことを知らなかった。

明日香の質問に、ゆうは目を瞑り、

「明日香さんより、少し上だよ」

ゆうはこたえた。

「3年生ですか?」

「それが近い…」

ゆうは、今思わず口に出た言葉に、自傷気味に笑った。

明日香は、そんな笑いに気付かず、

「じゃあ…やっぱり、ゆうさん…ゆうやさんがいいのかな？」

真剣に悩む明日香が、かわいくと、

ゆうの表情が和らぐ。

「ゆうでいいよ」

「え、でも…」

「好きな女の子に、だったら、呼び捨てがいい」

「え」

明日香の時が、止まる。

ゆうは、まっすぐ明日香を見つめながら、

「好きだよ。明日香さん」

ゆうの顔が、やさしい笑顔でいっぱいになる。

「あなたのことが好きだ」

突然の…思いもよらないゆうの言葉に驚き、明日香は言葉を失った。

何も言うことができずに、息が止まった後も…激しく鼓動だけが、心臓を揺らした。

ゆうはただ笑顔で…明日香を見ていたけど、しばらくすると、照れたように顔を背けた。

明日香は、自分の中で驚きや戸惑いより、喜びが大きくなっていくことがわかった。

それも、心の奥から湧き出るような喜び。

今までない…

嬉しさだった。

「だから…きみを傷つけるやつは、許さない」

ゆうの口調が、変わる。

手摺りを握り締め、グラウンドの一点を睨む。

「え…」

明日香は、ゆうの視線の先を追った。

サッカー部のマネージャーたちが待機しているところ……いつもは、取り巻きがいるところ。

「昨日も、あの女達が…きみに酷いことを」

ゆうの言葉に…明日香は、はっとした。

「もしかして…昨日、先生に通報したのは…」

ゆうは静かに、頷いた。

「きみを傷つけるやつは、許さない」

「で、でも…」

何か言おうとした明日香を、こちらに向けたゆうの目が、止めた。

あまりの目の強さに、明日香は動けない。

やがて、ゆうは微笑むと、ゆっくりと手摺りから、離れた。

「もう…時間だね」

固まっている明日香。

「ぼくの好きに対しての答えは、いらない。ただ…明日も、ここに来てほしい」

ゆうは、明日香を見つめながら、歩き出す。

名残惜しそうに、体育館の横に降りる階段を、降りていく。

少しつづ見えなくなるゆうの背中の向こうに、

山の遥か向こうに、沈んでいく夕陽が…赤より真っ赤になって、

今日…最後の輝きを見せる。

明日香は、頭がぼおっとして、1人…渡り廊下に立ちすくむ。

しばらく動けなかった。

息もしていたのだろう。

好きと言われて、何の反応もできなかった。

それを後悔したり、

悔やんだりする思考能力も、

今の明日香にはない。

好きだ。

好きだ。

あなたが好きだ。

という…ゆうの言葉と、顔しか浮かばない。

好きだ。

好きだ。

明日香さん。

校舎が、今日最後のチャイムを鳴らす。

明日香はやっと、渡り廊下から歩き出した。

明日香は、フラフラしながら、階段を降りていく。

階段の真下に、

高橋がいた。

明日香は、高橋に気づかず、

階段を降りると、隣をすり抜けていく。

「香月さん」

高橋は振り返り、明日香に声をかけた。

それでも、明日香は気づかない。

「香月さん！」

高橋は叫んだ。

やっと気づき、明日香は振り向いた。

「高橋くん…」

高橋は笑顔を見せると、深々と頭を下げた。

「昨日はごめん」

ぼおっとしていた明日香も、高橋の行動に、びっくりして、

我に返った。

「き、昨日のことなら…高橋くんは、悪くないから。謝らなくいいよ」

高橋は首を横に振り、

「いや、俺の責任だ。あんなこと言わす前に、とめるべきだった」

「気にしないで。あたしも手を、だしたし…」

まだ、何か言おうとする高橋に、

明日香は、軽く頭を下げると、

「気にしないで下さい」

また歩きだした。

まだ…頭がぼおっとしてる。

これ以上会話なんて…明日香にはできなかった。

去っていく明日香の後ろ姿を、見送りながら、

高橋は、唇を噛み締めた。

「何よ。あの態度！」

明日香の姿が見えなくなると、物影から、

麻理亜が出てきた。

「高橋君が、謝ってるのに、あの態度！最悪だわ」

麻理亜の言葉に、高橋は彼女を睨んだ。

「彼女のことを、悪く言うな！」

高橋のあまりの剣幕に、麻理亜は驚いた。

「どうして…あんな女の肩をもつのよ！高橋君が、何もするなっていうから…我慢してるのに！本当は、殴り返してやりたいのに！…部活も、見に来るなって言うし…」

取り乱し、わめき散らす麻里亜の肩を、

高橋は掴んだ。

「黙れ」

高橋は、手に力を込めた。

「痛いよ！高橋君……！？」

麻里亜は、自分を睨む高橋の目に、ぞっとし、震えだした。

「彼女には、何もするな」

高橋の口調は、有無を言わせない。命令に近い。

麻里亜は怯えながら、頷くしかなかった。

高橋は、ゆっくりと力を抜くと、麻里亜の肩から、手を離した。

「それより…昨日言ってたことは、本当なのか？」

手を離しても、高橋の目が麻里亜を離さない。

震えが止まらない麻理亜に一歩近づき、

高橋は耳元で、何か呟いた。

麻理亜は、何度も頷いた。

高橋は、にやっと笑うと、

顔を上に上げた。

そして、誰もいない空間を睨んだ。

渡り廊下の手摺り。

さっきまで、明日香とゆうがいた空間を。

I Fall In Love Too Easily…

トランペットが吹けない。

最初から、ずっと練習してる曲…バイバイブラックバードが吹けない。

明日香が、あたふたしていても関係なく、

バンドは、次の曲…I Fall In Love Too Easilyに入る。

明日香は慌てて、ミュートをトランペットにつけると、一度息を吸い、静かに吹き始める。

バラードだ。

目を閉じ、バンドの演奏に身を任せながら、

明日香は、頭の中でイメージした。

恵子を包む健司のように…吹こうとした。

だけど、イメージできない。

フレーズが浮かばない。

目を強く瞑り、明日香は音の中を…さ迷う。

暗闇の中で、やっと見つけた光は…

ゆうの顔をしていた。

ゆうは微笑み、明日香に告白する。

好きだ。

その言葉が、グルグルと明日香の周りを回り続ける。

多分…顔が赤くなってる。

恥ずかしさに、力がはいる。

何を吹いてるのか…

どこを吹いているのか…

わからないまま、

演奏は終わった。

「お疲れ」

他のメンバーが、ステージを降りても、

明日香は、しばらくステージに立ち尽くし、

やがて、溜め息とともに、ステージを降りた。

バンドは、休憩に入る。

フラフラとカウンターまで歩いてくると、明日香は席についた。

ニヤニヤしながら、阿部が近づいてきた。

「何かあったの？明日香ちゃん」

明日香ははっとして、

「ごめんなさい！頭が、真っ白になっちゃって…」

阿部はさらに、ニヤニヤし、

「真っ白じゃなくて…何か考えてただろ」

「え」

阿部は、ウインクをした。

「めちゃくちゃだったけど…。一瞬、すごくよかったよ」

「え！」

「昨日よりよかった。いいねえ～青春かあ」

阿部は、明日香の肩を叩くと、再びステージに戻っていった。

明日香は、顔を真っ赤にした。

恵子は、笑いながら、明日香に、オレンジジュースをだした。

「恋するなんて…簡単。明日香ちゃんも簡単ね」

「簡単じゃないです！」

少しむきになる明日香に、

「あらあ。簡単ではないのね」

明日香はさらに、真っ赤になる。

恵子は、クスクスと笑うと、煙草に火を点けた。

真っ赤になったまま、ジュースのストローと格闘している明日香に、

恵子は、自然と微笑んだ。

明日香は、何とかオレンジジュースを飲むことができた。

ズズッと音を立ててしまう。

焦りながら、明日香は話題を変えなくちゃいけないと思った。

焦っていたのも、あるかもしれないけど、

それは素直で、

素朴な質問だった。

だからこそ、

きいては、

いけなかったのかもしれない…。

そんな質問を、明日香はしてしまった。

「昨日…タブルケイのＣＤを、聴いたんですけど…。ジャケット見たら…」

明日香は、ストローを持ち、グラスの中の氷を見つめながら、転がした。

そして、次の言葉を発した。

「健司さんって…。阿部っていう名字なんですか?」

恵子の煙草を吸う手が、

止まった。

顔を上げた明日香は、恵子の様子に気付いた。

少し固まった恵子の指先から、煙草の煙が漂う。

気まずい雰囲気。

「兄貴だよ」

いつの間にか、阿部が明日香の後ろに来ていた。

阿部は、明日香の隣に座ると、吐き捨てるように言った。

「トランペッターとしては、最高だが、男としては最低なやつさ！」

健司のことはなぜか…

触れられない雰囲気があった。

明日香が憧れ…常日頃、彼のように吹きたいと言っていても、、彼自身の話は…まったくでなかった。

今どこにいて、何をやっているのか…。

阿部は、煙草をくわえたが、なかなか火が点かず、

煙草を灰皿に捨てた。

そんな阿部の様子を、見つめる恵子。

「トランペッターとしては、最高だったよ！だけど、男としては…人間としては、最低だ！」

阿部は、カウンターを激しく叩いた。

明日香は戸惑い、言葉が出ない。

「もうやめなさい。大樹」

これまで、阿部のことを名字で、呼んでいた恵子が、初めて、下の名前で呼んだ。

「いや、やめないよ。姉さん！いい機会だから言うよ」

阿部も、恵子を姉さんと呼んだ。

明日香は驚いた。

阿部は、カウンターに立つ恵子を見上げた。

「いい加減…忘れよう！あいつのことなんか！」

阿部は叫んだ。

思いも寄らない阿部の言葉と迫力に、

自分に言われていないのに、圧倒される明日香。
言われている恵子は、冷静さを取り戻していた。

「もういい加減…店名も変えよう！ここを捨てて、出ていったやつが、つけた名前なんて…くそ食らえだ！」

普段、いつも愛想良く笑顔のイメージがある阿部の…怒った顔を、明日香は今まで想像できなかった。

「ＫＫには、あたしも入ってるの」

恵子は、扉にはめ込んである店名のロゴを見つめた。

「店をやりたいと言ったのは、あたし…。結果が、どうであれ…あたしも関わっていたの」

「でも！姉さん！」

思わず立ち上がり、まだ何か言おうとする阿部を、恵子は遮った。

「あたしは、後悔してない」

恵子は、阿部の目を見つめた。

恵子の目の強さに、阿部は何も言えなくなる。

「姉さん…」

阿部は、立ちすくむ。

「大樹…有り難う」

恵子は、阿部に微笑むと、明日香に顔を向けた。

「折角…明日香ちゃんのノロケ話を、きこうとしたのに…。明日香ちゃんが、びっくりしてるじゃない」

「え！い、いえ…」

いきなり振られて、明日香は口ごもる。

「ママ！来たよ」

突然、店の扉が開き、団体のお客さんが入ってくる。

恵子の表情が、一瞬にして変わる。

「いらっしゃいませ。いつもありがとうございます。奥のテーブル席へどうぞ」

いつのまにか…7時をまわっていた。

次々に、お客が入ってくる。

「明日香ちゃん。少し時間ある？」

カウンターを出る前に、恵子は明日香に声をかけた。

「あ、はい」

明日香は頷いた。

「じゃあ、少し待ってて」

恵子は、来店されたお客に、挨拶に行く。

阿部は、ステージに上がり、さっさとベースのチューニングを済ます。

慌ただしく、営業が始まった。

武田が、カウントを取ると、

演奏も始まった。

いつもより激しい

ビーバップ調の演奏が、

阿部の気持ちを、表していた。

心を、切り裂くような演奏。

3人は、曲を決めていなかったはずなのに、

武田と原田は、阿部の気持ちに呼応する。

2人も、同調しているかのように。

だけど、

そんな気持ちの爆発は、1曲だけだ。

すぐさま、曲調は変わり、心地よいBGMになる。

やがて…お客のリクエストが入り、

いつものお仕事に、戻る。

曲は、星に願いを。

日本人が選ぶジャズナンバーには、必ず入る名曲だ。

今でも、よくCMに使われる。

明日香にも、聞き覚えがあった。

切ないメロディーが、店内を包んだ。

店が、一段落つくと、

恵子は、明日香の前に戻ってきた。

「ごめんね。明日香ちゃん」

「あたしこそ…変なことをきいてしまって…」

明日香は、頭を下げた。

「いいのよ。謝らなくて」

恵子は微笑み…煙草に、火をつけようとしたけど、

お客がいることを、思い出して、やめた。

恵子は、明日香の中身がなくなったグラスに、オレンジジュースを注ぐと、

徐に、ステージ上の阿部を見つめながら、話し出した。

「健司は…あたしに、音楽を…歌うことを、教えてくれた人。そして…あたしの旦那だった人よ」

恵子の目が…なつかしそうに、ステージを見つめた。

「あたしに…才能があると、いつも言ってた。あたしも…調子に乗って、歌手になったわ。いろんなところで歌い…少し有名になって…CDも出せた。もっと…歌を聴いて貰いたかったから…自分の店も…場末だけど、もてたわ」

明日香は、何も言わず、ただじっと…恵子を、見つめていた。

恵子の目の色が、とても淡くなる。

「彼なしには、あたしの歌は、生まれない。結婚しょうと言われた時は、本当…嬉しかったわ。一生…彼だけじゃなく、彼の音も、手に入れたんだから…」

3人の演奏が終わり、

お客の1人が、ステージに上がった。1曲歌うみたいだ。

演歌だ。

彼らは、カラオケの代わりもする。

音痴はいない。

と阿部が言っていた。

カラオケとは違い、バックが歌う人に合わせて、演奏したらね…。

ただし、音程や歌い方が安定していないと、大変らしい。

確かに、大変そうだ。

歌ってる人は、気持ちいいだろうけど…。

ステージで、生で合わせてくれることは、ＫＫのウリの１つとなっていた。

「彼は…音楽に対して、妥協しない人だった。だから、あんな音を、出せたの。だから……そして、出会ったの…彼女と。あたしよりも、才能のある歌手にね」

恵子は、後ろの棚から、

１枚のＣＤをだした。

安藤理恵。

安藤理恵。

明日香は、知っていた。

少し前、テレビで特集していた。

海を越え、世界で認められた歌手。

日本人でありながら。

伝説の歌手。

でも、自殺したと…。

恵子は目を細め・・・・・

「2人は、すぐに惹かれ合い…愛し合ったわ」

恵子は、CDを見つめていた。

「そして、あたしを捨てて…健司は、理恵さんと2人で、アメリカに渡ったのよ」

恵子の悲しげな表情に、明日香は、胸を締め付けられていた。

恵子は、扉のＫＫのロゴに再び、目をやった。

「彼なしでは、あたしの音は、生まれない。だから…彼が、いなくなって…あたしは、歌えなくなった。ＫＫは、１人じゃないから…」

恵子はＣＤを、棚にしまった。

「理恵さんが、亡くなって、すぐ…彼も、後を追うようにして、アメリカで亡くなったわ」

カラオケの代わりが終わり、拍手が、観客から起こる。

恵子もステージを降りるお客の方を向きながら、拍手した。

「だけど…明日香ちゃん。あなたが来た。あたしが、忘れてた…忘れようとしてた…音を持って。あなたは、言ってくれたわね。あたしの歌が、好きだって…。とっても嬉しかったわ」

明日香に、顔を戻した恵子は、涙ぐんでいた。

「ママ…」

明日香も、泣いていた。

「あなたに、出会えて…あたしは再び…音楽に、向き合えるようになったの。あなたのお陰よ。本当に、ありがとう」

恵子は、お客に見られないように、涙を拭うと、

明日香の涙も、ハンカチで拭いてあげた。

「お互い…泣き虫は、禁止よ。女の涙は、めったに見せない…武器なんだからね」

恵子は、明日香にウィンクした。

恵子の話が終わると、

明日香は、店を出た。

もう8時前だ。

決して明るいとは、言えない道を、駅まで降りていく。

昔は、本当の山道だったけど、最近はＫＫより上に、住宅が建ち並ぶようになり、街灯は多い。

駅までは歩いて、3分くらいだ。

階段を降り、改札を通ると、

里美がいた。

驚く明日香に、里美は手をあげ、

よっと、1言発した。

「里美!?どおして、ここに!用があって、帰ったんじゃ…」

「うん。でも…もう終ったから…」

里美は俯き加減で、

歩き出す。

でも、昨日と違い…どこか嬉しそうだ。

「何か、いいことあった?」

明日香は、里美の顔を覗き込んだ。

ちょっとにやけている。

あまり見られるのが、嫌みたいで、早足になる。

「いいことあったな」

里美の足が、止まる。

「何?」

明日香も、嬉しくなってきた。

チラッと明日香を見ると、

里美はまた、歩き出した。

ホームにでる。

タイミングよく、電車が入ってきた。
ドアが開き、2人は飛び乗った。
ドアが締まると、里美はドアにもたれかかる。
そして、またクスッと笑う。
「勿体ぶらないでよ」
里美は、明日香に、嬉しそうな笑顔を向けた。
「コクられた」
里美は、体を反転させ、
ドア越しに、流れる風景を見つめながら、呟くように言った。
電車は、地上に出た。
「誰によ！」
里美はまた反転し、明日香に正面を向けると、満面の笑顔を見せた。
「高橋くんに！」
明日香は、里美の言葉に喜んだ。
「よかったじゃない！」

里美は笑顔のまま、大きく頷いた。

「今日呼び出されて…付き合いたいって！明日から、いっしょに帰ろうって！だから、明日香とは…帰れなくなるから…。今日は、迎えにきた」

里美の幸せそうな様子に、明日香は心から、祝福したかった。

これで、少しギクシャクした2人の関係も、もとに戻ると。

次の駅で、電車を乗り換えると、一駅で、2人の学校がある駅に着いた。

2人は、電車を降りると、同じホームに向かうけど、

乗る電車が違った。

明日香は普通。

里美は急行だ。

ホームに、電車が滑り込んで来た。

急行だ。

「じゃあ…お先に…」

電車に、乗り込む里美の背中に、

「おめでとう！里美！」

明日香は、声をかけた。

里美は振り返り、

「ありがとう…明日香」

里美は、涙ぐんでいた。

ドアが閉まり、電車が動き出しても、明日香は手を振り続けた。

電車が、見えなくなるまで。

「明日香…」

里美はドアにもたれ、涙を拭っていると、

携帯が鳴った。

切ろうとしたけど、画面を見て、

里美は慌てて、出た。

口元を手で覆いながら、

「高橋くん。今、明日香と別れたところ…」

電話の相手は、高橋だった。

次の日。

昼はいつも、里美と食べていたけど、

今日から1人。

里美は、高橋くんとランチらしい。

幸せでよかったけど…

少し寂しい。

明日香は、いつものように、体育館の裏のベンチで、サンドイッチをパクついていると、

優一が、顔をだした。

「先生！」

びっくりする明日香に、優一は頭をかき、

「ごめん。癖だな…ここに来るのは。あれ？今日は1人？有沢さんは」

「ちょっと…」

口ごもる明日香に、優一は肩をすくめ、

「別に、関係ないか…」

そう言うと、その場を去ろうとしたが…優一は思い出したように、振り返り、

明日香を見、笑いかけた。

「今日は、元気そうだね。よかった」

「え」

優一の言葉に、驚く明日香。

優一は、優しく微笑み、

話題を変えた。

「先生は、大変だね…。今から授業まで、勉強だ」

優一は、そう言うと、ベンチ前から、消えていった。

「変なの…」

明日香は、首を傾げると…再びサンドイッチをパクつく。

「どうして…あそこに、いつも足が向くんだ…」

優一も、頭を傾げながら、歩く。

ベンチがある場所は、体育館の裏側であり、体育館に沿って、校舎まで歩いていると、

当然、渡り廊下の横を通る。

「うん？」

優一は、視線を感じ、真上を見上げた。

手摺りは確認できたけど、

そこから、覗き込むものはいない。

気のせいか。

優一は、歩き出そうとしたけど、

再び…上を見上げた。

しばし見上げ、

「いるわけない」

フッと笑うと、再び歩き出した。

「先生！」

優一に、気づいた女生徒が、１０人くらいに、優一の周りに集まってくる。

「先生！ご飯、食べたんですか？」

「あっ…いや、まだなんだけど…」

口ごもる優一を、

「じゃあ！一緒に食べましょう」

両腕を捕られ、優一は囲まれながら、

渡り廊下と、反対側の北校舎の横にある食堂へと、連行されていく。

１人になると、自然に考えるのは、

ゆうのことだった。

今…何をしてるのだろう。

何を食べてるんだろう。

明日香も、里美のように一緒に、ランチしたかった。

恵子の歌声や、メロディーも浮かぶ。

恋するなんて、簡単…

とは、明日香は思わない。

でも…恋をして、

永遠の愛を得て、

それを失うなんて…。

明日香には、考えられなかった。

やるつもりは、なかった音楽。

でも…やってみると、わかる。

自分の心が、自分の戸惑いが…。

明日香が、わかったことは…

わからないことばかりと、いうこと。

自分の心さえも…。

そうだ。

ゆうにきいてみよう。

あたしが、音楽をやってると言ったら、
何て言うだろうか。

あたしが、
愛や恋が、わからないと言ったら…
あなたは…、
何とこたえるのだろうか。

明日香は、自分の願うこたえを、口にするゆうを想像し、
赤くなった。
妄想は自由だ。

しばらくして、妄想が落ち着くと、
明日香は、現実に戻り…大きな溜め息をついた。

「会いたいな…」

誰もいないベンチで、ぽつんと呟き、
明日香は早く、放課後になることを願った。

それぞれの願い

昼休みが、終わってすぐ…

いきなり、唐突に…雨が降りだした。

明日香は、教室で席に着いて、授業の準備をしてる時に、雨に気づいた。

「雨…」

外を…世界を隠すような

強い雨。

雨のカーテンは、窓から見える景色を暗くし、心にも陰を落とす。

だけど、まだ…明日香の心を、不安にはさせなかった。少し憂鬱にはなったけど…。

「止むよね…」

明日香の予想は外れ…

雨は放課後まで、降り続けた。

止む気配はなく…。

だけど、

授業が終わると、薄暗い廊下を、明日香は歩いていく。

廊下の左の窓の向こうは、雨が降り続けている

雨なんて、明日香には関係なかった。

明日香の気持ちは、渡り廊下に急いでいた。

激しい雨は、夕焼けを隠した。

息を切らせて、渡り廊下についた明日香の前で、

雨に濡れた渡り廊下が、普段とは、違う姿を見せていた。

雨に濡れ続ける…手摺り。

誰もいない…渡り廊下。

ゆうはいなかった。

ゆうがいない。

それが、

どんなに寂しいことなのか…

明日香は、立ちすくんだ。

ただの雨なのに…

廊下を、濡らすだけではなく、

明日香の心も、濡らしていた。

夕焼けがない夕方。

傘をさしながら、正門で待つ里美。

次々に、帰っていく生徒達を、見送る里美の顔はどこか暗い。

「ごめん。お待たせ」

高橋が、ゆっくりと歩いてやって来た。

里美の顔が、笑顔になる。

「あたしも今、来たところだから」

笑顔の里美を、一度見ただけで…高橋は、周りを見回し、誰を探す。

「高橋くん？」

訝しげに、里美は高橋を見た。

高橋は、里美の表情なんて気にしない。

「あれ？香月くんは？」

高橋の言葉に、里美の表情が曇る。

「え？…明日香は、いないけど…。今日から、高橋くんと一緒に帰るから…」

里美の言葉に、今度は、高橋の表情が、変わる。

「いつものところか…」

高橋は振り返り、学校内を睨んだ。

「高橋くん？」

高橋は、拳を握り締めながらも、

作った笑顔を、里美に向けた。

「あっ、ごめん。いこうか」

2人は、歩きだした。

高橋はもう…校内を、振り返ることはなかったけど、

里美を、見ることもなかった。

ただ前方を、睨みながら、駅までの道を歩いた。

「今日は、自転車じゃないんだ…」

里美の言葉も、高橋には、聞こえない。

何かを考え込んでいる。

「高橋君…？」

里美の質問から、しばらくしてから…高橋は徐に、口を開いた。

「あ…。雨が、降るかもしれないから、家の近くの駅に、置いてきたんだ」

そして、また無言に戻る。

駅に近づく。

踏切が、閉まっていた。

２人は足を止め、
通り過ぎる電車を、ただ見送っていた。
踏切が上がる瞬間、
高橋は、口を開いた。
「里美…」
高橋は、里美の方を向いて、里美を見つめ、ゆっくりと口を開いた。
「今度デートしょう」
ＫＫでの練習を終えて、
明日香は、まっすぐに家に帰った。
かばんを置くというより、落とす。
そのまま、ベットに倒れ込んだ。
ベットに体が、めり込む感覚が、包まれているようで、

少し安心する。

ゆうに会えなかった日。

何かあったのか…心配だ。

たった一日だけど…

心配。

そして、淋しい。

部屋の外から、母親の声が聞こえた。

ごはんの用意が、できたみたい。

返事をし、部屋をでようとしたら、

唐突に、携帯が鳴った。

里美からだった。

「明日香…」

少し声のトーンが、おかしい。

「どうしたの?」

心配気に、明日香がきいた。

ゆっくりと、里美は話しだした。

今日…高橋といっしょに帰り、カフェでお茶したことを。

「よかったじゃない！」

「うん…」

あまり、うれしそうじゃない里美。

しばらく…間があった。

里美の息遣いだけが、聞こえる。

明日香はただ、それを黙って聞いていた。

「明日香…」

蚊の鳴くような声で、

里美は、話し出した。

「高橋君と…デートの約束したんだけど…」

「よかったじゃない！」

また、

しばらく、声が聞こえなくなる。

里美の息遣いだけが、さっきより、大きく聞こえてくる。

「さ、里美？」

明日香には、里美が電話越しで、泣いてるように思えた。

「明日香。日曜日なんだけど……あいてる？」

「え？あいてるけど…どうして？」

「高橋くんが…はじめてだから…明日香も呼んで、４人で遊びにいこうって。サッカー部の子も、連れてくるって…」

「え？それって…」

「来て…お願いだから…」

里美はそう言うと、電話を切った。

明日香は、里美の切羽詰まったような口調に、

何か、おかしいなものを感じていた。

里美のことを、気に掛けながら、

いつのまにか、明日香は、眠りについていた。

目覚めた朝は、快晴だった。

部屋の窓を開け、朝の日差しをいっぱい浴びて、明日香は大きく、背伸びをした。

「とにかく！里美に会おう」

家を飛び出た明日香は、

いつのルートで、学校へと向かった。

学校に着いた明日香は、

教室に、先に来ていた里美を見つけ、

明るく駆け寄る。

「おはよう！里美」

里美は、明日香を見ると、

すぐに視線を外し、

「おはよう…」

一応、挨拶はするけど…明日香の横を、擦り抜け、

里美は、教室をでていった。

そして、

授業が始まるまで…教室に、戻って来なかった。

休み時間。

明日香がどれだけ、声をかけようとしても、

里美は、すぐに教室を出て、どこかに消えていく。

そんな二人の様子を、遠くから、ニヤニヤ笑いながら、見ている麻理亜たち。

明日香が、顔を向けると、麻理亜以外は、顔を背けるけど、

麻理亜だけは、明日香をじっと睨み続けた。

何も言わずに。

誰も、休憩時間内は、来ない…視聴覚室のある校舎。

里美は、廊下の壁にもたれながら、

胸を押さえていた。

張り裂けそうな程、痛い。

どうしょうもないくらい、胸が痛む。

痛みが、

嫉妬や、憎しみにならないように、

1人…

薄暗い廊下で、押さえていた。

明日香は、悪くないのに。

何度も、

そう言い聞かせても、痛みは、激しさを増す。

張り裂けそう。

ごめん、明日香。

ごめん、明日香。

でも、

「もお…」

里美は、廊下に崩れ落ちた。

「抑えられないよう」

放課後になった。

今日は、雨が邪魔しない。

綺麗に輝く夕焼けを、背にして、

ゆうはいた。

手摺りから離れ、渡り廊下の真ん中で、無邪気な笑顔を浮かべ、

明日香を迎えた。

息を切らしながら、明日香は、渡り廊下に来た。

嫌な事も、心配事も、忘れられる。

いや、忘れさせてくれる場所。

ほんの一時じゃない。

この時間は…。

だから、

この黄昏に、溺れたい。

先程までの心配と、疑問と、遣る瀬なさの間にある…

この幸せな夕暮れの時間を、

大事にしたい。

明日香は、ゆうのそばに駆け寄る。

「やあ」

ゆうのやさしい笑顔。

ほっと、心が癒される。

明日香は、ゆうを見つめ、

少し照れたように、すぐに視線をグランドに向け、

手摺りへと歩いていく。

「昨日、いなかったね…。どうしたの?」

明日香の瞳に映るグランドも、心に入らない。

明日香は、ゆうの答えを待つ。

「ああ…。雨は、苦手なんだ…」

ゆうは、明日香の隣の手摺りに手をかけ、憂いをおびた笑顔を、明日香に向けた。

「来てくれたんだね…。ごめん…」

明日香は、首を横に降った。

「いいの…理由が、あったんだったら…。それに…今日は、いてくれたし…」

明日香は、手摺りにもたれた。

「ただ…。もう…会えないんじゃないかと…心配しただけ…」

ゆうは、夕陽に照らされた明日香の横顔を、見つめた。

ゆうは、明日香から、ゆっくりと視線を外すと、呟いた。

「まだ…会えるよ…」

それは、とても小さな声で、悲しいトーンをしていた。

ゆうの小さな呟きは、

明日香には、聞こえなかった。

「あたし…音楽やってるの」

明日香は、ゆうを見ないで、強い口調で言った。

「音楽？」

「うん…」

明日香は、こくりと頷いた。

「あんまり…興味ないかな？」

心配気に、明日香はちらっと、ゆうの方を見た。

「あるよ。音楽は、好きだ」

ゆうの言葉に、明日香は笑顔になる。

「本当に？」

ゆうは、頷き、

「どんな音楽を、やってるの？」

明日香は、手摺りから体を離し、ゆうに体を向けた。

「ジャズ！トランペットをやってるの！ジャズって…マニアックかな？」

「ジャズは聴くよ。ボーカルだけど……確か、トランペットもよかった」

「誰を聴くの？」

「安藤理恵」

ゆうの言葉に、明日香は驚いた。

「安藤理恵！」

思わず、声を荒げた。

「聴いたことがないの！聴いてみたい！」

ＫＫで名前が出た時、聴きたいと思ったけど、

恵子からは、何となく借りにくかった。

「聴いてみたいの？」

「うん」

「明日…土曜日だけど…。何とかして、渡すよ。夕方までは、いないからね」

「明日…土曜日か…」

明後日は、日曜日。

日曜日のことは、言えなかった。

悪いことをするようで、胸が痛んだ。

甘く、切ない時間は短い。

もう時間だ。

校内に、部活の終了を告げるチャイムが響く。

「じゃあ。またね」

その言葉を言うのが、明日香には辛かった。

本当は、

いっしょに帰ろう…と、言いたかった。

言ってほしい。

あたしに、言ってほしい。

「またね」

でも、

優しい笑顔を、浮かべながら、去っていくゆうを、

明日香は、手を振って、見送りながら…

自分の思いを、しまい込んだ。

ゆうとは、

帰る方向がちがう。

自分のわがままを、押しつけてはいけない。

時間があるとき、

自分が、ゆうの方向に遠回りしょう。

あたしが合わそう。

ダブルケイの練習がないときにでも。

まだ・・・今のあたしだから

「そろそろ…。明日香ちゃんも、お客さんの前で、やってみようかしら」

練習が終わり、トランペットを片付けようとしていた明日香は、

突然の恵子の言葉に、ぎょっとなった。

慌てて、

「ま、まともに、吹けるの…2曲だけですけど…」

「2曲で、十分!それ以上聴かせたら、お客さんからお金を…頂けないわ」

恵子の言葉に、阿部たちは大爆笑する。

「今日は、何時まで入れるの?」

「家に連絡したら、8時までは…」

「ちょうどいいわ。阿部ちゃんたちが先に、2曲程やってから…明日香ちゃんは、ステージに、上がってちょうだい」

恵子は、有無を言わせない。

「今日は、団体で、常連のお客さんが、来るから」

恵子の言葉通り、

7時ちょうどになると、扉が開き、ゾロゾロとお客が、入ってくる。

恵子のいらっしゃいませが、合図となる。

ステージ上で、武田がカウントをとり、原田のピアノが、転がり始めた。

曲は何と、意表をつく…ビートルズのキャントバイミーラブ。

ピアノトリオで聴く、ビートルズもいい。

いきなり、お客から歓声がわく。

演奏は、そのままの勢いで、次の曲…A列車でいこうに、なだれ込む。

お客の興奮とは違う…

興奮と緊張が、明日香を包んでいた。

もうすぐ、明日香の出番だ。

金曜日だから、いつもよりお客が多い。

恵子の知り合いが、手伝いに、来てるくらいだ。

店内が、ノリノリの内に、

ついに、

明日香の登場となる。

「明日香ちゃん」

恵子は、ドリンクを作りながらも、カウンターで待機する明日香にウィンクした。

「はい！」

明日香は、トランペットを手にし、お客が座るテーブル席を遠巻きにして、ステージまで歩いていく。

何の挨拶もなく、明日香はステージに上がったけど、

バンドは、演奏をやめることはなく、そのまま…

バイバイブラックバードのイントロを、奏でる。

（なるようになれ！）

明日香は覚悟を決めると、ステージのド真ん中で、

トランペットのマウスに、口づけした。

あたしの音が…ＫＫに響く。

バックが、あたしを包んでくれる。

間違っても、

絶対、助けてくれる。

ピアニストのハービーハンコックが、言っていた。

昔。マイルスのバンドにいたとき、彼は…明らかに間違った音を弾いた。

その瞬間、

マイルスの一音で、バンドは、間違った音を、いかした展開に変わったと。

ビーバップを創った…チャーリーパーカーは、

間違ったら、それを三回やれと言った。

そうしたら、観客は間違ったなんて、思わない。

それが、ジャズだ。

それが、生きた音楽だ。

阿部に、そう言われた。

ステージは、生きている。

演奏を辞めないかぎり、
間違いなんてない。
今、明日香が演奏している音楽は、曲のコピーであって、コピーではない。
自由だ。
みんな…力強い。
安心できる。
初めてのステージなのに、みんなが、支えていてくれるから。
明日香は、自由に音を出せた。
曲が終った。
阿部が、一歩前にでて、頭を下げた。
「今夜、ここに来られた皆さんは…とても幸運です。こんなかわいい女の子の初ステージを、見ることが…できるんですから！」
阿部は、お客に明日香を紹介する。
「香月明日香…トランペッター！次の曲は、バラードです。アイ・フォール・イン・ラブ・トゥー・イージリー…恋するなんて、簡単」

お客の拍手の中、一礼した明日香は、

トランペットに、ストレートミュートを取り付ける。

そして、そっとゆっくりと…言葉を、噛み締めるように、

メロディを奏でた。

曲の歌詞を、理解しなさい。

天才歌手…ビリー・ホリディは、ピアノのマルヴァロンに、ただそれだけを、指示した。

恋することは、簡単。

だけど、永遠の愛を得ることは、むずかしい。

明日香には、

まだ、その意味を、理解できない。

だから、

今の自分が

わかる心だけで、表現しょう。

今わかる…真実だけで。

言葉を使えない演奏で、うそはつけないから。

原田が、最後のフレーズを奏でると、

明日香もまた、終わりに向う。

そっと…静かにやさしく。

明日香の演奏が、終わる。

大拍手が、沸き起こる。

無事に演奏が終わり、ほっとしていた明日香は、突然の歓声に、びっくりした。

そして、感激した。

席を立っているお客もいる。

お客の拍手が、こんなにうれしく、心に響くものだなんて。

今まで練習は、

この為にあったんだ。

驚きと発見。うれしさと恥ずかしさ。

まだ今は、

恥ずかしさが、一番勝っている。

明日香はぺこっと、頭を下げると、そそくさと、ステージを降りた。

カウンターの向こうでは、

恵子が、微笑んでいた。

恵子の拍手を聞き、明日香の中で、

やっと嬉しさだけで、いっぱいになる。

恵子の笑顔も、嬉しい。

明日香も笑顔で、

お客の拍手の中、テーブル席を抜けて、カウンターに向かう。

明日香の憧れと、目標のもとへ。

「初めてにしては、上出来だわ」

恵子は、明日香にオレンジジュースを、出してくれた。

「あなたも、そう思うでしょ」

恵子の前に、いつのまにか…

一人の男が、座っていた。

「啓介？」

２０代前半くらいで、グレーのスーツをラフに着こなしていた。

彫りが深い横顔は、鼻が高く、日本人離れしていた。

啓介と呼ばれた男の隣には、楽器ケースが、置いてある。

恵子の問いに、

啓介は、ワイルドターキーの入ったグラスを、傾けた。

明日香の方は、見ない。

「初めてなんだろ…」

啓介は一口、ターキーを飲んでから、

「まあいいんじゃない」

啓介のグラスの中で、氷がざわめく。

お客の一人が、啓介を見付け、テーブルから、近づいてくる。

「けいちゃん？やっぱり、けいちゃんだあ！もどってきたんだ。い

つ、アメリカから?」

啓介はグラスを置き、カウンターから立ち上がり、頭を下げ、

「昨日です」

「いやあ〜。やっぱり、けいちゃんが、いないとさあ。ママだけじゃ、ダブルケイとは、言えないからねえ」

明日香は、お客の言葉に驚いた。

(恵子と健司とで…ダブルケイじゃあないの?)

「今日は、演奏しないの?けいちゃん」

「これから…用がありまして、すいません」

啓介はまた、頭を下げた。

「まあ、仕方がないか!今、話題の新人、安藤啓介!忙しいよなあ」

「ジャズなんて…やってるやつが、少ないからですよ」

啓介は苦笑し、ケースを手に取ると、

「これから、レコーディングなんで…失礼します」

「さすが!すごいねえ」

「ただ…アイドルのバックで、吹くだけですよ。失礼します」

啓介はお客に、挨拶すると、恵子の方を見て、

「じゃあ、ママ。いってくるよ」

啓介は颯爽と、店を出ていった。

安藤啓介。

明日香は気づいた。

伝説の歌手と、同じ名字。

土曜日の朝。

今日は午前中だけ、学校があった。

明日香が教室に入り、授業の用意をしょうと、机の中に手を入れると、

何かが手に当たった。

明日香が取り出すと、

ＣＤだった。

安藤理恵。

アルバムタイトルは、

ＬＥＴ　ＭＥ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ。

ゆうからだ…。

明日香は微笑み、ＣＤをまじまじと見つめた。

早く聴きたい。

今日は、早く終わるし、

ダブルケイにも、行かなくていいから、

まっすぐ家に帰ろう。

昼までに、授業はすべて終了した。

明日香は、わくわくしながら、

家に急いで、帰った。

里美は最近、毎日高橋と帰る為、

もう明日香に断ってから、教室を出ることもなくなっていた。

家に着くと、

着替えるより先に、ＣＤをセットした。

銀色の円盤が、ラジカセに吸い込まれ、

音が流れ始めた。

明日香の時が、止まる。

いつのまにか、

音楽も止まった。

明日香は、ＣＤを取り出すと、ケースにしまった。

着替えることを忘れ、

明日香はベットに、倒れ込むと、

しばらくぼおっとした。

もう帰ってから、１時間くらいたっていた。

明日香は、ＣＤを手に取り、照明にかざすように、ジャケットを眺めた。

これは…

悲しみと絶望の音楽だ。

今、あたしが聴いては、いけない音。

そう感じた。

明日香は、ベットから起きあがると、

ＣＤをラジカセの横に、立てかけ、別のＣＤを手に取った。

ＫＫのアルバム。

明日香は、恵子の歌をかけることにした。

切なさとやさしさの音。

どちらのＣＤも、健司のトランペットがはいってるけど、

まったくの別人。

なぜ、

健司は、絶望の方を、選んだのだろうか…。

ｋｋの音。

恵子と健司の音。

切ないけど、やさしくて暖かい。

希望もある。

だから、

明日香は憧れ、ＫＫを追いかけている。

絶望を望む人も、いるかもしれないけど、

今の明日香には、必要なかった。

絶望しても、また元気になればいい。

無邪気に、そう思う明日香は、

まだ、

本当の悲しみを、知らない。

絶望は、選ぶものではなく、

知らないうちに、

希望や幸せが、変わってしまったもの…かもしれない。

それを、乗り越える力がなければ、

人は、容易く堕ちていく。

そう堕ちていくのだ。

嫉妬や悲しみや…絶望に。

理恵と健司。

恵子と健司。

人は、愛する対象が変われば、

奏でる音や、

本質さえ変わるのだろうか。

幸せとは何。

絶望を選んでしまった人…かもしれない…

健司のことを考えてしまう。

明日香が心の中で、自分では理解できない思いに、葛藤した時、

いきなり、

携帯が鳴った。

里美からだった。

「明日香……」

里美はただ…

日曜日の待ち合わせ場所と、時間だけを、告げるだけだ。

淡々と、一方的に。

「里美」

明日香が、話そうとしたけど、

電話が切れた。

（あたしを避けている？）

でも、

どうして…。

デートの意味

日曜日になった。

高橋とその友達が、サッカーシューズをほしいというから、

最初は、スポーツショップに入った。

明日香達の住む街の、一番の中心地。

駅前のショピングセンターに来ていた。

２００以上の店舗が、集まっていた。

明日香は、あまりスポーツショップには来ないので、

三人が選んでる間、暇だった。

里美は、高橋の隣にいた。

あまり、明日香と話そうとしない。

さっき…案内図を見た時、上に楽器店と、ＣＤショップを発見していた。

いってみたい。

だけど、１人で行くわけにはいかないから、

適当に売り場を、ぶらつくことにした。

里美は、高橋の隣で、いっしょに選んでいる。

（仲良いのね）

明日香が少し、ほっとした時、

「これ、どうかな？こ、香月さん。俺に、似合うかな？」

三島という男が、視界の端から現れ、明日香に寄り添ってくる。

明日香は退きながらも、頷き、

愛想笑いを浮かべ、

「とっても…」

三島から、少し離れた。

にやにや異常に笑う三島の相手も、疲れる。

シューズが決まり、やっと終った。

「おまたせ」

高橋が、明日香に向かって言った。

「上に、楽器店あるから…いこうか」

高橋の言葉に、驚く明日香。

四人は、エスカレーターに乗った。

高橋が先頭で、

里美が、一番後ろ。

「音楽やってるって、里美からきいたよ」

高橋は振り返り、

真後ろにいる明日香に、微笑んだ。

「でも…今日は別に、見たいものがないから…いいですよ」

断る明日香を見て、

高橋は、進路を変えた。

「じゃあ。ＣＤを見よう」

ＣＤショップに、入る高橋。

その後を、

エスカレーターから降りると、慌てて、里美が追いかけた。

そんな里美の後ろ姿を、見つめる明日香。

三島も、ＣＤショップに入った。

明日香は店の前で、ため息をつくと、入ることは入ったけど…

３人とは離れ、違うコーナーへ足を進めた。

３人がいくのは、Ｊ－ＰＯＰ。

明日香が行きたいのは、ジャズだから…。

他より、狭く小さなコーナーだけど、

明日香には、未知なる宝の山だった。

周りを見回しながら、明日香はゆっくりと歩く。

そして、

一枚のＣＤを、手に取った。

チェットベイカー。

チェット・ベイカーのシングス。

名前は知っていた。

アンニュイな歌声に、興味があった。

ほしいけど…。

今月は、ピンチだ。

悩んでいると、後ろから声がした。

「これがほしいの？」

高橋だった。

明日香の肩越しに、ＣＤを見ていた。

いつのまに、後ろに…。

明日香は、振り向こうとしたけど、

あまりにも、顔が近すぎて、

慌てて、体ごと離れた。

「いえ、別に…」

身を縮ませて、明日香は反射的に、首を横に振り、

急いで、ＣＤを棚に戻した。

高橋と、あまり話してはいけない。

里美が、気にしている。

これ以上、

親友に、いらぬ心配をかけては、いけない。

明日香は高橋に、頭を下げると、

ジャズコーナーから走って、離れた。

そんな明日香の後ろ姿を、見つめる高橋。

棚から一枚のＣＤを、抜き取った。

「高橋君！」

高橋を探していたらしく、里美は駆け寄ってくる。

「いきなり、いなくなるから…」

高橋のそばで、足を止めた里美は、

高橋の手の中にあるＣＤに、気づいた。

「高橋君も…ジャズなんて聴くんだ…」

「ああ…」

高橋は、手に持ったＣＤを、じっと見つめた。

そんな高橋の横顔を、

里美もただ、じっと見つめるしか…できなかった。

あなた

月曜日になった。

放課後…明日香は急いで、渡り廊下に向う。

「CDはあげるよ」

ゆうの笑顔が、出迎えた。

「ありがとう」

明日香は今、しあわせだった。

音楽の話や、たわいもないこと…いろんなことを話した。

一時間もないけど、

次の日も次の日も、

明日香は、ゆうと話した。

どこか、いきたかったけど、

今は…

これだけで、十分しあわせだった。

ただ、言葉を交わす。

あなたのそばで。

それが、何よりも大切だった。

ｋｋの練習も、楽しくなってきた。

明日香は、気づいていないけど、

恵子達は、気づいていた。

明日香の変化に。

ゆうと、話すだけの幸せ。

ただ心配なのは、里美のこと。

里美とは、日曜日から話していない。

別れるときも、そっけなかった。

毎日、挨拶はしてくれるけど…。

そして、日は進み、

木曜日になった。

「早いねえ～。あっという間だ。もうすぐ、終わりだなんてなあ」

廊下を一緒に、歩きながら、

優一に、彼の指導員の先生が言った。

優一は、すれ違う生徒に挨拶しながら、

「そうですね。あと3日ですね」

実習の期間は、2週間だから。

前から、高橋が来た。

高橋と優一は、

無言で、すれ違った。

「牧村先生。母校に戻ってきて、どうでした?」

指導員の言葉に、

優一は、笑顔で答えた。

「よかったです。実は…この学校に、ちょっと…心残りが、ありましたんで…」

優一は、廊下の窓の方を向いた。
ガラス越しに、グラウンドが見えた。
「心残りって、何だい？」
少し気になるのか、指導員はきいた。
優一は窓から、顔を指導員に向けると、
愛想笑いを浮かべ、
「大したことではないです」
「そうか…」
指導員は、ポンと手を叩き、
「牧村先生は、ここのサッカー部出身でしたね。結構、優秀だったと」
「昔の話です」
優一は、もうグラウンドを見なかった。
指導員と別れ、
優一は、廊下を曲がった。

いきなり、誰かとぶつかった。

明日香だった。

「大丈夫！」

優一は慌てて、手を差し伸べた。

「大丈夫です」

尻餅をついた明日香は、自分の力で、立ち上がろうと、顔を上げた。

優一と、目が合う。

吸い込まれそうな瞳。

とても淡い瞳。

それは、

明日香の知っている瞳と、同じだった。

まるで…

あの人のよう。

明日香は、

しばし、優一を見つめてしまう。

瞳の奥底を、探るように。

優一は、そんな明日香に、首を傾げた。

その時、校内にチャイムが鳴り響き、廊下内が慌ただしくなる。

優一は、すぐに、教師の顔になり、

「大丈夫なんだね？じゃあ、授業があるので、失礼するよ」

明日香の視線から、逃げるように、

優一は、次の授業のある教室に、消えていった。

木曜日。

今日…

里美が、学校を休んでいた。

理由は、わからなかった。

心配。

あっという間に、放課後になり、

明日香は、渡り廊下へ走る。

夕焼けが、

校舎やグラウンドを、赤よりも赤く、染めていた。

いつもより鮮明な赤は、どこか心に、恐れと違和感を感じさせた。

しかし、明日香のゆうへの気持ちが、そんな一瞬の感覚を、すぐに消し去った。

いや、無意識は感じたかもしれないけど、

明日香の意識は、ゆう以外感じない。

いつもの場所に、ゆうはいた。

息を整えながら、明日香はゆうに近づき、

「今日も…里美が、休んでるの。心配だけど…電話するわけには、いかないし」

最初に出た言葉は、里美に関してだった。

ゆうは、一方的に話す明日香の言葉を、いつものようにきいていた。

しかし、

いつも最後まで、話を聞いているゆうが、いきなり、

明日香の話を遮るように、言葉を発した。

「明日香さん」

いつもより強い口調で…思い詰めたような、ゆうの口調に、

明日香は、言葉を止め…息を飲んだ。

風が、２人の間を吹き抜けた。

まるで、引き裂くかのように。

言葉の強さとは裏腹に、

笑顔が優しい。

「もう会えなくなる」

視線を、

明日香と、合わさないようにグラウンドに向けた。

「明日が、最後だ」

明日香を見ない。

「ごめん…。明日が、ここにいれる最後になる…」

「どういう意味？」

明日香は驚き、戸惑い、
言葉の意味を確認しながら、

ゆうに、詰め寄った。

ゆうは、ゆっくりと、

顔を、明日香に向けると、

これまでになく、

さっきよりも優しく、

そして、

悲しく、微笑んだ。

「まだ…明日会えるよ…」

また、風が吹いた。

とても強い風。

明日香は、思わず目をつぶった。

少し埃が入った。

何とか、目を開けた時には、

もうゆうは、いなかった。

夕陽も、今日から明日へ

沈み始めていた。

「ゆうさん！」

明日香の叫びも虚しく、

夜が来る。

戸惑いのメランコリック

沈む夕日の中、

明日香は、追いかけた。

ゆうが、消えたと思われる方向へ。

体育館は、閉まっていった。

明日香は、体育館に入る扉の横にある、

階段を駆け下りた。

いない。

目を外したのは、一瞬だったはず。

そんなに早く、見失うはずはない…。

明日香は、グラウンドの端を走った。

ちょうど、サッカー部の練習が、終わるところだった。

そんなことは、どうでもいい。

走り疲れ、

止まった場所。

いつも昼休みに使う…ベンチだった。

部活の終わりを告げる

チャイムが鳴る。

サッカー部もまた、片付けを始めていた。

「あれ…香月さんじゃないの？」

ボールを、片づけていた三島は、グラウンドの端を、駆け抜ける明日香の姿を見つけた。

高橋は、三島の言葉を無視して、ボールを蹴った。

ボールは、かごに入る。

「なあ、高橋。香月さんが…」

高橋は、またボールを蹴った。

激しい音を立てて、かごが倒れ、
入っていたボールが、四方八方に転がった。

「高橋！」

慌てて、後輩達が、ボールを拾いにいく。
高橋は、そんな後輩達を押しのけて、
1人、部室へと歩いていった。

明日香は、誰もいないベンチに、座り込んだ。
明日香の頬を、自然に、涙が流れた。
もう夕陽は、完全に…向こう側に沈んだ。
明日香は、ベンチにうずくまり、声をださずに、泣いた。
皮肉にも、
夕陽と交代した暗闇が、
明日香の涙を、隠してくれた。

だけど、
それは、単なる気休めにもならなかった。

学校は、休んでしまったけど…

里美は、

学校の近くの駅の踏切を、学校側からこえて、少し行ったところで、
待っていた。

高橋を。

駅をこえたところだから、他の生徒の目を余り、気にしなくていい。
明日香も、ここを通るはずがない。

少し俯きかげんに、里美はただ、待っていた。

もう３０分ぐらいは、待っていた。

踏切からのなだらかな曲がり角の…電柱のそばで。

やっと、高橋が自転車で来た。

里美は、自転車の気配を感じ、顔を上げた。

高橋に、笑顔を向ける。

しかし、

高橋は、気づかないかのように、通り過ぎていく。

里美は驚き、

高橋の名を、叫んだ。

急ブレーキをかけて、高橋が止まる。

振り返って、里美を見る目が、無表情だ。

近寄ろうとした、里美の足が止まる。

「高橋君…待ってたんだけど…」

里美は、恐る恐る高橋に近づく。

「話があるの…。携帯にかけても、メールの返事も、くれないから…」

高橋は、自転車を降りることなく、里美に言う。

「もう待たなくていい。お前と、話す必要もなくなった」

「え…？」

愕然とする里美に、

高橋は、吐き捨てるように言った。

「役立たずが！」

高橋は路上に、唾を吐き捨てると、自転車をこいで、

そのまま、振り返ることなく、帰っていった。

里美は、

その場で崩れ落ちた。

「今日は来ないね…。何かあったのかな？」

阿部が、ベースのチューニングを合わせながら、心配そうに言った。

もう七時前だ。

恵子は、カウンターの上に用意してあったコーヒーカップを、眺める。

こんな時間まで、明日香が、連絡してこないなんて…

めずらしい。

少しため息をつき、恵子が、カップを下げようとした時、

電話が鳴った。

恵子は、カップをそのままにして、受話器を取った。

「ありがとうございます。ダブルケイです」

恵子の言葉が、止まる。

かけてきた相手は、明日香だった。

恵子は、受話器を持ったまま、何も話さない。

「わかったわ…」

しばらくして、恵子は頷き、

最後に、おやすみと言って、電話を切った。

泣き声で、何を言ってるのか、聞き取れなかったけど、

来れない状態であることは、理解できた。

恵子は、煙草を取り出し、火をつけると、

カウンターに残されたカップを見つめ…ため息の煙をはいた。

そして、もう一度、煙草を吸うと、

扉にある…ＫＫのロゴに視線を移し、

ただ目を細めた。

家に、何とかたどり着いた。

見慣れた自分の、部屋の中。

ここに帰っても、落ち着かなかった。

ただの一言が、単なる一言が、

明日香の胸を、締め付けた。

ただ苦しくて、切なかった。

眠れない夜になった。
ご飯も入らなかった。
着替える力さえない。
眠れぬ夜は、
長く、感じなかった。
苦しみとともに、朝を迎えた。

黄昏

ただの一言、

ゆうの一言が、

体と心を、締め付けた夜を終え、

明日香は、ずっと倒れ込んでいたベットから、身を起こすと、

いつもより早く、学校へと向かった。

ゆうに、言葉の理由をきかないといけない。

今日で、会えなくなる理由を。

まだ誰も来てない、学校の裏門で、ゆうを待つ。

いつも、ゆうはこっちの方向に、消えるから…。

授業が、始まるギリギリまでいたけど、

ゆうは、来なかった。

とぼとぼと、自分の教室にいくと、

今日も、里美は休みだった。

心配だけど、

明日香には、どうしたらいいのか、わからない。

すべてが、どうしたらいいのか、

明日香には、わからなかった。

休み時間を使って、すべての三年の教室を、まわったけど、

ゆうの姿は、見つからない。

昼休みも、ランチを食べる時間を惜しんで、

明日香は、校内を探し回った。

でも、

ゆうは見つからない。

やっぱり

放課後しか…。

体育館とは、反対にある食堂を探した帰り、

グランドの向こうに見える体育館と、

渡り廊下。

明日香は、しばらく渡り廊下を見つめ、足を止めた。

あそこでしか…ゆうには会えない。

明日香はなぜか、そう思った。

だから、もう探すのは、やめようと。

大人しく、自分の教室に戻り、時がたつのを待つ。

黄昏の刻まで。

それは、明日香にとって、運命の刻となることを、

明日香は知らない。

終業のベルとともに、急いで、渡り廊下に向おうと、

教室を飛び出し、走る明日香。

廊下の右側に並ぶ窓から、夕焼けの木漏れ日が、明日香を照らし続けた。

だけど、明日香には前しか、見えない。

渡り廊下に繋がる出入り口が、見えた。

あの向こうに、ゆうがいる。

明日香は、切なさに胸が痛んできたけど…全力で、走り抜けようとした。

渡り廊下の手前まで来て、道を塞ぐ者がいた。

高橋だ。

高橋に目もくれず、横を追い抜こうとした。

高橋は、明日香の腕を、強引に掴んだ。

「もういかせない！」

痛いほど、高橋は掴む手に、力をいれていた。

「離して下さい！」

明日香は、振り解こうとしたけど、

高橋は、離さない。

「あいつのところに、行くつもりだろ！頼む！いかないでくれ！」

高橋は、片手でポケットから、ＣＤを取り出し、
明日香の目の前に、差し出した。
それは、チェットベイカーのシングスだった。
「これが、ほしかったんだろ！」
ＣＤを、無理やり、押し付けられ、
明日香は、手で払いのけた。
ＣＤが、廊下に転がる。
それを見た高橋は、思わず、
平手で、明日香を叩いた。
「きゃ！」
明日香は、軽く吹っ飛んだ。腕を掴まれているから、倒れなかったが、痛みで思わず、叫んだ。
高橋はその声で、少し我に返った。
明日香と、廊下に落ちたＣＤを交互に見、
肩を震わせながら、叫んだ。
「どうして…わからないんだ！」

高橋の声が、廊下にこだまする。

高橋の目に、薄らと涙が浮かぶ。

「どうして、わからないだ！俺は、前から、君が、好きだった！それなのに」

高橋は、手に力を込めた。

「君は、あんな男と！ずっと、グラウンドから、君だけを見てたのに！君は…あんな男と、仲良くしやがって！」

明日香は、頬を押さえながらも、高橋を睨んだ。

「あたしが、誰と仲良くしょうと、あなたには、関係ないわ」

「好きだと、言ってるだろ！」

高橋は、明日香の腕を握り締める。

「あなたは、里美の彼氏でしょ！」

明日香の言葉に、高橋は目を丸くし、

やがて、にやっと笑った。

「彼氏？」

高橋は、顔を押さえ…大声で笑い出した。

「あんな女が、彼女の訳ないだろ！あの程度の女…ハハハハ…。ただ、君の知り合いだったから」

「だったから何よ！」

明日香は、高橋を睨んだ。

「君に近づく為に、ちょっと、仲良くしてやっただけだ！好きなのは、君だけだ！」

「最低！」

明日香の言葉を、遮るように、

高橋は、狂ったように叫び出す。

「あんな女のことは、どうでもいいんだよ！君さえ、手に入れば！」

高橋は力任せに、

明日香を押し倒した。

「最初から、こうすればよかったんだ！」

高橋は、明日香の上に乗り、

「女なんかな」

「やめて…」

どんなに、明日香があがいても、高橋はびくともしない。

明日香の両手を抑え、

高橋の顔が、

明日香に近づく。

廊下を、

夕陽が、ただ赤く染めていた。

渡り廊下の入口である校舎は、実験室とかがある普段は、授業があるとき以外は、人はいない…寂しい校舎だった。

特に、渡り廊下と繋がっている階は、体育倉庫のようになっていた。

顔をそむけて、抵抗する明日香を、

夕日が赤く、染めた。

あまりの眩しさに、反射的に、目を細めてしまう。

その時、

風が吹いた。

風が吹くことはない、廊下に、

強い風が。

それは、明日香には、優しく、

高橋には、激しかった。

「うわあっ！」

高橋の体が、吹っ飛んだ。

明日香の上から、離れた。

明日香は、体を起こし、

夕陽の輝きに、目を細めながら、

明日香のそばに立つ、人影を見上げた。

「ああ…」

嬉しさから、言葉にならない。

高橋に、近づく男の影の中に、

明日香は包まれた。

明日香の頬に、安堵の涙が流れた。

夕日に照らされながら、
廊下に現れたゆう。
高橋に、蹴りを喰らわしたのだ。
驚く高橋が、立ち上がる前に、
ゆうは顔面に、
もう一度、蹴りをお見舞いする。
「昔は、俺も、サッカー部だったんだよ」
また吹っ飛ぶ高橋。
「この子を、傷つけるやつは許さない」
ゆうは、高橋に馬乗りになり、何度も殴った。
高橋に、もう抵抗する気はなかった。
明日香は、殴り続けるゆうを、後ろから、
抱き締めて、止めようとする。
「やめて」

明日香は、ゆうに訴えた。

ゆうは怒りで、我を忘れ、
高橋を、殴り続ける。

「やめて！もう…大丈夫だから…」

明日香は後ろから、

ゆうを、ぎゅっと抱き締めた。

「お願い…」

明日香の願いに、

やっと、ゆうの動きが、止まる。

激しく肩で、息をし、

殴る手を止めたゆう。

体を抑える力が、ゆるまり、

高橋は慌てて、ゆうの下から這い出ると、

すぐに、走って逃げ出した。

「ありがとう」

明日香は、ゆうを抱き締め続け、

背中に、頬を押し付けながら、呟いた。

「もう大丈夫だから…ありがとう」

ゆうを、抱き締めながら、明日香は何度も、囁いた。

肩で、息をするゆうの鼓動が、

だんだんと、落ち着いてくる。

ゆうの鼓動の動きを、感じる。

ゆうは、抱き締める明日香の手に、そっと

後ろから、手を置いた。

そのまま、時が止まる。

ゆっくりと、

ゆうが振り返る。

ほんの数センチ先に、
明日香の顔が、あった。
淡く、
きれいな瞳。
明日香は、吸い込まれた。
ゆっくりと、自然に、
目を閉じた。
唇が、触れる。
幸せの涙が、
明日香の頬を、流れた時…
唇の感覚が、消えていく。
明日香は、目を開けて、ゆうを見た。
唇が、離れた訳じゃなかった。
ゆうの感触が、消えていたのだ。
すべての感覚が。

明日香は、瞳のように、
淡くなっていく、ゆうを見つめた。
ゆうは、悲しげに微笑む。
その瞳の奥にある、輝きは…。

明日香の口から、
思わず、言葉が出た。
それは、自分でも、信じられない言葉。

「先生…」

ゆうは、明日香の手をゆっくりと離すと、

静かに、立ち上がり、

明日香に、微笑みかけた。

その姿は、

明日香には、優一を思わせた。

ゆうは、観念したかのように、明日香に背を向け、夕陽を見つめながら、

話し出した。

「確かに…俺は、優一だ。だけど、今の優一じゃない」

ゆうの淡い姿。

夕日が透ける。

明日香は、ゆうの背中を見つめ続けた。

「高校生だった…昔の優一。サッカー部で、グランドから、いつも

…渡り廊下の女の子を、見ていた…優一だ」

ゆうは、歩きだした。

明日香も立ち上がり、後に続く。

2人は、渡り廊下にでた。

「いつもここから…彼女は、僕を見ていた。僕のことが、好きだったらしい。僕も…好きだった」

ゆうは、手摺りに近づいていく。

いつもの定位置。

「だけど…それが原因で、彼女は、いじめられることになった」

ゆうは、グラウンドを見た。

「意気地なしの僕は、彼女を助けることも…好きということも、できなかった」

風が吹いた。

「教育実習で、ここに来た日。気がついたら、僕はここにいた。夕方の刻だけ……昔、来たかった…この場所に…」

明日香は、ゆうの話をきいていた。

「そして、出会った…あの時の彼女に、そっくりな君に」

「ゆう…」

「はじめて、名前を呼んでくれたね。ありがとう。でも、勘違いしないで、ほしい。昔の子と、重ねた訳じゃない。純粋に、明日香を好きになった」

ゆうの体が、消えていく。

「だけど…僕は、優一の幻…彼が、去ればいなくなる。幻だけど…明日香を、心から愛してた」

「ゆう…うそ…だよね…ゆう…」

明日香の言葉に、ゆうは、
首を横に、振った。

悲しげに、笑顔のまま。

ゆうの淡い瞳から、涙がこぼれた。

「でも、最後に…君を助けられて、よかった」

ゆうは、グラウンドの向こうに、消えていく夕焼けを見た。

「この時間が、永遠だったら…ずっと、明日香を守りたい」

「ゆう…」

「ただ一度。ただの一度でいいから…君の音を、聴きたかった」

夕陽が沈んでいく。

「明日香。大好きだ」

ゆうは微笑みながら、明日香に向けて、手を差し出した。

涙さえ、

流れ落ちることなく、

途中で消えていく。

ゆうのすべてが、

消えていく。

手を伸ばす明日香。

ゆうの手が、近づく。

だけど、

その手は、

触れ合うことは、

二度となかった。

黄昏の時は、終わった。

夕陽は、向こうの世界に沈み、

辺りは、

夜へと変わっていく。

黄昏の中、出会った人…。

だれそれ…。

出会ったときには、

別れる運命だったのかも…しれない。

大好きな短い時。

黄昏。

さよなら

それから、覚えていない。

明日香は、薄闇の中、

なんとかＫＫに、辿り着くことができた。

もうオープンとプレートが、掲げてあるドアを開け、

恵子の顔を見た瞬間、

明日香は、泣きだした。

恵子は驚き…慌ててカウンターからでると、

泣き続ける明日香を、抱き締めた。

明日香は、何も言わず…ただ泣き続けた。

恵子も理由をきかず、ただ明日香を、抱き締めた。

明日香は、泣き続けた。

そこから、本人にも記憶がない。

いつのまにか、泣き疲れたのか…寝たらしい。

恵子は、営業中にもかかわらず、
車で、明日香を、家まで送ってくれた。
明日香が気付いたら、家のベットの上だった。
また、涙がでてきて、
泣いた。

泣くことにも、慣れた頃、
朝が来た。
もう
ゆうに会えない朝。
学校に行きたくないと、思った。
だけど、
しばらくして、
明日香は、起き上がった。

（あたしはまだ…

本当のさよならを、

していない！）

明日香はベットから、飛び起きた。

（今日があの人の、最終日のはずだ）

終了のチャイムがなった。

担任が、今日で、教育実習の終わりを告げる。

優一が、教壇に立つ。

頭を下げ、1人1人の顔を見てから、優一は話し出した。

「短い時間でしたけど、皆さんと過ごし、学んだことをいかし…立派な教師に、なるように、努力します。この2週間…つたない授業で、申し訳ありませんでした」

深々ともう一度、頭を下げ、

「ありがとうございました」

生徒から、拍手が沸き上がり、
実習は、終わりを告げた。

「先生！」

出ていく優一に、明日香は慌てて席を立ち、メモを渡した。
驚く優一は、
メモを見て、静かに頷いた。

世話になった先生や、同じ実習生に、最後の挨拶を済ませ、
優一は、メモに書いてある場所に、向かう。

渡り廊下。

久々に、向かうその場所に、
優一は、緊張していた。

廊下を抜けると、青空が広がった。

すぐ目の前に、体育館。

右手には、グラウンドが、一望できた。

手摺りの、思い出の定位置に、

彼女はいた。

なつかしそうに、優一は、目を細める。

振り返った少女の笑顔に、

優一の過去が、広がった。

優一を見つけ、

微笑む少女…。

日光に照らされて、

キラキラ輝く少女は、

過去ではなく、

現在。

明日香だった。

明日香の微笑みに、

優一は、我にかえった。

（フッ…）

と、心の中で、少し笑うと、優一は、明日香に近づく。

過去は、過去。

今は、今。

決して、同じじゃない。

（それは、わかってるんだけど…）

ここに来ると、

幻を願う。

学生の自分が、

ここにいるような…

錯覚。

いや、

（願望だな）

優一は、自らに苦笑した。

あの頃は、当たり前だった学校という存在と、過ごす時間。

今は、永遠に戻れない。

例え、

今、ここに立っていても…

戻ることなんて、できない。

明日香は、優一に、ひまわりの花束を渡した。

「あ、ありがとう」

「CDのお礼です。昼休み、抜け出して、買いにいきました」

明日香は、舌をだす。

「CD…そうだ！あげる約束したよね。覚えてないんだけど…」

首を捻る優一に、明日香は苦笑すると、

敬礼した。

「立派な先生に、なってくださいネ」

その言葉に、優一は頭をかく。

そして、手摺りに、もたれかかると、

グラウンドを見た。

「実は…あんまり、先生になる気は、ないんだ…」

懐かしそうに、グラウンドを眺め、

「ただ…もう一度…。この場所に、来たかっただけなんだ」

そう語る、優一の横顔は…似ていた。

明日香は確信し、

「先生って、高校生の時、サッカー部だったんですか？」

優一は、目を丸くした。

「どうして…それを…」

明日香は、言葉を続ける。

「好きな人、いましたか？」

「い、いたよ。上月くんっていって…」

「あたしに、そっくりでした？」

「え！」

真っ赤になる優一。

渡り廊下に、姿を見せた時から…

優一の姿…

しぐさに、

明日香は微笑んだ。

優一は、ゆうだ。

明日香は、嬉しくなった。

（完全に、ゆうは消えた訳じゃない）

滲んできた涙を、我慢し、

明日香は、優一に、もう一度、姿勢を正し、敬礼した。

「ゆう先生、お元気で！」

明日香の笑顔に、

優一も笑いかける。

「香月さんも、お元気で」

その笑顔にたまらなくなり、明日香は口を開いた。

「先生！あたし…音楽やってるんです…」

明日香は、優一を見つめ、少し言葉を詰まらせ、

改めて、微笑んだ。

「いつか…いつか！聴きに来て、下さいね」

「ああ、ぜひとも」

明日香は、背を向けた。

涙が、溢れそうになったから。

必死におさえ、

「さっきのメモに、メルアド書いてます。いつか連絡下さい！じゃあ、ゆう先生！お元気で！」

明日香は振り返り、頭を下げると、

急いで、階段を駆け下りた。

もう駄目だった…。

涙が溢れ、

流れ、止まらない。

優一に、涙を見せる訳にはいかなかった。

階段をかけ降りた後、

明日香は足を止め、渡り廊下を振り返った。

今は、夕暮れじゃないけど…、

「さよなら…ゆう」

明日香は、涙を拭うと、

歩きだした。

そしてもう…振り返ることはなかった。

「今日は、お昼までだから、来ないと思ってたわ。泣き虫さん」

七時は、まわっていたけど、

恵子は、突然ドアを開けた明日香に、いつものように、コーヒーをいれてくれた。

「今日は、おめかししてるじゃない」

いつもと違い、私服に着替えた明日香に、恵子は微笑んだ。

明日香は一旦、家に帰り、

今できる最高に、おしゃれな格好をしていた。

「ママ！あたし、歌いたいの！本当は、ママのように！トランペットを、吹きたかったのは…やさしさを知りたかったから。トランペットは、口づけの優しさ…愛する人への。あたしには、まだ…そんな風に吹けないけど…歌いたいの！ただ、ママのように歌いたいの」

恵子は、目を見張り、

やがて、

優しく微笑んだ。

「じゃあ。何か歌えるのかい？」

カウンターに座っていた啓介が、グラスを傾けながら、きいた。

「あれなら、歌えるわ！マイフーリッシュハート」

明日香は、ステージに向って、歩く。

お客さんがいるテーブル席を、すり抜け、

演奏が終わった、一瞬の隙に、

ステージに上がった明日香は、一言。

「マイフーリッシュハート」

阿部は驚いたが、

すぐに苦笑し、原田達と、アイコンタクトを取った。

明日香は、静かに切なく、

でも、

力強く、歌い始めた。

恋は、まるで夢のようだから、

迷わないで、

あたしの恋心。

歌うこと。

それが、

新しいあたしの始まり。

ゆうと出会えて、

あたしが得たこと。

ゆうとの口づけの優しさが、あたしに…歌う力をくれた。

あなたへの切なさを、

あなたへの気持ちを、

あたしは、歌の中に、残していけるから。

想いは、終わらないから。

例え、

時が過ぎても、

この想いは…

あたしの体に、染み込んでいるから。
いつでも、この気持ちを思い出せる。
歌として、表現できる。

「ママ…」

啓介は、カウンターにグラスを置いた。

「俺を生んだお袋は…天才だった。音楽も、あの人を愛した…でも、あの人は、音楽を愛さずに、自分の才能と…歌うことに絶望して、死んだ」

啓介は、明日香の歌声を聴きながら、
グラスを見つめた。

「俺を育てた、あなたは…音楽を愛したが…」

啓介の言葉の後を、
恵子は続けた。

「愛する人をなくして…歌えなくなった。いいのよ。あたしは、音楽に愛されなかった。でも…」

恵子はカウンターから、ステージ上を見、

「あの子はまっすぐで、素直」

明日香の歌は、決してまだ、うまくはない。

でも、

まっすぐで、心地よい歌声。

恵子と啓介は、自然に微笑んだ。

「音楽をやるやつには、いろいろいる。もてたいやつ、格好つけたいやつ、有名になりたいやつ…自分が楽しければ、いいやつ。天才だと、勘違いしてるやつ。そして、俺みたいに何かを…親をこえたいやつ！」

「あの子は…あたしに、なりたいんでしょうね」

恵子は、クスッと笑う。

明日香の歌が、終わった。

「仕方ないわね」

恵子は、カウンターをでて、ステージに向う。

ゆっくりと、ステージに上がら、歌い終わった明日香の頭を撫で、

そっと、抱き締めた。

「よかったわ…とっても、素敵だった」

恵子は、明日香にウィンクし、

「歌手…香月明日香の、誕生祝いに、一曲…プレゼントしてあげる」

恵子の言葉に、

店中の人が驚き、

騒めく。

恵子が歌うなんて…。

恵子は、後ろを向き、

「大した演奏じゃなかったら、減給だからね」

阿部達を、冗談まじりで睨む。

「曲は、ジャズじゃないけど…キャロルキングのナチュラルウーマン」

ＫＫに、歓声が沸き起こった。

恵子が、マイクの前に、立つと、

その隣に、

啓介が立った。

「音…必要だろ？」

啓介は、アルトサックスを掲げた。

「だけど、俺は、おやじのように、甘くはないぜ」

啓介の言葉に、

恵子は苦笑した。

「生意気ね」

恵子の体が、カウントを取ると、ゆっくりと、歌い出した。

まるで、

初めて歌う、少女のように。

戸惑い…

そして、喜び、

次第に、

震え、

嬉しさが溢れてくる。

この歌は、愛を知って、

女の子が、女になる歌。

だけど、

恵子は、

それ以上を、歌を通して、明日香に語りかける。

愛には、いろいろあるわ。

一途な愛。

幸せな愛。

悲し過ぎる愛。

一方通行な愛。

他人を傷つける愛。

押し付けがましい愛。

失した愛…。

これからの愛。

すべてが、

あなたを、成長させてくれるから…

決して、

愛することから、逃げないで。

恵子は歌いながら、苦笑したかった。

それは、あたしのことね。

逃げてたのは、あたし。

あたしのことね。

明日香ちゃん…

ありがとうね。

あたしに、会いに来てくれて、

本当にありがとう。

恵子の歌声に、絡みつくように、

啓介のサックスが、鳴る。

健司のトランペットは、

やさしく、包み込むようだったけど、

啓介のサックスは、包み込み、

それを、さらに、前へ押し出すような音。

（未来へ続く音だ！）

明日香は、恵子と啓介のそばで、音を聴きながら、

ただ涙した。

感動とうれしさ。

二人の音…。

そこに、

明日香が、目指すものがある気がした。

歌が終わると、明日香は、恵子に抱きついた。

「ママは、やっぱり特別よ」

店の扉が開き、誰かが店内に、入ってきた。

その時、

「里美！」

明日香は、恵子から離れると、ステージを降り、駆け寄ると、

里美を抱き締めた。

「携帯つながらなかったから…あんたの家に、電話したら…ここだって言うから」

明日香は、ぎゅっと里美を抱き締め、

「あたし…里美の気持ち、全然、わかってあげられなかった…」

里美は、首を横に降り、

「あたしこそ…あんたは、ちっとも悪くないのに…嫉妬してた」

「里美…」

「ごめんね、明日香」

「あたしこそ、ごめんなさい」

やがて、2人は泣きながら、笑い合うと、

お互いの涙を、拭った。

「そうだ！里美。あんた…あたしの演奏、聴いたことないでしょ」

明日香は、ステージの奥にあるものを、取りに行った。

トランペット。

「あら。もう…いらないんじゃないの？」

いたずらぽく、恵子が言う。

「これで最後！」

ステージを降りる恵子と、

ペットを持って上がる明日香が、すれ違う。

マイクの前に立つ明日香。

「何をやるんだ?」

啓介がアルトサックスをチェックしながら、きいた。

明日香は、前を向いたまま、

「バイバイブラックバード」

凛として答えた。

軽快に、演奏が始まる。

明日香は、トランペットに口づけした。

里美に向けて、

ここにいるすべての人に向けて、

音を奏でる。

明日香はまだ、

気づいていない。

彼女の音もまた、

未来へと続く、音だということを。

ミュートの囁き

まっすぐな明日香の音に、
啓介の太い音が、絡む。
恵子は、その音に、
懐かしさと暖かさ、
未来への輝きを、感じていた。
遠い昔。
恵子と健司が、奏でたように。
明日香は、あたしとは違う。
きっと、
永遠に、幸せな音を奏で、
幸せな音と共に、いれるはず。
こんなまっすぐな音を、出せるのだから。
過去を思い出し、
恵子は、そっと涙した。

誰にも、気付かれないようにしないと。

新しい目標を、見つけた…明日香に失礼だから…。

恵子は微笑み、

いつものように、煙草に火をつけた。

もう明日香に、

恋は、簡単なんて似合わない。

だけど、

まだ…あなたの知らないことばかり…。

でもね…。

もし、傷ついても、

恐れないでほしい。

今日のように、まっすぐに歌いなさい。

まっすぐに、恋をしなさい。

あなたのやさしさと、笑顔があるかぎり、

必ず、幸せにたどり着ける。

あたしは…

さあ、

もう一杯、コーヒーをいれてあげる。

「じゃあね、ママ！また明日」

明日香と里美は、手を振りながら、ＫＫの扉を閉めた。

もう外は、真っ暗だ。

駅まで歩く。

「ねえ。あたしの演奏、どうだった？」

明日香の質問に、

里美は、少し考え込むフリをしながら、

「まあ、いいんじゃない」

えらそうに答えた。

「何！その適当な答えは！」

明日香は、里美にくってかかろうとする。

里美は、少し早足になり、明日香から離れた。

「だって、ここで誉めたら…あんた、天狗になるでしょ」

「ならないわよ！天狗なんて」

「なるなる！絶対に！調子に乗るもの！あたしにはわかる」

明日香は、里美を捕まえ、後ろから、羽交い締めにする。

「ならないから！ちゃんと、よかったといいなさい」

里美は、苦しみながら、

「よかったと、言わそうとしてるところが…おかしい…」

何とか、明日香から逃れると、

里美は、駅まで全力で走る。

「待って！里美」

明日香は追いかける。

「天狗やろう！」

悪態をつく里美。

それは、いつもの二人だった。

明日へと旅立つ明日香を、見送った後…

慌ただしい営業も終わり、

バンドのメンバーも帰った後、

カウンターに一人座り、

恵子は、残されたトランペットを見つめていた。

健司の…

そして、

さっきまで、明日香のだったペット。

しばらく見つめていると、隣に誰かが座った。

啓介だった。

手に、バーボンの入った二つのグラスを持って…。

恵子は、グラスを受け取ると、そっと傾けた。

ワイルドターキートリビュート１５Ｙ。

シュガーバレルで、１５年熟成された甘い香りが漂う。

啓介が、静かに話しだした。

「ママは…なぜあの子に、おやじのペットを、あげたんだい？」

グラスの中で、氷が転がる。

恵子は、ペットをやさしく撫でる。

「だって、この子に、罪はないから…」

恵子は、グラスに口をつける。

「俺も…そうだったね」

啓介は呟いた。

恵子に、その呟きが聞こえたのか、聞こえなかったかは…

わからない。

「それに…あの子が知りたかった音は…この子から出たものよ」

恵子はもう一度トランペットを撫でると…静かに立ち上がった。

「楽器は、鳴らすもの…あたしは…」

クスッと笑うと、

恵子は、グラスの中身を飲み干し、

カウンターに置いた。

「また、歌いたくなったわ」

恵子は、ステージに向かう。

「啓介。たまには、親孝行しなさい」

啓介は、苦笑すると、立ち上がった。

「はい。母さん」

楽器ケースから、アルトサックスを取り出し、ステージに上がる。

「曲は？」

「イッツ・オンリー・ペーパー・ムーン」

誰もいない店内に、

２人のＫの音が、流れた。

優しく、そして切なく…

音楽を演奏することも、思い出もいっしょ……

自分から離れると泡のように、漂い…

決して、つかむことはできない。

そして、泡は弾け、

自分の心以外には、残らない。

だけど…決して忘れない。

第一部…完。

第2部　ミュートの安らぎ

霞がかかったような店内に、恵子はいた。

ｋｋ…

ダブルケイという名のｂａｒ。

「これ、置いていくのね…」

恵子は、カウンターに置かれたトランペットを、

そっと撫でた。

「いらないからな…」

健司が呟いた。

最後のタバコに火をつけた瞬間、

店の扉が開いた。

逆光の中、佇む細身の女。

安藤理恵。

恵子から、すべてを奪っていく女。

理恵は、店内を一瞥すると、すぐに消えた。

恵子を、見ようともしないで。

「待つのが、嫌いな女だからな…」

健司は、吸いかけのタバコを、灰皿にねじ込むと、

カウンターから立った。

「俺を、憎んでもいい」

「お前に、憎まれている方が…俺の力になる」

健司は、店内を見回した。

「この店…そして、お前」

健司は、恵子を見つめた。

最後の視線…。

「すべてを捨てないと…俺は…あそこに、たどり着けない」

健司は、扉の向こうへ歩き出した。

もう…恵子を見ることはない。

扉の向こう…

理恵のもとへ。

静かに閉まる扉。

残されたトランペットに、

残された女…。

今…

タブルケイは、一人になった。

「どうして、姉さんが引き取るんだ！」

阿部の怒声が、ダブルケイに響き渡った。

「そんなに大声だしたら、びっくりするじゃない」

恵子の腕の中で、眠る赤ん坊。

安藤啓介。

健司と理恵の間に、産まれた子。

啓介が、目を覚ました。

「ほら、起きたじゃない。ごめんなさいね」

恵子は、啓介をあやす。

「見ろよ！こいつの目！あの女にそっくりだ！あの冷たい目に！」

「赤ん坊に、そんなこと言うものじゃないわ」

恵子の笑みに、これ以上ない笑みを返す啓介。

「この子は優しいわ。だって、こんなに笑顔が、素敵なんですもの。まるで天使のようだわ」

「あいつらの子供なんだ！ほっといたらいい！誰かが面倒みるさ」

「誰が？両親はいないのよ」

理恵が、自ら死を選んだ後、

健司も後を追うように亡くなった。

「だからといって、姉さんが…」

「この子に、罪はないのよ」

Ｍｉｄｎｉｇｈｔ　Ｂｌｕｅ。

この国は、夜さえ明るく、
ほんのり淡いブルー。
真っ暗な夜なんて、あるのかしら。
夕焼けを、追いやった夜の中、
香月明日香は、ネオンに飾られた街並みを、歩いていた。
学校から一旦、家に帰ると、デニムのパンツに着替え…明日香は、
市で一番栄えている街の中心部に、向かった。
音楽を教えて貰っている…ママの息子であるサックス奏者のライブ
を、見に行く為に。
演奏は、店で聴いたことはあったけど、
内と外では、違うらしい。
繁華街から、少し離れた雑居ビルの地下。
階段を降り、ライブハウスの扉を開けた時、
明日香は、新たな運命と出会うことになる。
咲き誇る薔薇のように美しく、
散りゆく桜のように潔い…一人の女に。

河野和美。

もう一人のK。

新たな出逢い

ライブハウス‘ラメール’

明日香は、地下に降りる階段を降り、重い扉を開けた。

いきなり、音の洗礼を受ける。

ヒップホップだ。

受付に座るだるそうな男が、チケットをせがむ。

明日香は、恵子から預かったチケットを渡す。

ワンドリンク付きだ。

高校生であるけど、

こんなところで、ジュースを頼む雰囲気じゃない。

「ジントニック」

明日香は、一言だけいうと、満員になってる店に入った。

フランソワーズアンディというフランスの歌手が、ジャズ風の曲をやっているアルバムのタイトルが、

ジントニックだった。

カフェを経営してた祖母が、持っていたアルバム。

愛してると、つぶやきながら…空々しくジントニックを飲む。

明日香は初めて、飲むお酒は、ジントニックと決めていた。

はじめて飲むお酒…ジントニックに、口を付けた。

あまりの苦さに、

顔をしかめそうになるのを、必死に押さえた。

こんなところに…初めて来て、お酒も初めてなんて…格好つかない。

妙に気取りながら、店の一番後ろの壁に、もたれ掛かった。

それにしても苦い…。

薬のようだわ。

店内は、満員だった。

明日香と、同じくらいの年の人が多い。

ステージ上で、ＭＣが激しく日本語で、がなり立てる。

明日香は、がっかりしていた。

バックの演奏も、すべてが大したことがない。

いつも教えてもらっている人達の方が、数段上だった。

熱気と歓声はあるけど…

ステージと、コミュニケーションがとれていない。

どこか、ストレス発散のような感じがしていた。

ある意味、それが普通なのだけど、明日香には、理解できなかった。

退屈だわ。

その時、

会場の空気を、震わすブロウが、鳴り響いた。

まるで、

音の狼煙のように。

アルトサックスの太い音色でありながら、

まるで…ナイフのように、そこにいる人たちを、切り裂いた。

一瞬の静寂から…

百人以上は、入っているライブハウス内が、興奮で爆発する。

それだけではない。

ステージにいる他のバンドの音を、絶妙に絡み合わせ、

先程のヘタな音が、一瞬にしてまとまる。

違うバンドのよう。

サックス奏者の名は、

安藤啓介。

明日香が、音楽を教えてもらっているママ…恵子の息子。

ジャズ専門誌にも紹介されている、若き新鋭のサックス奏者。

そして、

産みの親は、世紀の天才といわれ、海を渡った伝説の歌手…

安藤理恵。

「すごいとこね」

明日香を、何とか探し出した有沢里美が、

隣に来て、壁にもたれ掛かった。

本当は、明日香といっしょに来るはずだったが、遅れてきたのだ。

チケットに、住所が載っているから、迷うことはなかったようだ。

里美が右手に、もっているドリンクは…。

明日香の視線に気づき、

里美は、照れ笑いをする。

「あっ！これ…芋焼酎の水割り」

高校生が…ライブハウスで焼酎って。

里美は一口飲むと

「おいしい」

満足げに呟く。

（おっさんか！）

「たまに、部の打ち上げで飲まされるんだ」

（部って、あんた園芸部でしょ！）

って、ツッコミたい明日香の視線を感じて、

里美は、頭をかいた。

「たまに、うちのおやじがすすめるのよ。たまにね」

言い直す里美の言葉に、明日香は呆れた。

「最近…なんか、あたしが落ち込んでるみたいだと、感じたみたいで…呼ばれたの」

里美は、焼酎を一口飲み、

「話せと…一杯すすめながら。娘にすることとは、思えないわ」

また、里美は焼酎を飲んだ。

おいしそうに。

それに、ペースが早い。

酒呑みだわ。

「それで、あの事を話したら…その男！殺すと言い出して…やりかねないわ」

ちょっと前、里美はふられたのだ。

ふられたと　いうより利用された…。

今は、明るくなってる。

立ち直ってると思いたい。

なぜなら、

明日香も関係してたから…。

演奏を終えたバンドが、ステージを降りても、

啓介だけは居続けた。

スカ、ロック、ファンク…。

次々に登場するバンドたちと、

啓介は、共演を続ける。

決して、

邪魔することなく、

周りと融合しながらも、

啓介の個性は、醸し出していた。

啓介の心が、叫ぶ。

サックスだから、

なぜ、ジャズをやらなければならない。

俺は、どんな音楽でも合わせてみせる。

そして、

どんな音にも、埋もれることはない。

一音で、

俺だとわかる音。

それが、啓介がほしいものであった。

そして、目標であった。

ジョンコルトレーンやウェインショーターのように。

すべてのバンドが、終わった。

会場が静まり返り、

最後のバンドが、片付けていても、

誰も帰らないどころか…人が、増えている。

みんな知っていたのだ。

今までが、前座であることを。

ステージに一人残る啓介の顔が、真剣になる。

恵子が、ここに明日香を行かせたのは…啓介を聴かせたいだけではなかった。

静かにステージに上がる…赤い影があった。

赤い影は、真紅のドレスをまとった女だった。

黒く長いストレートの髪に、大きな瞳。

軽く会釈すると、

バンドが、後ろでセットしている中、

いきなり、アカペラで歌い出した。

明日香は、曲を知っていた。

美空ひばりのりんご追分。

啓介だけが、歌に絡んでいく。

人々は、まるで

奴隷だった。

聴くことしか許されない。

でも、押し付けがましくない、自然に心に染み渡る歌。

情熱的なのに、

どこか切ない。

明日香は、歌というものの魔力を知った。

軽やかで、

暖かく、やわらか。

そのくせ、激しく心をノックする。

最近、歌い始めたばかりの明日香は、愕然とした。

これが歌なの。

これが、歌うというものなの…。

歌い終わると、

女は静かに、客席に向かって微笑んだ。

「今日は、何の告知もしてないのに…こんなに集まって頂いて、ありがとうございます」

深々と頭を下げる。

ライブハウスに、歓声が沸き上がる。

女は、笑顔を満遍なく、

会場の端から、端まで振りまいた。

嫌みなく。

「次の曲は、アリシアキーズのＩｆ　ＩＡｉｎ'ｔ　Ｇｏｔ　Ｙｏｕ」

バックがピアノを弾き、歌がはじめる。

あれほど、うるさかったライブハウスが静まり返り、

歌声に聴き惚れる。

啓介のサックスが、絡んだ瞬間…

明日香は、

ライブハウスを飛び出した。

この感じは…

あの音だ。

あたしが憧れた音。

「明日香！」

ライブハウスから、飛び出した明日香の後を、

里美が慌てて、追いかけてくる。

「どうしたのよ」

まだ焼酎の入った紙コップを、持っている。

明日香は、胸を押さえた。

（このわき上がる感情は…嫉妬？あたしは嫉妬した）

あの二人の音は、

明日香が憧れたｋｋ…ダブルケイの音だった。

明日香を、音楽へと導いた

恵子と健司の音だった。

（誰なの…啓介さんの隣にいた歌手は…）

次の日学校が終わると、明日香はまっすぐに、
音楽を教えてもらっている恵子の店へと、急いだ。
もう日が、落ちるのが早い。
短くなった夕焼けに、照らされながら、
電車を乗り継いで、ｋｋへと着いた。
七時開店のため、クローズとなっている扉を開けると、
笑顔の恵子が、迎えてくれる。
「おはよう。明日香ちゃん…と、里美ちゃん」
「おはよう！ママ」
里美が、元気よく挨拶する。
そう…なぜか最近、よく付いてくるのだ。
いつものように、恵子はコーヒーをいれてくれる。
里美は一口飲むと、
「ママのコーヒーって、ほんとおいしい！」
「あら。里美ちゃんは、いつもお上手ね。うそでも嬉しいわ」

「あたし…うそはつけないんですよ。だから、男にもだまされるし」

里美は笑う。

（笑えない…）

「奇遇ね。あたしもそうなのよ」

恵子も笑う。

さらに笑えない。

笑いあう二人。

明日香は、無理矢理咳払いすると、話題をかえた。

「ママ」

真剣な明日香の声のトーンに、

恵子は、笑うのをやめた。

「昨日、ライブで…啓介さんといた歌手は、誰なんですか？」

明日香の質問に、恵子は目を丸くして、

「言わなかったの？」

明日香の隣で、コーヒーを味わっていた里美が口を開いた。

「この子…いきなりライブが、はじまって…すぐに、出ていたのよ」

里美はコーヒーを飲み干すと、肩をすくめた。

恵子は驚き、あきれた顔で、明日香を見た。

明日香は恵子から、顔を背けると、

「だって…くやしかったんもん……。なんか二人の音が…くやしかったの」

明日香は、コーヒーに手をのばした。

恵子は苦笑する。

「それって…啓介が、他の女とやってたからかい？」

いつのまにか隣にきた…ベースの阿部が、ニヤニヤ笑っていた。

「ち、ちがいます！そんなんじゃないです」

明日香は、阿部にソッポをむいた。

「そうですよ。明日香も最近、ふられたばかりなんですから！誰か…知らないけど」

里美は、じっと明日香を凝視する。

明日香は、里美も見ないようにし、恵子にもう一度きいた。

「ママ！あの人は…？」

呆れながら、恵子は…一冊のジャズ雑誌を、明日香に渡した。

「河野和美…２３才。まだデビューはしてないけど…あの安藤理恵の再来と、いわれているわ」

安藤理恵。

アジアの歌声という宝石…

といわれた彼女は、アメリカに渡り自殺した。

明日香がページをめくると、見開き一杯に和美の特集をしていた。

赤い服。

赤い口紅。

「真紅の歌姫…」

和美は、そう紹介されていた。

「そろそろ、音あわせましょうか」

恵子の言葉に、

まじまじと見つめていた雑誌を、カウンターに置くと、
明日香は、ステージに向かった。

「なんか…あたしも、音楽やりたいなあ」

カウンターに座って、明日香の練習を見ていた里美がつぶやいた。

「なにがやりたいの？」

恵子の問いに、

里美は、カウンターから身を乗り出し

「ドラム！」

里美は、叩く真似をしながら、

「こう…すべてをぶち壊すような！コノヤロウって感じで」

恵子は苦笑し、

「理由はどうであれ…。興味をもつことは、いいわね…でも、ドラムはむずかしいのよ」

恵子は、指でカウンターを叩いた。

当然音がなる。

「ドラムは、叩いたら…誰でも鳴るのよ。だからこそ、ある程度のリズム感があれば、叩けるわ。だけど…」

次は、少し強くカウンターを弾くように、叩く。

「感動できる一音を叩けるアーティストは、一握りだけ…」

ぽかんとしている里美に気づき、苦笑した恵子。

「ごめんなさい。そこまで考えなくていいわね」

ちょうど、ステージ上で歌っていた明日香が、終わったところだ。

恵子は、ドラマーの武田を呼び、里美に教えるように言った。

無表情に頷く武田と、

驚く明日香。

「ちょうどよかったわ。うちは、年寄りばかりだから…」

恵子は、明日香に微笑んだ。

スカートの為、叩きにくそうだったが、

叩いたら、音がでるドラムに、里美は夢中になる。

お陰で、明日香の練習する時間がなくなった。

少し不満げな明日香に、

恵子は、オレンジジュースを手渡す。

「明日香ちゃんは…そろそろ、ここ以外で、歌わなきゃならないわね」

「え？」

「歌手は、人前で歌って成長するの。ここは、常連が多いから…みんな、明日香ちゃんに甘いしね」

恵子は、タバコに火をつけた。

「でも…もうちょっと先の話ね」

タバコを深く吸い込むと、

一気に、灰皿にねじ込んだ。

もう七時。

ＫＫの営業が始まる。

お客さんの前で、歌うのは、学校が、休みの前の日だけ。

一応、高校生なのだ。

興奮している里美と、帰りながら、明日香は、嬉しそうに里美を見

ていた。

サッカー部の高橋君に、ふられてから、

どこか空元気だった里美の笑顔。

明日香は、嬉しかった。

「明日香！今度、ＣＤ貸してよ。あたしも、ジャズきいてみる」

明日香は頷く。

里美とは、線がちがうので、

学校がある駅に着くと、二人は別れた。

家に帰り、

ご飯を食べ、お風呂に入った後、

明日香は、里美に貸すＣＤを探していた。

マイルス・ディビス…リー・モーガン…ケニー・ドーハム。

トランペッターしかない。

後は、ＫＫと…安藤理恵…啓介のお母さん。

（このＣＤは…）

明日香は、ＣＤをぎゅっと抱き締めた。

「ゆう…」

ゆうが、明日香にくれたもの。

幻のような恋だったけれど、

こんなにまだ…

胸を締め付けるなんて。

あれから、何ヶ月かたったけど、

まだ忘れない。

この思いが、消えることなんてない。

消したくない。

明日香は、泣いてる自分に気づき、自分で涙を拭うと、

理恵のアルバムをかけた。

一度聴いただけで、

明日香は、それからトレイにのせていない。

あまりにも、絶望の音だから…。

音楽が、流れだした。

心の奥に、触れる音

あまりにも、静かな音。

無音すらも、

音が、なっているように感じる。

この歌は、

絶望だけじゃない。

明日香は、驚いた。

嬉しさがある。

フューチャー…未来という名の曲。

理恵にとっての未来とは…。

ジャケットを手に取る。

カバーばかりの曲の中、

この曲だけが、

オリジナルだ。

理恵が書いたオリジナルナンバー。

曲が終わる。

自然と涙が、頬を伝う。

先ほどとは、違う涙。

この未来は、

理恵の未来じゃない。

啓介のことだ。

でも、

どうして…嬉しいのに、悲しいのだろうか。

どうして啓介を残して、自殺したのだろうか。

明日香には、わからなかった。

たぶん、

一生わからない。

わからなくていい。

明日香は決めた。

あたしは、理恵とは違う歌を歌う。

あたしは、涙なんか流れない歌を歌う。

たとえ…

悲しくて切なくても、

こんな涙は、流さない。

次の日。

学校で、里美に会うと、明日香は、ＣＤを渡した。

マイルス・ディビスのラウンドアバルトミッドナイト。

初めて、明日香が買ったジャズアルバム。

夕焼けのように赤いジャケットを見ながら、里美が言った。

「アンタの好きそうな色ね」

「そうかな?」

「…そういえば、最近…あんた…渡り廊下に行ってないよね。なんかあった？」

渡り廊下…もうなつかしい響きだ。

「まさか高橋君と…」

高橋。

サッカー部のエースで、里美の元カレ

渡り廊下から、部活を見下ろし、

明日香はその動きから、メロディーを探していた。

そして、その場所で

ゆうに出会い、大切なことを学んだ。

誰かを好きになること。

明日香は、首を横に振った。

「別に、何もないわ。ただ…あの場所に、いかなくても、よくなっただけ」

明日香は微笑み、

「もう…学ぶことはないから…」

チャイムが鳴り、授業がはじまる。

授業が終わった。

里美は部活の為…今日は、ｋｋにいけないという。

明日香は１人、店に向かう。

駅を降り、山道を登っていると、いつもないものを発見した。

それは、あまりにも…存在を強調し過ぎていた。

ＫＫの店前に見慣れない…赤いオープンカーが、停まっていたのだ。

明日香は、横目で車を見ながら、店の扉を開けた。

カウンターから、恵子がおはようの挨拶をした…

その前に、彼女はいた。

黒のデニムに赤いＴシャツ。

河野和美。

真紅の歌姫。

振り返った和美の横顔は、鼻筋が通り、

とても綺麗だった。

彫りの深い顔は、どこか日本人離れしていた。

美人だ。

恵子の挨拶を聞いて、カウンターから、和美は振り返った。

「あなたが、明日香ちゃんね。啓介からきいているわ」

微笑みながらも、和美はじっと、制服姿の明日香を凝視した。

明日香は、扉の前で緊張して、動けなくなる。

和美は視線を明日香から外し、軽く鼻で笑うと、

「啓介が、ほめてたから、どんな子かと思ったら…まだ子供じゃない」

ゆっくりと…和美はカウンターから立ち上がり、おもむろにステージに向かう。

「歌ってるらしいわね。今から、本当の歌を聴かせてあげる」

ピアノに座ると、いきなり歌いだした。

ロバータフラックのＫｉｌｌｉｎｇ　Ｍｅ　Ｓｏｆｔｌｙ。

圧倒的な歌声と、感情豊かなピアノの音が、ｋｋ内を染めていく。

激しい音。

傍らにいた阿部が、感嘆したように口笛を吹く。

ピアノの腕も凄い。

最後のフレーズをピアノが、奏でると終わった。

余韻がため息をつく。

「これが、あたしの音よ」

和美は、ピアノから離れると、ステージを降り、

真っ直ぐに、明日香に向かって歩いてくる。

目の前で止まると、和美は腕を組み、威圧的に…挑戦的に、明日香に言った。

「あなたの音は、あるの？」

戸惑い、思わず恵子を見る明日香…。

恵子は、深く頷いた。

明日香は深呼吸をし、天井を見上げた。

目をつぶる。

（逃げちゃ、だめ！）

心の奥が、明日香に告げた。

明日香はもう一度、恵子の方を見て、

力強く頷くと、歩きだした。

ステージまで。

和美の横をすり抜け、

明日香は、ステージに上がった。

マイクの前に立つと、明日香は、アカペラで歌い出した。

マイフーリッシュハート。

でも、上手くなんて歌えない…。

アカペラなんて、初めてだから。

そんな明日香の様子を見て、阿部達がステージに、いこうとする。

しかし、恵子が止めた。

明日香は、自分の歌の中で、道に迷う。

歌詞は覚えてる。

だけど、音が見つからない。

いつも聴いてるｋｋのアルバムのように、歌えるはず…

なのに、音がない。

あのアルバムには、

恵子の歌に、

寄り添い包むような優しい…健司の音があった。

健司の音。

寄り添う音。

あたしにはない。

あたしにはあの音がない。

あの音…

（トランペット！）

いきなり、明日香は歌うのをやめ、ステージから降りると、

横にある控え室に走った。

そこにあるもの。

恵子が、明日香にくれたもの。

明日香はケースを開け、

マウスを、それに差し込みと、

ミュートを、先にねじ込んだ。

そして、ステージへと戻った。

マイクに向かい、

「香月明日香。曲はＩ　Ｆａｌｌ　Ｉｎ　Ｌｏｖｅ　Ｔｏｏ　Ｅａｓｉｌｙ」

そう言うと、マウスに口づけをした。

トランペットが、静かにイントロを奏でた後、

唇を離すと、明日香は歌い出した。

明日香の歌。

明日香の音を。

静かに、

トランペットが、エンディングを優しく奏でる。

終わった。

明日香は、深々と頭を下げた。

カウンターに座って聴いていた和美は、立ち上がると、

「これが、あなたの歌。あなたのスタイルね。ペットを吹きながら歌う。ママが指示したの？」

恵子は、軽く首を横に振り、

「あの子が選んだのよ」

和美は、明日香を見た。

ステージ上で、緊張して、トランペットを抱き締め、和美を見る明日香。

和美は、フッと笑った。

（演奏してる時は…まったく緊張していなかったのに…）

和美は、明日香を見据え、

「ペットも歌も、まだまだだけど…認めてあげる」

和美は、明日香から視線を外すと、真っ直ぐ扉に向かう。

「だけど…まだ、愛を知ったばかりの女の子の歌ね。ママ、お邪魔したわ」

扉が、激しく音をたてて、閉まる。

和美は、ＫＫから…嵐のように去っていった。

明日香は、トランペットを抱き締めた。

恵子と健司の…ｋｋのアルバムに導かれて、

あたしは、ここに来た。

恵子の歌声に憧れ、

健司の音の優しさを、知りたかった。

（そうなの…。あたしが惹かれたのは、恵子と健司の音！一つじゃない！）

「ママ！あたし欲張りかな！」

明日香は、カウンターに向かって、叫んだ。

恵子は、笑顔を向け、

「欲張りじゃないわ。あなたは、あなたのやりたいようにしなさい。それが、あなたの音楽よ」

明日香は、トランペットを突き出し、

「これ、また使っていいの？」

「もう…とっくに、あなたのものよ」

明日香は、ステージから飛び降りると、恵子のもとへ走っていく。

カウンター越しに、恵子に抱きついた。

「仕方が、ないわね。明日から、もっといっぱい練習しなくちゃね」

恵子は、優しく明日香の頭を撫でた。

「うん」

明日香は、頷いた。

ほんのり淡い夜の中。

夜景を見渡せるラウンジに、1人…和美はいた。

見える街並みの光の輝きを、隣のカップルが、綺麗と呟きあっていた。

（綺麗？）

和美は心の中で、せせら笑った。

（こんな人工的な光が？）

和美は、光を睨んだ。

夜は暗いものよ。

夜がない街は、

安らぎのない街。

綺麗なだけ…。

夜景との間にあるガラス窓に、

和美な顔が映る。

（あたしもか…）

和美の手の中にある…グラスの中で、氷が転がる。

虚しい音を残して。

「ここだったか…」

突然後ろから、声がした。

ガラス窓に映ったが…和美は、映った姿を見たくなかった。
目をつぶり、振り返ると…和美は、ゆっくりと目を開け、声の主を見上げた。

「何を飲んでる?」

声の主の質問に、和美は微笑んだ。

「いつもの…」

声の主は、注文を取りにきた店員に、告げる。

「同じものを」

バーボンのロック…ワイルドターキー。

和美は、クスッと笑った。

「自分の意志がないの?啓介?」

和美の前に座ったのは、啓介だった。

「俺は昔から、これだろ。お前が、真似しだしたんだ」

「そうだったかもね」

運ばれてきたグラスを、手に取り、啓介と和美は軽くグラスを合わせる。

バーボンの甘い香が漂う。

「店に…行ったんだってな」

啓介は、口をつける前に、グラスを転がした。

「そうよ。恵子ママはいつ見ても綺麗ね。あこがれちゃう」

それが何か…というように、和美はグラスを、口に運んだ。

「何しに行った?」

啓介の口調が、強くなる。

「恐い顔しないでよ」

和美は、バーボンを飲み干すと、同じものを注文した。

和美は啓介を見つめながら、頬杖をついた。

「見たかったの。啓介が気に入ってる子…。悪い?」

「…いや」

グラスを転がすのをやめ、啓介は…一口飲んだ

和美は、視線を窓に移し、呟くように言った。

「期待外れだったわ…」

和美の言葉に、

啓介は驚かない。

解りきったこと…。

「歌も…演奏も、素人とレベル」

「だな…」

啓介は、また一口飲んだ。

和美は不満げに、啓介を見た。

視線を感じ、

「仕方ないだろ。はじめて、半年ぐらいなんだから」

「それなのに、なぜ恐れないの？」

和美は、グラスを見つめ、

「あたしは、こわいわ。歌うことは…好きよ。でも、あたしは…人前で歌うときは、いつもこわいわ」

和美は立ち上がり、啓介に服を見せた。

「赤い服。あたしのイメージ…目立つ服装で、あたしはいつもいる。みんなの視線を浴びる為に…そうしないと、あたしは逃げ出す」

啓介は、和美を見ずに、

「座れよ。みんな見てる」

「言ったでしょ。目立ちたいと」

フンと鼻を鳴らすと、和美は座り、一気にグラスの中身を飲み干した。

また同じものを、注文した。

「なのに、あの子は…何？若い子で歌ってる子は、何人も知ってるけど…歌が好きなだけ！それだけの子ばかり！下手くそでも、お構い無し！プライドがないのよ！」

和美は、顔をしかめた。

啓介は、それに関しては、否定も肯定もしない。

ただ…ゆっくりとグラスを置くと、和美を見て、

「優しさを知りたい…。歌に、寄り添うおやじの音が、知りたかったらしい」

「優しさ…？」

和美は、眉を潜めた。

啓介は頷き、

「あの子は、歌が好きから、始めたんじゃないのさ」

「優しさって…甘いわ」

和美は、ガラスに映る自分を睨む。

「俺達よりは、ましだろ」

啓介の言葉に、和美は振り向いた。そして、啓介を軽く睨む。

「それが、あたしと組まない理由なの？」

「お前と俺は、似すぎている」

啓介は、睨む和美を真っ直ぐに見据えた。

「あたしと、啓介の音が絡んだら、誰にも負けないわ。少なくても、こんな国では！」

和美は、声を荒げた。

「お前も、アメリカにいくつもりか？」

啓介の言葉に、和美は少し冷静さを取り戻し、

「アメリカ…小さいわ」

遠くの虚空を睨んだ。

「俺は、お前とは組まない」

啓介はきっぱりと言い放った。

啓介は、バーボンを飲み干すと、席を立った。

「こんなに合ってるのに！なぜよ」

「お前とは…確かに、すばらしい音が生まれる。表面的にはな。だが、俺達の音は…だめだ」

「どうして！だめなのよ！」

「俺とお前が、音楽をやってる理由だ」

啓介は、伝票を取ろうとした。

それを、和美は制した。

「やめてよ。そういうのは嫌い。あたしが誘ったのよ」

啓介は、和美を見つめ、

舌打ちすると、伝票を和美に返した。

そのまま…出ていく啓介の背中を見つめながら、

「あんたの音は、誰にも渡さないわ」

和美は、グラスを握り締めた。

心の中で・・・

「よくわからなかった」

里美は、貸してもらったＣＤ…ジャズが、イマイチだったらしい。

明日香は、クスッと笑うと、

「聴くとやるは、違うから…里美も、音を合わせたら、わかるようになるわ」

昼休み。

いつもの場所である…体育館裏のベンチで、２人は寛いでいた。

もう夏だ。

この場所は、日陰だからいいけど、

少し動くだけで、汗をかいてしまう。

「明日香。あたしさあ…園芸部やめようと思うんだ」

里美は、烏龍茶を飲みながら、話し出した。

「もともと…興味なかったしね。だから、やめて…軽音部に入ろうと思うんだ」

「どうして？」

唐突な里美の言葉に、明日香は少し驚いた。

「あたし…あんたより、出遅れてるでしょ。だから、入ろかなと。ママの店は、あたしを教えだしたら、あんたの時間が、少なくなるし」

「里美…」

「あんまり…店までいけないし」

里美は、烏龍茶を飲んだ。

「そんなに、気を使わなくていいよ」

「もう入部したし」

さらっと言う里美。

「え！」

明日香が驚くと、

里美は、お茶を飲み干し、

「いやあ～説明だけ、ききにいくはずだったんだけど…あまりにも、部長が男前でさ！これは運命よ」

里美は、ガッツポーズをとる。

「もう園芸なんてやってられない。音楽こそ、新たなあたしの始まりよ」

あきれてしまう…。

男勝りで、恋愛恋愛と騒ぐタイプではないが、

密かに、イケメン好きであることを、

明日香は、最近知った。

軽く頭を抱える明日香に、

トドメの一言が発せられる。

「あんたも、入部したから。その場で、2枚書いたから」

里美は、2本目の緑茶を開ける。

「どうして興味を?って滝川部長が…潤んだ瞳できいてくるから」

里美はウットリとし、

「親友が、音楽をやっていてと言ったら…ぜひ、会いたいというのよ!だから、手っ取り早く入部させたの」

「か、勝手に！？」

「ちゃんと～忙しいから、たまにしか…顔は出せないと、いっておいたから！ナイス！あ☆た☆し」

里美は、自分で納得気に頷いた。

「あのねえ！」

「今日。一緒に、顔出すからね。そんなに時間、とらさないから」

里美は、緑茶も飲み終えると、

明日香の手を握り締め、

「仕方がないじゃない！運命の人の望みなんだから」

明日香が、何か言おうとすると、

里美はぎろっと睨み、

「それとも何？運命なんてあきらめて、過去にしがみついて、泣いてたらいいの！なんて、ひどい親友！いえ、もう親友でも友達でもないなら、いいわ」

少し芝居がかった里美の口調に、明日香は観念した。

「わかったわよ」

「あなたまで…入ってくれるなんて…」

滝川は、笑顔で二人を迎え、

「本人の意志を、確認してからと、言ったんだけど…有沢さんが、大丈夫だからと、強引に」

滝川が、申し訳なさそうに明日香に向かって、言った。

明日香は、里美を見た。

里美はソッポを向き、舌を出した。

（はめられた）

滝川は、明日香の手を握り締め、

「最近…あまり人が、入らなくて…メンバーが、足りなかったんだ。ほんと助かるよ」

放課後、連れていかれたのは音楽室。

北館の2階。

正面の窓の向こうに、グラウンドが見える。

さりげなく、里美はカーテンを閉めた。

カーテンの隙間から、

夕日がこぼれる。

右側の窓からは、

渡り廊下が見えた。

部員は、明日香達をいれて、８人のようだ。

部長の滝川は、眼鏡をかけていて、音楽をやっているようには見えない。

真面目そうだ。

担当はベース。

「そういえば…香月君は、外で、音楽やってるそうだね。それもトランペット！」

おおっと、とってつけたように周りの部員が驚く。

里美も驚く。

（おい！）

ツッコミをいれたくなる。

「みんな、聴いてみたいよね」

里美も含め、

全員が大きく頷く。

明日香は、変な空気を感じ…少し後退る。

「…今日はトランペットを…持ってませんから…また次回ということで…」

滝川は、ニコニコしながら、

後ろに隠してあったものを、明日香に差し出す。

「こんなことがあろうかと…ブラスバンド部から、拝借してきました」

ああ…トランペット…。

はめられてる。

逃げようにも

出口をいつの間にか、

里美達に塞がれてる。

ニコニコと滝川が、トランペットを押し付ける。

屈辱だが、仕方がない。

明日香は、トランペットを受け取ると、

もともとついていたマウスを外し…ポケットから、いつも使っているマウスを、取り出した。

恵子が言っていた。

マウスは、使ってると自分の唇の形がつくから、

つねに、同じのをつけなさい。

（あなたの口づけよ）

明日香は、周りを見回すと、

そっと…渡り廊下の方に、ペットを向けた。

夕焼けに染まった渡り廊下……。

そういえば…

あなた。

言っていたわね。

あたしの音が、聴きたかったと…。

今は、黄昏。

あなたに届くかしら。

（ゆう…）

明日香は、目をつぶり、静かに吹いた。

静かに、

優しく、そっと、

あなたに、触れるように…。

あなたとの口づけの想い出とともに。

夕焼けに、

優しく照らされた明日香。

トランペットも優しく、中音域の音を奏でる。

（あたしは…高い音とか、叫ぶ音とか嫌いみたい）

ゆっくりとゆっくりと囁くように、

でも、心に残るように…

あなたの笑顔が、

あたしの中に残ったように。

そう。

あたしの音は黄昏。

昼間のように、輝いてもいない。

夜のように、暗くも神秘的でもない。

その間の黄昏。

あなたと過ごした黄昏の優しさが、

あたしの音になる。

少しフェイクをくわえながら、

最後のフレーズ…

最後のメロディーを遊んでみる。

終わるのがいやだから。

でも、

夕焼けは短いの。

ゆっくりと、目を開けながら、

渡り廊下を見つめながら、

明日香は、演奏を終えた。

少しの沈黙。

明日香は、マウスへの口づけをやめた。

拍手が湧き上がる。

「すごい！」

里美が、感嘆している。

明日香は、深々と頭を下げた。

今までで、一番うまく吹けたと思う。

（あたしは成長している）

渡り廊下に向かって、微笑んだ。

さらに、もう一度拍手をしながら、

滝川が、明日香に近付く。

「すごくよかった。トランペットだけじゃなくて、歌も歌ってるそうですね」

「どちらも、まだまだですけど」

滝川は、眼鏡を人差し指であげると、

後ろのドアを、押さえている女の方を向いた。

「浅倉君。これで…いい戦力ができましたね」

浅倉は、ドアを押さえるのをやめ、明日香に近付く。

そして、明日香を下から上まで見て、一言、

「かわいいです」

浅倉と滝川は、頷き合う。

「浅倉副部長」

「滝川部長」

二人は、にやっと笑った。

「メイドもいけます」

浅倉の言葉に、滝川は頷く。

「メイドでバンド」

ガッツポーズを取る。

なんなのかわからない…。

疑問形の明日香は、やはり身の危険を感じ、トランペットを置くと、

そそくさと、出ていこうとする。

「待ちたまえ！香月さん。理由を説明しょう」

滝川が叫んだ。

「この部は今、存続の危機に瀕している！」

滝川の言葉の続きを、浅倉が続ける。

「部員が少なく、あまり活躍もしていないことと…逆に、ブラスバンド部が活躍し、賞を取った為に…。軽音部は、ブラスバンドに吸収…合併の話が、でているのです」

「そこで我々は、学校側と交渉したのだ。１ヶ月半後、我が校は姉妹校三校と、音楽祭を開催する。そこで一番注目を浴びたら、存続できる！」

滝川と浅倉は、明日香の腕を取り、

「その為に、あなたが必要なのだ！香月さん！よろしくお願いします」

明日香は、たじろぐ。

「浅倉副部長」

滝川の言葉に、

浅倉は、黒板に紙を貼った。

紙には、

ボーカル&，トランペット　香月明日香。ベース　藤井亜紀。ギター　浅倉瞳。キーボード　近藤由里。ドラム　上原裕子。

「軽音部が誇る！女性陣で、スペシャルユニットを、組んでもらいます」

「その名も！」

「部長！まだ、名前は決まっていません」

肩透かし。

咳払いの後、滝川は、

「とにかく…これで、勝ちにいきます。よろしく香月さん」

いきなりの展開に、

戸惑い…言葉を失う明日香。

「あのお…あたしは？」

置いてきぼりのような空気を感じ、

里美が、手を上げた。

はっとする滝川と浅倉。

二人は小声で、

「部長…」

「分かっているよ…浅倉副部長…初心者を、入れるわけにはいかない」

滝川は、咳払いをすると、

ニコニコと里美に近づく。

里美の肩に、手を置いた。

「有沢くん…君には特別な…君しかできない！ことを、用意してあるから」

滝川は、ウィンクをした。

「君にしかできない！」

「って…何？」

顔をしかめる里美を、

滝川は、無視して、

明日香達の方を向く。

「音楽祭は、１ヶ月半後です。姉妹校だけでなく、一般の人も参加してきます」

「まあ…ブラスバンド部より、注目を集めたらいいだけですので」

滝川と浅倉は、明日香の肩を叩いた。

「明日から！このユニットは始動するんで、よろしく！」

断れない空気に、明日香は、深いため息をついた。

あたしでいる為に

木漏れ日の中、
揺りかごから出された…
まだ小さな体は、
ほんの少しの力だけで、恵子に抱きかかえられた。
恵子の腕の中で、
嬉しそうに
少し手足をばたつかせ、恵子を見つめた。
そして、
小さな小さなで手で、恵子の頬に触れた。
恵子も微笑むと、部屋の中を歩き出した。
静かに。
そして、
静かに歌い出す。
子守歌より、優しい歌。

健司を失い、

歌えなくなったカナリアは、

赤ん坊をあやすときだけ、自然に歌えた。

たった一人の大切な坊や。

さらに嬉しそうに、手足をばたつかせる。

まるで、リズムをとるかのように。

恵子もさらに微笑み、

「啓介は、歌が好きなのね」

もう一曲。

恵子は、歌い続けた。

たった一人の観客が、

眠りにつくまで…。

「どういうことなのよ！里美！」

音楽室をでて、駅へと向かう帰り道。

「どういうこととは、こっちのセリフよ！なんで、あんたが、メンバーに入ってて！あたしは、入ってないのよ」

逆ぎれだ。

言い争いを続ける2人の横を、

2台の自転車が、走り抜けていく。

明日香達と、同じクラスの雪野麻理亜と……

高橋。

麻理亜は、フンと一瞥をくれたが、

高橋は、まるで…気付かないみたいに、無視だ。

去った二人の後ろ姿を、見つめながら、

里美は、拳を握りしめた。

「あ、あすかあ！あたし。絶対に、部長としあわせになるからね。ちきしょう！」

メラメラと燃える怒りに、

里美は、震えていた。

「ったく、むかつく！」

ｋｋに着き、

カウンターに座った明日香は、音楽祭のビラを見ながら、愚痴る。

「あれ？里美ちゃんは？」

後ろから、カウンターに近づいてきた阿部が、明日香にきいた。

明日香は振り返り、膨れ顔を見せる。

恵子は、肩をすくめると、

「ケンカしたらしいわよ」

「だって、ひどいんですよ。無理やり…」

明日香の説明を、ききながら、

恵子は、タバコに火をつけた。

阿部は笑う。

「いいんじゃない」

恵子は、タバコをふかす。

阿部も頷き、

「いいことだよ。歳の近い子とやることは…ここは、年寄りばかりだからね」

「悪かったわね」

恵子の言葉に、阿部が狼狽える。

「ね、姉さん！そういう意味じゃなくて…」

何とか言い訳をしようと、必死な阿部の姿に耐えられず、

恵子は、笑ってしまう。

「わかってるわよ。同い年の子と音楽をやり、学び、成長することは…今しか、できないことだから」

阿部は、胸を撫で下ろし、

「俺らなんて…もう成長しょうがない。新しい曲も、そつなくこなすけど…こなしてるだけ。新しいことはできない」

「そうですか？」

明日香は、首を捻る。

「明日香ちゃんは、若いからね。自分の限界なんて、わからないだろ」

「あたしだって、勉強…特に、理数系は無理だって、限界感じます」

明日香の言葉に、阿部は微笑み、

「でも…死ぬ気で、頑張れば、何とかなるかもしれない。勉強なんて、答えがあるんだから…」

阿部は、タバコを取り出し、

「俺は学校とか…集団で学べるものは、ある程度、みんなできると思っている。個人差は、あるだろうけど」

恵子は、灰皿を阿部に渡した。

「この子は、頭、良かったのよ。兄が、あこぎな商売についたから…親の期待を、一身に受けて。全国模試でも十番以内で」

阿部は照れながら、タバコに火をつけた。

「昔の話だよ。結局…兄貴と同じ…あこぎな商売やってるんだから。でも…あんなに、バカにしてた兄貴みたいには…なれなかった」

ゆっくりと、阿部は煙を吐き出した。

「そういえば…大樹は、どうして、音楽をやるようになったの？今まで、きいたことなかったわね」

恵子の言葉に、

阿部は、顔を真っ赤にして、

「兄貴が…心の中では、羨ましかったのさ…兄貴が…」

阿部は、タバコを灰皿にねじ込むと、

ステージに向かった。

もう練習時間が、少なくなってる。

明日香は、音楽祭のビラを恵子に渡すと、

ステージへと走った。

曲が変わる。

武田がカウントし、

原田のピアノが、静かに転がる。

曲は、Ｉｔ　Ｎｅｖｅｒ　Ｅｎｔｅｒｅｄ　Ｍｙ　Ｍｉｎｄ。

明日香は、フゥと軽く息を吸うと、
トランペットのマウスに、口づけをした。
甘く、優しい音が、
ダブルケイの店内に響く。

まだ拙い…不安定な音ではあるけど、
不思議と、聴いてるだけで、微笑む暖かさがある。
戸惑いさえも…
微笑ましい。
恵子も…自然と微笑みながらも、
演奏が終わると、タバコを灰皿にねじ込み、表情を引き締めると、
ステージに近づいた。

「最近、バラードが多いわね。得意だからといって、それだけじゃあ、駄目よ」
恵子は、厳しい口調で、ステージにいるメンバーに一喝する。
「武田くん。シャッフルのリズムを」

武田は、リズムを刻みだす。

それに合わせて、

阿部が、ウォーキンベースを弾き出す。

リズムが跳ねる。

「曲は、Ｒｉｇｈｔ　Ｏｆｆ」

ライト・オフ。

マイルス・ディビスが創ったロックの名曲。

発表から、３０年以上たっても、未だにジャズロックバンドが、クラブのジャムでよく演奏している。

お望みならば、最高のロックグループをつくってやる。

ジャズトランペッターだった彼が放った…その言葉を、裏付けるように、発表したこの曲は、

ジミーヘンドリックスにも影響を与えた。

「原田くんは休んで！」

恵子はそう言うと、

ステージ横から、ギターを取り出し、

アンプに繋ぐと、ギターを抱え、ステージに上がる。

恵子のカッテングを主体にしたギターが、鳴り響く。

「ママ…」

トランペットを持ったまま、…唖然としている明日香に、

「ぼおっといない！リズムに乗って、吹いて！」

恵子の声に、

明日香は、恐る恐るトランペットを構える。

「ドラムを感じて…乗りなさい！トランペットを意識しないで！リズムだけ、感じなさい」

明日香は目を閉じると、

トランペットを吹く。

リズムを感じる…。

周りの音にだけ、集中していると、

少しつづ…明日香に見えてきた。

リズムの道が。

明日香の体に、

恵子のギターが絡みつき、

武田と阿部が、進むべき道を創っていく。

ギターが押してくれている。

明日香はその道に向かって、歩きだす。

まだ、まっすぐ歩けないけど…。

少しフラフラしながらも、明日香はトランペットを吹き、

歩いていく。

カウンターでは、

いつのまにか店に来た…里美が、指で軽くリズムを刻みながら、ステージ上を見つめていた。

知らないうちに、

原田のピアノも、参加している。

鍵盤を激しく叩き、
明日香のバックの時みたいな…メロディー主体の弾き方ではなく、
リズム楽器でもあるピアノの姿を、浮き彫りにする。
恵子が、有名なジャックジョンソンのテーマと呼ばれるリフを弾き出すと…
やがて、演奏は終わった。
明日香は、激しい恵子のリフに圧倒され、
音を吹けなくなった。

ギターを外しながら、
「吹かなくていいときは、吹かなくていい」
恵子は、明日香に近づく。
「吹けないではなくて、今は吹く必要がないと、感じられることも…大切よ」
恵子はウィンクした。
「は、はい！」

明日香は頭を下げた。

恵子は微笑みながら、ステージを降りた。

ステージ脇では、

いつのまにか…啓介が、立っていた。

「母さんが、ギターを弾くなんて…」

「あら。弾けないと思った?」

恵子は、ギターをしまいながら、啓介を見た。

「そんなんじゃなくて…」

少し不満げな顔をしながらも、

啓介は視線を、ステージ上に向けた。

「特別か…」

その目は、明日香を映していた。

恵子は、啓介の言葉にこたえず、カウンターに向かう。

啓介は軽く肩をすくめると、裏口に消えていった。

「もう一回お願いします！」

明日香はバックに、頭を下げた。

ヒュウ。

阿部が口笛を吹くと、

ベースを刻み、

ドラムが、シャッフルのリズムを刻む。

今度は、迷うことなく、

明日香は、トランペットを吹き出した。

「あら?…里美ちゃん．．．おはよう」

恵子は、カウンターに座る里美に気付いた。

「ママ…」

カウンターに蹲り…1人座っていた里美が、

カウンター内に入った恵子に、声をかけた。

「どうしたら…上手くなるんだろ？」

恵子は少し驚きながらも、

里美に微笑んだ。

「練習することだけよ」

「やっぱり練習かあ…」

里美は、カウンターに顔をつけ、両手を広げた。

「それも、人前でね」

恵子の言葉に、

里美は身を上げた。

「人前？」

「そうよ。音楽は1人で練習しても、仕方がないのよ」

恵子は里見を見つめ、

「かつて…マイルス・ディビスは、新しく入った若いメンバーに、こう言ったらしいわ…」

それから、タバコを取り出し、火をつけた。

「お客さんの前で、練習したらいいと」

「お客さんの前で！？」

恵子は頷き、

「それだと、リハーサルする必要もないし…スタジオ代もかからないって…」

恵子はクスクス笑い、

「それは、冗談として…。確かに、人前でいきなり…新曲とかを、合わせていたらしいわ。それによって、バンドのメンバーは、緊張感を保ち…お客さんは、新鮮な演奏を聴ける」

里美は黙って、聞いている。

恵子はタバコを吹かし、

「音楽を、上手くなりたいなら…スタジオとかにこもるのではなくて、できるだけ人前で、演奏することよ」

恵子は、里美にウィンクすると、

「武田くん！ドラム変わってちょうだい」

演奏中でありながらも、恵子の声は伸びやかで、

ステージ上にも響いた。

演奏が止まる。

「いってらっしゃい。里美ちゃん」

「うん！」

里美は勢いよく、カウンターから立ち上がると、

ステージへ走っていく。

そんな里美の背中を、

恵子は嬉しそうに、見つめていた。

でも、ステージ上で、明日香と目が合うと、二人はフンと顔を背け合う。

だけど…演奏が始まると、不思議と合っていた。

恵子は、カウンター内からクスッと笑った。

練習が終わり、

明日香と里美がお互いに、顔を背けながら帰った…十分後に、

和美が、顔をだした。

恵子は驚き、

「今日は、テレビの仕事じゃなかったの？」

和美は、カウンターに座る。

「昼までに、終わらせたわ。今、まっすぐ帰ってきたところ…。ママ、いつもの」

ワイルドターキー、トリビュート１５Ｙをロックで。

和美は、グラスを手に取り、一口飲むと、

「ＣＭ決まったわ。ＣＤにはならないけど…化粧品で、曲はカバー。イパネマの娘…ボサノヴァよ。ワンテイクで、さっさと終わらせたけど」

「さすがね」

恵子は、お客さんに呼ばれた為、

カウンターを出た。

その時、

和美は、カウンターの上に置いてある…ビラに気づいた。

明日香が、持ってきたもの。

和美は、なぜか気になり、

ビラを手に取った。

「音楽祭？」

渡り廊下で

仕方なく…次の日の

放課後、明日香は音楽室へと向かう。

足取りが重い明日香を、

夕陽が照らす。

（助けてくれないのね）

恨めしそうに、夕陽を見る。

明日香は、ため息とともに、音楽室へ向かう階段を、上がろうとした。

その時、

階段の上から、3人の女子が現れた。

「香月さんね」

真ん中の女が、降りてきた。

いきなり、胸元に手をいれると、

プリクラつきの名刺を、明日香に差し出した。

「結城恵美…ブラスバンド部部長！？」

驚きながらも、明日香が名刺を読むと…結城は、さっと名刺を、奪い返した。

「あなたの話は、きいてるわ。軽音の秘密兵器」

言い放つような結城の言い方に、明日香は、唖然とする。

結城は構わずに、話を続けた。

「しらばっくれても、無理よ。先日、うちの部室から…トランペットが、盗まれるという事件が、発生したのよ」

あっと、思わず口にでた明日香。

結城の目が、光る。

「そのトランペットは、学校のものとはいえ…うちが、所有していたもの！それを無断で！」

結城は、明日香を見、

「昨日…何と！音楽室より、トランペットの音がもれてきたの！吹いてたのは、あなたね」

結城は、明日香を指差す。

身の危険を感じ、思いっきり、首を横に振る明日香。

結城は、明日香に顔を近づけ、クスッと笑うと、

「別に…使ったらいけないと言ってないの」

急に、猫なで声になった。

「あなたが…うちの部員だったね」

結城は、ニヤリと笑い、

「我がブラスバンドは！いつも、優秀な人材を募集中！あなたがー」

明日香をまた指差し、

「我がブラスバンド部員だったら！何の問題にもならないわ」

満面の笑みで、結城はさらに顔を、明日香に近づける。

たじろぐ明日香。

「待ちなさい！」

階段のさらに上から、声がした。

颯爽と登場したのは、

軽音部副部長、浅倉だ。

右手に、トランペットを持っている。

「お探しのは、これね。昨日、うちの部員が拾って、保管してたの。今ちょうど、届けにいこうとしてたところよ」

「うそおっしゃい！」

結城は苦々しく、浅倉を見上げ、睨み付けた。

「あらあ。感謝されることはあっても、文句をいわれる筋合いはないわ」

階段を降りてきた浅倉と

結城が、至近距離で睨み合う。

その隙に…

明日香は、階段を降りた。

そして、

気づかれないように、

その場を全力で、後にした。

明日香は久々に、渡り廊下に来た。

少し風が強い。

でも、頬を撫でる風が、

何だか優しい。

少し沈みかけている夕陽に向かって、背伸びし、

敬礼した。

本当に久しぶりだ。

いつもの定位置だった場所…手摺りに寄りかかる。

隣を向いて、誰もいないけど、

微笑んだ。

（ただいま）

自然と、鼻歌を口ずさむ。

Ｓｏｍｅｄａｙ　Ｍｙ　Ｐｒｉｎｃｅ　Ｗｉｌｌ　Ｃｏｍｅ～いつか王子様が。

今の明日香の練習曲。

渡り廊下から、北館にある音楽室が見えた。

里美が、ドラムに座って叩いている。

一生懸命に。

こんなところから見えるなんて、知らなかった。

いつも、夕陽とグラウンドだけを見ていた。

夕陽が、半分くらい沈んでいる。

もう音楽室に、いけるだろう。

明日香が、

手摺りから離れようとした瞬間、

グラウンドからの階段を、上がってくる人物がいた。

高橋だ。

高橋は笑い、

「最近、あの男はいないようだね。別れたの？」

いきなり現れた高橋に、身構える明日香。

「あなたには、関係ないでしょ」

明日香の言葉に、高橋は鼻で笑った。

「フン…関係な〜い！？いきなり、殴られたんだぜ」

「それはあなたが…」

「俺がどうしたって？」

高橋は、明日香に近づく。

「結構…傷ついたんだぜ。女なんかに、ふられたことが」

明日香は、身の危険を感じ、後退る。

「あれから…何人か付き合ったけど、傷はふさがらない」

ゆっくりと…高橋は、距離をつめてくる。

「もう…あの男はいない」

後ろの階段に向かって、走ろうとした明日香との距離を、

一瞬で縮め、高橋は腕を掴んだ。

「好きだったから…特別に、少しは優しくしてやろうと思ったけど…やめだ」

高橋は、明日香の腕を引っ張り、
抱き寄せる。

（ゆう……）

明日香の必死の抵抗も、高橋には通用しない。

（助けて…）

高橋は無理やり
明日香の顎に手をやり、
顔を上げさせる。

「嫌がるなよ。みんな、喜んでしてるぜ」

高橋は、キスをしょうとする。

明日香は、必死に抵抗する。
けど、力が違いすぎる。

（もうダメ…）

明日香の頬を、涙が流れた。

「痛っ！」

突然、高橋は、明日香を離した。

高橋は頭を押さえて、蹲る。

後ろから、

頭にホウキが、思いっきり打ち込まれたのだ。

「明日香、大丈夫！」

涙をためた瞳に、

ホウキを持った里美が映った。

「里美！」

「こっちへ、明日香」

蹲る高橋の横を通り、明日香は、里美の後ろにまわった。

頭を押さえながら、高橋は里美を睨みつける。

「このブスがああ！」

「明日香に手をだしたら、許さないんだから！」

ホウキで身構える里美。

高橋は大笑いし、

「別に変なことをする訳じゃない。お前も、喜んでたことを、してやるだけだ」

その言葉に、

里美のホウキを持つ手が、震えた。

「喜んでたじゃないか。あんまり、長くつきあってやらなかったけどさ。すぐにしただろ」

里美は、ただ震えている。

唇を噛み締めて。

「軽い女の癖に。それとも何か！俺が、他の女とキスするのが、嫌か」

里美は、ホウキで殴りかかるが、

簡単にかわされる。

そして、

足をかけられて転ぶ。

「里美！」

高橋が、転んだ里美を蹴ろうとした瞬間、

「やめろ！」

渡り廊下に、滝川と浅倉が現れた。

後ろには、生徒指導の先生がいた。

「何をしている！」

先生にきかれ、

高橋は、困ったような顔をし、

「彼女が転んだから…手を、貸そうとしただけですよ」

高橋はそう言ったが…信じれるはずもなく、

一応、先生に連れて行かれた。

里美はこけたまま、

起き上がらない。

うつぶせのまま、

泣き出す。

明日香がそばにいくと、

何とか起き上がり、

里美は、明日香にしがみついた。

「くやしいよ。くやしいよ。くやしいよ…」

ただ一言を、繰り返して言う里美を、

明日香は、ぎゅと抱き締めた。

「風が…いきなり強く、窓を叩いてるから。窓の外をみたら…明日香のそばに、あいつがいて…」

里美は、その場にあったホウキを持って、飛び出したのだ。

「くやしいよ、明日香。あんなやつを好きだった…ことが、悔しいよ」

泣きじゃくる里美を慰めながら、

明日香も、泣いていた。

ふたりは泣いていた。

トランペット

「ふぅ…」

店の準備に追われる恵子が一息ついていると……

健司が近づいてきて…右手に持ったものを恵子に、突き出した。

それは、トランペットだった。

新品の新しいトランペット。

「どうしたの？」

恵子が、目を丸くすると、

健司は照れたように笑い、

「いいだろ？最高のやつだ！でも…金ないから、月賦で買ったんだ」

恵子はクスクスと笑い、

「見栄張って…ローンまでしなくても。他にあるでしょ…トランペットは」

健司は、右手に持った新品のトランペットを見つめた。

「他の安物だ。音が違う！それに、見栄じゃねえよ。決意だ。絶対、

後戻りしないと」

健司は、トランペットを恵子に向け、

「一生…こいつとお前と…一緒にいるという誓いだ」

健司は笑い、

「それに…今度、お前とレコーディングするだろ？最高のお前の歌に、最高の音を残してやるよ！永遠に残る音を！」

また照れたように笑うと、健司はそれを隠すかのように、恵子に背を向け、

ステージに向かう。

恵子は、はっとして、

ステージに振り返った。

ステージ上には、武田や原田はいたけど、

健司はいなかった。

恵子が、ため息をつくと、

店の扉が開いた。

「山田さん…来るんだろ?今日は、俺が吹くよ」

店内に入ってきたのは、

啓介だった。

ほぼ貸切状態の店に、

啓介のブロウが、響き渡る。

練習を終えた明日香は、カウンターに座り、

音に、身を任せていた。

「まだ帰らなくていいの?」

カウンター内で、ドリンクをつくりながら、

恵子はきいた。

「大丈夫です」

明日香は、微笑みながらも、

明日香の全神経は、啓介の音に、集中していた。

啓介の音は、聞き逃してはいけない。

明日香にとって、とても勉強になる…特別な音だった。

そして、啓介の音に、身を任せていると……心が安らいで、嫌なことを忘れられた。

恵子は…

そんな明日香の姿を、

かつて、健司を音を同じように聴いていた…

自分に重ねていた。

その目線が、

明日香の隣に置いてある楽器ケースを、とらえた。

恵子はフッと、自嘲気味に笑った。

あんなに大切なものを、

あなたは置いていた。

啓介のサックスが、すすり泣く。

恵子はステージを見、

微笑んだ。

あの子は、そんなことはしない。

できない…優しい子…。

だから、

少し、恵子には心配だった。

何かの拍子で……

壊れることはないだろうか。

力強い音こそ…本当は、繊細なのだ。

それだけが…

息子に対する不安だった。

演奏が終わり、

拍手の中、啓介はステージを降りた。

真っ直ぐに、カウンターに向かい、

座ると、ワイルドターキーの入ったグラスが置かれた。

「お疲れ様」

恵子の笑顔に、啓介は笑顔で返すと、グラスを手に取った。

氷を転がしながら、啓介は目をつぶった。

ステージ上では、ピアノトリオとなった武田達の演奏が、始まった。

「素晴らしい…」

啓介の感嘆の呟きに、

明日香は振り返り、

ステージを見た。

まったく無駄がなく、

その癖、少し今までと、違うこともする。

彼らの音楽は、いつでも新鮮だった。

聴き惚れている明日香に、

恵子が言った。

「時間、大丈夫なの？」

その言葉に、明日香ははっとして、携帯の時間を見た。

「やばい」

明日香は、カウンターから立ち上がると、鞄と楽器ケースを持って、店を出ようとする。

「途中まで、一緒にいこう」

啓介はそう言うと、一気にターキーを飲み干し、グラスをカウンターに置くと、

「今日の夜遅く…アイドルのレコーディングに、参加しなければならないから…」

啓介も立ち上がり、

驚いている明日香を追い抜き、

「行こうか」

啓介は扉の前で、微笑んだ。

店を出て、駅までの道を歩く啓介。

少し離れて、後ろを歩く……明日香。

少し空気が重い。

明日香が、無理やりでも、何か話そうとした刹那、

「最近どう？今度、音楽祭に出るんだって？」

啓介が、話しかけてきた。

「あ、えっと…」

いきなりで、口ごもる明日香に、

啓介は振り返り、優しい視線を送りながら、

「曲とか決まったの？」

「あっ、はい！一応は…」

「頑張ってるね」

啓介は、体を前に戻した。

「え…まだまだ…」

啓介と明日香は、歩き続けた。

「努力が、音に出てるよ」

「明日香ちゃんの音は、素直だね。今日、何かあったのかな？って…そんなこともわかる」

啓介は足を止め、振り返らずに、

「3日前…何かあった？」

「え…」

明日香も、足が止まった。

いや、動けなくなったのだ。

3日前…明日香は学校で、同じ学年の高橋に、襲われていた。

「ひどく、悲しくて、泣いてるんだけど…」

啓介は振り返り、

「その悲しみは…自分のではなく、誰かの為のもの」

高橋は、里美の元彼だった。

「誰かの為の…優しい音。それが、明日香ちゃんの音なんだね」

啓介の言葉に、

明日香は、どう返していいのか…わからなかった。

戸惑っていると、駅に着いた。

「俺…二番線だから」

明日香は一番線だ。

手を上げて、去っていく啓介に、

明日香はやっと、正気に戻って、

思わず叫んだ。

「啓介さんの音！いつも、感動してます！」

「ありがとう」

啓介は微笑みながら、

明日香とは、違う電車に乗っていく。

明日香が、手を振ると、

啓介はずっと笑顔のまま、

軽く手を振った。

電車は、発車した。

とめどなく

赤い点滅が、録音中を示す。

スタジオの中、

ただ流れる音に、身をまかせて、

啓介は、サックスを吹く。

サックス以外は、取り終えており、

啓介の音をいれた後に…そのカラオケに、歌をいれる。

こんなただの音入れに、

何も得るものはないが、

恥ずかしいプレイだけは、したくない。

スタジオミュージシャンは、自分の色を出さず、そつなくこなすだけ。

上手ければいい。

だから、啓介はテクニックやフレーズは、指示通りにしかしない。

だからこそ、

啓介は、音色に拘った。

音だけで、俺とわかるような音色。

声なら簡単だ。

有名な歌手なら、特徴があればわかる。

しかし、楽器は…。

それは音楽の歴史で、ほんの一握り。

日本人では、いないだろう…。

このレコーディングのメインの人物は、知らない。

知る気もない。

どんな仕事も断らずに、受けた。

ラジオから流れて、初めてわかるのもあった。

しかし、吹いた自分だからわかるだけで、

誰が聴いても、

啓介とわかるレベルではない。

マイルスやコルトレーンに、ゲッツ、バードにアームストロングに、

ジミヘンにピアソラ…

数少ない音色の革新者。

テクニックやフレーズなんて、

ある程度は、できるようになる。

音色…トーンだけは…。

売れなくてもいい。

俺というトーンさえ、残れば。

日本には、俳句がある。

短い響きに、深い意味をのせる。

それができる癖に、

音楽になるとできない。

日本人にはわからない。

例えば、テイクファイブをカバーするとする。

日本人はただ…メロディを奏でるだけだ。

ただアドリブというテクニックを、ひけらかすだけだ。

ただ、コードや楽譜を追うだけだ。

それじゃあ、だめなんだ。

コピー楽譜を見て、音を合わせて、

喜ぶ。

音楽は、プラモデルではない。

いつから、模倣だけの国になった。

なぜ歌詞を理解しない。

それぞれが…個性あるアーティストが奏でた…感情の表れと思わない。

まったく他人と同じ、

俳句を詠んでどうする。

自分の言葉を、奏でないと…。

コピーなんか意味がない。

クラシックなら、それでいい。もう骨董品だから。

俺は、生きた今を…奏でたいのだ。

今という…すぐに過去になる時を、未来に向けて。

啓介は、スタジオを後にした。

ただ一人、帰る彼。

まだ自分の音を生み出すのに、精一杯だ。

でも…いつかは、

誰かと、音楽をやらないといけない。

音楽は、一人では表現の限界がある。

誰と組むのか…。

それは、

啓介にもわからなかった。

渡り廊下の事件から、
数日が過ぎた。
サッカーの部のエースである高橋は、
学校側の判断により、厳重注意だけで終わった。
しかし、浅倉と滝川…特に、里美の父親が、学校に乗り込んできたことにより、
がらっと、学校側の対応が変わり…しばらくは、高橋に、監視がつくことになった。
授業が終わり、
音楽室に向かおうとした明日香を、
止める人物がいた。
麻里亜だ。
「少しいいかな」
麻里亜に、呼ばれるなんて、初めてだ。

警戒する明日香に、

「心配しなくていい。あたししかいないから」

麻里亜は、先に歩きだした。

少し思い詰めたような麻里亜の様子に、

明日香は、ついていくことにした

「本当は、有沢さんとも話したいんだけど…あの子とは合わないから。多分、犬猿の仲ね」

着いたのは、体育館の裏のベンチだった。

夕陽に照らされたベンチ。

「こんなことというのは、おかしいんだけど…」

麻里亜は振り返り、明日香を見、

「あの人のこと、許してほしいの」

麻里亜は、ベンチに座らない。

「あんなひどいことした相手を、許してなんて…都合が、良すぎることはわかってる…。それでも、許してあげてほしいの」

明日香も座らず、ただ麻里亜を見つめた。

「あたし達、今…付き合って…付き合っては、いないわね。ただ遊ばれてるだけ…。それでもいい」

遠くで、多くの生徒の声がした。

部活が始まったのだ。

「彼は、あなたにふられてから…おかしくなったの」

麻里亜は、目を伏せ、

「最初は、自分が悪いと責め…最後は、俺をふった女が悪いと。それから、周りにいたみんなに、手をだして…ドロドロに…。ファンクラブも解散したわ」

麻里亜は、明日香に背を向けた。

「最低な男だと、思ったけど…2人でいる時、たまに無意識で…あなたの名前を呼んで泣くの」

麻里亜の背中が、震えていた。

「あなたのことが、本当に好きなの。女の子に…それも、好きな子にふられたことが、すごくショックだったの」

麻里亜は、泣いていた。

涙を見せていないが、麻里亜の切なさが、伝わってきた。

「本当は、別れるべきなんだけど…。あたし、ほっとけなくて」

麻里亜は、涙を拭うと、

明日香の方を向いた。

「あたし…。あの人が、本当に好きなの。今日から、サッカー部のマネージャーをやるわ。もう絶対、この前のようなことさせないから」

麻里亜は、深々と頭を下げた。

「あたしも…あなた達に対して、謝ります。今まで、ごめんなさい」

顔を上げた麻里亜は、優しく微笑み

「もう部活に行かなくちゃ…突然呼び出して、悪かったわね。ごめんなさい」

麻里亜はまた、頭を下げると、

一目散に走り去った。

高橋のいるところまで。

明日香はベンチに、倒れるように座った。

傷ついて、傷つけられたと思っていた…

明日香と里美。

傷つけた相手も傷つき、

そのそばにいる人も、傷ついていた。

高橋のことは許せない。

でも…もし……

（あたしが、高橋の気持ちを受け入れていたら…）

よかったのか。

それは、またちがう形で結局…

傷つけ合う。

何よりも、

里美をさらに、傷つけることになる。

それは、絶対にいやだった。

（人を愛することって、こんなに難しいの）

明日香は、沈みかける夕陽に問いかける。

しばらく夕陽を、見つめ続けた。

例え…

こたえてくれなくても…。

音楽室につくと、

一心不乱にドラムを叩く

里美がいた。

音が激しい。

滝川が、明日香に気づき、後ろに手招きする。

音楽祭にでるメンバーが、揃っていた。

「話が進んでなかったので…まずは、やる曲を決めなければならない。1組、2曲しかできないけど」

しばらくの沈黙の後、

次々に曲名が上がる。

最近のヒット曲や、有名曲たち。

だけど、これという曲がない。

また黙り込むみんな。

「今回は、香月さんがメインなんだから…まず、香月さんが、やりたい曲はないの？」

唐突な浅倉の言葉に、まったく口を開いていなかった…明日香に、全員の目が向く。

明日香はただ、里美の叩くリズムに、身を任せていただけだったから、

いきなりのフリに驚く。

やりたい曲…。

明日香は思わず、

「マーヴィンゲイのＷｈａｔ'ｓ　Ｇｏｉｎｇ　Ｏｎ…」

その曲は、いずれ…遠い未来に明日香がライブをするとき、

１曲目は、トランペットで、これをやりたかった。

スムーズジャズというアメリカで流行っているジャンルがあって…
たまたま聴いた、ソウルカバー集に入っていた。

気に入り、原曲を阿部から借りて、

さらに気に入った。

「ホワッツゴーイングオンか…確かボールウェラーも、カーバーしていたな。ロックアレンジで」

「ロックじゃ、駄目なんです！」

明日香は思わず、叫んだ。

「何かこう…ふわっと…柔らかい感触でなくちゃ…いけないんです」

明日香は最近、できるだけ、

いろいろなライブに、足を運ぶことにしていた。

だけど、満足する音に、出会えていなかった。

ほとんどのミュージシャンの……リズムが、固いのだ。

特に、ドラムの音。

音が、抜けていないのだ。

音が、一音、一音で止まり…リズムが続かない。

リズムや、音の勢いが、叩くたびに、寸断されているのだ。

だから、聴いていると、

疲れてくるのだ。

阿部や武田の音は、軽やかで、

何だか心が踊り、

フワフワの羽毛に、包まれているように感じる。

恵子は、明日香の歌にあまり口出しはしなかった。

阿部や原田が、キーを指定し、発声練習をしてるときも。

ただ一度だけ、恵子は口を開いた。

明日香に、ナットキングコールのアルバムを貸してくれたとき…。

「彼は、マーヴィンゲイが憧れた人。本当のソウルフル、歌が上手い人は決して、大袈裟に叫んだり、がなりたてたりしないもの。もっと軽やかで…それでいて、深いものよ。彼のようにね」

その恵子の言葉を、

明日香は、自分の歌の目標にしていた。

軽やかであること。

明日香の説明に、

浅倉は頷くと、

「他は、ロックや…ブラスバンドはスウィング調でくると思うから…音の差別化には、なるわね」

「他にやりたい曲は？」

滝川がきいたが…明日香は、首を振り、

「ないです」

滝川は、ため息をつき、

「今回は、香月さんのできる曲でやろうと思う。僕達がやれる曲は、決まっているし…。毎週…発表会を、土曜日やってるんだが…客がまったくつかない…」

滝川の言葉に、他の部員も首をうなだれる。

「だから、新しい風がほしいだ。香月さんという風がね」

ｋｋの練習を終え、

明日香は、電車を乗り継ぎ、帰途についていた。

軽やかな演奏。

明日香の目標ができた。

それも１人ではなく、みんなとである。

楽しくて、スキップをしながら、

明日香は、駅を出た。

自転車置き場まで、商店街を歩く。

電気店の店頭の液晶テレビから、

ＣＭが流れてきた。

口紅のＣＭ。

明日香の足がとまった。

なんて…軽やかな歌声。

明日香は、震えた。

この声は…。

知っている。

（この声は…）

明日香は、胸を握り締めた。

（和美さん！）

明日香は、ＣＭが終わっても、動けなかった。

衝撃が、背筋を貫き、

まるで、杭を打たれたように、明日香はその場に立ち尽くした。

しばらくして、気付いたときには、

走っていた。

自転車置き場まで走り、

胸を押さえた。

激しく息をする。

（また逃げた…）

あたしは、あの人の歌から。

この前は、そばに恵子たちがいたから、

耐えれた。

あたしは…。

あの人は天才。

あたしは、あの人には勝てない。

絶対に。

明日香は、崩れ落ちた。

あたしはあたし

眩しいライトの中、

赤いドレスを着こなし、凛とした表情で、

和美は立っていた。

ファッション雑誌の撮影。

この後、朝の音楽番組で、トークと歌をうたい…

夜は、知り合いの料理店のオープニングセレモニーで、

1曲披露しなければならない。

アイドルではないが、

その日本人離れした美貌と、通好みの歌声とテクニックは

音楽を知る者程、魅了した。

スポットライトから出ると、

和美の周りに、多くの人が群がって来る。

そんな人々に、少しの笑みだけで応え、

和美は、用意された席に座った。

和美より、愛想笑いのマネージャーに、

和美は、一枚の紙を渡した。

訝しげに見るマネージャーに、一言。

「これに出るから。もし、予定があったら、すべてキャンセルしといて」

驚くマネージャーに、反対する権利はなかった。

和美の歌を聴いた次の日。

ｋｋのカウンターで、

明日香は、蹲っていた。

久々に、里美も来ていて、ステージでドラムを叩いていた。

「何かあったの？」

恵子は、おかわりのコーヒーをいれてくれた。

明日香は顔を上げ、ため息でこたえた。

「里美ちゃん…上手くなったわね。才能あるのかも」

「才能…」

その言葉に、明日香は目の前のコーヒーカップを見つめながら、

「あたしにはないわ」

呟くように、言った。

「どうしたの？」

恵子は、心配気にきいた。

「あたし…才能ないから…大して上手くないし…あたしの歌なんて聴いたら、みんながっかりするわ」

またカウンターに、蹲る明日香。

「あら。音楽祭で歌うんじゃないの？」

「だから、自信がないんです！」

恵子は呆れながら、

「昨日は楽しそうだったのに、何があったの？」

明日香のふさぎ込む姿に、話かけた。

「音楽は才能より、気持ちよ。気持ちが、負けてたら絶対…軽やか演奏なんてできないわよ」

「明日香！」

里美が、ドラムセットの中から呼んでいた。

阿部がやってきて、一曲やろうと、明日香を誘いに来た。

里美のリクエスト。

明日香に借りて、まだ返していないアルバムより、

ラウンドミッドナイト。

仕方なく…ステージに上がった明日香は、ミュートはつけず、オープンで吹き出す。

その時、

店の扉が開いた。

明日香の吹く音の後ろで、

細かいブラッシングを、里美がいれていた。

明日香と里美だけの音。

そして、

有名なブレイクにはいる直前に、

誰かが、ステージに上がった。

明日香と音を合わすように入り、音を爆発させた。

まるで

狼の遠吠えみたいに。

啓介だった。

驚く明日香を見ずに、

演奏は、啓介主体に変わり、バンドも演奏に加わわる。

啓介の熱いソロの後、

明日香が、慌ててミュートをトランペットに差し込むと…息を整え、

静かに、エンディングのフレーズを吹くと　、

さらに、啓介のサックスの音が、明日香に絡んでくる。

ホットなサックスに、クールなやトランペット。

明日香は、

昨日とはちがう意味で、

震えていた。

「この曲は、明日香ちゃんには合ってるかもな」

演奏が終わった後、明日香に向かって、微笑むと…啓介は、ステージから降りた。

「ドラムの子も、よかったよ。明日香ちゃんの友達？」

啓介は振り返り、ドラムセットの向こうに座る里美を見た。

里美は誉められて、嬉しそうに、ドラムセットから飛び出し、

「はい！初めまして、有沢里美です。よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしく」

啓介は、カウンターに座った。

里美は、明日香に耳打ちする。

「あれが…啓介さんね。格好いいじゃない」

「そお」

素っ気なくこたえる明日香。

「興味なしか…」

里美は呟いた。

恵子は、ターキーの入ったグラスを、啓介に出した。

啓介は、1口飲むと、

「2人とも、いい感じだ。それに、店が明るくなった…いや、ママが綺麗になったよ」

「あら…前は綺麗じゃなかったの?」

「前から、綺麗だったよ」

「綺麗だなんて…言ってくれたことないじゃない」

啓介は、グラスを持つ手を止めて、

「は、母親に綺麗なんて、あまり言わないよ」

恵子は、啓介を見つめ、

「啓介は、男前よ。いつも言ってるでしょ」

「恥ずかしいから、やめてくれ」

じっと見つめる恵子の視線に、耐えられず…啓介は、グラスを持っ

て、テーブルへ移動した。

同時に、明日香と里美が、カウンターに座る。

「啓介さん、どうしたの？」

首を傾げる明日香に、恵子はクスクス笑って、こたえた。

「まだまだ子供なのよ」

啓介をしばらく見つめた後、

「明日香ちゃん」

恵子は、２人に烏龍茶を出すと、明日香の方を見た。

「あなたはまだ…音楽を習い始めたばかり。才能なんて、言葉を語るものじゃないわ」

恵子は、タバコに火をつけた。

「もし、周りにいる啓介や和美達と、今のあなたを、比べてるんだったら…やめなさい」

恵子は、明日香の目を見つめ、

「キャリアがちがうし…あの子達も、まだ発展途上よ。あの子達より、他の有名なアーティストの音を聴いて、勉強しなさい。そばにいるものだけに、とらわれないで」

恵子は、明日香が愛おしかった。

「それよりも、音楽をやれる楽しみを、味わいなさい。同じ仲間と、同じ曲を練習し、演奏できる楽しさを。里美ちゃん、よろしくね」

里美は、烏龍茶を飲み干しながら、

「任せて、ママ！この子は、何でも、深刻に考え過ぎるのよ」

里美は、空になったグラスを置くと、

ちらっと時計を見た。

「時間だわ。明日香！あたし、先に帰るね。ママ、ごちそうさまでした」

明日香はこの後、ステージに立つことになっていた。

もう7時前だ。

開店の時間。

慌ただしく、店が動き出す。

明日香は外まで、里美を見送ると、

すぐに、トランペットを握り締めて、呼吸を整えた。

明日香は、ステージに上がり、

大きく深呼吸すると、

トランペットの先に、ミュートを差し込む。

7時になると、

お客さんが、ぞろぞろ入ってくる。

ピアノとベースが、イントロを奏でる。

曲は、いつか王子様が。

音のシーツに包まれ、

明日香は、マウスに口づけを捧げた。

許せないこと

1曲目が終わり、常連の暖かい拍手の中、

ピアノに導かれるように、静かに明日香は、歌い出す。

曲は、マイファニーヴァレンタイン。

明日香のまっすぐで、何のテクニックも使わない声が、

聴く者の心に、すんまりと入ってくる。

恵子はわかっていた。

明日香の歌い方が、日本人にはあまりいないことを。

演歌のこぶし、

若い子のR&B被れ…いやゴスペル被れのあまりにも、大袈裟な歌い方、ロックの叫び。

すべてが、自分に合った歌い方や声質など考えず、

ただの物真似で、終わっている。

音楽の売上げが、全世界でアメリカに次ぐ第2位。

しかし、

世界で活躍する歌手を生み出せないのは、技術ではなく、

あまりにも、オリジナルでないから。

音楽に縁がなく、歌から入ったわけでなく、

健司の優しい音色に惹かれ…歌手になった明日香を、大切にしたかった。

恵子は、自分とはまったくちがう歌手に、育つ明日香を楽しみにしていた。

ただこわいのは愛。

恵子も健司を失い、歌えなくなった。

最初の恋は、すぐに終わり、明日香に切なさを教え、音楽をやっていくことを決意させた。

次こそ…

恵子は、幸せを願った。

明日香にとって本物になるはず。

明日香の歌声が、終わる。

甘い声だった。

酔いしれる観客。

でも、明日香には、そんなお客の反応などわからない。

あまりのっていないように感じ、

少し戸惑う。

啓介が、ステージに上がってきた。

明日香に耳打ちする。

明日香は頷くと、ミュートをつけたトランペットを構え、マウスピースに口づけた。

トランペットの歌が始まる。

ラウンドミッドナイト。

名演…マイルスディビスのは寂寥感に満ちていたが、

明日香のは切なさで、溢れていた。

明日香の音だけが、ｋｋを満たし、

ゆっくりと武田のドラムが、軽くリズムを叩き、トランペットに色を添える。

やがて、ブレイクがくる。

明日香の音に寄り添うように、原田のピアノがはいり、ブレイクを誘う。

啓介と明日香がいきなり、

音を爆発させる。

爆音から羽ばたくように、啓介のサックスが、空を舞う。

あまりにも、すばらしい音のコントラスト。

明日香の音と啓介の音が、混ざり合う。

あまりにも、対象的な音。

観客は、ただ静かに音にきき惚れていた。

ただ一人を除いて…。

ブレイクの寸前に、

扉をあけようにした和美は手を止め…隙間から、音を聴いていた。

やがて静かに、

扉を閉めた。

演奏が終わると、大拍手が湧き上がる。

やっと、ほっとした明日香は、ステージを降りた。

啓介はステージに残り、激しい演奏を繰り広げる。

明日香は、恵子に挨拶すると、

学校で使う為、トランペットを持って、店を出た。

もう暗くなっている。

深く息を吸うと、歩き出す。

その前に、いきなり

和美が現れた。

「和美さん！？」

びっくりする明日香に、和美は近づき、

「家まで送るわ」

和美は、明日香を車まで誘う。

断る理由もなく、

それに和美と、少し話したかった。

明日香は、和美の車に乗り込んだ。

山手から都会に向けて、車は走る。

助手席に座る明日香。

話したいことはあったが、オープンカーの為、話しにくい。

しばらく無言の中、車は走る。

「家は、どの辺だった?」

明日香がこたえると、車は激しくカーブを曲がる。

「あなた…まだ時間ある?」

明日香が頷くと、車は止まった。

木造でできたプレハブのような店の前。

「知り合いがやってるのよ」

明日香は、車から降り、和美の後についていく。

木造の扉を開けると、サンバのリズムが流れていた。

明日香が、その音に驚いていると、

「エリス・レジーナ。ブラジルが産んだ天才よ。あなたも、歌手なら、彼女くらい知ってなさい」

奥から、ヒゲを生やしたガッチリした体格の男が出て来た。

「いらっしゃい。かずちゃん！今日は、一人じゃないんだね」

「お邪魔するわ…チーフ。たまには、若い子と触れあわないと」

チーフは、大笑いする。

「いつもの場所開いてる？」

和美と明日香は、二階のテーブル席に通される。

天井が高い店内。

一階のテーブル席を囲むように、二階は回廊のように広がっていた。

二人はテーブルに、向かい合って座った。

座った席から、明日香が住む街の明かりが、よく見えた。

「大丈夫なんですか？」

注文を取り来たチーフに、バーボンを頼む和美。

明日香が、心配そうに言った。

「真面目なのね。大丈夫よ。いつも、飲んでるやつだし…酔わないわ。それとも…あたしが、運転してるから心配？」

「い、いえ…そんなんじゃないです」

狼狽える明日香に、クスッと笑うと、和美は、

「真面目ね。それに、かわいいわ。1杯だけだし、酔わないわよ。そうね…あたしが、日本酒とか飲みだしたら、逃げた方がいいわね」

和美は笑う。

少し視線を落とし、緊張気味の明日香。

「あなたも、一杯付き合いなさいよ。それとも、飲んだことがない？」

「いえ、あります」

「何を？」

「ジントニック…」

「チーフ！この子にジントニック？」

「え！大丈夫なの？」

飛んできたチーフは、明日香を見た。

「大丈夫よ。責任は、あたしがもつから。ただし内緒よ」

和美は、チーフにウィンクした。

ドリンクが運ばれてきて、乾杯すると、２人は一口飲んだ。

「今日誘ったのは…」

「あのお…」

２人は、同時に声に出した。

和美は笑うと、

「先にどうぞ」

明日香は、拳をテーブルの下で握り締め、少し俯きながら、

「ＣＭ…見ました。和美さんの歌に、心打たれました…」

突然、携帯が鳴った。

「ごめんなさい…」

和美は、携帯に出た。

「はい……啓介!?」

電話の相手は、啓介だった。

(啓介さんは…、和美さんの携帯を知ってるだ…)

どうしてか、明日香はそんなことが、気になった。

「店には、行ったんだけど…明日香ちゃんに、会っちゃって…。今、どこって…?」

和美は、グラスを口に運び、妖しい笑みを口元に浮かべた。

「気になるの?」

そして、クスッと笑うと、

一口飲み、

明日香を見た。

思わず、視線を外す明日香。

「チーフところよ」

和美は、明日香を見つめながら、

グラスを置いた。

すると、

「あらあ…切られたわ」

啓介が、電話を切ったらしい。

和美は、肩をすくめた。

しばらく…無言で、時が過ぎる。

「なんだったけ？ああ、そうね！あのＣＭね」

和美は一瞬、夜景を見る。

いや、ガラスに映る和美自身を。

「大したことないわ。ワンテイクで終わったし…今度、あたしの本気を、教えてあげるわ」

和美は、グラスに口をつける。そして、ゆっくりと顔を、明日香に向けた。

「次は、あたしの番ね。あなたが歌う理由は、啓介から聞いたわ。歌が好きだから、はじめた訳じゃないって。誰、も目標にしてないの？」

和美の質問に、明日香は即答した。

「目標はいます。恵子ママのように歌いたいです！それに…安藤理恵さんみたい…！！」

突然、和美はグラスを、音を立てて、テーブルに置いた。

その音の強さに、明日香は言葉を飲み込んだ。

明らかに、和美の表情が変わった。

「安藤理恵ですって！あんな女の名前！あたしの前で、出さないでちょうだい！」

あまりの剣幕に、驚く明日香。

「あんな女！歌手でも、なんでもないわ。単なる男好きのアバズレよ！」

まくし立てる和美。

「自殺したから、神格化されてるけど、大したことないわ！」

「誰のことだ？」

明日香と和美の横に立った人物の影が、テーブルを暗くした。

その人物は、啓介だった。

「啓介！？」

驚く和美と明日香。

「お袋のことか」

啓介は、明日香の方を向いて、

「こんな時間まで、連れ出して、申し訳ない。家まで送るよ」

和美に背を向けて、明日香に席を立つように、促す啓介。

「啓介！待ってよ！この子に、話があるのよ」

無視されたように感じ、和美は席を立った。

「何だ？」

啓介は振り返り、軽く和美を睨んだ。

「啓介に、言ってないわ！明日香！」

和美は、明日香を見、

「あんたみたいな！何の苦労も知らない女が、啓介とできるなんて、思い上がらないで！啓介といっしょにステージに立てる歌手は、あ

たしだけなんだから！」

「まだ、そんなことを言ってるのか！俺は、お前とは組まない」

啓介は、明日香と和美の間の壁となり、明日香を守る。

そんな啓介を見て、和美はさらに叫ぶ。

「あんたを、理解できるのは、あたしだけ！あたしを理解できるのも、あんただけなのに！」

「俺は、お前とはちがう！」

啓介は、伝票をつかむと、明日香の腕もつかんだ。

「今日は払うぞ」

泣き崩れる和美を残して、

一階に、二人は降りた。

明日香は気になって、上に戻ろうとしたが、

啓介が、首を横に振り、制した。

啓介はレジで、会計を済ます。

「チーフ、すまない。和美を頼む」

チーフは、ため息とともに頷くと、一枚のＣＤを、明日香に手渡した。

エリス・レジーナのイン・ロンドン。

「さっきかけてたＣＤ。かずちゃんから、あの子にあげてと…。これは…先にお代を頂いてるから」

（いつのまに…）

全然、気付かなかった。

明日香は、チーフからＣＤを受け取り、

店を出た。

啓介が、店前で待って貰っていたタクシーに、

２人は乗り込む。

明日香は車内で、

ＣＤのジャケットを見つめた。

（歌手なら知ってなさい）

と言った…

和美の言葉を思い出した。
明日香の家の場所を告げると、タクシーは出発した。

「すまない。今日は」

啓介が、頭を下げた。

明日香は、首を横に振って、

「啓介さんのせいじゃないです。あたしが、変なこと言ったから」

「お袋のことか…仕方ないかもな」

啓介は、前を見た。

「安藤理恵…俺を産んだお袋だが、和美のお袋でもある」

「え!?」

明日香は、驚いた。

「安藤は、母方の姓だ。俺の親父と出会う前、結婚していたんだ…和美の父親と」

タクシーは、静かな住宅街をこえ、大きな川を渡った。

明日香の学校の近くを通る。

「和美の父親と離婚…というか…家をでて、俺の親父とともに、アメリカに旅立った。まだ1歳にもならない…和美を置いてな」

明日香は、衝撃で…言葉が出ない。

「俺の親父とは、正式に結婚した訳じゃない。だから、親父も望んだことだが…恵子ママが、母方の安藤の姓を、俺につけたのさ」

啓介は、バックミラーに映る自分自身を見つめた。

「だけど…周りから、望まれた子ではない俺は…母方も認めなかった」

啓介は、目をつぶり、

「だから…恵子ママが、養子にむかえてくれたのさ」

啓介の話は、続く。

「子供の頃は……母さんと、名字がちがうから、疑問だったけどね」

タクシーは市をまたぎ、都会へと入っていく。

「でも…俺は、よかった。母さんがいたから…。でも和美は…」

啓介は目を開け、

「お袋に捨てられた和美の父親は、精神的におかしくなり…仕事をやめ、家に籠もりきりになった」

明日香は、啓介の横顔を見つめた。言い様のない…悲しみが、浮かんでいた。

「そして、お袋が自殺したと知った…次の日。彼もまた、後追い自殺した」

タクシーは都市部に入り、周りの景色が明るくなる。

「たまに、様子を見に来ていた彼の母親が、見たものは…首を吊った彼と、餓死しかけていた和美だった」

明日香は、いつの間にか泣いていた。

「それから、苦労したらしい。父親の母親も、中学の頃に亡くなり…その頃から、歌を歌い出したみたいだ。食べる為に」

真紅の歌姫といわれる…和美からは、信じられない話だ。

「外人相手に、英語の歌を歌い…金を貰う。母親譲りの歌の旨さは、評判になった」

明日香の脳裏に、生きる為に、歌う…幼い和美の姿が、浮かぶ。

どんな歌を歌っていたのかは…明日香には、想像できなかった。

「夜間学校に通い、朝まで歌い、昼からバイト…。今は、まるでセレブのように着飾っているが、本当はそうじゃない」

タクシーは、明日香が降りる駅へと近づいていく。

「自分を、捨てた母親から受け継いだ才能により、生かされている…それが、死ぬ程許せないのさ」

啓介は、明日香の方を向き、

「だからと言って…君が同情することもないし…歌ってはいけない…理由にはならない」

タクシーは、駅前に着いた。

啓介は、無言の明日香を心配そうに見つめ、

「ごめん…話しすぎたな…。気にしないでほしい」

啓介はそっと、

明日香の肩を叩いた。

明日香はタクシーを降りると、

頭を下げた。

言葉が出ない…。

「ありがとう…」

やっと、言葉が出た。

啓介は微笑み、

「おやすみ」

静かに、ドアが閉まり、

啓介の微笑みとともに、

タクシーは消えていった。

歌を歌うこと

明日香は家に着くと、

軽く食事を済ました。

食欲がないことを心配する母親に、大丈夫とだけこたえると、

自分の部屋にいき、ベットに倒れ込んだ。

手には、エリス・レジーナのＣＤを持っていた。

和美がくれたＣＤ。

起き上がると、封を切り、ラジカセにセットした。

いきなり歌声が、スピーカーから飛び出す。

明日香は思わず、身を乗り出す。

３曲目のシ・ヴォセ・ペンサが始まった時、どこか和美に似てると思った。

歌い方とか声質ではなく、勢いが、歌手としての本質が似てると。

エリスは１５歳でデビューし、３６歳で亡くなっている。

その始まりと終焉は、和美と…理恵を思わせた。

３６分ちょっとで、ＣＤは終わった。

明日香はしばらく、ジャケットを眺めた。

鳩に囲まれて、笑顔のエリス。

両手は羽のよう。

軽やかな歌声。

明日香は次に、安藤理恵のアルバムをかけた。

闇に囲まれた横顔。

オリジナル曲、未来。

明日香は、理恵の歌を理解した。

本当の思いを。

そして、明日香は気付いた。

この曲は、まだ生まれていない啓介に、捧げたものじゃない。

和美に、捧げたものなんだと。

明日香は、ジャケットを取り出した。

めくると、この曲だけ歌詞が載っていた。

英語だ。

明日香は何とか…訳していく。

赤ん坊が泣いていた。

天才といわれ…数多くの人が、理恵に近寄ろうとした。

理恵は、アイドルという人形じゃないから、

くだらないことに、縛られたくなかった。

世界中の著名なアーティストが、理恵の歌声を欲しがり、自分の国に、きてくれることを望んだ。

もちろんファーストクラスで。

でも、理恵は不満だった。

ほしければ、あんたが来なさい。

その理恵の考えに……たかが、ジャップの黄色猿が…と来ないやつが、大半だった。

音楽じゃない。そいつらの…プライドの問題だった。

どうしても、ほしいやつはバンドを連れてきたり、マスターテープを持って世界中から、理恵のもとに来た。

理恵は、才能がある者は、誰でも、その場で起用し、使えなかったら、すぐに首にした。

人種じゃない…そいつの問題だった。

理恵のアルバムが、録音されるときは…スタジオには、ミュージシャンが溢れ、呼ばれるのを待っていた。

売れてる者も、そうでない者も。

理恵は、ミュージシャンを実力で判断した。

録音したすべての版権を、自分で持ち、ある程度の枚数を売ると、すぐにアルバム、を生産中止にした。

あたしの音を、ちゃんと理解して、聴ける人なんて少ない。

話題と興味で、きいてほしくなった。

マスターテープを、レコード会社の偉いさんの前で、何回も破壊した。

だから、理恵のアルバムはほとんど残ってなく、プレミアがついている。

こんな過去のものに…理恵は、過去の自分にさえ、興味がなかった。

過去より、今。

次が、つねに最高になる。

過去には、満足できない。

あたしは、つねに成長している。

満足できない過去など、残す価値もない。

理恵は、まだ若く、

未来はいつも、

すぐそばにあった。

だから、

音楽業界もすぐに、

引退した。

未練なんてなかった。

平凡な男の平凡さが、新鮮で、結婚した。

これが、幸せなのだろうか。

完璧を愛した理恵は、結婚後も、完璧な主婦を演じた。

掃除、洗濯、家事はすべてこなした。

しかし、

完璧だからこそ、壊れるのだ。

和美が生まれ、生活が和美中心になる。

でも、苦にはならなかった。

和美の笑顔と笑い声は、どんな歌よりも、素敵に感じていたからだ。

綺麗なストレートの髪は、和美を抱くのに邪魔だから、ばっさりと切った。

服装は、派手なドレスなど着ることはなくなり、質素になった。

誰も、安藤理恵だと思わない。

今は、河野理恵だから。

その代わり、和美にはいっぱいおしゃれを、させたかった。

この子は、あたしの未来だから。

しかし…

ある日、夫の母親が家に来た。

理恵が、買い物にいく間、和美を見てくれるという。

いつもは…和美を、抱えて買い物にいくのだが、

理恵は言葉に甘え、一人で出かけた。

久々の一人。身軽に買い物はすぐに、済ませた。

嬉しくって、いつもより余計に、買ってしまった。

少し休憩しょうと、茶店に入った。

初めて入る店。

小綺麗な店内に、流れるジャズ。

ゆっくりと、ジャスミンティーを楽しんでいた。

ゆっくりと、音楽に包まれることなんて、長いこと忘れていた。

かかっている音が、

デューク・エリントンであることも気に入った。

ひばりが完コピーしたことで、有名な曲…A列車でいこう。

スキャットが心地よい…。

まどろむ時を、引き裂くように…

いきなり、扉が開いた。

それは、運命の扉だった。

両手に、紙袋を持った二人の男と女…。

男はトランペッターで、

女は、歌手だった…

KK…

ダブルケイと、
二人は名乗った。

唐突に…茶店で、２人は演奏を始めた。
理恵は、衝撃を受けた。
完璧だからこそ
やめた音楽だけど…
あたしには、かけていた。
あたしは足りなかった。
あたしは、一人だった。

ＣＤを、手売りし出したから、
理恵も、買うことにした。
ＣＤを、渡す女の笑顔が…憎らしかった。
あたしより、下手な癖に。

家に帰り、鏡を見た理恵は、

大声で笑った。

そこには、

みすぼらしい女が、一人いた。

（これがあたし！？）

理恵の笑いは、止まらない。

完璧なあたし。

完璧な主婦。

完璧な母親。

そして、

完璧な歌手。

違った…。

あたしは、違ったのよ。

完璧でなければ、

何もできない。

あたしは、

主婦も母親も…。

理恵は、すぐに電話した。

レコード会社に。

会社は喜び、

すぐに、アルバムを作りたいと言ってきた。

理恵は、作るにあたり…使いたいミュージシャンを、指定した。

トランペッター、阿部健司。

完璧な歌手になり、すぐに完璧な主婦…

完璧な母親に、戻るはずだった。

しかし、

2人の天才の出会いは、激しく絡み合い、運命を解けなくした。

もう戻れない程に。

未来の歌詞は、他愛もないものだった。

家族の為に、買い物をして、料理をし、子供とともにいて、

成長を見守ること。

普通の生活。

しかし、それこそが理恵の未来だった。

望みだったのだ。

彼女が捨てた幸せこそが、

未来だった…。

明日香は、ＣＤをそっと、ケースに戻す。

また…エリス・レジーナのアルバムをかけ、

目を閉じた。

明日香は、思った。

音楽には、いろんな思いが込められていることを。

今までは、漠然としか…気付いてなかった。

友達とたまに、カラオケにいったり、歌番組は見ていたけど。

あたしの歌には、何があるんだろう。

多分…あたしの音は、しゃぼん玉。

ふわふわ飛んでいくけど、

中身のない…すぐに壊れてしまう。

翼がほしい。

暖かい翼。

理恵の未来を、包める暖かさ。

（あたしは！）

明日香はもう一度、理恵のアルバムをセットし、

未来と向き合った。

翼ある気持ち

恵子は、夢を見ていた。

それは、大した幸せではないのかもしれない。

恵子は、普通の女ではなかったのかもしれない。

周りが、彼氏をつくろうと躍起にやってるときも、玉の輿に乗ろうとしてるときも、

マイペースだった。

恵子は、知っていた。

与えられたものは、自分のものでないことを。

他人に与えられた幸せが…なくなったり…捨てられたり、ふられたとしても、仕方がないと思っていた。

だって…選ばれた理由が、若さであるか、容姿であるか、女であるかだけだから。

男と女が、出会う場所は増えても、お互いを唯一無二の相手だと本当に感じてるのだろうか。

健司がいなくなって、数ヶ月が過ぎた。

仕方ないと思いながら、

中身が、だんだん空っぽになっていくのを感じた。

涙という直接的なものではなく…心の底から、抜けていくような…

小さな穴が、恵子には、開いていた。

だけど、普通に店をあける恵子を、お客はこう言った。

強い女。

酒を飲みながら、同情を演じたり、慰めながら口説く男。

バカばかり。

あたしは、抜け殻…。

抜け殻に欲しいのは、

同情でも愛情でもなかった。

啓介が来た日。

恵子は泣いた。

無垢な瞳、無垢な笑顔。

時折泣き止まなかった。

（不安なの？）

小さな手で、泣きながら、恵子にすがりついてくる。

すがりつく手の力が、

泣き声が、

無垢な笑顔が…

すべて、恵子に向けられた。

すがりつく強さに、恵子は泣いた。

あなたのお母さんじゃないのに…。

恵子は、赤ん坊を抱き締めながら、

逆に、抱き締められていた。

心の雪は溶けた。

涙とともに。

やがて…

赤ん坊の泣き止んだ笑顔を見て、

恵子は誓った。

もう泣かない。

この子の為に、笑顔でいよう。

笑顔でいれば、生きていける。

そう確信した。

それは同情でも、義務でもなかった。

お互いがいて、お互いがいるから、

生きていける。

そういう意味では、恵子と啓介は…

親子とは、少しちがうのかもしれない…。

放課後。

音楽室では、連日…音楽祭に向けて、練習がなされていた。

浅倉のギターカッティングから、

歌うように、明日香のトランペットが鳴る。

曲は、ホワッツゴーイングオン。

でも、明日香には、満足がいかなかった。

上原の叩くドラムが、納得できないのだ。

目が大きく、小柄でかわいく、ドラムも力強いが…

スウィングしてなかった。

ロックならいいけど、ブラックミュージックには合わない。

何度も指示したが、別に…リズムが合ってない訳じゃないから、理解できないようだった。

音の感触が、違うのだ。

明日香は、トランペットを置いて、休憩した。

因みにトランペットは、ｋｋから持ってきていた。

明日香の隣に、浅倉が来た。

「ごめん、香月さん。あたしたち…ジャズとかＲ＆ａｍｐ；Ｂとか…やったことがなくて」

明日香は、トランペットの唾抜きをする。分解し、掃除しながら、

「普段は、皆さん…どういうのを、やってるんですか？」

「普段は、アイコとかハイスタ…」

「あっ！カラオケで歌いますよ」

他愛のない会話の後、明日香と浅倉は、演奏に戻った。

満足しないうちに、

練習は、終わった。

片付けていると、

音楽室の扉が、勢いよく開いた。

里美が、飛び込んできた。

「大変よ、明日香！」

「どうしたの？」

トランペットをケースにしまいながら、明日香は、息を切らせて、真っ赤になっている里美を見た。

里美は、興奮して、

「か、か、和美さんもでるんだって、音楽祭！」

大声で叫んだ。

「和美が…明日香ちゃんの学校の音楽祭にでるって！」

カウンターの向こうから、恵子にそのことをきかされた…啓介は、一度座ったカウンターから、立ち上がった。

それは、今朝の朝方だった。

お客が帰り、片付けを終えて、

店内で、くつろいでいた恵子は、煙草をふかしていた。

突然、店の電話が鳴った。

受話器を取ると、和美だった。

和美は一言…

音楽祭にでることを告げると、電話を切った。

啓介は、頭を抱えた。

「この前は、無理やり連れ出したと思ったら…一体どうして…そんなことばかりするんだ」

舌打ちし、啓介は、和美の携帯に電話したが、出ない。

「ったく！何を考えている。和美は、プロなんだぞ。まだ音楽を始めたばかりの子を、なぜ気にする必要がある！」

「あんたと同じ理由よ。啓介」

恵子は、啓介を見た。

「あんたもなぜ、明日香ちゃんが気になるの？」

「それは…」

言葉に詰まる啓介。

恵子は微笑んだ。

「かずちゃんの好きに、させてあげなさい。あの子は、何でも…自分で確認しないと…気がすまないのよ」

「でも…」

啓介は、カウンターに座りなおした。

「あんたはどうなの？」

恵子は、カウンターから啓介の目を見つめた。

啓介は、それにはこたえない。

カウンターから、立ち上がると…ただステージへと向かった。

そして、明かりの消えたステージの上で、サックスを吹き続けた。

恵子は、そんな息子をただ…

カウンターから見守り続けた。

ドラムの上原が、いきなりやめたいと言ってきた。

明日香のいう…軽やかな演奏ができないから、ユニットに参加したくないと。

彼女は、退部届けを出してきた。

とめたが、無理だった。

意志はカタかった。

唯一のドラマーを、軽音部は失った。

後でわかったことだが、

上原は、結城に引き抜かれたのだ。

ブラスバンド部に。

仕方がなく、

里美が、ドラムの座につくことになった。

負けを覚悟した滝川部長。

歓喜する里美。

落ち込む滝川に、

明日香は、演奏する曲の変更を申し出た。

もう音楽祭まで、数日しかない。

戸惑う滝川に、明日香は言った。

「この曲でなければ、だめなんです」

ドラマーが変わったことも、ちょうどよかった。

「シンプルな曲なので、大丈夫です」

明日香は、他のメンバーに、曲を聴かせた。

浅倉が頷けば、滝川は文句がいえなくなった。

そして、里美を加えた練習が、始まった。

今日は、土曜日だったから、夕方までみっちり練習が出来た。

音楽祭まで、後一週間。

夕焼けの中、明日香と里美は歩いていた。

里美は足をとめ、明日香に言った。

「ベンチいこうか」

少し驚いたが、明日香は頷いた。

いつも昼休みに、つかうベンチ。

2人して座ると、

里美がおもむろに…話し出した。

「あたしがさあ…高橋君とつきあってた時…あんまり、明日香と話さないとき、あったでしょ」

明日香は頷く。

「あたし知ってたんだ。高橋君が、本当は…あんたのことが好きなんだって…。それなのに、あんたときたら、あたしの知らない男と仲良くしてるっていうじゃない。あたしは、好きにもなって貰えないのに、あんたは！」

里美は、足元の石を蹴った。

「くやしくて、むかついて…1度、渡り廊下にいこうとしたのよ。階段を上がりかけて…あんたの顔が見えた。残念だけど、相手の顔は、見えなかったけどね」

里美は、明日香を見た。

向こうに、夕日が見えた。

里美は微笑む。

「綺麗だったよ。明日香」

「え？」

里美は、照れたように視線を外し、

「夕陽に照らされて、幸せそうなあんたが、とっても綺麗で…。ああ、高橋君が惚れても、仕方ないやと思った」

笑った。

「仕方がないわ…あたしじゃ勝てないって」

そして、顔を上に向けた。流れそうな涙を止める為に。

「何言ってるのよ！里美」

里美は、明日香を無視し…言葉を続けた。

「高橋君にふられて…初めて、ママの店に行った時……。あたしの為に、トランペット吹いてくれたでしょ…。その時のあんた…むちゃくちゃ格好よかった。あんたみたいに、なりたいと思ったんだ…。だから、軽音部に入ったのよ」

「滝川部長に、一目惚れしたからじゃないの？」

里美は笑い、

「確かに…部長は、格好いいけど…副部長という彼女がいるしね」

「えええ！！」

「気づかなかったの！相変わらず、鈍感ね。それにあたし…そんなに気持ちをすぐに、切り替えられない」

里美は目を丸くした後、明日香に顔を向け…微笑んだ。

明日香は無言で、何も言えなかった。

「音楽室で…あんたが、トランペットを吹いた時も、夕陽に照らされて…やっぱり綺麗だった。明日香…。あんたといっしょにいたら…あたしも、綺麗になれるかな」

「里美…」

「それなのに！」

里美は、勢いよく立ち上がると、

鞄で明日香をこづいた。

「何なのよ、あんた！暗すぎるわ！最近のトランペットを吹くあんたは！あたしに初めて、聴かせたときは…あんなに楽しそうだったのに！」

里美は、少し泣いていた。

「軽やか、軽やかって…自分こそ、できてないくせに！」

里美は、明日香に叫んだ。

「何があったか知らないけど、あんたは、あんたなのよ！才能がないとか、軽やかな演奏とか！楽しくなくちゃ、全然面白くない！和美さんに、何か言われたとしても、気にするなあああ！！」

絶叫する里美の優しさが、明日香に伝わった。

「あたしが、ドラムを叩くことになったんだから、しっかりしろよ！あすかあ！」

明日香も、少し流れた涙を拭いながら、

里美の言葉に、頷いた。

里美も頷くと、

「わかったら、よろしい。では、これから…景気づけに、カラオケにいくわよ！どうせ…ママとこ、今日は行かないんでしょ」

強引な里美。

里美らしい。

2人は、笑いながら歩きだした。

「ところで、ユニット名だけど…ペパーミントでどう?」

里美が言った。

「昨日飲んだカクテル…じゃなくて、ミントって明るいキャラがいて…」

「酒飲み…」

明日香の言葉に思いっきり、首を振る里美。

「酒飲みじゃないわよ。たまたま…青いきれいな飲み物があって…何かなと騙された訳よ」

「どこで?」

「家の近所で父親と…」

「あやしい」

2人を照らす夕焼けの中、少女たちは歩いていく。

「勝手に、ユニット名つけていいの?」

「大丈夫よ。明日香の心配性!」

「うるさいわね」

里美は舌を出した。

それは……いつもの2人だった。

伝えたいこと

あれから、何日か過ぎた。

音楽祭のポスターができあがり、学校のいろんなところに貼られている。

最初はあまり、盛り上がりはなかったが、

連日ブラスバンド部が、グラウンドのそばで、ＰＲの演奏を繰り広げ、

少しずつ浸透し始めた。

決定的だったのは、

デビューアルバムを、ついにリリースすることになった和美が、

テレビの歌番組で、自分も参加することを告知したことだ。

ファンが、殺到することになった。

もともと、タダだったチケットがプレミアが付き、

会場となる体育館は、

使う予定がなかった2階席まで、使用することになった。

音楽祭は明日。

体育館では、参加する者達がリハーサルをしていた。

当日は、審査員もつき、点数で競われる。

参加するのは、全部で１８組。

くじ引きにより、

軽音部は、

一番最後に、なってしまった。

「和美さんは？」

里美の問いに、

明日香は予定表を見たが、

載っていない。

「たぶん…一番最後か、一番最初だろう」

滝川がこたえた。

「それより…うちは、リハやらなくていいのかい？」

心配そうな滝川に、

明日香は、笑顔でこたえた。

「はい。新鮮な気持ちで、新鮮な演奏を、聴かせたいんです。参加者にも」

明日香は、体育館を見回した。

音の響きはわかった。

後は、

当日、ここで演奏するだけだった。

すべては、明日だ。

緊張しだした里美は、さっさと帰った。

明日香は、いつものようにダブルケイに向かった。

扉を開けると、

カウンターに和美がいた。

「お久しぶりね。明日香ちゃん…あなたを待ってたのよ」

和美は、満面の笑みで、明日香を迎えた。

「お久しぶりです。この前は、ありがとうございました。ＣＤまで頂いて…」

明日香は、頭を下げた。

「いいのよ。あれくらい」

カウンターの奥に、啓介がいた。

「早く座ったらどう？」

和美の前で、立ちすくんでいた明日香が座ると、

和美は、音楽祭のプログラムを見せた。

「あなた達…最後にでるのね」

「はい」

明日香は、力強く頷いた。

和美は、じっと明日香の目を見つめてから…カウンターの中にいる恵子の方を見て、

「決めたは、ママ。あたし、最後から、２番目に歌う」

「何だって！」

和美の言葉に、啓介が反応した。

「別にいいじゃない。どこで歌っても」

和美は、クスッと笑った。

「プロのお前が、歌った後にだぞ！」

和美に詰め寄る啓介に対して、

恵子が言った。

「別にいいんじゃない」

「母さん！明日香ちゃんが、不利になるだけだろ」

「そんなことないわよね。明日香ちゃん」

恵子は、明日香にきいた。

明日香は、深く頷いた。

「大丈夫です」

今度は和美が、明日香を見、

「大した自信ね」

明日香はカウンターから立ち上がり、真っすぐに和美を見つめて、口を開いた。

「伝えたいことがあります」

真っすぐに向けられた明日香の視線に、たじろぐことなく、

「あたしに…何を伝えたいの？」

和美は、明日香に顔を近づけた。

明日香は、視線を逸らさない。

恵子は、そんな2人の間に…コーヒーを置いた。

「明日香ちゃん。はい、コーヒー」

恵子は、和美に視線を移した。

「かずちゃん。明日わかることよ」

鼻を鳴らすと、和美は、席を立った。

「ほんと、大した自信だわ」

和美は、真っすぐに扉へと歩いていく。

外に出る前に、和美は足を止め、振り向かずにきいた。

「啓介は明日、出ないわよね？」

「なぜ、俺が出るんだよ」

啓介は、ずっと腕を組んだままでいた。

和美は、啓介の方を振り返ると、

「邪魔だけはしないでね」

フンと前を向くと、扉を開け、そのまま出ていった。

ステージにいた阿部は、ベースを調節しながら、

「あれは、血だな」

恵子は、肩をすくめた。

明日香は、もうカウンターには座らずに…トランペットを持つと、ステージに向かって歩いていった。

ステージに上がると、ドラムセットの中にいた武田に向かって、口を開いた。

「武田さん！適当にリズム、叩いてくれますか。ちょっと吹きたく

なっちゃった」

明日香は、何のメロディーも考えず、ただフリーブロウで吹きまくった。

「めずらしいな」

啓介が、ステージ上から聞こえてくる明日香の音の激しさを感じ、呟いた。

「そうね」

恵子も、明日香の音に…身を任せた。

音楽祭

土曜日。

学校は、慌ただしく音楽祭の準備が始まった。

興味がない生徒は、さっさと帰り、

代わりに、多くの観客が入ってくる。

体育館は、すぐに満員になった。

観客の中には、恵子と啓介もいた。

ステージのそばには、審査員席が用意されている。

体育館とグラウンドの間に、簡易のプレハブがつくられ、そこが控え室になる。

それでも、全員が入れないので…軽音部は、音楽室にいた。

「もうすぐ、最初のバンドが始まるわよ。見に行かなくていいの？」

里美がきいてきたが、明日香は、うんと頷いた。

他のメンバーも、明日香を見た。

「あたしのことは、気にしないで下さい。皆さんは、見に行って下さい」

すると、里美と明日香を残して、みんな出ていった。

明日香は、音楽室の窓側の壁にもたれ、トランペットを抱き締め、目をつぶった。

開けた窓から、渡り廊下の向こうに見える体育館の中の音が、こぼれてきた。

一組目であるブラスバンドの演奏が、始まったみたいだ。

曲はキューティハニー。

明日香は深呼吸をすると、トランペットを持ち、音楽室を出た。

「どこいくのよ。明日香！」

里美が、後を追う。

明日香はゆっくりと、歩いていく。廊下を歩くたびに、しっかりと床を踏み、心を落ち着けていく。

南館に入ると、あとは真っ直ぐに歩くだけだ。

前方に、体育館が見える。

あれから来てなかった。

渡り廊下。

昼間だからか・・・今日はめずらしく、何人か人がいる。

明日香と、少し遅れてきた里美は、手摺りにもたれ、

漏れる音と風に、身を任せながら、

次々にかわる音たちを、聴いていた。

しばらくしてから、裏門の方がうるさくなった。

和美が来たのだ。

今日は、学校側から楽器が用意されているので、

和美は、いつものオープンカーで、バンドのメンバーが後ろから、

別の車で来た。

車から降りた和美は、いつもの赤い色だ。

「来たわね」

里美が、渡り廊下の手摺りから、身を乗り出して、言った。

明日香は頷くと、廊下を渡り、体育館の二階の観客席に、つながる扉を開けた。

演奏しているバンドより、体育館に入ってきた和美に、歓声が沸く。

和美は、軽く頭を下げ、審査員席に座った。

これから出てくる…どんなバンドも、関係ない。

みんなが見てるのは、和美だけだ。

明日香は、震えた。

いつもと違う空気を、だす和美。

あれが歌手。

歌手なんだ。

次々と、点数が付いていく。

今のところ一番は、ブラスバンド部。

やがて…

歓声が、一段と大きくなった。

和美が、席から立っただけで。

観客に軽く会釈し、ステージへ向かう和美を背にして、

明日香は、トランペットを握り締め…控え室へ向かう。

出番が近い。

（馬鹿な観客ばかり…）

ステージに上がると、和美は笑顔の裏で、せせら笑った。

あたしの音楽なんて、知らない癖に…。

テレビに出ているから、少し有名だからで、ここに来ている。

さっきから聴いてるけど、大した音はなかった。

あれで、よく人前に出るわね。

明日香。

あなたもよ。

ここにいる人達に、教えてあげる。

歌というものを。

明日香に、圧倒的な実力の差を。

これで潰れるようなら、

あなたは、それまでよ。

和美は深々と頭を下げ…上げた時には、笑顔は消えていた。

もう…和美には、観客は見えていない。

おもむろにと、和美は歌いだした。

ビリーホリディで、有名な愛するポーギーを。

身を切り裂くような…悲しい愛を歌い出す。

一瞬にして、凍りつく観客。

あまりの悲しさに、口を覆う人もいる。

それだけ凄いのだ。

表現力が、並ではない。

歌だけで、人々の心の中に、映像をこえた気持ちと、狂おしい思いが、生まれた。

汚い手で、あたしに触れないで…。

差別と…愛する人を助ける為に、体を捧げる女の…悲しさ。

歌詞の意味を理解して、歌いなさい。

と、恵子は、明日香に言った。

和美の歌は、意味を理解し…さらに、それを観客に伝えている。

（だけど…）

明日香は、和美の歌と…観客の反応を見て、みんなを呼んだ。

明日香の案に、驚くメンバー。

明日香は、トランペットのミュートを外した。

和美の次の曲は、ミニーリパートンのＬｏｖｉｎ'　Ｙｏｕだ。

高音から低音まで、声の幅が半端でないほど…凄い。

これも、圧倒的だった。

歌が終わっても、体育館は静まり返り…

和美が、深々と頭を下げると

やっと、

解放されたように、大拍手が沸き起こる。

ステージを降りる和美。

拍手はすぐ終わり、

また観客は、静かになる。

和美の歌による緊張が、終わっていないのだ。

静まり返った体育館に、

明日香達が、立つ。

明日香は、トランペットを観客席に突き出し、

両足とお腹に力をいれて、強く吹いた。

一音。

調子を外したような音に、

一瞬、びくっとした観客にむけて、

明日香だけで演奏する。

大きな古時計。

「童謡!?」

和美が、審査員席で驚く。

親しみやすく覚えやすいメロディーは、観客を和ませた。

鼻歌さえ、きこえそうになる。

一小節だけ吹くと、

明日香は、浅倉をちらっと見た。

浅倉がいきなり、ギターでカッテングし出す。

滑らかに、バックが入ってきて、

ホワッゴーイングオンが始まった。

一転して、

ミュートを付けると、

明日香は、トランペットで歌い出す。

軽やかな演奏。

観客の体が、小刻みに動き出す。

サビのホワッゴーイングオンのフレーズを、

明日香はトランペットで、浅倉達はマイクから声で、掛け合う。

明日香は、ステージギリギリまで前に来て、トランペットで観客を煽る。

やがて、

トランペットの音と、観客がホワッゴーイングオンと叫び、掛け合いがはじまる。

里美が、スティックを鳴らし、さらに煽る。

体育館が、掛け合いで震えた。

「早くも…勝負あったわね」

恵子が呟いた。

隣で、啓介はただ…ステージ上を、じっと見つめていた。

恵子は、チラッと隣を見、

またステージに、視線を戻した。

やがて曲が終わり、

体育館中の観客が、一斉に立ち上がり、

拍手がわき起こった。

和美だけが、ステージを睨みつけていた。

明日香は頭を下げ、マイクに向かう。

「ペパーミントです。次の曲は、大切な人の為につくられた曲です」

トランペットを下げると、マイクの位置を確認し、

「安藤理恵さんの曲で…未来」

明日香は、歌い出す。

席から、立ち上がる和美。

里美が、静かにリズムを刻む。

明日香の甘くきれいな声が、体育館を包む。

まっすぐで、なめらかで軽やか。

それは、シャボン玉なんかじゃなく、ふわふわ暖かい羽毛だった。

間奏は、トランペットで。

健司より、淡く切ない音。

人々は、聴き惚れていた。

演奏が終わった後、

体育館は、暖かい空気に包まれていた。

観客の拍手さえ、暖かくなっていた。

「こんなの認めない！」

和美は拍手の中、ステージに上がった。

「あたしへの嫌がらせ？あんな女の歌を、うたって！」

近づいてくる和美に向かって、明日香はマイクの前から離れずに、

「嫌がらせでは、ありません。これが、あたしの伝えたいことです」

体を和美の方に向け、真っ直ぐに、見つめた。

「何が未来！馬鹿にしないで！子供とともにいて、成長する？自分から、捨てた癖に！」

明日香のそばで、絶叫する和美。

その時、

誰かが、ステージに上がってきた。

「お前は勘違いしている」

啓介だった。

手に、理恵のＣＤを持っている。

「啓介…」

啓介は、和美にＣＤを差し出した。

「明日香ちゃんは…気づいていたようだ」

「こんなアルバム持って来ないでよ。見たくもない」

和美は、ＣＤを受け取らない。

だが、無理やり、啓介はＣＤを押しつけた。

「まともに、見たことないだろ。未来の作者を、見てみろ」

和美は、嫌々…ジャケットを開いて、何枚かめくり、作者の文字を見た。

和美の手が、止まった。

そこには英語で、こう書かれていた。

作詞作曲　安藤理恵＆amp;…

河野和美。

「お袋のアルバムは、これ以外売っていない。過去の作品はすべて、お袋がマスターを破壊しているからな。過去のものは、残さない主義だったからな」

和美は、ジャケットを持ったまま震えている。

「どうして、このアルバムだけが、残っているのか…それは印税が…娘に、ずっと入るようにだ」

和美は、ジャケットから顔を上げ、啓介を睨んだ。

「印税なんてもらったことないわ」

「俺の母さんから、渡してもらっているだろ」

「あれはママが…」

啓介は、首を横に振った。

「ちがう。あれは…お袋が、母さんに、手紙とともに託したのさ。あの子を捨てたあたしを、許さないだろうからと。もし…いつかあたしを、許してくれて…未来を聴いてくれるまで…」

啓介は、和美の手を握った。

「未来とは…捨てた幸せではなく…和美。お前という未来のことだったんだよ」

啓介は、優しく微笑む。

「お前の未来の為に、未来という曲を、残したんだ」

崩れ落ちる和美。

だけど、

こんなことで、許すわけもない。

ただの一曲。

ただの一曲。

だけど…

あたしが、気付かなかった一曲。

（あの子は気づいたの？）

あたしが、気付かなかったことを。

和美は、真っ直ぐに姿勢を正して、ステージに立つ明日香を見た。

（この子は…何なの…）

「だけど！」

和美は、叫んだ。

「歌は負けてないわ。あたしの勝ちよ」

和美が立ち上がり、啓介を…そして、観客を見た。

静まり返る観客。

「どうして…」

唖然とする和美に、

啓介は語りかける。

「お前は、天才だ。だからこそ…勝ち負けがあるとするなら」

啓介は、和美の顔を見、

「負けだ」

「どうしてよ!」

和美は、納得できない。

「歌っているとき、何を考えてた?聴いてる人のことを考え、聴いて貰うという気持ちがあったか?お前は、天才だよ。天才だからこそ、お前の思っている心が、気持ちが、ストレートに観客に伝わる」

啓介は、和美から満席の観客に視線を移し、

「もし…お前が、最後にでてたら…勝っていたよ。お前の歌を聴いた人々は、心が打ちひしがれたまま、帰ったことだろう」

啓介は、明日香達の方を向き、

「だけど…観客は、彼女達の音で救われたのさ」

明日香に微笑んだ。

「和美の歌声に、圧倒された人達の緊張をとくために…わかりやすい童謡を、少し吹いて、和ませ…次の曲で、お客さんを巻き込んで楽しませる」

啓介は、明日香に近づき、

「最後に、歌を聴かせる…。いい構成だったよ」

啓介の言葉に、

明日香は、顔を真っ赤にして照れた。

啓介は、和美の方を見て、

「お客を楽しませる…それが、お前にかけていたことだ」

和美は、観客を見た。

端から端、

2階席まで見て、

俯いた。

しばらく目を閉じると、

明日香達の方を向いた。

「わかったわ。あたしの負けね」

そう言うと、

静かにステージを降り、

体育館から、消えて行った。

「和美さん！」

追おうとする明日香を、啓介が止めた。

そして…

「君が、和美に伝えたいことがあったように…俺も、君に、伝えたいことがあるんだ」

啓介の真剣で、

それでいて、穏やかな瞳が、

明日香を見つめていた。

決意

ステージ上で見つめ合う二人。

啓介が、静かに話し出す。

「俺といっしょに、音楽をやらないか」

思いもよらない言葉に、明日香の時が、鼓動が…一瞬止まった。

「君の音が、ほしいんだ」

啓介は、明日香だけを見ていた。

「俺はまだ…自分のバンドを持っていない。いずれ、組むつもりだ。その時は、君にいてほしい」

「あたしなんて…」

明日香は、トランペットを抱き締めると…やっと声が出た。

「今日の演奏を聴いて…いや、母さんが、歌ったあの日から、君がほしかった」

啓介の目は、ただ優しい。

「俺がなぜ、音楽をやってるか…和美同様に、親をこえたいというのも…あるんだが…少しちがうんだ」

啓介は、明日香の持つ…トランペットを見た。

「おやじは、ペットだったが…俺は、サックスを選んだ。俺は俺…おやじとは、ちがうからな。だけど…一つ勝てないことがあった」

「勝てないこと？」

明日香が呟くように、きいた。

啓介は、頷く。

「歌だよ」

「歌？」

「母さんは、俺が小さいときはよく…歌ってくれたんだ。それなのに、もう何年も歌ってくれない。母さんの歌が好きだった…和美もね。俺達が、どんなに上手くなっても、歌ってくれなかった…。それなのに」

啓介は、明日香を優しく見つめ、

「君は、歌わせたんだよ。母さんを」

明日香は、トランペットをさらに、強く抱き締め、

視線を…啓介から、少し外した。

そして、小刻みに体を震わせた。

啓介の言葉を、噛み締めると、

やがて、啓介を真っ直ぐに見、

口を開いた。

「あたし…」

啓介の言葉は、嬉しかった。

（でも……）

だからこそ、明日香は言った。

「あなたとは、組めません。まだ…組めません」

騒めく観客。

啓介は、驚きはしないが、明日香にきいた。

「なぜ?」

明日香は、トランペットを下げ、姿勢を正した。

「あたしは、いろんな人の優しさに包まれて、音楽をやってきました。ママや、ダブルケイの店の人達…あなたや和美さん…。今日だって、里美や軽音部のみんながいなかったら…あたしは、ステージ

に立つことは、できなかった」

明日香は、ステージの上の人達を見た。

「今、あなたのバンドに入ったら…あたしはまた、あなたの優しさに、守られるだけだから…」

明日香の目から、涙が溢れた。

「本当は誘ってくれて、嬉しいの…。でも、待って下さい。あたしが、あたし自身で、音を奏でられるまで…待って下さい。あたしがあたしの足で、あたしの音を抱いて、あなたのもとにいくまで…」

「ふられたわね」

店に戻った恵子と啓介。

「啓介が、ふられるなんてな。それも大勢の前で」

ニヤニヤ笑う阿部。

啓介は、やけ酒のワイルドターキーをロックで飲みながら、阿部を睨んだ。

「おじさん！俺はまだ、ふられてないよ」

恵子も笑う。

ワイルドターキーをグラスに注ぎ、阿部に渡し、自分の分も用意すると、乾杯した。

「啓介の未来に、乾杯」

啓介はふくれた。

そんな息子の姿がかわいくて、恵子は啓介に絡む。

「それにしても…あたしの歌が聴きたかったんだって～言ってくれたら、いつでも、歌ってあげたのに」

啓介は絡んでくる恵子を、振りほどきながら、

「口に出して、頼むんじゃなくて。母さんが、自分から歌ってほしかったんだよ」

恵子は、啓介を抱きしめた。

「痛い！首に入ってる」

半分冗談で、半分うれしさで。

後日、

音楽祭の勝者は、ブラスバンド部に決まった。

それは、なぜか。

簡単な理由だ。

軽音部は、点数を付けてもらっていない。

審査員の和美は、途中で帰るし、

啓介が乱入するしで、

みんな…そんなことは忘れてたのだ。

その場にいた…他の審査員達以外は。

結局…優勝したブラスバンド部部長結城も、何か納得できない。

だから、軽音部の吸収合併は、今回はなしになりましたとさ。

めでたし、めでたし。

「何か…納得できない」

しばらく…結城の口癖になった。

月曜日。

夕陽に照らされながら、

明日香が、ダブルケイに入ってきた。

「おはよう。明日香ちゃん」

いつもの恵子の笑顔。

いつものコーヒー。

明日香は、自然と微笑んだ。

「啓介さんは？」

明日香は、カウンターに座る前に、キョロキョロ周りを見回した。

「今日は、啓介いないわよ。レコーディングで、泊まり込みだから」

「啓介さん、怒ってました？」

申し訳なさそうな明日香の表情に、恵子はクスッと笑い、

「大丈夫よ」

ほっと胸を撫で下ろした明日香は、コーヒーを一口飲むと、

恵子を見た。

思い詰めた表情で、ゆっくりと口を開き、

「まだ…先の話なんですけど…」

明日香は、話出した。

「あたし…。高校を卒業したら…地方の短大に、通って…1人暮らしを、しょうと思うんです…」

身を乗り出して、

「勿論、学費も、自分で払いたい」

明日香の話を、恵子は静かにきいた。

「それまでの一年半…部活を、メインにしたいんです。あたし…今まで…ママの優しさに甘えてばかり、教えて貰ってばかり…」

明日香は、カウンターから身を乗り出し、

「でも！この前の音楽祭で、思ったの。ここで、教わったことを、あたしがみんなに教えられるって！逆に、教えられることもいっぱいあるの！初心者の里美からも」

恵子は思った。

そう…。

この子も、あたしの子供だ。

「それで、どうしたいの？明日香ちゃんは」

明日香は申し訳なさそうに、

「あまり来れなくなります…ダブルケイに。ごめんなさい」

恵子は微笑み、明日香の背中を叩いた。

「何言ってるのよ。謝る必要なんてないわ」

「ママ！」

「学生なんだから、当たり前のことよ。それにしても…音楽ばかりね。恋人とかできないわよ。好きな人とかいないの？」

明日香は、少し考えると、

笑顔になり、

「…多分います」

恵子は眉を潜め、少し考え込むと、

「ああ、あれね…」

頷いた。

「はい」

明日香の嬉しそうな笑顔に、

恵子は、微笑んだ後…少しため息をついた。

「…尻にしかれるわね。でも…女は、そうした方がいいわ」

恵子は、明日香にウィンクした。

旅立ち

あれから、1年以上経った。

浅倉や滝川が、卒業した後も、ペパーミントは続き、

学校内だけではなく、いろんな学生のイベントにも参加し、話題となった。

特に、

和美とやり合った明日香のことは、

音楽業界でも、少しうわさになった。

だけど、

明日香は、すべての誘いに乗らなかった。

和美も、2枚目のアルバムをリリースし、ヒットチャートの上位にランクインした。

特に、今まで隠していた理恵の娘であることを告白し、

啓介とともに、日本語で、カバーした未来は、

感動を呼び、シングルカットされた。

歌詞は、少し和美が変え、
本当に、作詞に参加したことになった。

高校を、卒業した明日香は、海と山が近い短大に通うことになった。
今や、短大は少なくなっていたけど、明日香には目標があった。
普通の四年制大学に、だらだらいく時間はなかった。

ジャズを愛する街。

人口は少ないが、ライブハウスは多かった。
1人暮らしを望んだが、
なぜか、里美がついてきた。
ドラムの腕も上がり、いつのまにか、音楽にどっぷりだ。
2人で、今や都会では珍しい木造アパートの2階に、住む。
2人はすぐに、1番近いライブハウスに通い、

メンバーを探しだした。
新生ペパーミントを、結成する為だ。

この街に来て…2ヶ月がたったある日。
アパートを訪ねる者がいた。
和美だ。

「和美さん！」

突然の和美の訪問に、驚く明日香。

玄関の前で、赤のワンピースを着て、微笑む和美は…以前と雰囲気が違っていた。

どこか、暖かく…柔らかい。

「よく、ここがわかりましたね。汚いところですけど、どうぞ」

六畳一間のアパート。

広くない部屋の真ん中にある…卓袱台の上には、

書きかけの歌詞と、トランペットが置いてあった。

勿論、健司のだ。

「1人なの？」

「里美は、バイトです。あたしも後で、バイトですけど」

「大変ね」

明日香に促され、和美は卓袱台の前に座る。

「すいません！散らかってて」

慌てて、明日香は卓袱台の上を整理する。

「いいのよ」

和美は笑う。

明日香は、玄関の横にある小さな台所で、お茶を入れにいく。

「今日は、どおしたんですか？あっ！アルバム買いましたよ。とてもよかったです」

明日香はお茶を持って、卓袱台に来た。

「言ってくれたら、あげたのに…」

和美は、お茶を受け取った。

「恵子ママとこには、さよならは言ったの？」

「さよならは、言ってません。いってきますだけです」

「啓介には？」

「特には…」

口をつまらせる明日香。

「バンドは、組んだみたいだけど…ボーカルはいれてないわ」

和美は明日香から、視線を外し、卓袱台の上を見た。

「歌詞を書いてるのね。やっぱり…あなたとあたしは、違うわ。あたしには、書けない」

和美は、眩しそうに、手書きの歌詞を見つめた。

「でも、未来の歌詞を、書いたじゃないですか」

明日香の言葉に、和美は苦笑した。

「あれは、書き足しただけよ。まだ…曲を書く余裕なんて、ないわ。あたしは歌手…どんな曲でも歌うだけ…。だけど、どんな曲でも、歌いきってみせる」

和美の言葉は、力強かった。

歌手としての決意。

圧倒されて、ポカンとしてしまった明日香に気づき、

和美は少し笑い、視線を外した。

窓の向こうに、広がる青い海。

まだ日本にも、こんな綺麗な海があるんだと、

和美は嬉しかった。

「多分…曲を書くとしたら…あたしは、一曲だけだと思う。母親と同じように。今までの人生…すべてを一曲に凝縮した…たった一曲」

それは、和美の未来を暗示していた。

明日香は後に、そのことに気づくことになる。

明日香と和美は、違う。

だからこそ、今は理解できた。

和美という歌手を。

彼女の信念を。

違うからこそ、深く理解できた。

いつか、和美に認めて貰いたかった。

明日香の音楽を。

（いつか、この人と対等に話したい）

海を眺める和美の横顔を、見つめながら、

明日香はそう思った。

「あたし…来週旅立つの。日本を離れるわ」

思いも寄らない和美の言葉に、明日香は驚いた。

「あたし…美空ひばりが好きなの。何かの本で…ギリシャか、その辺りの人が、ひばりを聴いて…言葉はわからないけど…歌の感覚が、その国の歌手にそっくりだと書いてあったの」

和美の目は、窓から見える海の向こうを見つめる。

「その辺りや…フランスにいって、しばらく住もうと思ってる。フランスは、ジャズを…音楽を、もっとも愛する国だしね。アメリカとかと違い、音楽を愛してる国だから」

「どれくらい、いかれるんですか？」

「はっきりとは、決めてないけど…最低2年。歌だけで、どこまでやれるのか…試したいの」

そう話す和美の顔は、とても輝いていた。

「もうバイトの時間でしょ。そろそろ帰るわ」

和美は、腕時計を見た。

「まだ時間はあります」

明日香は、止めようとするが、

和美は、立ち上がった。

そして、1枚の名刺を差し出した。

「あたしが、世話になってた人よ。彼は、信用できるわ。音楽関係の仕事をくれるはずよ。あなたのプレイは、1年前の音楽祭から、聴いてるから…。どうせ働くなら、音楽に関わってる方が、為になるわ」

明日香は、受け取った名刺を見つめた。

そんな明日香を見つめ、和美は、

「それと、最後に一つ。啓介の姉として…」

明日香ははっとして、名刺から顔を上げた。

和美は優しく、微笑んでいた。

「あんまり啓介を…待たせないでね。あの子…一途だから…」

和美は、おもむろに啓介の携帯番号を書いたメモを取り出し、明日香に手渡した。

「ありがとうございます…」

明日香は、携帯番号を見つめた。

多分、しばらくはかけない。

かけれない…番号。

和美は、少しため息をついた。

「似てるわね…あなた達は…」

「え？」

顔を上げた明日香の驚いた顔が、和美はおかしかった。

笑いながら、旅立つのはいい。

「じゃあね。明日香ちゃん」

去っていく和美に、

明日香は慌てて、叫んだ。

思い切り大声で。

「気をつけて、いってらっしゃいませ！」

和美は振り返り、満面の笑みでこたえた。

「いってきます！」

愛した音

音楽祭の前…。練習に来ていた明日香や里美が帰り、
営業も終わった後、
啓介は、ダブルケイにいた。
恵子は、マンションに帰り、
阿部達も帰った。
1人ステージに立ち、
サックスを吹いていた。

マンションには帰らず、
上に泊まったらいい。

昔は、恵子と二人で…ダブルケイの二階に、住んでいた。

できる限り照明を消し、サックスに集中する。
音楽だけが、かかっていた。
ギャングスター。

ヒップホップだ。

ＤＪプレミアのつくるビートにのせて、

サックスを吹いていた。

「ここにいたのね」

扉がゆっくりと開き、

街灯による逆光の中、

現れた女。

真紅のスーツを来た女。

「気づいてないか」

女が入ってきても、

啓介は、音だけに集中している。

女は、ため息をつくと、

カウンターに座った。

そして、

ステージを見つめながら、
静かに目を閉じ、
音に沈んでいった。

やがて…
CDが終わった。
啓介と女が、目を開けるのは、同時だった。
「あっ…姉さん…」
啓介は、呟いた。

「やっぱり…あんたの音は、特別」
和美は、感嘆のため息をついた。
「それなのに…」
和美は、カウンターから立ち上がった。
「あんたは…あたしと組まないんだから…」

和美は、ステージまで歩いていく。

「あたしのものに、ならないんだったら…いっそのこと…」

和美は、ステージに上がった。

「壊してしまいたいわ」

和美は拳を、啓介のお腹に軽く当てた。

「姉さん…」

しばらく、拳を当てたまま、

和美は黙り込む。

「でも…弟なのよね…。寝取ることもできない…」

和美は少し笑うと、

視線を外し、啓介から離れた。

ステージの端まで歩く。

無言になる啓介。

和美は、クスクスと笑いだすと、

「冗談よ」

啓介の方を向いた。

「姉さん…」

「本気にした？」

啓介は、胸を撫で下ろした。

「冗談…きついぜ…」

安堵の表情をする弟に、

和美は、１通の手紙を差し出した。

「何？」

手紙は、封が開いてあった。

宛名は、河野和美。

差出人は書いていない。

「読んでみて」

戸惑っている啓介に、

和美は促した。

啓介は、仕方なく…手紙を読む。

「これは…」

眉を潜める啓介に…、

「あんたのファンよ」

和美は肩をすくめ、

「あたしとあんたが、付き合ってると、思ってるみたいね」

和美と啓介は、異父姉弟である。

和美は、そのことを公表していない。

手紙の内容に、顔をしかめると、

啓介は、手紙を封筒に戻した。

「これだけじゃ…ないのよ。中傷だけじゃなくて…紹介してくれとか…」

和美はステージから、店を眺め、

「あんたは、もてるのよね。昔から…」

このステージに立つのは、

久々だ。

いつからか…

和美の口座に、年に何回か…お金が振り込まれていた。

振り込んでいるのは、

速水恵子。

それは、物心つく前から、

お金は、振り込まれていた。

誰なのか…調べたら、

和美と同じ…

捨てられた者だということが、わかった。

同情で、金を貰うなんて、許せなかった。

一切、手を付けなかった通帳を持って、

中学生になった和美は、

ダブルケイへと向かった。

重い扉を開けると、

飛び込んできた音に、

和美は動けなくなった。

もうその頃から、年齢を偽って、クラブで歌っていた和美は、

たまに共演するプロにも、感じることができなかった…衝撃が、和美の体を貫いていた。

和美は、店の中にいつのまか、

飛び込んでいた。

お客さんを押しのけて、

和美は、ステージにかぶりついていた。

サックスを吹く…

スラッとした長身の
少年。
淡く憂いをおびた瞳。
綺麗な少年だった。
その癖…
サックスの音は太く、深い。
和美は初めて…
自分をこえた音に、出会った。
和美は、自分でも信じられない行動をとった。
ステージに上がり、
サックスに合わせて、
生で歌い始めたのだ。
確かめたかった。
本当なのか…。
演奏中の為、唖然としながらも、止められない阿部達は、

仕方なく、和美の歌に合わせることにした。

マイクを通さなくても、響き渡る声量と、

その歌声に、店にいる誰もが驚愕した。

「理恵さん…」

カウンターの中にいた恵子は、

思わず、火をつけようとしたタバコを…落とした。

ただ1人だけ…

店内で、冷静な者がいた。

ステージ上で、少し微笑むと、少年は、サックスを炸裂させた。

和美の体が震えた。

全身に、鳥肌がたつ。

歌のレベルが…いや、全体のレベルが上がる。

和美は初めて…

歌をうたいながら、恍惚の感動を味わっていた。

「歌…上手いね」

曲が終わった後、

さっきの凄い演奏とは、違い…まだあどけない少年の笑顔に、

和美は、ドキッとした。

それは、初恋だった…。

しかし、初恋は

次の瞬間、終わりを迎えた。

「安藤啓介です。よろしく」

和美は、握手を求める啓介の顔を見つめてしまう。

「安藤…」

「安藤…啓介…」

ボソッと呟いた和美に、

「何だよ…いきなり、フルネームで」

サックスをしまい、

啓介は、ステージを降りる。

「あ、ああ…」

我に返った和美も、ステージを降りた。

「何か飲む？」

カウンターに入る啓介に、

「勝手に飲んでいいの？」

啓介は棚から、ターキーのボトルを取り出すと、

ボトルを和美に見せ、

「心配しなくても…俺のキープだ」

啓介は、２つのグラスを用意した。

和美は微笑むと、カウンターに座った。

あの日。

恵子は、和美に告げた。

「これは…あなたの才能を失いたくない…あたしの勝手な投資よ」

同情とかではなく、

あなたの才能に、惚れている。

恵子の嘘だと、今だからわかるけど…

あの時は、それが…生きていく励みになった。

育ててくれたお祖母ちゃんが亡くなり、

歌しか、支えがなくなった和美にとって、

あの頃の恵子の言葉が、素直に嬉しかった。

初恋であり、

唯一の肉親でもある啓介。

和美にとって、啓介達は特別な存在だった。

一緒に暮らしたり、頻繁に会ってた訳じゃないが…。

いつも、彼らを感じ、生きてきた。

軽く乾杯し、

グラスを傾けながら、

和美は、氷を見つめ続けた。

「こんな時間に、ここにくるなんて…何かあった?」

心配そうな啓介の声に、

和美は、ゆっくりと首を横に振った。

「何もないわ…」

「仕事…大変なんだろ?俺と違って…歌手は、表舞台に立つから…」

啓介は、グラスを揺らすと、

やっと一口飲んだ。

「変に売れようとか…思ってないから…。歌で、生きていけたら…
それでいいの…」

和美は、氷を見つめながら、

「贅沢はしたいと、思わない…。いえ、贅沢をする暇もないわ。あ

たしはまだ…歌い足りない」

歌手としての和美の生き方は、啓介は好きだった。

自分も同じだから…。

しかし、男と女は違う。

身の…滅ぼし方が。

すべてを、全身全霊で受け止め、

歌として、しぼりだす。

母性というものの凄さを、啓介は、恵子から感じていた。

本当の息子でない…俺の為に、すべてを捧げている恵子。

それを返すことなんて、

啓介にはできない。

だから…せめて、

恵子が好きな音楽で、

誰よりも、凄い音を奏でたい。
恵子の愛情から、生まれた音で。

「啓介…」

和美は、グラスをカウンターに置いた。
俯きながら、
和美は、呟くように言った。
「明日香ちゃんだっけ…あの子…」

「明日香ちゃん…？あの子が、どうかしたの？」
思いもよらなかった明日香の名前が出て、啓介は驚いた。

「あんた…」

和美は、言葉を続けようとしたが、
フッと笑うと、言葉を止め、
話題を変えた。

「マザコンだから…さっさと彼女つくりなさいよ。年上で、しっかりした彼女を」

そう。

あたしみたいな。

「よ、余計なお世話だ！それに、誰がマザコンだよ」

顔を真っ赤した啓介に、

和美は微笑むと、

グラスの中身を、飲み干した。

「ご馳走様」

和美は席を立ち、

手を上げると、扉へと歩いていく。

「じゃあね」

「姉さん！」

啓介が慌てて、声をかけても、

和美は、振り返ることはなかった。

静まり返った店内に、
外から、車のエンジンがかかる音が響いた。
すぐに、車は発車した。

「姉さん…」
2人っきりでないと、
啓介は、和美を姉さんとは呼ばない。
啓介とは違い…
和美は、母を憎んでいた。
安藤理恵を。
和美と、和美の父親を捨てた母親。
啓介も同じだけど、恵子がそばにいた。
啓介は、カウンター内の壁にもたれ、
ゆっくりと、グラスに口をつけた。
カウンター内にある小さな時計に、ふっと目をやると、

もう4時半をまわっていた。
もうすぐ日の出だ。
啓介は、ターキーを飲み干し、
2つのグラスを洗うと、
そのまま…2階へと消えていった。

スタジオに赤いランプが、点く。
「どういう風の吹き回し…なんだ?」
啓介は、アルトサックスを調整しながら、
マイクの前に立つ和美に、きいた。
和美は肩をすくめ、
「いいじゃない。たまには…」
音楽祭の後…和美は、少しやわらかくなっていた。考え方も、歌い方さえも。

スタジオ内に、和美と啓介。

今回、録音する曲は、

未来。

和美と啓介の母…安藤理恵の曲だった。

それは、理恵が和美の為に、残した曲。

和美はその曲を、啓介と一緒にカバーする。

英語だった歌詞を、日本語に訳し、

少し歌詞を付け足した。

それは、これからの未来として。

「あんたこそ…。あたしとは、やらないんじゃないの?」

和美がいたずらぽく、啓介を見つめながらきいた。

啓介は調整を終え、

「一曲くらいは…いいだろ?」

その言葉に、和美はクスッと笑い、

「まあ…。あんたには、待ってるボーカリストがいるしね」

「だめかな？」

啓介は、和美にきいた。

「いいと思うよ。あの子なら…」

照れくさそうな啓介に、和美はそう告げると、

マイクを握りしめた。

「しかし…一緒に、この曲をやるとはな…」

啓介は、アルトサックスを喰わえた。

狭いスタジオ内の奥には、バックミュージャンもいた。

「一緒の方が…音楽が生まれるわ。カラオケなんて、大嫌い」

和美は虚空を睨んだ。

「未来は、必ず来るものよ。誰にでもね」

和美の合図とともに、曲が始まる。

未来。

和美は歌いながら、思った。

この曲は昔、成長していく子供の為に作られた。

ならば、次はあたしが、

次の未来の為に、歌おう。

過去や、今は過ぎ去っていくけど、

未来は、永遠に続いていく。

あたしは、未来に続く歌を歌おう。

過去という思い出と、生きる今を大切にしながら、

未来に伝える歌を。

演奏が終わった後、

和美は、啓介に握手を求めた。

差し出した手を、握り返す啓介。

「ありがとう…」

和美は少し俯いた。

「どうしたんだい？お姉さん」

涙を浮かべている和美に、啓介は驚いた。

「あたし……旅に出るわ。音楽を伝える旅に…」

和美は自分から、握手を解くと、涙を拭い…啓介に笑いかけたまま、スタジオを出た。

曲のプレイバックは、聴かなかった。

これで、やっとあたしは、未来に向けて歩き出せる。

初恋だった男。

弟とわかってからも、

あいつの音を、手をいれたかった…

男。

やっと、離れられる。

和美はスタジオから、外の廊下に出て、呟いた。

「さようなら…。あたしの初恋の…音」

未来

そして、また時は流れた。

里美とともに、結成したペパーミントは、ガールズバンドとして活躍し、

何とか、インディーズデビューの話まで、持ち上がるまでになっていた。

しかし、パンクに走ろうとするバンドと、明日香の間には、少し溝が入ろうとしていた。

もう短大も卒業だ。

明日香は、学校近くの小高い丘に立ち、

街並みを見下ろしていた。

決して、大きな街ではないけど、

音楽の街といわれ、ライブハウスは多かった。

明日香の目の前で、夕陽が沈もうとしていた。

海と港と、街が赤く染まっている。

夜が近い。

明日香は、左の方の海岸線を見た。

見えないけど、はるか向こうに、明日香の戻るべき町がある。

風が強い。

潮風にも慣れてしまった。

でも、いずれ…これもなつかしい臭いに変わる。

明日香は、風を抱きしめた。

この臭いも、この風景も、

過去に変わる。

それは、明日香が未来に歩き出すから…。

丘を降りようとした明日香の携帯が、鳴った。

「はい。里美…今から行くわ」

夕陽の時間は終わり、

夜が覆い尽くした町を、明日香は歩いていく。

短大の卒業記念として、

地元の大学や、専門学校の卒業生達と、飲み会をするのだ。

主催は、里美。

「明日香あ！」

会場となる居酒屋に着いたら、もう里美は、出来上がっていた。

今、６時半。

大丈夫なのか…。

座敷に上がると、５０人くらいはいた。

結構な大所帯だ。

「ペパーミントの未来に乾杯！」

この町で見つけたギターリストの瑞希が、勝手に1人で乾杯してる。

「何時から、のんでるの？」

座敷の一番端に、座った明日香は、隣に座るベーシストの小百合にきいた。

小百合は顔を上に向け、考え込んだけど、わからずに、

携帯で、時間を確認した。

「4時からだから…ゲッ！2時間半だ！」

周りを見回すと、もう酔いつぶれている人間もいる。

「明日香！」

焼酎の入ったグラスを片手に、里美が抱きついてくる。

「何とか卒業できたね！あたし達。一時期はどうやることかと」

（それは、あんただけだ）

明日香は、心の中で叫んだ。

「明日香！一生、ペパーミントで頑張ろうぜ」

一生…このバンドで…。

里美の言葉は、嬉しかったけど、

明日香には、帰るべき場所があった。

今は、楽しいお酒の席。

いうべきではない。

明日香は、里美に微笑みを返した。

里美の赤い顔が、一瞬だけ、素面に戻る。

「明日香…」

里美は、持っていた焼酎を、一気飲みすると、

「とにかく、今日は飲めえ!!」

里美は、絶叫した。

明日香は、頷いた。

1時間後、飲み会は終わりを告げた。

「もう一軒、いくぞ!」

里美の号令のもと、ほとんどの参加者が、二次会に向かう。

だけど、明日香だけは別れた。

「明日香!」

小百合が、帰っていく明日香の背中に、声をかけた。

「小百合！いいんだよ！」

里美が言った。

「で、でも…」

「あいつは…。あたし達とは、違う。こんなところで、終わるやつじゃないのさ」

里美は、明日香の背中を見送りながら、

自然と流れた一筋の涙を、腕で拭った。

「止めちゃ…駄目なんだよ。わかってるだけど…」

うんと…こたえてくれることを、少し期待してしまった。

「行くぞ！みんな！」

里美は、明日香と違う方向に歩き出した。

「香月さん！」

帰る明日香を、追いかけてくる男がいた。

明日香が、振り返ると、

その男は、息を切らしながら、走ってくる。

男の名は、川上雅人。

少し長い前髪に、眼鏡が似合う専門学校生。

さっきの飲み会に、参加していた。

「どうしたんですか？」

明日香の問いに、

川上は、息を整えながら、

「さっき…有沢さんから、香月さんが地元に帰ると、きいたから…」

「え？」

「飲み会の挨拶で、いきなり、そう言うと、有沢さん…一気しだして…周りも、泣きながら、一気…。悲しいんだよ」

川上は、やっと落ち着くと、姿勢を正し、明日香を見つめた。

「みんな…香月さんが、この街からいなくなるのが、寂しいだ。香月さんは、みんなのアイドルだから…」

「アイドルだなんて…」

口ごもる明日香に、

川上は詰め寄り、

「だから、行くなよ！ずっと、この街で、活動したらいい！」

「それは…」

「待ってる…男がいるんだって…」

川上は、唇を噛み締めた。

明日香は驚き、言葉が止まる。

「……」

川上の言葉は、止まらなくなる。

両手を広げ、

「だけど！その男は、この2年間！連絡を取ってきたのか！会いに来たのか！全然、何もしてないんだろ！それで、恋人だと言えるのかよ！」

川上の叫びに、

明日香はゆっくりと、首を横に振った。

「恋人では、ありません。それに、連絡をしてこないのは…」

明日香は、ぎゅと胸を抱きしめ、

「あたしが…それを望んでたから…」

明日香はそう言うと、

深々と、頭を下げた。

「心配してくれて…ありがとう」

「香月さん…」

そのまま、去ろうとする明日香に、

川上は、最後の言葉をかけた。

「どうして、楽に生きないんだ！彼氏をつくったり、もっと遊びに行ったり…楽しくできないんだ！バイトと、トランペットの練習ばかりして！」

明日香は足を止め、

静かに振り返った。

「それは…あの人に近づく為。あの人の足手まといに、ならない為」

明日香は、笑顔を見せた。

それは、とても美しい笑顔。

「多分、あの人は毎日…練習してるはず。いつも、どこかで…。あ

たしが、毎日練習しても、きっとあの人には、届かない。だけど…
これ以上、差をつけられたくないんです」

明日香の笑顔と言葉に、
川上は目を見張り、
やがて、うなだれた。

「好きなんだね…その人が…」

「はい」

明日香は嬉しそうに、頷いた。

明日香は初めて、
自分の気持ちを、口にした。

そう。

（あたしは、啓介さんが好き）

頭を下げ、笑顔で去っていく明日香を、
川上はもう…止めることなんて、できなかった。

「振られたな…」

ただうなだれながら、呟くだけだった。

アパートに帰り、ほとんど何もないけど、身支度を整えた。

ほとんどが、里美と共有のものだから、

明日香のものは、服とトランペットくらいしかない。

歌詞を書き留めた紙を、楽器ケースにしまうと、

明日香はいつのまにか、

寝てしまった。

朝の日差しの眩しさに、目をやられ、夢からさめると、

テーブルにうつぶせになっていた明日香に、布団がかけられていた。

明日香は身を起こし、家の中を確認すると、

窓の横に、里美が壁にもたれ、座っていた。

里美は、じっと明日香を見つめていた。

「里美…」

里美は顔を背け、

「帰るんだろ…」

明日香は姿勢を正し、

里美の方に、体を向け、

「うん」

そして、頷いた。

「やっと…だな…。自信は、ついたのか」

「うん。自信というか…決意ができたから…」

「じゃあ…。さっさと帰れ！ここは、もうあんたのいるべき場所じゃない」

「里美…」

里美は立ち上がり、

「さっきと行け！明日香！」

明日香は、テーブルの横においてあった楽器ケースを、手に取った。

服が詰まった鞄も、持とうとしたら、

「これは、実家に送ってやるからさ！とっとと、啓介さんのもとへ…帰りやがれ！」

「里美…」

明日香は涙ぐみながらも、力強く頷くと、

楽器ケースだけを掴んで、

玄関へと走った。

「明日香！」

里美が叫んだ。

明日香は、足を止めた。

「頑張れ」

里美は、明日香を見ずに、

「あんたは…あたしの憧れなんだからな」

そう言った。

「ありがとう」

明日香も振り返らずに、ドアを開け、

部屋を後にした。

一人残った里美は、

畳の上に、仰向けに倒れ込んだ。

天井を見つめながら、

「最初からさ…。分かってたことなんだ…けど…」

里美は、涙を拭った。

「畜生――！！」

思い切り、誰もいない部屋で、泣き叫んだ。

「明日香！！！！！！！本当は…本当は…」

もう涙を拭う力もない。

「ずっと…あんたと、音楽がやりたかった…ずっと…やりたかったんだよ！！！」

言っちゃいけない言葉。

止めてはいけない思い。

この日の為に、あの子はここにいて、

あたしは、ただ…ついてきただけ。

あの子の後ろを。

里美は涙を拭った。

笑ってみる。

笑顔をつくってみる。

そして、

「2年間…ありがとう」

里美は笑う。

「ありがとう。明日香…」

涙は溢れ続けても、笑い続けた。

これからの音を奏でて

少し空気が冷たい。
電車を乗り継ぎ、降り立った駅は、
思い出の中と、変わっていなかった。
目の前に、赤い山が広がる。
夕陽はどこでも同じ。
すべてを赤く染める。
だけど、
この景色だけは、ここにしかなかった。
あの頃は当たり前で、
あまり特別だと、思わなかった。
歩く道さえ、そこへ至る一歩一歩さえ…
特別だったのよ。
夕陽に照らされて、そこはあった。

明日香が帰る所。

いつでも、明日香を待ってくれている場所。

あたしは、帰ってきた。

あたしの場所に、あたしの足で歩いて。

手に持っているのは、大切なトランペットが入ったケースと、

あの時、

あなたが、言ってくれた言葉だけ。

すべてが、うまくいった訳じゃない。

傷ついたことも、裏切られたこともあった。

話すこともしたくない…悲しいこともあった。

でも、

あたしは、挫けなかった。

叶えたい思いが、あったから。

戻りたい場所が、あったから。

あたしが、帰る場所があったから。

待ってくれている人が、いたから。

いつもの時間。

まだクローズと、

プレートがかかっている扉を開けた。

音が飛び込んでくる。

この音なの…。

あたしが、ずっと聴きたかった音は。

聴いただけで、あたしにはわかる。

啓介の音。

カウンターの中に、恵子がいた。

恵子は微笑み、

「お帰りなさい。明日香ちゃん」

「ただいま！ママ」

店内に流れる音が、止まった。

ステージにいる人達。

阿部、原田、武田。

そして、啓介。

啓介の優しい笑顔を見た瞬間、

明日香は走り出した。

そして、啓介に抱きついた。

「ただいま…啓介さん」

「おかえり、明日香」

明日香の顔は、涙でぐちゃぐちゃになっていた。

せっかく綺麗に、化粧したのに。

あたしはまだ子供。

でも、

こんなあたしを待っててくれたあなたが、あたしは…。

「あたしを…あなたのバンドに入れて下さい」

啓介は、明日香を抱き締め、

「もう入ってるよ。俺のバンドに」

明日香と啓介。

安らぎと暖かさを感じながら、

二人は二人の音を奏でる。

それは不器用で、まっすぐで一途な、

そして特別な音。

二人の音。

これからの音。

未来へと続く音。

第二部完。

第3部　Singer's Dream

どこまでも続く海岸。

青い空。

覚えてるのはそこまでだった…。

気がつくと、闇の中…

ほんの小さな灯りに、暖かな毛布に包まれていた。

体を起こすと、灯りの向こうに老婆と、小さな子供がいた。

子供は、老婆にしがみつきながら、じっとこちらを見ていた。

「気がついたかい？」

老婆はそう言うと、椅子から立ち上がり、別の部屋に消えていった。

子供はまだ、こちらを見ていた。

和美が微笑みかけると、

子供は照れたように、老婆の消えた方に、走っていった。

「ここは…」

和美は、ベッドの上にいた。

横にある小窓から、空をみると、

日本とはちがう星空が、広がっていた。

「海岸近くで、倒れておったんじゃよ」

老婆は暖かいスープを持って、戻ってきた。

和美のお腹が鳴った。

「お腹が、すいとるじゃろ。行き倒れなど、久々に見たわ」

和美は、老婆の言葉を何とか理解できた。

フランス語…少し訛りがある。

和美が遠慮していると、

「早く食べんと冷めるよ」

老婆の優しい眼差しに、

和美は、手を合わせると、スープをいただくことにした。

老婆の後ろから、子供が出てきて、和美がスープを飲む様子を見守っている。

老婆は、子供の頭を撫で、

「この子が、あんたを見つけたんだよ」

和美は、スープを飲む手を止めて、子供に微笑んだ。

「ありがとう」

真っ赤になって、子供はまた…老婆の後ろに隠れた。

「あんたは…中国人じゃないねえ…」

老婆の質問に、

食べ終わったお皿に、また手を合わせてから、和美はこたえた。

日本と。

「日本！…そりゃあ、遠い国だねえ」

和美はもう一度、窓から星空を見上げた。

確かに遠いわ。

「何しに、こんなところまで来られたんじゃ？」

「歌を歌いに…」

「歌？」

和美は頷いた。

「どうして、こんな土地に、歌を歌いに?日本には、歌うところがないのかい?」

「いっぱいあります。でも、自然の中で歌いたかったんです」

密封されたライブハウスや、舗装された道路の上ではなく、青空と土の上で、歌いたかった。

日本は音楽など、カルチャーに関しては、開かれた国ではない。

音楽もどこか産業…金のにおいが強かった。

有名になりたいとか、金持ちになりたいとか、成功したいとか、

元来、歌うこととは、関係ないはずだ。

和美は歌手としての、本来の姿を求め、

日本を出て、この土地に来た。

何も持たず、声だけで。

でも、

(行き倒れてる場合じゃないわ)

和美は、ため息をついていると、

「一曲、歌ってくれんかのう」

突然の老婆の頼みに驚いた。

「もう夜だから、静かな歌がいいんじゃが…無理には言わん」

和美は目をつぶり、静かに息をして、この土地の空気を感じる。

やがて、

和美の喉から発せられた歌は、

美空ひばりのりんご追分だった。

ジャズやロックは、出てこなかった。

日本語の歌。

自分でも驚いたけど、この土地の空気が、この曲を歌わせた。

歌い終わると、子供は大拍手をした。

老婆は感嘆した。

「あんたは本当に…歌手なんだねえ。言葉はわからんが…気持ちは伝わったよ」

「おばあちゃんは、歌手だったんだよ！むちゃくちゃうまいんだよ」

老婆は、子供を愛しそうに見つめ、

「昔の話じゃよ」

老婆は、和美を見た。

「この世界は…神が罰として、いろんな言葉を作り、他の国の人達と壁をつくったという…わしにはわからんが…」

老婆は、和美の食べ終わった皿を下げにいく。

「歌手という存在は…その壁を、壊すものかもしれんのう」

老婆は、子供に寝るように促した。

「わしも嘗ては、ジャズを歌っていた。あれは…アメリカに連れて行かれた者達が、世界中に伝えた言葉じゃな…」

ジャズ…。黒人が本音や不満を語るブルースが、白人にとって、悪魔の音楽と言われたなら、

戦中の華やかなダンスミュージックから、ビーバップへと移行した言葉なき、音楽は、
黒人が発した…言葉では伝えられなかったメッセージである。

「あんたが、本物の歌手なら…何かを伝える為に、存在しているのかもしれん」

老婆は、部屋の隅にあるタンスの上に飾ってある、

一枚のＬＰを手に取った。

「わしの生まれは、デトロイト…アメリカじゃよ」

ＬＰには、多くの黒人が写っていた。

楽団だ。

「アメリカから、この国に渡り、熱烈な歓迎を受けた…わし達の音楽は、芸術と評価され、初めて尊敬された…」

老婆は、ＬＰをタンスの上に戻すと、

「だから…わしらは、ここに残った。アメリカに戻らずにな」

和美は、話にはきいていた。

多くのジャズマンが、フランスに遠征で来て、

アメリカに帰らずに、残ったこと。

アメリカは単なる大衆音楽として、差別されていたジャズは、ヨーロッパにて評価された。

あの有名なブルーノートレベールの創設者も、ドイツからの亡命者だ。

「しかし…」

老婆は、星空を見た。

「音楽の歴史を紡いだのは…この地に来ても、アメリカに帰った者たちじゃよ…。わしらはある意味…祖国から逃げたのかもしれん…差別から戦わずに」

老婆は、和美をじっと見つめて、

「あんたは…逃げたんじゃないね」

和美は、老婆に微笑んだ。

「捨てたのかもしれません…」

和美の言葉に、老婆は笑った。

「あんたは捨ててないさ。自ら、捨てたという者は…なかなか捨てられないもんさ…。いずれ、自ら気づくじゃろ」

少し考え込む和美。

老婆はそんな和美を、優しく見守りながら、

おやすみと言って、

灯りを消すと、出て行った。

次の日。

和美は、丁寧に毛布をたたむと、部屋を出た。

そして…老婆の所にいくと、頭を下げた。

「昨日は、ありがとうございました」

「よく眠れたかい？」

和美は、深く頷いた。

そして、真剣な表情になる。

「この町に、働くところはありますか？あたし…しばらくこの地にいます」

いきなり、歌で食えるわけがない。

普通に働きながら、歌を歌おう。

こうして、和美の旅は始まった。

夜の仕事

この話が好き。

ある有名なジャマイカの歌手が、初めて日本を訪れた際の言葉。

「この国は戦争に負けたんだよね?」

車で移動しながら、

彼は、何処までも広がる建築物を眺めて、

呟いた。

「君達のお父さん…いや、お祖父さんやお祖母さんは…頑張ったんだな。感謝しなければ」

他の敗戦国が、未だに立ち直っていない国が多い中、

この国は、異様なる発展を遂げた。

異様なる…。

キラキラと、夜さえ忘れさせるネオンの中、

歩いていく。

今から出勤だ。

派手な格好に、

派手な化粧。

他では、浮いてしまいそうな格好も、

この街では普通だった。

そこら辺にいる…恋人同士には見えないカップルも、

当たり前。

普通のこと。

単なるお仕事。

真っすぐに、

できるだけ、すまして歩く。

だらしないやつは、多いけど、

せめて、

見栄えだけは、ちゃんとしたかった。

だけど…

ずっと、左頬が痛んでいた。

化粧で何とか…アザは、隠すことができたけど、

痛みだけは、誤魔化せなかった。

馬鹿な男に、殴られたのだ。

女を殴るやつは、最低の男だ。

でも、

あたしの

今までの確率では、そんな男にしか出会っていない。

あたしが、悪いだよ。

自分に、毒づいても仕方がない。

半分…そんなものだと思っている。

ただあいつには、むかついたから、

あの男には、出て行って貰う。

なぜか…

いつも

男が、あたしのうちに転がり込んでくる。

帰れとも言わないから、ずっといる。

女友達…いや職場の女が遊びに来たりして、

いつのまにか、デキてる時も多い。

まあ、他人の男を取ることが、趣味のやつもいるから。

今回もそんなんだが…昨日は、むかついた。

留守にしてたら、

その女に、

あたしのズボンをはかしていたからだ。

アンタは、誰と寝ても構わないが、

あたしの物に触れるなと、

キレた。

逆ギレで殴られたが、

何とか、家から追い出し、鍵も替えてやった。

狭いエレベーターに乗り、3階で降りた。

無駄に広い、踊場の向こう…フロアの奥にある…扉を開くと、

これも無駄に広い空間。

百人は入る。

奥には、昔バンドを雇っていた名残のステージがある。

「紗理奈、昨日はごめん」

ステージの裏の更衣室に入ると、

昨日、家にいたミーナが取って付けたように、謝ってきた。

今日の出勤は１０人。

少ないが、平日…。

同伴の予定も入ってないみたいだ。

「ああ」

適当に返事すると、紗理奈は着替えだす。

怒りはなかった。

紗理奈は、古びたソファーに座ると、タバコに火をつけた。

「あいつはどうした？」

紗理奈の問いかけに、ミーナは首を傾げ、

「わからない。すぐに別れたし」

ミーナには、好きなやつがいる。

紗理奈も知ってるやつだから、相談を受けてた。

今回のことは遊び。

暇つぶし。

こんな女と、やるやつが悪いのだ。

別に、好きといってる男にもチクらない。

もし引っかかったら、そいつに見る目がないだけ。

知ってる女の男を、寝取った優越感だけ…。

それがほしいだけ…。

マネージャーが、朝礼を告げる。

タバコを消して、けだるいフロアにでた。

いつもと変わらないマネージャーの言葉。

どんなにえらそうに指示されても、お客に接するのは、

あたし達…女だ。

女のコントロールするのが、男の役目だというが…紗理奈はせせら笑った。

程度の低いやつに操れるのは、程度の低いやつだけだ。

時間の無駄と思いながら、紗理奈は、店内を見た。

場末のキャバクラ…。

一体どれくらい、
ここにいるのだろうか…。

高校は、中退した。
父親が家を出ていき、
一人残された母は、
いやに潔癖に、ヒッステリックになり、
紗理奈に、きつく当たるようになった。

（どうして？）

逆に、
兄には優しくなり、甘かった。
もともと内向的だった兄は、その甘さに甘え、
家に、引きこもるようになった。
所謂、オタクからニートになった。

それでも、家にいてくれる兄を大事にした。

紗理奈にきつく…

きつく当たった。

自分にだけ…どうして…きつくあたるのか…。

最初は、理解できなかったけど、

ある日、

紗理奈は気づいた。

母は、

女を憎んでいた。

自分から、旦那を奪ったのは、若い女。

紗理奈は背が高く、早熟していた。

そんな紗理奈を、汚らわしい体と、

母親が罵り、

口に出したとき、

家をでることにした。

家出だった。

できるだけ遠く、

有り金全部を使って、

十六の時、この街に来た。

この店に、面接に来たとき、

年齢も名前も嘘を書いた。

くわしくきいてきたり、確認するところは、

すぐにでた。

見た目が、十六に見えなかったことと、

その日はたまたま、店は女の子が足りなかった。

大した確認もなく、入店となった。

簡単なドリンクの作り方だけ教えられると、

すぐに席へとつかされた。

店長が、ボーイに言った。

「～さんは素人ぽい人が好きだから」

少し小太りの中年のおっさんの隣に座り、

ドリンクをつくる。

適当な会話が終わり、

おっさんが、紗理奈にすり寄ってきた時…

ステージでは、専属のバンドが演奏を始めた。

演奏を、ぼおっと聴いていた。

その間、

おっさんが、ずっと体を触っていたけど、

あまりいやとは、思わなかった。

母親に、汚らわしい体と言われたからか…

それとも、

男に、免疫がなかったからか…。

いつのまにか、

指名延長が取れていた。

（楽かな？）

何の感覚もなく、

紗理奈は、夜の店で過ごした。

体を触らしてることに、

他の女から文句がきたが、

「ああ…だめなんだ…」

と、無表情にこたえる紗理奈を…おかしいと思ったらしく、しばらくしたら…

何も言わなくなった。

そして、

タバコと酒を覚えた頃、

知らない間に、

男と住んでいた。

店の寮は、ワンルームマンションだったが、荷物もなかったし、何

とか住めた。

相変わらずの店で、

演奏が始まると、

紗理奈は、ぼおっと聴いていた。

その時、触り放題になる。

断るすべも、あしらい方も覚えたが、

音が流れるときは、

なぜかステージに集中し、他はどうでもよくなった。

ある日。

紗理奈は、衝撃を覚える。

ステージに立った一人の歌手に。

その歌手は、

昔、このステージで歌っていたらしい。

今回オーナーの代が、変わるから、たっての願いで

特別に来てくれたらしい。

まだ新人の歌手は若く、

紗理奈とあまり変わらないような気がした。

赤いドレスを纏った、あまりにもきれいな姿。

歌手の名は、

河野和美。

女を口説くことに、夢中な男。

それにたかる女たち。

多分ステージを見ているのは、紗理奈だけかもしれない。

河野和美という歌手は、一礼すると、

満面の笑みを客席に向け、静かに歌いだした。

曲名は、分からなかった。

音楽は、ここで聴くだけだから。

後に、その曲は…未来と知った。

母親の子への愛。

子からの思い。

母親から逃げて、この場にいる紗理奈には、

嘘と叫びたかった。

けど…。

紗理奈は涙した。

嘘は、あたしだと思った。

あのステージで、歌われている歌こそが本当で、

客席にいるあたしは、偽物。

キラキラとしたステージの明かりを、

見慣れた照明を、

始めて眩しく感じ、

遠くに感じた。

その時、

紗理奈にとって歌は、

特別になった。

あの場所に行きたいと。

次の日。

紗理奈は早速、

ＣＤｓｈｏｐに向かった。

昨日の歌手のアルバムを、探した。

何とか見つけ、購入する。

そういえば…

機械もなかったから、ラジカセを買うことにした。

もしかしたら、

初めて自分の稼いだ金で、買い物をしたのかもしれない。

家に帰ると、烈火の如く男に怒られた。

部屋が狭くなるのと、

俺の金が減ったと。

返品して来いと、男がＣＤを投げた時、

紗理奈は初めて、

男を殴り、部屋から追い出した。

初めての男、初めての彼氏だったが、

そんなこと関係なく、許せなかった。

紗理奈は、初めての別れを経験した。

しかし、そんなことはどうでもよかった。

音楽が聴けたら。

和美の歌を聴きながら、

また店で、歌ってほしいと願った。

でも、紗理奈は知らなかった。

昨日のステージを最後に、

和美は、日本から離れていったことを。

それから、

紗理奈は、音楽にのめり込むこととなる。

歌を歌いたくて、カラオケによく行くようになった。

ＣＤショップも、よく行くようになった。

そうすると、

知らず知らずの内に、音楽好きが集まるようになった。

奈々子とえりか。

同じ店の仲間だが、いつのまにか、カラオケ友達になっていた。

歌を歌うことで、

精神的に楽になったみたいで、

よく笑うようになっていた。

そんな…ある日。

いつもと同じように席につく。

奈々子と、二人でついた席は、

一人が、マネージャーの知り合い（何度か見たことがある）長髪の男と、

その男の連れには見えない…綺麗な顔をした男…

まるで、女の子のような美形だ。

紗理奈は、美形の方の隣に座った。

ドリンクをつくり、他愛もない会話を続ける中、

ふっと、会話が途切れた。

前に座る長髪が、女の子のドリンクを頼んだらしく、

紗理奈の前にも、ビールがくる。

乾杯の後、

いただきますと言って、一口飲んだ。

こういうときは、ありきたりな話題がいい。

「趣味とかありますか?何か好きなことは?」

美形は、ＶＳＯＰの水割りを飲みながら、少し考え込み、

「音楽が、趣味かな?でも…俺は聴くだけ。知り合いが、バンドやってるけど」

音楽という言葉に、

思い切り反応する紗理奈。

「何を、聴かれるんですか？」

美形は少し考えながら、

「もっぱら洋楽だけど…日本人も聴くよ。今、話題になってる…。えっと名前が出てこない…海外で活躍している…なんとかかずみ」

「河野和美！」

思わず、紗理奈の声のトーンが上がる。

「そう！河野和美だ」

紗理奈は、嬉しくなった。

夜の出会いの中で

日本から、
ヨーロッパに渡った和美は、
地道にライブ活動を始めた。
路上や公園。
ライブハウスで、無理やりの飛び込み。
天性の歌声は、話題を呼び…渡欧から一年で、
インディーズだがＣＤを出せた。
日本のレコードの力を使えば、すぐにだせたけど。
でも、そんなお膳立てはいらなかった。
その国の人が聴きたくて、聴いてくれるようになるまでは、アルバムをつくる気はなかった。
自分では、曲を書かなかったが、
フランスで有名な作家が、是非と…曲を提供してくれた。
それにより、インディーズながらも売上をあげ、

和美は一躍、時の人になる。

それは海を越え、

日本へ、

さらにアメリカへ。

2枚目のアルバムを録音中、

アメリカの有名なジャズレーベルから、

次は、うちからリリースしたいと、打診があった。

最初は、首を立てに振らなかった和美も、

最後は承諾した。

アルバムからの曲が、アメリカで上映する映画に、

大々的に、使われることが決定したからだ。

しかし、

輝かしい栄光ばかりが、続くはずがない。

グラスの中で、氷が回る。

おかわりを、紗理奈は作っていた。

「河野和美って、あの伝説の歌手、安藤理恵の娘なんだよね」

「安藤理恵？」

紗理奈は、首を傾げた。

美形は、紗理奈からグラスを受け取ると、一口飲んだ。

「知らない？海を渡って、アメリカでも、活躍した伝説の人物！日本人でありながら、世界中で愛された歌手さ」

「伝説…」

和美の母。

伝説の歌手。

「まあ、娘も伝説になるかも。有名なレーベルと契約したし、映画の主題歌も歌うし」

「そうですよね…あの人はすごいから…」

紗理奈の頭に、

安藤理恵という存在が残った。

和美のお母さん。

「その安藤…理恵さんのCDって売ってるんですか？」

「一枚だけ。輸入盤なら、手にはいるよ。持っていたんだけど、知り合いにあげたから」

「輸入盤？」

紗理奈がいくCDショップは、日本盤しかなかった。

「この辺だったら、一つ向こうの駅前にあるよ」

この街に来て、何年かたつが、あまり地理に詳しくなかった。

思わず、

紗理奈の口から出た言葉。

「いっしょに買いにいきませんか？」

「え？」

「今度の日曜日、休みなんで…」

少し照れてる紗理奈に、

美形は少し考えた後、

「いいよ」

「でしたら、昼の一時に駅前で」

「わかった」

美形が、了解したとき、

前にいる長髪が、時間が終わった事を告げた。

席をたつ二人。

「あのお…お名前は？」

紗理奈は、名前をきいてなかった。

美形は、紗理奈を見つめながら、

「牧村」

一言だけ告げると、

そのまま、店から消えていった。

なぜ、

今日初めて会ったのに、

なぜ、

休みの日に、会うことにしたのか…。

紗理奈にも、分からなかった。

（営業なら、引っ張るべきだったかしら?）

だけど、紗理奈は待てなかった。

今すぐにでも、聴いてみたくなったのだ。

母親の歌を。

行き交う人々を眺めながら、

紗理奈は、壁にもたれていた。

少し早く来すぎた。

昼間は、あまり動かないから、

何か…自分が浮いた存在に感じる。

夜は、あんなに着飾って歩く癖に、

昼間は、帽子を目深に被り、人並みから離れる…。

あたしはなんだろう。

夜の人間…。

言葉は、簡単に表現するけど、

されたものの気持ちなんて、考えない。

紗理奈は、落ち着こうとして、タバコを吸おうとした時、

牧村は来た。

約束の時間の１０分前。

割とちゃんとしている。

二人は、すぐにＣＤショップへと、向かった。

駅の改札は、地下だから、

そのまま隣のビルに移動し、エレベーターに乗った。

八階にあった。

ワンフロアまるごとの店内に、紗理奈は驚いた。

安藤理恵のアルバムは、簡単に見つかった。

紗理奈は、しばらく…ＣＤを眺めていた。

ふっと気付くと、牧村がいない。

ＣＤを手に、

紗理奈は、牧村を探す。

いた。

ブラックミュージックコーナーに。

手に、一枚のＣＤを持っていた。

紗理奈は近付き、ＣＤを覗き込んだ。

エリカバトゥの“Ｂａｄｕｉｚｍ”

「これ買うんですか？」

紗理奈の質問に、

少し照れる牧村。

「持ってるんだけど…知り合いの子が、音楽やってるから…参考に

あげようかと」

（誰にあげるの？）

と、

きくほど親しくも

興味もなかった。

二人は、それぞれ一枚のＣＤを買うと、

店をでて、

そのまま駅で別れた。

あっさりと。

改札を通り…じゃあと、手を振る牧村の後ろ姿を、

一瞬見送ると、

紗理奈は歩きだした。

ふと気になって、改札の向こうを振り返るけど…、

人並みの中、牧村の姿は、もう確認できなかった。

何度かお客さんと外で、
逢ったことはあるけど…
こんなにあっさりと、帰らされたのは、初めてだ。
大体は、何とか長くいようとするのに…。
これじゃ…本当に、買い物に付き合っただけじゃない。
わざわざ休みに出てきて。
（変なやつ）
紗理奈は、毒づきながらも、
妙に、牧村のことが、
心に残ることになる。
一応…携帯番号だけは、交換しておいた。
番号の書いた紙を握りしめて、紗理奈は改札に背を向けた。
一緒に買い物してから、一週間後の日曜日。

紗理奈は、牧村の携帯に電話した。

それは、

ＣＤの感想を伝えるため…。

「ものすご～く暗かった。あと…言葉が英語で、全然わからない」

紗理奈の感想に、

受話器の向こうで、大笑いする牧村。

何とか笑いをこらえて、

「河野和美だって、英語だろ」

「彼女は、特別」

しばらく会話は続いた後、

紗理奈は言った。

「また…今度お茶でもしない？」

次の日曜日。

また、駅前で待ち合わせ、地下のカフェでコーヒーを飲む。

そして、別れる。

ある意味律儀だ。

そして、また

来週会うことを決めた。

そんなことの繰り返しを、続けた。

わかったことは、

牧村が音楽に詳しいこと。

キャバクラとか、普段はまったくいかないこと。

あの日は、知り合いに無理やり連れてこられたこと。

会うたびに、紗理奈の店の愚痴も、真剣にきいてくれた。

それが単純に、嬉しかった。

単なる話をするだけだが、

口説くとか、他の男のようなやらしさがなかった。

そんなことを、何ヶ月か続けた…ある日。

平日の水曜日。

めずらしく、休みとなった紗理奈は、

夕方、牧村の携帯に電話した。

仕事中。

とらないかもしれない。

少しドキドキしながら、

携帯を鳴らす。

「はい」

いつもの声が聞こえた。

嬉しくなる。

「お仕事中、ごめんなさい」

「いいよ。今、暇だから…どうかしたの?この時間にかけてくるな

んて…」

紗理奈は、唾を飲み込んで、

「あのお…今日の夜は、予定とかありますか？」

「いや、ないよ」

紗理奈の声が上ずる。

「暇でしたら…お仕事終わったら、お茶でもしませんか？」

「いいよ」

あっさりと、ＯＫだった。

「じゃあ、いつの場所で」

牧村の終わる時間だけ確認して、携帯を切った。

少しガッツポーズを取ると、時計を見、

紗理奈は、出かける準備をしだした。

あの人の好き

駅前で佇む。

いつもなら、もう出勤の時間だ。

六時半。

静かに牧村を待つ。

こんな時間に同伴でもなく、人を待つなんて…

普通の人みたい。

待つことが、嬉しいなんてなかった。

改札からではなく、

紗理奈が来た…反対方向の地下街から、

牧村はやってきた。

「職場が向こうなんだ。一駅もないから、歩いてきた」

紗理奈は、牧村の仕事を知らなかった。

「事務職さ。営業のね」

二人は、並んで歩きだす。

「ところで、どこいくの？」

牧村の質問に、

紗理奈は、笑顔でこたえた。

「カラオケ！」

「カラオケ！？いきなり！何か食べないの？」

「今のカラオケは、居酒屋より安くて…まあまあおいしいのよ」

「へえ～」

感心する牧村。

「カラオケは、居酒屋並みに、メニューが豊富で、安い！」

「カラオケでごはんねえ…」

「そんなに、おかしいですか？それとも何？水商売の女がカラオケで、安くごはん食べたら、おかしいですか？」

「別におかしいとは…」

「そりゃあ。お客さんと同伴するときは、高いとこにいきます」

「うらやましいなあ」

「でも、仕事で食べてるから、気を使うし…おいしいとか、感じる余裕がない。だから、せめて、高いものを食べたいの」

「こわ！」

紗理奈は、そっぽを向くと、

「別にいいじゃないですか！こんなかわいい子と、いっしょに、ごはん食べれるんだから」

自分でかわいいと言って、恥ずかしくなる紗理奈。

「へぇ～そうかもな」

他人事のように話す牧村を、

紗理奈は少し、睨んでしまう。

この人は、一体何なのだろう。

こんなにデートを重ねてるのに…。

今までの男だったら、もう付き合って、

住んで、

別れてる頃だ。

それとも…。

水商売の女は、嫌なんだろうか。

紗理奈の気持ちに気付かずに、

牧村が言った。

「じゃあ…俺とも、今度から、高いところにいかないとな」

紗理奈は、牧村に殺意を抱いた。

「そうね！でもその前に、お客なら、店に来て下さい！」

フンと、早足になる紗理奈に、

さすがに、悪かったと思ったらしく、

追いかけながら謝る牧村。

「ごめん」

無視する紗理奈。

「本当ごめん！デリカシーがなかった」

そうこう言ってる間に、カラオケに着いた。

カラオケ店のロビーの広さに、感動する牧村を連れて、

少し広い部屋に通される。

ビールとウーロン茶。

後は適当に、唐揚げとかを注文する。

早速、本をめくり、曲を探し…すぐにいれる紗理奈。

店員が、先にドリンクを運んでくる。

ビールは牧村。

ウーロン茶は紗理奈。

乾杯する。

紗理奈は、できるだけ休みは、お酒を抜きたかった。

紗理奈の歌がはじまる。

ＵＡの情熱だ。

手でリズムを取りながら、歌い出す。

思わず、

牧村のビールを飲む手が、止まった。

牧村は素直に、驚いた。

相当うまい。

ハスキーで、ソウルフルな歌声。

牧村は、ジョッキを置き、

目をつぶって、

紗理奈の歌声に、聴き惚れた。

歌が終わる。

ふぅと息をつく紗理奈。

大拍手する牧村。

照れながら、頭を下げる紗理奈。

次の曲が、入っていないことに気づいた。

「いや、俺はいいよ。きみの歌が聴きたいから」

紗理奈は驚き、遠慮しながらも、次の曲を入れた。

エンジンがかかった紗理奈の、

ワンマンショーが始まる。

いろんなタイプの曲を歌い、
牧村の反応を見た。
（うまく歌えているかな……）
「どうだった？」
紗理奈の問いに、牧村は、
「よかったよ。うまかった」
感心したように、何度も頷いた。

二時間くらいいて、紗理奈と牧村は、店を出た。
歩きだし、
しばらくして
紗理奈は足を止めた。
振り返る牧村。
「もう帰る？」
紗理奈がきいた。

牧村は、時計を見、

「…じゃあ、もう一軒いく？」

「どこか連れてってよ」

紗理奈の言葉に、苦笑すると、

牧村は促す。

「行きつけのＢＡＲがある…いく？」

「うん」

紗理奈は、素直についていく。

カラオケのすぐ右を曲がると、商店街がある。

しばらく歩き、

二本目の十字路を、左に曲がると、

雑居ビルがあった。

そこの三階に、

ＢＡＲはあった。

ＢＡＲ　Ｅｖｉｌ。

エレベーターに乗り、三階につく。

廊下には、数多くの扉が並び、

奥から三番目にあった。

多分、一人では来れない。

木製の扉を開けると、

ジャズが流れてきた。

店内は入るとすぐにカウンターがあり…その中には、

一人の女がいた。

「いらっしゃいませ！」

牧村は、紗理奈をカウンターに促し、自分も座った。

「おはようございます。先生」

二人の前に、コースターが置かれる。

「先生は、やめてくれと言ってるだろ。香月さん」

照れている牧村。

「あら。先生だって、香月さんじゃないですか」

「あ、あすかさんとは言いにくい…」

「あたしは、言えますよ。ゆう先生！」

「やめてくれ！先生はいらない」

カウンターにいる女は、

香月明日香だった。

LikeLoveYou

話題は走る。
すぐに情報は、
リアルタイムで、人々に送られる。
ネットの普及は、
人々を豊かにした。
溢れる情報は…
知りたいことを、キーボードや、マウスをクイックするだけで、
すぐに得ることができる。

しかし、
これだけ、溢れる情報の中で
同じものが流行り、
消費されるのはなぜ。
それが、

大衆意識というものなのか…。
人々は、
本当に豊かになったのか。
溢れる情報に踊らされ、
逆に
狭くは、なってはいないのか。
判断力は、下がっていないか。
人は、人と触れ合って、
初めて、実感できる生き物なのに…。

ニューヨークタイムスに…
今、話題の歌手
と紹介された記事を、見たとき、和美は覚悟した。
次の消費は、自分だと。
消費され、なくなる前に、
あたしのやるべきことは…

歌手として、

日本語しか歌わない歌手には、ならない

と誓った時から。

安藤理恵がどうして

自殺したのか…。

今の和美には、わかっていた。

ほとんどのミュージシャンは、

理恵のすばらしさを理解した。

しかし、

ある程度、突き抜けたアーティストしか、

理恵を認めなかった。

理恵を、突然変異とでも思ったのだろう。

だからこそ、

普通のミュージシャンは…。

理解しても、認めるとは限らない。

和美はやるべきこと。

グラミーのジャズボーカルにノミネートされたと、連絡があった。

喜ぶスタッフの中、

和美はため息をついた。

赤で、決めた自分の姿を眺めた。

もう予感がしてた。

（いいわ、別に…。あたしは、どこにいても、どこで歌っても…あたしだから…）

照れくさそうに、カウンターに座る優一を、

紗理奈は、戸惑いながら見ていた。

そんな視線を感じず、
優一は、明日香を見ていた。

教育実習にいったとき…
優一はつくづく、自分が先生に、向いてないと思った。
みんな…各々頑張る彼らを、
どう評価ができよう。
できないと評価し、彼らの一生を左右できようか。

優一についた担当の先生は、優しくて温和で
生徒に人気があった。
その先生が、優一にこう言った。

「牧村先生。こいつらは、何もできない馬鹿。私達が、教えないとないも知らない馬鹿…と思わないと、先生はできない」

そのアドバイスをきいたとき、
優一は、自分には無理と思った。

実習最後の日、

渡り廊下から、校舎を見た。

そこからしか、見れない景色を、

自分が、再び見れたことで…目的も、終わった気がした。

卒業後、

優一は、普通の企業に就職した。

逆に、会社をやめる先輩にある日、

飲みに連れ出された。

二軒目に、連れて来られたＢＡＲ。

そこで、優一は久々の再会を果たしたのだ。

それは、教育実習で、出会った少女だった。

香月明日香。

優一の思い出の少女に、似ていた。

明日香はＥＶＩＬを、恵子に紹介された。

恵子とマスターは、知り合いだった。

ＥＶＩＬのマスターは、

もと恵子のバンド…ダブルケイのメンバーだった。

店は、道路を渡ると、すぐにスタジオがある…便利な場所にあった。

週４日は、働いていた。

啓介のバンドに入っていたが…そんなに毎日、仕事がある訳でなかった。

ジャズは、ギャラが安かった。

明日香をメインにし、歌を前面にだそうとしたが、

レコード会社は、啓介だけを押したかった。

バンドのメンバーに、給料を払わなければならない。

その為、啓介は相変わらず、セッションの仕事ををしていた。

仕事の依頼は多く、

啓介は、スタジオを飛び回っていた。

その間、

明日香は、スタジオとバイトを行ったり来たりしていた。

バンドは、タイトにまとまってきており、啓介がいない時は、明日香がリーダーだった。

大好きなマイルスディビスの言葉。

つねに、自分の知らないことをやる。

を意識して、練習した。

自分の知らない音楽を、探した。

ピアソラや…レゲエ、テクノ…自然の中。

川のせせらぎのような…いつまでも、聴いていられる…心地よい音を、奏でたかった。

明日香は、ミュージシャンになっていた。

もうすぐ…21になる。

優一と紗理奈は、ビールを注文した。

サーバーから、ビールをグラスに注ぐ明日香。

「今日は、お1人じゃないんですね。ゆうさん」

「うん。ちょっと…いっしょに、カラオケいってたんだ」

「カラオケかあ…ながいこと行ってないです。昔はよく、里美と行ってたんですけど」

ビールが、二人の前に出される。

優一は、紗理奈と乾杯する。

「里美…。有沢さんか！元気してるの」

「はい。お陰様で」

明日香と優一の会話を、聞いてるだけの紗理奈に気づき、

明日香は、紗理奈に微笑みかける。

「はじめまして、香月と申します。よろしくお願いします」

紗理奈はいきなりで、驚く。

「ああ、紗理奈です」

「音楽友達なんだ、俺達」

友達…。

その言葉が、紗理奈には
嫌だった。
明日香の笑顔も、
嫌だった。

かけていたＣＤが止まり、
明日香は、新しいＣＤをセットする。
流れる低音。

Ａ　ＴＲＩＢＥ　ＣＡＬＬＥＤ　ＱＵＥＳＴの“Ｔｈｅ　Ｌｏｗ　Ｅｎｄ　Ｔｈｅｏｒｙ”

今、明日香のお気に入りの音だった。
無駄を省いたその音は、美しく、衝撃的。

カウンターだけの店内は広く、１５人くらいは座れた。
奥に三人、お客がいた。

明日香は、１人１人に満遍なく話しかける。

「店長、遅いね」

「知り合いのお店の周年で…お祝いにいってますから」

明日香を包む店の雰囲気…お客さんも優しかった。

妹や娘に、話しかけるように。

紗理奈の客とは違った。

同じ客商売なのに。

間に、カウンターがあるからだろうか。

紗理奈は、お客に話しかける明日香の横顔を眺めた。

綺麗な顔。

紗理奈も、けっしてブサイクではないが、

種類が違うように感じた。

紗理奈は、花束。

綺麗だが、

根を切られ、

長く生きれない。

明日香は、鉢植えの花。

綺麗と眺められ、

大切に水をやり、

育てられる。

その鉢植えは、

多分…

花束より高価だ。

「明日香ちゃんのＣＤないの？」

１人のお客が、ウォッカトニックのおかわりを頼みながら、明日香にきいた。

明日香は目を丸くし、

「え！あたしのＣＤですか？」

「発売日が決まったと、マスターが言っていたぞ」

「聴きたいなあ」

他の客も言い出す。

「やっと…レコード会社が、折れてくれたから…」

明日香は少し、はにかむ。

「店でかけるんですかあ～」

あくまでバンドとして、活動したい啓介と、

啓介をメインに、他はバックバンドというレコード会社とは、

中々意見がまとまらなかった。

今話題の河野和美の弟。

伝説の歌手、安藤理恵の息子。

売り出すのは、今しかなかった。

明日香が、バンドに入るとすぐに、

レコーディングは行われ…アルバム一枚は、完成した。

それは…明日香が、ダブルケイやペパーミントで演奏した曲達…。

ある意味、明日香のそれまでの集大成だった。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕ（ライクラブユウ）

バンド名は、決まっていた。

あなたを愛することが、できる…そんな日々が好き。

明日香の想いだった。

啓介への。

アルバムは、出来ていたが、リリース予定が未定だった。

しかし、

ライブでの評判。

そして、

グラミーにノミネートされた和美との、タイミングを考えると、

今出さないといけないと、判断したレコード会社は…

渋々納得した。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕ。

明日香の新しい始まりだった。

「ＣＤあるんでしょ」

お客に言われ、

渋々明日香は、自分のカバンから、ＣＤを取り出す。

「本当にかけるんですか？」

お客達が頷く。

「ＣＤ聴けるんだあ」

優一が、感嘆の声を上げた。

明日香は音楽を止め、自分のアルバムをセットした。

ピアノが、静かに流れ出し…曲が始まる。

マイフーリッシュハート。

夜と夢の間で、迷わないで…あたしの恋心。

この曲が、

明日香の始まりだった。

恵子の歌声に惹かれて、

明日香は、音楽の扉を開いた。

明日香の澄んだ歌声に絡みつき、

寄り添う啓介のアルトサックスが鳴る。

ダブルケイとは違う二人の音。

恵子と健司は

寄り添うような、触れ合うような、離れるような、互いにクールでありながら、

本当は、大切に思い合ってる二人の音だった。

明日香と啓介は

しっかりと手を繋ぎ、つまずきながら、戸惑いながらも、

絶対に離さない…そんな音だ。

紗理奈は、初めて聴く歌声に…

素直に、感動した。

和美や自分とは、まったく違う歌声。

すっと体に、染み込んでくる。

「相変わらず、いい声だ」

感嘆する優一の声を、きいた瞬間、

紗理奈は、席を立った。

結構、勢いよく立った為、激しい音がして、

店内の人が一斉に、紗理奈を見た。

「あたし…帰るね」

紗理奈は、店を出ていった。

「どうしたんだ」

優一の声も無視して…。

誤解という裏切り

何にも知らなかったアタシ…。

あの人の名前さえ。

（ゆう…）

ゆうっていうらしいわ。

カラオケで、歌をきかせたアタシと、

本物の歌手のあの子。

（馬鹿みたいじゃない！）

エレベーターを降り、ビルの前でへたり込む。

「紗理奈さん！」

優一が、追いかけてきた。

「どうしたんだ？いきなり」

紗理奈は、優一を見、

すぐに視線を外すと、

「今から…アタシの家に来ない？」

「何言ってるだよ。いきなり」

優一は驚く。

「どうせ…目的は、みんな、いっしょなんだから！さっさと、すましたらいいのよ！」

紗理奈は、叫んだ。

言葉なく、立ちすくむ優一。

「来ないんだったらいい…帰る」

「紗理奈さん」

背を向けて、歩きだす紗理奈は、何とか手を伸ばし、止めようとする優一を、振りほどいて、

「さんづけなんて、最低だよ」

紗理奈は、走り出した。

ここにいたくなかった。

最低なの、は自分。

それが、わかりながらも。

ワンルームマンションに、帰った紗理奈は、

ユニットバスの中、

シャワーを浴びていた。

ふっと目線が、手首にいく。

忘れてた。

最近…落ち着いていたから。

暑くなっても、けっしてTシャツを着なかった。

店でも、お客に分からないように、何とかして隠していた。

これを見ると、

自分の弱さが分かる。

無性に、独りがこわくなり、誰かにいてほしくなる。

誰でもいいから。

家を飛び出した癖に。

紗理奈は、シャワーを止めると、タオルをつかみ、
ユニットバスから出た。
狭い部屋を見回した。
勝手に、
男が、住み着いた訳でないことも、わかっていた。
紗理奈は裸のまま、
部屋のほとんどをしめるベットに、倒れ込んだ。

まだ…決まった訳じゃない。
明日、確かめにいこう。
優一にも謝らなくちゃ。
紗理奈は、静かに目を閉じた。

次の日。

出勤が、遅番になったため…紗理奈は、Ｅｖｉｌに向かった。

いざとなったら、

お客と店近くで待ち合わせて、そのまま、

同伴出勤にしたらいい。

三階に上がり、扉を開けると、

カウンターから、小太りの小柄な男が顔を出した。

「いらっしゃいませ」

昨日いなかった人。

マスターだろう。

カウンターに座り、ビールを注文する。

「こちらは、はじめてですよね」

マスターはコースターを出し、ビールを置いた。

「いえ」

紗理奈は一口飲むと、グラスを置いた。

奥にお客が一人。

このお客も、昨日はいなかった。

ニヤニヤ紗理奈を見ている。

紗理奈はマスターを見、

「明日香さんは…今日、いらっしゃらないのですか？」

マスターは少し驚くと、すぐに営業の顔になり、

「世話になってたＢＡＲの…ママが倒れたらしく、病院に寄ってから、来ますので…少し遅れると思います」

「そうですか」

紗理奈はまた、ビールを飲んだ。

「ところで…こちらへは、誰の紹介で、来られたんですか？」

ビルの三階のＢＡＲ。

女が一人、ふらっと入ってくるものではない。

マスターの質問に、紗理奈はグラスを置き、

「ゆうさんと一度、来させて頂きました」

その言葉に、客が反応した。

「ゆう！ゆうってあれだろ～マスター」

お客はさらにニヤニヤ笑い、

「明日香がいたら、必ずくるやつ」

紗理奈を見ながら、

「明日香のことが、好きなやつだろ！」

紗理奈は、ビールを飲み干すと、

「ごちそうさま」

お金をカウンターに置いて、でていこうとする。

慌てて、

「多いです。お釣りの方を」

お釣りを、返そうとするマスター。

紗理奈は、満面の笑みを浮かべ、

「いらない。向こうのお客さんにでも、一杯おごるわ」

「ラッキー！」
お客が手を振る。
店を出た紗理奈は、大笑いした。
馬鹿みたい。

昨日のことが気になり、
優一は、紗理奈の携帯に電話した…
が通じなかった。
何か…気にさわることをしたのだろうか。
明日香と話し過ぎて、あまり紗理奈を話さなかったから…
（…だよな）
連れてこられて、退屈だよな。

いろいろ反省していると、優一の携帯が、

いきなり鳴った。

緊張しながらでると、

淡々とした紗理奈の声が、きこえてきた。

「あたし。彼氏できたから、もう二人で、会えないから」

それだけ言うと、

電話は切れた。

ナチュラル

意を決して、

和美は、アメリカへと活動を移した。

フランスで出会ったバンド仲間も、ついてきてくれた。

啓介のアメリカ留学時のミュージシャン仲間が、暖かく迎えてくれた。

そして、休む暇もなく、

早速ライブの予定が入った。

ニューヨーク。

有名なクラブで歌う。

きらびやかな照明が、アメリカを象徴していた。

真っ赤なドレスで、和美はステージに立つ。

映画の主題歌になったオリジナル曲。

ジャズ、ソウル。

そして、日本の民謡や童謡。

日本独特の音階を、だしたかった。

和美の天性の歌声と、

アメリカ人向けにアレンジしたとはいえ…西洋とは違う音階は、オリジナリティを醸し出した。

毅然としたクールな姿勢も評価され、

彼女は、日本人なのかという声も上がった。

どこでも大盛況だった。

一歩、会場をでると、

激しい中傷もあった。

ジャップ。

黄色いメス猿が、白人や黒人の猿真似をしている等。

コンサートが終わるたびに、ホテルの自分の部屋に戻ると、

和美は倒れるように、気絶するように寝た。

毎回、すべてを出し切っていた。

そして、ついに、グラミー賞当日になった。

「カズミ・コウノ！」

会場が、大拍手で湧き上がる。

ジャズボーカルを、アジアンが取ることなんて…奇跡。

いや道化だ。

アメリカ各地でおこる…有色人種への差別による不満を、和らげる為に、

今年は特例で、和美に与えられたのだ。

アメリカンドリームの体現として。

あなた達でも、夢が実現できると。

和美は、ステージに上がり、

グラミーの象徴を受け取ると、マイクに向かって話し出した。

「この度は、このような名誉ある賞を頂き、心から感謝しています。まずは、私を応援してくれたファンのみなさんに、感謝します。そして、私を支えてくれたバンドのみんな、レコード会社、フランスや日本にいる仲間に、感謝します。」

会場を拍手が包む。

「私を産んでくれた両親に感謝します。天国まで届くことを祈っています」

そこまで言って、和美は言葉を止めた。

そして、

またゆっくりと…話し始めた。

「母親は…この地で、自らの手で、命を絶ちました。それがなぜか…」

和美は、観客…集まっているスター達を、じっと見つめた。

（ここに…あたし達はいない）

和美は、鼓動を押さえながら、毅然と言った。

「彼女が、日本人だからです」

会場が騒めく。

「日本という国にいると、解りにくいですが…世界には、人種による違いがあります。白人、黒人、そして…その他有色人種！」

和美は、まっすぐに会場の人々をみた。

「だけど、この国の色分けなんて、あたしには関係ない！あたしの色は、ナチュラル！両親から生まれた自然の色。あたしの色よ。誰

とも違う…あたしだけの色」

和美は、ドレスの袖をめくり、肌を見せる。

「人は、それぞれ違う。違うから、他人を理解しょうとする。違うから、知りたい。違うから、理解できないじゃない」

和美は、埋めつくす人々を見つめ、

「だから、あたしは、あなた方の言葉で歌う。あなた方を、理解したいから」

和美は息を整え、少し間をあけると、

「最後に、あたしの故郷を、ジャパンなんて…汚い言葉で、呼ばないでほしい」

和美は叫ぶ。

「あたしの故郷は!日本…に・ほ・んというの。ジャパンなんて国は、存在しないわ。馬鹿な日本人は、そう呼ばれても…気にしないみたいだけど」

和美は、手に持っていたグラミーの象徴を台に置いて、

その場を、去ろうとした。

司会の二人が慌てる。

「歌手に、必要なのは…観客と音楽だけ。名誉なんていらない」

決して振り返らず、

和美は、静まり返る会場を後にした。

（歌手に…この場所は似合わない）

生放送で、中継されたこの和美のスピーチは、

世界中で、議論を巻き起こした。

激しい嫌悪感を、抱くものもいたが、

表だっては、言えなかった。

有色人種の小娘が、生意気な。

と思っていても、公共の場でいえば問題になる。

しかし、

この国における差別は、根深い。

特に…

今まで、虐げられてきた者達には。

和美の周囲は、あまり変わらなかった。

よく言ったと、拍手する者もいたが、

周りは、冷ややかだった。

どう対応していいのか、わからないのだ。

偉大な賞を侮辱したと、怒る者もいた。

ライブを行っても、どこか戸惑いを、観客から感じた。

相変わらず満員だが、

白人の数が減っている。

（そろそろ潮時ね）

フランスに戻ろう。

最後のアメリカでのライブを終え、

バンドの仲間と、食事をしていると、

1人の男が、テーブルに割り込んできた。

スーツを着、品が良さそうな男はいきなり、

和美の前に座った。

「ちょっといいですか？お嬢さん」

和美は、ワインの入ったグラスを置いた。

「何か？」

和美の凛とした態度に、

男は苦笑し、

「テレビを、拝見しましたよ。あなたのアルバムも、聴きました。大したものだ。賞を取るのも納得する。しかし」

男が、ニャッと笑う。

危険を感じ、バンド仲間が立とうとしたが、

それを、和美が制した。

男は、さらに笑みを浮かべ、

「日本人にしてはだ。ジャズは、この国のものだ。お前の音楽は、ジャズじゃない！」

一転して睨む男に、和美は微笑みで返した。

「だから言ってます。あたしの音楽は、あたしだと。ジャンルなんて関係ない」

「この国は、自由の国だ。しかし！誰もが、自由になれることはない。お前達…黄色に、自由があると自惚れないことだ」

男は、体を震わせた。

和美は、席を立った。

「あたしの色は、ナチュラル。黄色ではないわ」

男の震えが、強くなる。

「ジャップが…言葉で言っても…わからないようだな」

和美が、背をむけて歩き出すのと、

男が、立ち上がるのは、

同時だった。

バンド仲間が気づき、男に飛びかかったが、

遅かった。

凄まじい銃声が、店内に轟き、

その後、

悲鳴があがった。
後ろから、打たれたのだ。

即死だった。

享年２５歳。
もうすぐ誕生日だった。

真紅の歌姫といわれ、世界を飛び回った歌手は、
母と同じ国で、
命を落とすことになった。

赤い血に染まり、
倒れる和美は、
散った…花びらのようだった。

と、目撃者は後に語った。

しかし、

それは自ら…散ったのではなく、

無残にも、むしりとられたのだ。

赤き宿命とともに、散った花びらは、

もう…

美しく咲くことはない。

記憶の中でしか…。

意志を継ぐ者

和美が、賞を取る少し前。

夕陽の中、

明日香は、歩いていた。

目の前に、大きな建物が広がる。

市民病院。

明日香は、誰もいない長い待合室を抜けると、奥にあるエレベーターに、乗り込んだ。

１２階で降りると、

ある部屋に入った。

「おはよう、明日香ちゃん。毎日、来なくていいのに」

ベッドの上に、

いつもの笑顔の恵子が、迎えてくれた。

だけど、ここはダブルケイではない。冷たい病院だ。

恵子は、笑顔のまま、少し明日香から視線をそらした。

「少し疲れが、たまっただけだから。明後日には、退院できるわ。だから…あんまり心配しないで。早く店に、戻らないといけないし」

明日香は、持ってきた花を花瓶に飾った。

綺麗な赤い花。

「ずっと、休みなく働いてきたんだから…たまには、ゆっくりして下さい」

「ゆっくりしてるわよ。もう音楽を教えなくちゃいけない…」

恵子は、明日香を見、

「泣き虫さんは、いないし」

「もう泣き虫じゃないですよ」

明日香の言葉に、恵子はクスッと笑うと、

「そうね…もう昔の話ね」

恵子は、お茶をいれる明日香を見つめた。

明日香は、お茶を恵子に渡した。

「啓介とは、うまくいってるの？」

「はい」

屈託のない明日香の笑顔。

「よかったわ」

恵子は、お茶をすすり…ほおっと息をついた。

明日香は、なぜか…恵子の姿に陰を感じ、

話を変えた。

「もうすぐ、和美さんの発表ですね」

恵子は、少しため息をついた。

「何もなければいいけど…」

明日香は驚き、恵子を見た。

恵子は、お茶を置いた。

「あの子は、理恵さんに似てるから…」

夕陽が沈みかけ、

最後に、さらに赤く輝く。

恵子の横顔が、赤く染まる。

「音楽を…この国だけでやろうと思わず…あの国を目指す者は…必ず、あることを、思い知らされるの」

恵子は、前を見…虚空を見据え、絞りだすように言った。

「人種の壁よ。今の世の中に、溢れてる音楽は…すべて、黒人や白人がつくったものよ」

窓の向こうの夕陽が、沈んでいく。

「どんなに、理恵さんや…かずちゃんが、素晴らしくても…彼女達は、オリジナルとは思われない」

恵子の向こうに、夜の闇が訪れる。

「言葉の壁より、人種の壁は、とても厚いのよ」

明日香は眉わひそめ、

「和美さんは…賞を取れないと」

恵子は首を横に振り、

「多分取るわ。だけど…快く、思わない人もでてくる」

「あんなに、人気があるのに…」

恵子は、首を横に振り、

「普通の人じゃない。ミュージシャンよ。ミュージシャンは、嫉妬深いの」

「そうですか。あたしの周りは…！？」

恵子が、明日香を真剣な目で、見つめていた。

息を飲む明日香。

「あなたはまだ…自分の足で、歩き出したばかり…それに、啓介がそばにいる。ミュージシャンの目が、啓介だけに向いてるかぎり…大丈夫だわ」

恵子は、明日香の手を取り、

「気をつけて、明日香ちゃん」

明日香は、笑顔を恵子に向けた。

「気をつけます。ママ、ありがとう」

日差しが眩しくなり、

紗理奈は、ベットから抜け出そうとしたけど、

隣で、寝ている男が邪魔だった。

足で、思いっ切りどかす。

裸の男が、ベットから落ちた。

ベットから起き上がると、

紗理奈も裸だった。

セックスはいい…没頭してると、嫌なことが忘れられる。

だけど、今回は空っぽにならなかった。

体が汚れてる気がしたけど…それでいいと、

紗理奈は、Tシャツを着た。

空気を変えようと、おもむろにテレビを付けた。

ニュースが流れる。

和美が殺されたと…。

グラミー賞を取った5日後のことだった。

犯人は、ミュージシャンだった。

最近、某有名バンドを首になっていた。

それにより、

自分は、仕事がなくなったのに、

日本人の和美が、活躍していることが、

許せなかったのだ。

紗理奈は、テレビの画面を見つめ…しばらく動けなくなった。

すると、裸の男は、立ち上がり、

後ろから、紗理奈を抱きしめた。

「へえ〜殺されたんだあ。まあ、別に、俺には関係ないけど。勝手に、死んどけって感じ」

男は、さらに絡みついてくる。

「なあ〜もう一回やろうぜ」

キスしょうとする男を、

紗理奈は振りほどくと、

「出ていけ！」

紗理奈は、裸の男を力ずくで、外に出した。

服を投げつけると、ドアを閉めた。

紗理奈は、茫然自失になり、ベットに倒れ込んだ。

あの日。

煌びやかな照明の中で、歌う和美に憧れ、

せめて、あの場所に立ちたいと、

手を延ばしてきたのに…

もう届かない。

あたしは、どこに向かえばいいの…。

教えて…

ゆう。

明日香はニュースの前に、

啓介の電話で、和美の死を知らされた。

啓介は、仕事から戻ってきており、ダブルケイに帰っていた。

明日香はショックで、しばらく人が行き交う交差点で、立ち止まってしまった。

信号の点滅と、車のクラクションで、目を覚まし、何とか歩くことができた。

恵子の心配をきいていたから、どうにか意識を保てていた。

それでも、意識を強くもたないと、崩れそうだ。

「今日は…今から、バイト入ってるから、マスターが遅いし…すぐには、そっちにはいけないわ」

「明日。俺は、アメリカにいくよ。今…肉親は、俺しかいないから」

啓介の言葉に、交差点を渡り切った瞬間、足を止めた。

「明日？」

「明日だ。だから、母さんの退院をよろしく頼むよ。いきたいんだけど…。母さんが、急いでアメリカに、迎えに行けと…いうから」

「わかったわ。気を付けて」

明日香は動揺から、何度も頷くと、携帯をしまい、店に向かう。

悲しむ暇もなかった。

明日香は、Ｅｖｉｌにいくために、エレベーターに乗った。

「待って下さい」

誰かが、エレベーターをとめて、滑り込んできた。

「あら」

明日香が驚いた。

「紗理奈さん！」

紗理奈も驚いた。

「明日香さん？」

エレベーターが閉じる。

二人っきりの空間となる。

「今日は、お一人…なんですか？」

紗理奈は、視線を外し、

「いつも一人よ」

エレベーターが開いた。

「今日…マスターが来てないんで、準備…まだ何です…」

慌てて、店の鍵をあける明日香。

「いいよ、待ってる」

紗理奈は扉の近くで、壁にもたれた。

しばらくして、

明日香が、店から顔を出した。

「お待たせしました。どうぞ」

紗理奈は、店内に入った。

タバコに火をつけ、

紗理奈は、カウンターに座る。

「明日香さんって、何歳なの？」

二人だけの店内に、タバコの煙が漂う。

「今は、２０歳ですけど、もうすぐ２１になります」

「あたしが、２０歳になったばかりだから…１つ上ね」

明日香は、コースターの上にビールを置いた。

音楽が流れ出した。

エリスレジーナの“イン・ロンドン”

和美にもらったＣＤ。

「今、かかっている曲…和美さんに似てる」

吸う手をとめて、思わず呟いた紗理奈に、

明日香は反応した。

「河野和美さんですよね。あたしも、似てると思いました。歌い方とか、声は違いますけど…雰囲気がそっくり」

「あんた、和美さんを知ってるの？」

明日香は頷き、

「このＣＤも、和美さんから頂きました」

もう遠い昔の話のように、明日香には感じられた。

紗理奈は一気に、

ビールを飲み干すと、

またおかわりを頼んだ。

明日香は、新しいグラスに、ビールを注ぐ。

「ニュースを見て、ショックだった…生きる目標がなくなったみたいな…」

紗理奈は、サーバーから注がれるビールを、じっと見つめた。

そして、いきなり席を立った。

「あんたも、歌手なんだろ！どうしたら、ああいう風になれる！どうしたら、歌手になれる！どうしたら、あのキラキラ輝いたところに、いける！」

紗理奈のぶつけるような激しい問い掛けに、

明日香は静かに、目をつぶり…

考えた。

そして、

おもむろに口を開いた。

「あたしは…和美さんの足元にも及ばないので、わかりませんが…ただ歌をうたいたいなら…方法は、たくさんあります。バンドを組むとか…」

「あたし、バンドは無理！人間関係うざいし」

紗理奈は座ると、きっぱりと言った。

「じゃあ…ギターで、弾き語りとか」

「楽器できない。カラオケしか歌ったことがない」

明日香はまた、考えた。

「やっぱり…ギターと歌がいいですね。紗理奈さんが歌で、ギターはゆうさんで！」

ゆうの名前がでて、紗理奈は驚いた。

「なんで、ゆうなんだ！」

「だめなんですか？」

「……まあ、でも…ちょうどよかった！」

紗理奈は、グラスを置き、

「あんた！ゆうをどう思ってるの！あいつは、あんたに、会いに来てるんだろ」

明日香は目を丸くし、

「来てましたけど、それは…あたしに相談してたから…」

明日香は、ちょっと言いにくそうな顔をする。

「相談！？何を相談してたのよ」

明日香は、紗理奈の顔を見…静かに頷くと、話しだした。

「紗理奈さんのことですよ。歌好きみたいだから…何を、オススメしたらいいのかとか」

今度は、紗理奈が驚いた。

「え？」

「あたしが、音楽にくわしいからって」

紗理奈の頭に、自慢気に説明する優一が浮かんだ。

（あいつの知識じゃなかったのか！）

「いつも何をきかせたらいいのか…悩んでましたよ」

（あいつがあたしの為に）

その時、店の扉が開いた。

「噂をすれば…」

明日香の笑顔。

店に入ってきたのは、

ゆうだった。

一瞬、

足を止めて、入るのを躊躇った。

しかし、

覚悟を決めて、ゆうはカウンターに向かった。

紗理奈と、少し離れて座った。

「どうして、離れるんですか?」

明日香の質問に、狼狽える優一。

すると…いきなり、紗理奈が、席を立った。

そして、

優一の隣に座った。

びっくりする優一。

「明日香さん。ゆうさんにビールを…あたしのおごりで!」

優一はさらに、驚いた。

紗理奈は、優一の方を体を向けた。

そして、素直に頭を下げた。

「この前は、ごめんなさい。なんか…一方的に、切れちゃって…」

「もういいよ」

紗理奈は、こちらを見ようとしない優一の横顔を見つめ、

視線を、前に置いてあるビールに移した。

「あたしが、目標にしてた人が死んじゃって…。どうしたらいいのか、途方にくれてたら…思い出したの…あなたのこと」

視線は、グラスのままだ。

「だから、今日ここに来たの…。あなたに会えるかなと思って…」

「彼氏がいるんだろ」

優一の声は冷たい。

「もういないわ」

「いい加減だな。彼氏と別れたから、俺かよ」

「彼氏じゃない。好きじゃなかったし…」

「誰でも、いいんじゃないか！」

優一が叫んだ。

叫んだ後、

明日香が、いることに気づき、口をつぐんだ。

「そうよ。あたしは、いい加減な女。だけど」

紗理奈の目に、涙が溜まる。

「それを、なおしたいの！ちゃんとしたいのよ！でも…1人じゃどうしたらいいのか…わからないのよ！どうやったら、普通になれるか……わからないのよ！」

紗理奈の言葉から、

しばらく時が止まる。

優一は黙って、ビールを一口飲む。

そして、ゆっくりと顔を、紗理奈に向け、

「わかったよ。また友達から始めよう」

優一は頭をかく。

紗理奈が頷く。

明日香はそっと、ＣＤを変えた。

マイルスディビスのワーキンだ。

ピアノが転がり、マイルスのミュートが限りなく優しい。

「あっ！まるで香月さんのペットの音みたいだ」

優一が思わず、口に出した。

「嬉しいですけど…こんな音、あたしには出せません！先生」

「先生はやめてくれ」

明日香と紗理奈は笑った。

優一は、教育実習を終えてから、なぜか、音楽が恋しくなり…

ギターを練習し始めていた。

あれから3年以上。

「まだ、2曲しか弾けない！？」

紗理奈は思わず、声を荒げた。

「仕方ないだろ。一人で部屋で弾くだけだから」

一曲は、エリッククラプトンのチェンジ・ザ・ワールド。

もう一曲はＵＡの情熱だ。

ＵＡの理由は、
紗理奈が歌ってたから。
「最近じゃない！」
紗理奈はあきれた。
二人は笑い合った。
こうして、
二人は、ユニットを組むことになった。
Ｅｖｉｌを後にし、二人は夜の街に出た。
少し前を歩く優一に、
紗理奈は声をかける。
「どうして、情熱を練習してたの？」
優一は振り返り、
「言っただろ。歌を聴いて、感動したからって」
「どうして…気にかけるの？」

「いっしょに音楽…できるかなと。せめて、ステージの上くらいは、連れて行ってあげようと」

「どうして…あんなに冷たくしたのに」

「さあな」

優一は前を向いた。

「あたしのこと…好きって訳でもあるまいし…」

「どうだろうな」

優一は走り出す。

慌てて、追いかける紗理奈。

「もし、そうだとしたらあ！いろいろやりようがあっただろ」

「でも、今は友達からだ」

優一は笑う。

「ねえ？好きなの？」

二人はじゃれあいながら、第1歩を踏み出した。

踏み出したばかりだ。

二人が帰った後、

明日香はもう一度、エリス・レジーナをかけた。

和美本人のアルバムをかけたら、

仕事には、ならなくなるだろう。

マスターが来たため、

明日香は、終電前に帰ることになった。

電車を乗り継ぎ、家に帰る。

短大を卒業し、実家に戻ってきていた。

家に着くと、荷物が届いていた。

アメリカから。

和美からだ。

日付を見ると、グラミーの前日だ。

中を開けると、

テープと手書きの楽譜と、手紙。

明日香は、手紙を読んだ。

（親愛なる明日香ちゃんへ。書かないといいながら、曲を書いちゃった）

（だから、あなたに、これの曲の詞を、書いてもらいたいの）

（あなたと、初めてのコラボになるわね）

（次のアルバムに、絶対いれるからね）

明日香は、手紙を持ったまま…その場で、泣き崩れた。

日が沈み、

薄暗くなった病室のベットの上で、明かりもつけずに、

恵子はいた。

物思いにふけている…。

不意にドアが開き、廊下から明かりが、病室にこもれる。

「姉さん…」

阿部が入ってくる。

「あら、大樹」

「明かりもつけないで…」

阿部が、明かりをつける。

恵子はフッと笑うと、

「ちょっと、かずちゃんのことを考えてたの…」

「あの子は…結局、幸せになれなかったな」

阿部の言葉に、恵子は首を横に振る。

「すべてが…不幸では、なかったわ。歌手としての…高みは、経験できた。ただ…歌手としても、女としてもこれからだったのに…」

恵子は睫毛を落とした。

阿部は、恵子を見つめた。

「でも、やっぱり不幸ね。殺されたんだから…」

「姉さん…」

しばらく無言が続く。

恵子は、窓の外を見た。

街の中心から、離れた病院は、静かで周りに何もない。

ただ…向こうに見える道路をまっすぐ行けば、ｋｋがある。

「今日、店は？」

「明日香ちゃんが、入ってくれてるよ」

「そう…それなら大丈夫ね」

「ああ…あの子はすごいよ。本人は、気づいてないみたいだけど…。あの子の音を、手に入れようとしている」

「初めて会った時は…何も知らない女の子だったのに…」

昔を思い出す恵子に、

阿部が言った。

「姉さん！」

阿部の口調が強い。

恵子は、阿部を見た。

阿部は体を震わせ、

「退院するって、本当なのか！嘘だろ」

恵子は、阿部から視線を外すと、

「本当よ」

阿部は驚き、声が裏返る。

「退院なんて、できるわけないだろ」

「ここにいたって、同じことよ」

「しかし、ここにいた方がいいに決まっ…」

阿部の言葉を、恵子が遮った。

「あたしは、みんなや音楽に囲まれたいの。こんなところに、ずっといるなんて耐えられないわ」

一度目を瞑った後、

「でも…」

恵子は、阿部に微笑みかけた。

「大丈夫よ。さっき啓介から、電話があったの。一年後、今度は俺達がとるから…それまでは、元気でいろと」

恵子は、笑った。

「無理に、決まってるのにね。二年連続…日本人がとれるはずがないのに…。でも、待たなくちゃいけないわね。母親として」

「姉さん…」

阿部は、泣いていた。

たった一年。

それが、どんなに遠いことか、

阿部は知っていた。

「あたしのことは、大樹と啓介しか知らないから…誰にも言わないように。特に、明日香ちゃんには…。あの子の音は、優しさ。あた

しのことで、曇らせたくないの」

恵子は、阿部に精一杯の笑顔を見せた。

笑顔。

そう笑顔。

できるだけ、

笑顔でいよう。

恵子は、そう誓った。

和美が残したメロディーを、聴きながら、

明日香は、いつのまにか眠ってしまった。

ステージ上に、和美がいた。

見たことがない人が、トランペットを吹いている。

音で分かった。

あの人だ。

（健司さん）

明日香は一人、観客席にいた。

なんて、すごい音なんだろう。

いつのまにか、

ステージで歌っている人が変わった。

細身で、スラッとしたモデルのような女性。

（あれが理恵さん！？）

感動で、泣きそうになる明日香。

気付くと、隣に、

和美がいた。

和美は微笑むと、

明日香の肩を、軽く叩いた。

その瞬間、

明日香の周りを光が、包んだ。

眩しい照明の中、

一人ステージの上に立っている。

手に、トランペットを持って。

ステージの向こうに、三人がいた。

明日香は、ステージを降りようとする。

和美が、手で制した。

そして、

マイクとトランペットを指差し、

微笑んだ。

明日香は、緊張しながらも、トランペットに口づけた。

その姿を見、

嬉しそうに、三人は笑顔になり、

会場から消えていく。

消える前の、

一瞬、

和美が、振り返った。

明日香を、

ステージを見る。

切なく、やるせない表情…を浮かべてた。

でも、

すぐに笑顔になると、

真紅のドレスを翻し、

扉の向こう側に、

消えていった。

夢から覚めた…

明日香の目に、

涙が流れた。

あたしは、あの三人ほど才能はない。

でも、あたしは、やらなくちゃいけない。

あたしの歌と音で。

明日香は、ペンを握り、

歌詞を書き始めた。

それは優しさ。

1人では、音はできない。

あたしを、見守ってくれている人達へ。

そして、

聴いてくれる人達の優しさへ。

あたしにあるのは感謝と、歌えるという喜びだけ。

死んだら、歌えない。

みんなによって、包まれた優しさ。

シンプルな歌詞になった。

それでいいと思った。

一つ一つの言葉に、思いを詰めて、

包み込んだらいい。

言葉で伝わらないことは、

トランペットで伝える。

明日香と和美の合作となる曲は、出来上がった。

ＹＡＳＡＳＨＩＳＡ。

曲名は、決まった。

啓介が、アメリカから戻ってきた。

退院して、いきなり店に入るという恵子を、何とか止めて、

今日は、明日香が、ダブルケイのカウンターに入っていた。

店の準備をしていると突然、啓介が店に入ってきた。

目で明日香を促し、

二人は外に出た。

山道の入口にあるダブルケイから見える街並みは、絶景だった。

日が、沈みかけている。

もうすぐ夕焼けの時間だ。

「和美は、父親の墓にはいることになったよ。」

啓介は、街並みを見つめた。

「母さんは元気そう?」

明日香は、啓介のそばに立ち、頷いた。

「うん。今日は、マンションに帰って、ゆっくりしてる」

「そうか…」

啓介は、店の二階を見た。

子供の頃、

しばらくは、店の上で恵子と二人で生活していた。

啓介の成長とともに、引っ越したのだ。

「明日香…」

啓介は、視線を明日香に戻した。

明日香は、啓介を見つめ、

言葉を待つ。

しばらくの静けさ。

啓介は、言葉を続けた。

「しばらく活動を、アメリカに移そうと思う」

「アメリカ？」

啓介は頷き、

「学生の時、もともとアメリカで活動してたから…地盤はある。信用できる仲間もいる」

「…」

「今がチャンスなんだ。和美の死により、目がアジアンに向いている。俺は、和美の弟だ。今な、ら話題に乗れる」

啓介は手を握りしめ、

「別に、有名になりたいとかではない。和美の無念を晴らしたいんだ。音楽で！今しかない。今なら…短期間で勝負できる！だから！」

啓介は、明日香をみつめる。

「しばらくしたら、お前も、アメリカに来てほしい。ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕは、向こうで、新しいメンバーで組み直す」

啓介は明日香から、少し視線を外した。

明日香は驚き、

「アメリカ…新しいメンバーて…」

啓介は、明日香の言葉を遮った。

「いきなり、日本人が向こうに行ったって…環境に、すぐに順応できない。向こうには、日系の知り合いや、付き合いの長いやつもいる。とにかく！時間がないんだ！」

「今の仲間は、いらないということ！みんな…いっしょにやってきたのに！」

明日香は、啓介に詰め寄った。

「時間がないんだ！」

啓介の叫びに、明日香は、首を横に振った。

「無理よ」

「明日香！」

啓介は、明日香の両肩をつかむ。

明日香は、顔をそらした。

二人は、黙り込む。

しばらくして、

明日香は、啓介を見た。

少し涙ぐんでいる。

「明日香…」

「どうしたの？啓介…。ママが、退院したばかりだよ。いきなり、アメリカなんて…。それに、あたし…まったく知らない人と、すぐにできないよ…」

啓介は手を離すと、明日香から離れた。

どうしたらいいのか分からない…。

二人とも…。

いつのまにか、

夕陽が、山を染め始めていた。

「やれやれ…」

会話が止まっている二人に、

近づく者達がいた。

「明日香ちゃんを、連れ出して…何を話してるのかと思ったら…」

近づいてくるのは、阿部、武田、原田。

ダブルケイのレギュラー。

「啓介。すまんが、話はきいたぜ」

阿部が、啓介の前に立つ。

「俺達じゃ、不満か？」

「おじさん？」

「俺達だったら、明日香ちゃんに合わせられる。誰よりも、彼女のバックで、成長を見てきたのは…俺達だ。いや、啓介。お前だって

そうだろ」

啓介には、阿部の言葉は信じられなかった。

「でも…おじさん達は…絶対、ここから動かないじゃないか」

「それは…俺達がダブルケイのメンバーだからだ」

原田が口を開いた。

明日香は驚いた。

知り合って長いが、原田の声なんて、あまりきいたことがない。

続けて、武田がしゃべる。

初めてきくかもしれない。

「大樹以外…俺と原田、井守、そして、健司と恵子で、ダブルケイだ。健司が去った後も、俺達は同じ仲間だった…井守は、音楽をやめたが…俺達は、恵子がいつでも歌えるように…そばにいたのさ」

井守は、Ｅｖｉｌのマスターだ。

阿部は山を見上げ、

「俺も…兄に対抗する為に、アメリカに留学してたんだぜ。ロサンゼルスだがな」

「おじさんが！」

啓介は、初めて知った。

阿部はゆっくりと、頷いた。

「お前が産まれる前の話さ…。兄貴に勝ちたかったから…俺は、自分を磨く為アメリカに留学した。ニューヨークにしなかったのは、ウェストコースのジャズが…俺に合ってると、感じたからだ」

阿部は、店を見た。

「ある日…行きつけのライブハウスに、顔を出したら…驚いたぜ。ステージに兄貴がいた…安藤理恵の隣に。訳が分からずに、ライブ終了後、楽屋にいくと…兄貴は、俺を見て、ただ一言…」

阿部は、遠くを睨み、

「気楽だなと、言いやがった」

皆、阿部の話をただ聞いている。

夕陽が沈みかけている。

「ステージでは、わからなかったが、近くで見ると…随分痩せていた…。ここで何してる、姉さんは?…ときいたら…また一言だけ」

阿部は唇を噛み締め、

あの時を思い出す。

「捨てたよとな」

武田と原田は、目をつぶっていた。

「最後に…俺達は、すべてを捨てて、ここにいるのに…まだ辿り着かないとな」

夕陽が沈む。

「あいつらは、最後には…自分達の命も捨てたのさ」

阿部は叫んだ。

「だから、俺は何も捨てない！俺は、大切な人の為に、音楽をやるだけだ！捨てないと、音楽ができないなんて、うそだ」

阿部は、涙ぐんでいた。

「観客もファンも大事だ。だけど…本当に大切なのは、自分のそばにいる人だ」

阿部は、涙をぬぐい、

「本当に、大切な誰かがいるから…音楽を知らない人に、きかせられるんだよ」

阿部の叫びは、

どこか悲壮だった。

阿部は、啓介を睨むように、見つめ、

「啓介！俺達を連れていけ！今の俺達なら、どんなやつにも負けないぜ！」

「だけど…店は…」

啓介は、口籠もった。

「一年間、ずっといる訳じゃないだろ。もちろん、ここには帰ってくる」

阿部の言葉の後を、武田が続けた。

「お前らのバンド仲間に、やらしたらいい。どうせ…お前達がいないと、暇だろ。ギャラもでるし」

「そんなことより、啓介。お前の作戦をきかせろ。勝算がなく、お前がそんなことを言いだす訳がない」

阿部は、啓介にすり寄る。

真剣な三人を見て、啓介は覚悟を決めた。

もう、引かないことはわかっていた。

この三人は、啓介の父親のようなものだった。

初めて演奏を聴いたのも、
演奏をしたのも、
彼らとだった。

「１０日後…ニューヨークの主要なライブハウスは、すべて押さえています。デカいところは無理でしたが…1週間、できる限りのライブをこなします。和美の弟として」

「売名行為だな」

武田が呟く。

啓介は頷く。

「音は？売り込む音がない」

「ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕのアルバムがあります」

「悪くなかったが、それだけでは弱いぞ」

「しかし…今、アルバムを録る時間がない」

「ライブは？」

議論が白熱する。

白熱する議論を、きいていた明日香。

胸を、ぎゅっと抱き締めると、

意を決して、明日香は一歩前に出た。

「和美さんから…」

明日香は叫んだ。

「送られたテープがあります！和美さんの演奏が、入ったテープが！」

それは、

残された希望だった。

光に包まれた場所

いつものように
お客の隣に座り、水割りをつくる紗理奈。
作り笑いも様になり、
最近は、精神的にも落ち着いていた。
お客の話をきき、
適切なアドバイスまで、できるようになった
紗理奈の客層は変わり、
もう、体を触させることもなくなった。
ふっと会話の合間、
紗理奈の目が、使われていないステージに向いた。
あの日、和美がいたステージ…。
しばらく見つめてしまう。
「紗理奈ちゃん、どうかしたの?」
お客の声で我に帰り、紗理奈は慌てて笑顔になる。

「すいません」

「ステージなんて見つめて。何かあるの？」

紗理奈は、おわかりをつくりながら、

「何もないです。ただあのスペースが、勿体ないなあと思っただけです」

「使ってないもんなあ」

お客は水割りを飲む。

紗理奈は、いきなり笑顔になった。

作り笑いではなく。

「もし、あたしが歌ったら…田中さんは聴いてくれますか？」

お客は少し驚きながら、

「カラオケ？」

「ちがいますよ。バンドっていうか…ギターと2人で音楽やってるんですよ」

お客はさらに驚き、

「音楽やってるだあ！」

「はい」

満面の笑顔になる。

「聴いてみたいなあ」

紗理奈の心は、踊った。

（そうだ！その手があった）

店長にいうとＯＫだった。

早い時間の、客引きのイベントとして。

次の日。

早速、出勤前に、

紗理奈は、ゆうを呼び出した。

いつものカラオケ店で、

ビールを飲みながら、紗理奈は本をめくり曲を探す。

いつもの様子を、眺めながら、

ゆうは、ため息をついた。

「ステージでやるって…まだ3曲だぜ。できるの…」

紗理奈は、番号を打ち込みながら、

「2曲しか無理みたい」

「2曲か…」

「日本語は、無理みたい。だから、もう決定よ」

カラオケがはじまる。

フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン。

歌い出す紗理奈。

「これとチェンジ・ザ・ワールドか…」

出勤前の為、あまり時間がなかった。

二人は、一時間で店を出た。

「じゃあね」

「仕事がんばって」

ぎこちない別れ。

二人は、好き合っていたが、付き合ってはいなかった。

キスも、手をつないだことさえない。

それでも幸せだった。

紗理奈は、少しこわかったのだ。

付き合うことで、

別れがくるのではないのかと。

今までの男と、ゆうはちがうけど、

付き合って、長く続いたことがない。

ゆうと別れたくないから、

深く付き合わない。

でも…

不安はあった。

「Ｅｖｉｌにいくの？」

紗理奈は、店にいこうとした足を止めた。

「いや、いかないよ」

「明日香ちゃん。最近…店入ってないんでしょ」

「世話になったママの店が、大変らしい」

「明日香ちゃんが、いないから…いかないんだあ」

嫌なことを言ってる。

嫌な女だ。

「ごめん」

紗理奈は、走り出そうとする。

そんな紗理奈の腕を、ゆうがつかんだ。

強い力を引き寄せられ、

抱きしめられ、

そして…、

キスされた。

「言葉にはしてないけど、俺達…付き合ってるだろ」

抱き締められ、紗理奈は頷く。

「だから、そんなこというなよ」

「うん」

紗理奈は深く頷き、

「ごめんなさい」

ゆうを、強く抱き締めた。

ゆうは家に帰ると、夜遅くまでギターを触っていた。

あまりうるさくならないように、静かにコードだけをなぞっていた。

少し疲れて、ゆうはベットに横になった。

寝てしまったらしい。

目が覚めると、深夜の2時半だった。

メールが来た。

携帯を取り、メールを見ると、紗理奈からだった。

紗理奈からのメール。

そこには、

この街に来るまでの出来事が、書いてあった。

母親とのこと。

家出。

しばらくメールを見つめていたゆうは、紗理奈に電話した。

紗理奈は泣いていた。

しばらく泣き声を黙って、ゆうは聞いていた。

「そんな女なんだ」

紗理奈の言葉。

ゆうは、ゆっくりと話し始めた。

「今…ギターの練習してた…まだ下手だけど、もっとうまくなって、ライブハウスとかでやりたい…」

ゆうは、言葉を噛み締め、

「お互い、もっとうまくなったら…招待しょう。お母さんを」

しばらくの間。

「うん」

紗理奈が、電話の向こうで頷いた。

「紗理奈…好きだよ」

ゆうは言った。

「ちゃんと、言ったことなかったな…紗理奈という女が好きだ」

「ゆう…あたしも好きだよ」

「よかった」

「ゆう…あたし…守本幸子っていうの…本当は」

「だから…二人のときは、幸子って呼んでほしい。あたしの名前だから」

「わかった…幸子」

「ライブだね。もうすぐしたら」

「うん。最初の一歩だ」

「うまくなろうね」

「早くうまくなろう」

「おやすみ。ゆう」

「おやすみ。幸子」

何日か過ぎ、ライブ当日となった。

女の子が出勤し、着替える前に、店に入り、

ゆうは、ギターのチューニングを合わせていた。

幸子は、憧れの赤を基調にしたドレスを着ていた。

まだ…明かりのつかないステージの上。

心が踊る。

開店前の朝礼が、始まる。

幸子も参加する。

緊張してきた。

朝礼が終わる。

店が始まる。

それは、幸子とゆうの始まりだった。

開店とともに、何人か飛び込んでくる。

幸子の知ってるお客が、次々と入ってくる。

いっぱいには、ならなかったが、3分の2は埋まってきた。

開店から三十分。

BGMが止まり、アナウンスが流れる。

「NO．21紗理奈におけるライブが始まります。短い時間ですが、お楽しみ下さい」

ここでは、あくまでも幸子がメインだった。

ゆうの名前は呼ばれない。

幸子がステージに上げる。

照明がつき、ライトが幸子を照らす。

拍手が起こる。

まばらだが、気にしない。

幸子は興奮と、嬉しさでいっぱいだった。

あたしが憧れた場所。

光が包むところに、

今立っているから。

ゆうのギターが、イントロを奏で、

エリック・クラプトンのチェンジ・ザ・ワールドが始める。

幸子は、マイクを握り締めた。

静かに、

マイクを口元に近づけ、歌い出す。

ハスキーな歌声が、

店内に響き渡った。

一曲目が終わる。

ギターも歌も、完コピーに近いけど、

幸子の独特の声が、オリジナルを感じさせた。

予想外のうまさに驚いたのか…先程と、打って変わって、拍手が激しい。

幸子は、頭を下げた。

もともと口下手な幸子は…どう対応していいか、わからない。

紗理奈ではなく、素の幸子にもどっていた。

屈託のない笑顔を浮かべる。

ちらっとゆうを見ると、

ゆうも微笑んでいる。

額に汗を、いっぱいかきながら。

2曲目が始まる。

フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーンだ。

これは、アレンジを少し変え、
オリジナルにあったボサノヴァ感を強調させた。
幸子の声は、伸びやかだ。
どこまでも飛んでいきそうだ。
緊張していたゆうも、目をつぶり、
幸子だけを感じていると、リラックスできた。
（俺は、こいつを支えていきたい）
ギターを弾きながら、
ただ幸子のことだけを、思っていた。
コードや演奏に捕らわれずに。
ずっといっしょにいたいと、願いながら。

ダブルケイ

Ｌｅｔ　Ｍｅ　Ｌｏｖｅ　Ｙｏｕ。

何年かぶりに、このアルバムを耳にした。

一人、マンションにいると退屈だ。

ダブルケイが、家みたいなものだから。

啓介も、ほとんど帰ってこないし。

恵子は一人…ワインをあけて、グラスを傾けていた。

理恵の歌声を聴きながら…。

昔、持っていたアルバムはすべて、捨ててしまった。

健司が去った日から、しばらくしてから。

綺麗な女だった。

美貌とは、あの女の為にあると思った。

歌も最高だった…。

だから、

仕方がないと思っていた。

でも

アルバムを聴いたら、

歌手であることさえ…否定されてるような気がして、

歌も歌えなくなった。

店を開けてても、音をかける気がせず、無音で営業していた…。

ある日。

原田が来て、勝手にステージに上がると、

何もいわずいきなり、ピアノを弾き出した。

営業終了まで、弾き続け、お客がいなくなると、

飲んでもないのに、

カウンターにお金を置いて、無言で帰る。

それを、何日か繰り返してると、

今度は、武田がやって来て、

ドラムをセットし、原田といっしょに演奏しだした。

二人は、営業が終わると、

お金を置いて帰る。

アメリカから戻ってきた阿部が、

扉を開けた。

ダブルケイに響く

武田と原田の音に驚き、

しばらく…店内をポカンと眺めた後、

慌てて、外に出る。

車に、積んであったベースをつかむと、

店内にもどり、

ステージに上がり、チューニングをやりながら、演奏に参加する。

そして、阿部もまた演奏が終わると、お金を払った。

阿部は、少し恵子の顔を伺いながら…。

そんなことを
何ヶ月も続けた。

半年くらいたったある日。

営業が終わり、

三人がいつものように、お金を払おうとしたとき、

三人は、恵子から封筒を渡された。

中には、三人が今まで払ったお金…プラス、

ギャラが入っていた。

恵子は呆れながら、

「ギャラ払うからには。ちゃんとした曲を、やってもらうからね」

その日から、彼らはずっと店にいた。

才能があり、ｋｋがなくなっても、どこでも演奏できたはずなのに。

再びダブルケイに、音楽が戻った。

それから、

啓介を引き取る…少し前…。

理恵、健司の遺品の中から、恵子宛ての手紙を受け取った。

それは、理恵が出さなかった手紙。

生まれてくる子供のことと、日本にいる和美のことだった。

（なぜ、あたし宛てに？）

それから、もう何年たったのだろうか。

恵子は、和美の為の曲…未来を聴きたくなり、

久しぶりに、理恵のＣＤを購入した。

聴いた瞬間、

恵子は理解した。

理恵という女を。

「理恵さんに乾杯」

恵子は、グラスを天に掲げた後、ワインを飲んだ。

あれから２０年以上。

マンションに流れる…歌声を聴きながら…。

このアルバムには、

歌手安藤理恵ではなく、

母親である安藤理恵がいた。

何もしてやれない母親。

（あたしは、何かしてあげれたかしら？）

理恵のように、曲を残す力は、もうない。

あの子達は、あたしをこえている。

（母親として…何か残せたかしら）

恵子は、テーブルの上に置いたＣＤのジャケットを見つめ、

（あたしから、すべてを奪ったのはあなた。でも…）

恵子は、グラスを見つめ、

（今のすべてを与えてくれたのも、あなた…）

今は、誰も恨んでいない。

（あたしより、あの子たちの幸せを…そう思えるあたしは幸せ）

恵子は、グラスを傾けた。

「幸せなあたしに乾杯」

例え…

終わりが近づいていても。

包み込む優しさ

和美のピアノに合わせて、
演奏する。

まずは、原田と阿部を録音し、
次に、明日香の歌と啓介のサックスをいれる。
何度も、やり直す訳にいかない。
ワンテイクで終わらす。
その覚悟で録音した。

その後、和美と明日香だけのトラックも録音する。
できたのは2トラックだ。

これを、シングルとしてリリースする。
啓介は、レコード会社に電話した。
発売を急いでほしいと。
電話が終わった後、

明日香は、もうワンテイク録音したいと申し出た。

今回は、アメリカでもリリースする為、シンプルな英語の歌詞にした。

でも、明日香が最初に書いたのは、日本語だった。

日本語で歌いたいと。

時間はなかったが、

明日香の決意の固さに、気づいた啓介は頷いた。

勿論ワンテイクだ。

明日香は、録音ルームに1人入った。

トランペットを持って。

ストレート・ミュートをつけて、和美の奏でるイントロに合わせる。

まっすぐで、何のテクニックも使わない素直な歌い方で、明日香は言葉を紡ぐ。

優しさの言葉を。

言葉を伝えたいから、1つ1つ丁寧に歌う。

抑揚がないと、誰かに言われた。

感情の高鳴りは、トランペットで表現したらいい。

クールな歌声に、少しホットなトランペット。

阿部が、感嘆の声を上げた。

「これが…明日香ちゃん…か？…素晴らしい」

啓介は、黙り込んでいた。

明日香が、録音を終え、

ブースから出てくると、

「いつの間に、うまくなった…最初から、やり直したくなった。畜生！」

と言うと、明日香を抱きしめた。

みんながいるから、恥ずかしい。

「時間がないから、仕方がない。ライブの時、アレンジを変えるぞ」

３曲入りのシングルは、出来上がった。

タイトルは、ＹＡＳＨＩＳＡになった。

日本語でシンプルに。

このシングルを持って、啓介は旅立った。

啓介だけでなく、阿部達もいっしょに。

明日香だけ、遅れていくことになった。

準備があったのだ。

明日香は、しばらく暇になるメンバーを、タブルケイに呼び、音合わせをさせた。

店は恵子と、いつも手伝ってくれる亜希子が来ていた。

最近まで知らなかったが…亜希子は、恵子の妹だった。

亜希子がいるから、阿部はアメリカにいくことができた。

バンド仲間に、説明していると、

勢いよく扉が開き、

懐かしい顔が、飛び込んできた。

「明日香！」

飛び込んできた人物に、

明日香と恵子は驚いた。

「里美！」

今や一端のドラマーになり、

明日香脱退後、

女の子だけのバンド…ペパーミントのリーダーとして、活躍しているはずの…里美。

「どうして！あたしに、声かけないのよ」

里美は、明日香に詰め寄った。

「ミュージシャンが、必要なら～最初に声をかけるのは、あ☆た★し☆だろ」

申し訳ないけど、

里美の顔は浮かばなかった。

大体。

「大体！里美の活動場所は、ここじゃなくて、大学の…」

「シャラップ！」

里美は、明日香の言葉を遮ったが、
遮り方が、イマイチどころではない。
「あたしの活動範囲は、無限よ」
（あたしの…？）
明日香は、眉をひそめた。
1人称がおかしい。
「つまり、バンドのメンバーがやめたと」
明日香の言葉に、
里美は、明日香に抱きついた。
「おお友よ。それ以上は、いうべきではない。例え…真実であったとしても」
（何の小芝居よ）
明日香は、里美を突き放した。
「何よ！その反応！ひどいじゃない。傷心のあたしを」
「うざい」

明日香は、里美にはきつかった。

「ママあ」

泣きつく対象を、恵子に変えた。

恵子は、肩をすくめた。

「仕方ないがないわね」

里美は、恵子にすり寄る。

「メンバーとケンカしちゃって…行くとこがないんです。しばらく、ここに置いてください」

明日香は、里美を恵子から引き離す。

「ママ。役立たずは置いたら、だめです」

「役立たずとは、失礼な！親友に向かって！」

「ドラマーだけいて、どうするのよ！」

「あっ！バンドをやってる人の中で、どれだけドラマーが、貴重なのか知ってるの！」

本当に仕方なく、

里美は、ダブルケイでアルバイトすることになった。

明日香は呆れながらも、
里美が入ったことで、店が明るくなったことは喜んでいた。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕ。

慣れない場所ながらも、
さすが、啓介が組んだメンバーだ。
そつなく演奏をこなしていた。

明日香は、お客さんのリクエストで、ステージに上がることはあったが、
大体は注文をとったり、ホールの仕事に追われていた。

恵子がドリンクとカウンターを、亜希子が厨房を、
里美は、洗い物をしていた。

あっという間に、営業が終わる。

電車の時間がある為、
亜希子と里美は、早めに店を出た。

明日香は、電車で帰ったり、阿部に車で、送ってもらったりしていた。

バンドメンバーを見送ると、もう時間がなかった。

恵子は、帰っていいと言ってくれたけど、まだ片付けが終わってない。

タクシーで帰ろうと覚悟した時、

恵子が言った。

「ここに泊まろか？」

恵子も、阿部に送ってもらっていた。

車はあったが、

今、運転するのは危なかった。

お客さんに飲まされたのもあるが、体によくなかった。

もともと住んでいたし、たまに疲れた時は、泊まっていた。

店ができた時、二階は…恵子と健司の新居だった。

明日香はコクッと頷くと、素直に泊まることにした。

片付けが終わり、

明日香はステージを眺めた。

誰もいないステージ。

明日香が、歌手として、トランペッターとしても、

初めて立ったのは、この場所だった。

「明日香ちゃん。上いこうか」

恵子が、カウンターから出てきた。

明日香はじっと、ステージを見つめている。

「明日香ちゃん?」

明日香は、振り返った。

恵子を見つめ、

「ママ…歌手ってなんだろ?歌うって、どういうことなんだろ」

明日香の言葉は続く。

「あたし…ママみたいに、歌いたかった…。でも、無理だったわ。あたしはあたし…あたしにしかなれなかった…。せめて、ママと健

司さんのような感じを、あたしなりに表現したかった…でも…」

恵子は静かに、話を聞いている。

「和美さんに出会って、歌うことの厳しさを知った。理恵さんからは、恐ろしさとやるせなさ…才能や、それ以上を求めていく貪欲さ…あたしにはできないこと…」

明日香は、ぎゅっと手を握り締めた。

「あたしには…何かを捨てることも、何かを背負って歌うことも…できない。ただ、歌うことしかできないの！」

恵子は、明日香に近づき、

明日香の頭を抱きしめた。

「何かを捨てることも、何かを背負うことも…する必要はないのよ」

恵子は、明日香の顔を見つめた。

「みんなが捨てたり、背負ったりするのは…ただ歌うということが、できないだけなの」

恵子は、少し遠くを見つめた後、

「ただ歌うこと…それが、どれだけむずかしいことか…」

恵子は、明日香に微笑む。

「明日香ちゃんは今…あたしの為に、ここにいてくれる。あたしの体調が、悪いから。かずちゃんや啓介の為に、アメリカにいこうとしてる…そんなしがらみを、あなたは背負っているわ」

「あたしは、ママに教えてもらったの！トランペットも、歌も！それなのに、あたしは何も…お返しをしていないわ」

恵子は首を横に振り、

「もう十分返してもらった…。あなたに、トランペットを押し付けたのは、あたし。あなたは、立派になったわ。もう…教えることもない。1人の歌手の誕生から、成長を見てこれただけでも…幸せよ」

「ママ」

明日香は泣いていた。

「泣き虫なのは、変わらないわね」

恵子は、もう一度明日香を抱きしめ、

「どんなことがあっても…あたしはただ、歌ってるだけと言えるあなたは、本当の歌手よ」

恵子は、幸せだった。

「捨てる必要もない…背負う重さも、苦痛に感じない…明日香ちゃんの優しさは、とても大きいのね」

「優しくなんてないです…ママの方がずっと優しい…」

明日香のすべてが、
恵子には愛しい。

「見せつけてやりなさい。何かを捨てたり、背負わなければ、歌えないという奴らに！日本人は、歌えないという者たちに、あなたのまっすぐで…素直な優しさを」

恵子の言葉。

それは明日香の中で、
永遠に大切な言葉となる。

あの国

せせら笑うかのような沈黙の中、

健司は、一人部屋にいた。

叩き壊したトランペットに、亡くした歌声…。

もう健司に、音楽への意欲は残っていない。

結局、何も残せなかった。

天才だった。

特別だったあいつが、なぜ…死ななければならない。

この国に、日本人としての居場所なんてない。

それは音楽にも。

俺達は、本物だったはずだ。

だが、本物だからだめなんだ。

日本人は、この国の顔色ばかりを伺い、すり寄ってきた。

だから、他の民族のように強いコミュニティーがない。

あるのは、

自国内…

島国の中だけだ。

別に、他の日本人にすがろうとは思っていない。

俺は外人なんだ。

この多民族国家の中。

音楽という世界でも。

島国の中で、日本人だけ相手に、じゃれ合っていればよかったのか。

できるやつだとしても。

天才だったとしても。

日本人は、日本国以外では外人だ。

もう日本にも戻れない。

捨てたから。

啓介は、サミーに預けた。

唯一信頼できるアメリカ人。

もう…トランペットも吹けない。

終わりにしょう。

ただ…からっぽになっただけだ。

すべて捨てて、

新しく手に入れようとしたものが…手に入らず、

手に入らず…

からっぽに…

からっぽになっただけだ…。

終わりもないのかもしれない。

空になった…

ターキーのボトルを眺めながら、

健司はゆっくりと、アパートの窓へと歩き出した。

ここは5階だ。

からっぽの俺の

今の中身は一体…

何だ……。

啓介のサックスが、ライブハウスの空間を切り裂く。

ずっしりにしたリズムセクションの安定感も、啓介には頼もしかった。

日本人だけでやりたい。

という願望はあった。

黒人と組むと、周りからブーイングがあった。

なぜ俺を使わず、日本人を使うのかと。

お前はできるやつだが…

雇えないと、断られることが多かった。

何とか、ミュージシャン間に知られ、

よくゲストには呼ばれるようになったが、

自分のバンドは、持てなかった。

それが、アメリカを去った理由だった。

今は、阿部達がいる。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕのメンバーとも、いずれは、この国でやりたい。

ライブが終わると、どこでもスタンディングオペレーションになる。

狭い業界だ。知ってる顔も多いが、

周りから、グレイトという声が上がった。

ライブハウスをでると、すぐに次のライブハウスへ移動した。

とにかくライブだ。

今は、ライブしかない。

ＹＡＳＡＳＨＩＳＡのシングルも、もうすぐ出来上がる。

先に三百枚くらいサンプル盤はプレスし、各ラジオ局に散布した。

バンド名はやはり、ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕ。

移動中のタクシーから、ＹＡＳＡＳＨＩＳＡが流れてきた。

世界中で一番忙しく、

一番早く流れる情報と、時間の街。

そこの谷間を走るタクシーの、

閉鎖された空間に流れるＹａｓａｓｈｉｓａ。

あまりにも場違いなシンプルな音。

しかし、タクシーの運転手が言った。

「こういう曲っていいですね」

啓介はただ、

窓から流れる街並みを眺めていた。

初めての海外だった。

日常会話は、何とかできる。

短大の時、

ペパーミントてして活動してた街は、

ジャズの街といわれ、外国人がたくさんいた。

日本語が、しゃべれない人もいたから、

片言の英語で、コミュニケーションをとっていたからだ。

空港まで見送りに、里美が来てくれた。

しばらく海外生活だ。

明日香は、ロビーで里美と抱き合うと、

元気よく、手を振って旅立つ。

「いってきます」

「いってらっしゃい」

できるだけ、荷物は少なく。

アメリカへ。

少なくても、一年近くはアメリカにいる。
でも、明日香は絶対に、日本に帰ってくる。
絶対に帰ってくる。
狭いエコノミーの席で、明日香は離れていく地面を見つめながら、
心に誓った。

ニューヨーク。

初めての海外。

行き交う人々の多さとビルの多さに、

明日香は、感嘆した。

圧倒されるよりも、空気感が、日本と違った。

まるで、空気が、肌を突き刺すような感覚。

（国が…違う）

明日香は、改めて、外国ということを意識した。

時間どおりに、空港に迎えに来た啓介とともに、タクシーに乗り込んだ。

明日香には、この街が好きになれそうになかった。

タクシーがいきなり、あるビルの前に停まった。

青く…小綺麗とはいえないビルは、周りから少し浮いていた。

タクシーを降りると、啓介に促され、ビルに入る。

長い階段を上がると、そこは、スタジオだった。

灰色のロビーの向こうに、数多く並ぶ扉から、漏れてくる音は、明らかにリズムを刻んでいた。

少し驚く明日香を、迎えたのは、阿部達だった。

緊張気味だった明日香は、知ってる顔を見て安心した。

タブルケイにいるみたいだ。

でも、

ロビーにいるスタッフはみんな、外人。

（あっ、あたしが外人か）

明日香の顔つきが、真剣になる。

空気が告げていた。ここにいたいなら、お前の存在を示せと。

明日香は覚悟した。時間をかけて、コミュニケーションを取っる暇はない。

「どうしたらいいの？」

明日香の真剣さに、啓介は微笑むと、

「アルバムをつくる。１日でだ」

「今？」

「いや、今夜ライブハウスで録音する」

武田が、指で軽くリズムを刻む。

「それまでここで、リハするぞ」

啓介が、アルトサックスを掴む。

明日香は着替えが入った鞄を置き、もう一つの荷物…

大切な楽器ケースを開けた。

十七歳の頃から、明日香とともにあるトランペット。

昔、アメリカに渡った健司がダブルケイに置いていったトランペット…。

今は、どこにいくにも、

明日香といっしょだった。

（あなたも、アメリカは初めてね）

スタジオに飛び込むと、明日香は、トランペットのマウスに口づけをした。

トランペットの歌が始まる。

ブースにいるエンジニアやスタッフ達は、

最初は、タバコを吹かしたり、話したり、リラックスしていたが…

一応、耳をすましていた。

聞いていない振りをしながら。

そして、明日香の音に合わせ…バックの音が混ざり合った瞬間、

スタッフの顔つきが変わった。

おもむろにタバコを消し、

真剣な表情で、スタジオ内に顔を向け

明日香のトランペットのメロディーに、鼻歌で合わす者も出だした。

さらに、啓介のサックスが、絡みつく。

エンジニアが、感嘆のため息をつく。

明日香は、啓介をちらっと見る。

軽くトランペットを、シェイクさせる。

原田が、それに反応し、

弾き出したメロディーは、

和美のメロディー。

明日香は、ミュートをトランペットにはめ、音を奏で、

やがて歌い出す。

ＹＡＳＡＳＨＩＳＡだ。

知っているのか…スタッフから、歓声が上がる。

明日香は、心を込めて歌う。

人が、人に対する思いやり、優しさは変わらないはず。

母親が子供に対する、家族に対する…

愛する人に対する思いは…

人種も国もこえて。

人は、絶対に一人では生きれないし、

みんな誰かに支えられて、成長してきた。

明日香のまっすぐな歌声に、啓介のサックスが寄り添う。

啓介のサックスには、明日香を支え、

包み込む愛情が、溢れていた。

二人の音が今、アメリカに響き始めた。

スタジオをでると、

横合いから、明日香の肩を、叩く人がいた。

体格のよい、黒人のお爺さんだ。

白い髭が、とても似合っていた。

「お嬢さんは…自分がやっている音楽を、何だと思ってる?」

お爺さんは、明日香の目を覗き込み、

「ソウルかい?それとも……ジャズかい?」

唐突な質問にも、明日香は微笑み、お爺さんの目をまっすぐ見据え、

「あたしの音楽は、ジャズともソウルとも、いえません。そんな…ジャズといわれるほどよくないし、まだまだです。だから…」

明日香は少し悩み、

「…あたしの音楽は、まだまだの音楽」

明日香の答えに、お爺さんは驚き、

やがて大笑いした。

「まだまだの音楽!そんな答え、はじめてだ!大体、若いやつはジャズだとか、ロックとかいうもんなんだがな。後は、今風の言葉を並べやがる」

お爺さんは感心したように、頷き、

「特に…俺が、知ってる日本人ってやつの多くは、ジャズと答えても、ジャズ風の演奏しかできないやつばかりだった。お前以外はな」

お爺さんは、啓介を見た。

啓介は肩をすくめた。

「さすがは、啓介の彼女だ。俺は、ジャズとかソウルとか…言葉に、捕らわれてるミュージシャンが、大嫌いだ。俺らの頃は、そんな言葉なんてなかった。ただ俺の音楽。ヒップなな」

啓介は、明日香にお爺さんを紹介した。

「彼はサミー。エンジニアだ。もしかしたら…黒人で初めて、エンジニアになったかもしれない。もともとミュージシャンで、ビーバップ全盛期を、知ってる生きた化石だ」

「化石とは酷いなあ。どこかの博物館に飾ってもらおうか」

「博物館はここだろ?」

啓介は、このスタジオを指差した。

「啓介! いきなり、押しかけてきたと思ったら…スタジオをアパートを貸せだぜ」

「ダイアナは、快く貸してくれたぜ」

サミーは頭を抱え、

「この糞ガキは、うちの奥さんにうまく、取り入りやがる」

「この国で、やっていく為に、1番大切なのは…女に気にいられることだっていったのは、サミーだぜ」

サミーは明日香に近づき、耳打ちする。

「気をつけることだ。とんだ女たらしだぞ…あいつは」

サミーの忠告に、笑顔でこたえる明日香。

「そうなんだあ！気をつけます」

明日香の満面の笑顔に、啓介は慌てる。

「冗談に決まってるだろ。アメリカンジョークだ」

啓介の様子を見て、サミーは阿部にきく。

「啓介は、尻にしかれてるのか？」

阿部は、ニヤニヤ笑いながら、頷く。

「あの啓介がな…。昔は、どんないい女に、口説かれても、見向きもせずに…サックスのことしか考えてなかったやつが…あんなお嬢ちゃんに」

意外そうなサミーに、阿部がきく。

「なあ、サミー。あんなの目からみて、彼女はどうだい？」

サミーの顔が、エンジニアであり、プロデューサーでもあるプロの顔に変わる。

「歌は、申し分ない。自分の音も持っている。ただし、まだまだの音という…日本人特有の謙虚さが、この国で通用しない」

サミーの忠告をきき、阿部は安堵した。

「あの子のさっきの言葉は、謙虚じゃない。あの子の音楽のハードルが、異常に高いだけさ」

阿部は、タバコに火をつけた。

「あの子には、マイルスディビスが基本のレベルなんだよ」

「帝王がか？」

阿部は頷く。

「だから、あの子のまだまだは、謙虚じゃないのさ」

阿部は、タバコを吹かす。

その癖、俺や周りの演奏にすぐに感動する。

自分に厳しく、周りに甘いではなく…

自分に厳しく、周りのすべてを受け入れる。

（あの子はすごい子かもな）

阿部は、タバコを灰皿にねじ込むと、

もう一度スタジオに入った。

原田も武田も続く。

彼らには分かっていた。

啓介はもちろん、明日香も自分達をこえている。

演奏が上手いというレベルではなく、音楽に愛されている…

ほんの少しのミュージシャンであることを。

愛されていない者達は、せめて彼らの…少しでも力になることだけだ。

三人はただ…啓介と明日香の音を、

さらに際立てる演奏に、徹することを誓った。

かつて、恵子の為にしたように。

リハーサルをすませ、

そのまま、体があたたまった状態で、近くのライブハウスに移動す

る。

サミーも、ライブを録音するために同行する。

そこの店自体は、ダブルケイより少しだけ、広かった。

入っているお客の多さは、ダブルケイの倍はいる。

ぎゅうぎゅう詰めになりながらも、騒いでいた。

しかも、ほとんどが黒人だ。

サミーが、明日香に耳打ちする。

「ここはまだ、上品な方だ」

ジャズという骨董品を、

嬉しがる若い黒人はいない。

耳がこえた…ある程度、年配の人ばかりだ。

狭いステージでは、ピアノトリオが演奏していた。

しかし、誰もステージ上には見向きもせず、おしゃべりに夢中だ。

「ヒップな演奏なら聴く。よくなければ、聴かない…。ただそれだけだ」

サミーの言葉に、明日香は息を飲む。

「次いくぞ」

啓介の言葉に、一同に緊張が走る。

ステージで、ピアノトリオの演奏が終わる。

拍手もない。

ステージを、見ることさえしない。

金を払って…飲んでいるのだ。つまらない音楽に、拍手をする義務はない。

金を返せと言われないだけ、ましな方だ。

観客をかき分け、明日香達はステージに向かう。

珍しい日本人の珍客に、ちらっと見、鼻で笑う客もいた。

一発録り。

失敗は、許されない。

明日香は、大きく深呼吸すると、

トランペットを握り締め、ステージに上がる。

足をしっかりと、ステージに固定し、
ペットの先を客席に向け、オープンで吹く。
まるで、吹き間違ったようなフレーズに、観客がステージを見た瞬間、
明日香は、静かにブルースを奏でる。
爆音から、静かなブルースへ。
観客の反応に合わせて、
啓介のサックスが、店内に轟いた。

阿部は、舌をまいていた。
（いきなりオリジナルか）
それも、ステージで作曲していく。
啓介は、曲順を決めなかった。
ただ、ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕの曲をやると。
いきなり知らない曲。
そりぁそうだ。

今、作曲している。

それも啓介ではなく、

明日香だ。

初めての外国。

まったくちがう観客の前で、ライブで曲をつくるだと。

阿部達は、明日香のトランペットの音に、全神経を集中させる。

明日香は、天性のメロディメイカーだ。

それもどこか日本ぽい。

それに、懐かしい。

心をかきむしるような…切なさがある。

それは、何かをカバーしてるとか、切なく吹いてるではない。

子供の無邪気さ。

無邪気な子供に戻れない切なさ。

無垢な音。

（チッ）

阿部は、舌打ちした。

明日香の邪魔をしないように、弾くだけで精一杯だ。

気が付くと、原田はピアノを弾くのを止めていた。

弾いたら、邪魔だと感じたのだ。

明日香の展開に、難なく合わせていく啓介にも、驚いた。

武田は、リズムキープに徹している。

もうだめだと、阿部が思った時、

明日香は、ストレートミュートを付け、印象的なイントロを奏でる。

間一髪を入れずに、原田がピアノを弾く。

ｙａｓａｓｈｉｓａだ。

知っている曲に変わり、

阿部はほっとした。

観客は、息を飲んだ…。ため息すら、飲み込んだ。

今、この瞬間、

明日香は、トランペッターとして、
羽ばたいていく。
ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕの
アメリカでの活動が、始まったのだ。

「ママ！買ってきたよ」

里美は、ダブルケイの扉を開けると、恵子のもとへ走り寄った。

手には、ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕのＹＡＳＡＳＨＩＳＡのシングルを持っていた。

街にでて、大型の外資系ＣＤ店に買いにいったのだ。

まだ、日本盤は出ていなかった。

里美は、２枚買ってきており、１枚を恵子にプレゼントした。

「お金払うわよ。里美ちゃん」

里美は、大袈裟に首を横に振り、

「いいよ、ママ。無理矢理押しかけて、雇ってもらってることだし」

頑として、お金を受け取らない里美に負けて、

恵子は有り難く、頂くことにした。

早速ＣＤをかけた。

恵子は、涙した。

里美達には、見られないようにしたが…。

流れる音には、歌手明日香がいた。

もう…恵子を超えていた。

（若い頃なら、嫉妬したかしら？）

恵子は、心の中で、首を横に振った。

（いえ…しなかったわ）

そんなレベルの話じゃない。

誰もが聴いて、癒される音。

誰もが、日常にきいてる音。

風の囁き、鳥達の囀り、小川のせせらぎ、

心臓の鼓動。

（そうなのね…）

恵子は、瞳に感動の涙が溢れた。

（あなたが、手に入れたのは…自然の音）

誰もが、普通に聴いていて、

意識してない音。

雑音や人工の音でも、

楽器の音でもない。

（あなたの声は…）

自然に、明日香の言葉が耳にはいり、

全身に染み渡る。

何の違和感も

嫌悪感も感じさせないで。

ライブで、一発録りされた音源は、大したミックスダウンもせず、

そのままの形で、リリースされた。

人々の感嘆、ため息…歓喜の叫び声。

すべてが、丸ごと入った…記録をこえた作品だった。

CDが、プレスされるまでの間、

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕは、徹底的にライブを行った。

最初は、悲劇の歌姫…河野和美の弟という興味によって、観客は集まってきた。

そして、ライブを見た観客は…

啓介のテクニックと、エモーショナルな音に驚き、

明日香の切ないトランペットよりも、

彼女の歌声の虜になった。

人々は、口々にこう言った。

彼女より、うまい歌手はたくさんいる。すごいテクニックを持った歌手も。

だけど…なぜか、もう一度聴きたい…聴きたくなるんだ。

ついに、アルバムはリリースされた。

シングルは、ラジオでかかりまくってことで、好調だった。

アルバムは、ライブであったから、最初は売れなかったが…

じわじわと、少しずつ地道なライブ活動によって、上がってきた。

リリースから半年…。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕは、最大のチャンスを得る。

テレビ演奏だ。

それは、ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕと、

ジャズ界の大御所…マリーナ・ヘインズとの共演だった。

マリーナ・ヘインズ。

無冠の女王といわれ、数多くの名盤を生み出しながらも、

決して、メジャーレーベルと契約を結ばなかった。

ミュージシャン・オブ・ミュージシャン。

シンガー・オブ・シンガー。

彼女は今年、引退を表明していた。

ライブが終わり、

スタジオの近くのｂａｒで、明日香達は一息ついていた。

明日香は、カウンターに座り、ジントニックを頼む。

そう言えば、

お酒をゆっくり飲むのは、この国に来て初めてだ。

渡米して、半年。

ライブばかりだった…。

明日香は、ジントニックを1口飲んだ。

（おいしい！）

と思える。

やっと…心に少し余裕が、できたかもしれない。

恵子にはほぼ毎日、阿部と啓介が連絡していた。

明日香も電話に出る。

恵子はいつも、元気そうだった。

いつも、明日香のことを心配していた。

「大丈夫だよ

と、明日香も恵子もこたえる。

それが、おかしくて笑った。

後ろの小さなステージでは、

ミュージシャンが、バンドネオンを弾き、タンゴを奏でる。

この地区は、どこでも音楽があった。

音楽による地域の活性化と、子供達の育成を目指していた。

いい国。

と安心したら、サミーに怒られた。

（この通りを、少しでも離れたら、命がなくなるぜ）

明日香は、それも分かっていた。

寝泊まりしているスタジオ上のアパートから、

そんなに、遠くないところで、銃声がきこえた。

それは、1晩だけではなかった。

パトカーの音は、日常の当たり前の音になっていた。

明日香は、ジントニックをおかわりした。

「失礼…。あたしにも、ジントニックを」

隣に、女性が座った。

明日香には、誰かわからなかった。

妙に存在感がある。

店内が騒めく。

明日香は、隣を見た。

よく見ると、年をとっているが、

それを感じさせない。

目に、力があった。

バーテンが、ジントニックを女性の前に出す。

女性は、グラスを手にとり、明日香の方を向くと、

「乾杯、よろしいかしら？」

明日香は一瞬唖然とし…はっと我にかえると、

慌ててグラスを手にとる。

その姿を見て、女性はクスッと笑う。

明日香は、恥ずかしそうに、乾杯する。

女性は、グラスを傾けた。

明日香も飲む。

女性は、そんな明日香の様子を眺めていた。

「アスカ・コウヅキね」

明日香は…

この女性が、誰かわかった。

「マリーナ・ヘインズ…」

マリーナは微笑むと、明日香に握手を求める。

グラスを置き、

明日香は、マリーナの手を握った。

（何て大きく、ゴツゴツした手…）

優しく微笑む顔と違い、手は力強い。

（これは、母親の…本当の女の手だ）

「かわいいわね」

握手を解くと、マリーナはまたクスッと笑った。

「去年は、カズミにとられた…あたしが、貰うはずだったもの…」

マリーナは苦笑し、

「まあ、あれは…この国の気紛れ…」

グラスをゆっくりと揺らし、氷を鳴らした。

「2度はないわ。まして、亡くなった者を、利用するなんて…音楽を侮辱している」

マリーナは、明日香を見つめた。

明日香は、マリーナの視線をまっすぐに受け止めた。

和美のことを言われるのは、わかっていた。

利用してるかもしれない。

でも、

明日香は…

利用なんてしていなかった。

マリーナの力強い視線。

明日香は、そらさない。

「利用じゃありません！あたしは、意志を継いでるだけです」

「意志？」

マリーナのグラスを揺らす手が、止まった。

「ただ…自分の持てるすべてを、歌に託すだけです」

「あなたに歌えて？ジャズを」

明日香は首を横に振り、

「ジャズは、歌えません」

明日香の言葉に、マリーナは驚き、

「何が歌えるの？」

明日香は唾を飲み込み、

「あたしの過去から、今まで…育てた歌だけです」

「過去…」

マリーナが、何か言おうとした瞬間、

サックスの音が、店内の空気を変えた。

「ケイスケ…」

はっとして、マリーナはステージを見た。

いつの間にか、

啓介が立っていた。

一通り吹くと、

啓介はステージを降り、明日香達に近づく。

「お久しぶりですね。マリーナ」

啓介は、マリーナに挨拶した。

明日香は驚いた。

啓介は説明する。

「昔。彼女のアルバムに、参加したことがあるんだ」

マリーナは、肩を震わせて、

「ケイスケ…あなた程の者が…なぜ、こんな素人と組む?」

啓介は、首を捻った。

「素人?マリーナ・ヘインズともあろう人が、わかりませんか?」

啓介の視線と、マリーナの視線が絡み合う。

やがて…。

「お邪魔したわ」

マリーナは席を立ち、お金を置くと、

まっすぐに店を出た。

待たせてあった車に、マリーナは乗り込んだ。

明日香のことは、わかっていた。

だから、ここまで来たのだ。

だから、

なぜ、和美のことを利用するのかわからなかった。

彼女は、いずれ成功する。

それなのになぜ…

和美の名をだす。

それは…

まるで、急いでるようだった。

早く駆け上がる為に。

マリーナはまた、クスッと笑った。

「意志を継ぐ」

マリーナは、過ぎゆく街並みを眺めながら、

「そう簡単に、継がせないわ」

女王が、

明日香を認めた瞬間だった。

明日香の案で、サンプラーがライブで導入され、

啓介の学生時代の知り合いのＤＪが、参加する。

ラッパーはいれなかったが、ＤＪがＭＣを担当した。

武田は、順応力が高く、

ヒップホップのリズムも、叩き出すことができた。

本日の一曲目は、ア・トライブ・コールド・クエストのＦｉｎｄ Ａ Ｗａｙだ。

印象的なサンプリングループから、

明日香のトランペットと啓介のサックスが、韻をふむように、ラップする。

印象的なコーラス部分は、ＤＪが歌い、

２コーラス目からは、明日香が歌う。

武田のリズムが鋭い。

曲が終わっても、

武田のドラムだけは、終わらない。

まるで、ミックステープのように。

シンプルに単純な音。

堅いスネアの音が、観客の心を激しくノックする。

啓介のサックスが、宙を舞うように漂う。

デイアンジェロのＢｒｏｗｎ　Ｓｕｇａｒだ。

明日香のクールな声が、会場に響く。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕは、来ている観客に合わせて、曲調を変えた。

決して、媚びてるわけではなく、

あくまで、明日香と啓介をメインにしていた。

ただ…観客を楽しませたい。

明日香が、トランペットを吹けることもよかった。

明日香の歌声は、ダンスナンバーには向いてなかったけど、

トランペットは別だった。

オープンからミュート…

使い分けも鋭く、

得意のワッツゴーイングオンでは、

トランペットで、観客を煽りまくった。

そして、

Ｙａｓａｓｈｉｓａ…。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕは、

ライブバンドとしての実力を、発揮し始めた。

そして、そのライブの雰囲気は、オープンであり、

誰でもが、参加できる隙間を開けていた。

時に、ラッパーが上がり、自由にライムを奏で、

楽器を持った者が、音に交ざることもあった。

自由と楽しさ……そして、切なさ。

人種が入り交じり、ステージは、音という交流の場となっていた。

言葉が、通じなくても、人はコミュニケーションがとれる。

人の心は、言葉をこえるのだから。

店を終え、

恵子は、一人マンションに帰ってきた。

鍵をあけると、電話が鳴っていた。

慌てて取ると、啓介だった。

「母さん、元気にしてる」

「うん。元気にしてるわよ」

恵子の声の調子が、元気そうなので、啓介はほっとした。

「ちゃんと病院いってる?」

「いってるわよ。毎日」

恵子は、嘘をついた。

「もうすぐ発表がある。何とか、いけそうだ」

「そんな簡単に、取れるものじゃないわよ」

「取れるさ！ここ半年以上、俺は持てる力のすべてを使って、演奏してるんだぜ」

「誰だって、いつでも全力よ。それでも、たどり着かない…」

「大丈夫だよ」

「どうして？」

「和美に、明日香もいる」

恵子はしばらく無言になり、

「そうね。かずちゃんと明日香ちゃんがいれば…大丈夫かもね」

「俺だけじゃ、だめなのかよ」

恵子は笑った。そして、真剣な言葉で、

「あんたは天才よ」

「わ、わかってるんだったら、心配するなよ。絶対取るから、母さんの息子が」

「そうね。取れるわね」

「俺だけじゃない。明日香も和美も、母さんの娘だからな」

「わかってるわ。みんな…あたしの子供よ」

恵子は、目をつぶった。

「ごめん…母さん。大変なときに…そばにいなくって…ごめん」

啓介の言葉が止まる。

しばらく無言になる二人。

恵子は、目をつぶり、クスッと笑った。

「わかってるわよ。あんたが、アメリカに行ったのは…かずちゃんの為だけじゃなくて…あたしの為でもあるんでしょ」

遠い昔…。

あたしと、啓介だけだった時代から、

あんたは優しかったから…。

遠い昔の話・・になるわね。

恵子が、歌を歌えなくなってた時期。

幼稚園で、いやなことがあったらしく、
帰ってきても、泣き止まない啓介。
理由を言わない。
激しく泣き止まない啓介に困り、
仕方なく、
昔、すぐに泣き止んだ方法を思い出した。
恵子は、歌った。
優しく。
啓介は、恵子にしがみつき、
「ママは…もう一人のママも歌うひとだったの?」
恵子は驚いた。
「啓介は、安藤啓介だけど…ママは、安藤じゃないから…」
啓介の涙を浮かべた瞳が、せつない。
「だから…ママが、別にいるって…どっかに…でも啓介のママは…
ママだけだもん」

啓介を、ぎゅと恵子は抱きしめ、

「あたしは、啓介のママよ」

「ママは、ほかにいないよね」

恵子は首を横に振り、啓介の顔を見た。

「もう1人のママは、遠い国にいるわ」

「どうして、遠い国にいるの？」

「そうね。歌が上手だから、向こうにいったの」

「ママの方が、上手だよ。ママもいっちゃうの」

「いかないわ」

「ママの方が、絶対上手だもん！絶対！でも…いっちゃいやだよ。いやくなっちゃ、いやだよ」

また泣き出す啓介を、

恵子は抱き締めた。

「大丈夫。ずっと啓介のそばにいるからね」

「俺は、ママの子供なんだ。本当は、安藤なんていやだった」

啓介の声が震える。

「音楽も、俺が…生きてきたすべては、母さんから教わり、学んだことなんだ…だから！」

恵子は、息子の声を聞いていた。

「母さんの息子が、絶対に賞を取る。歌手である母さんの息子が！その姿を見るまで、絶対元気でいてくれ」

受話器を置き、

泣いてしまった恵子は、

アメリカから届いた荷物に気づいた。

中身は、ＣＤだった。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕのライブ盤。

ジャケットは黒一色で、白字でメンバー名が書いてあった。

恵子は驚き、大粒の涙を流した。

Ｋｅｉｓｕｋｅ　Ｈａｙａｍｉ

速水啓介と書かれてあった。

初めて目にした…心には描いていたが、隠していたもの。

恵子は、ＣＤを抱き締め、

ただ泣いた。

ラストレター

恵子との電話を終え、啓介はスタジオに戻る。

明日香だけが1人、ギターを片手にメロディを奏でていた。

聴いたことがある。

真夏の果実だ。

鼻歌まじりに歌っている。

啓介の姿を認め、弾くのをやめた。

「おじさん達は?」

リズムセクションがいない。

「疲れたから、少し休むって」

今までに、馴染みがない音楽をやらされ、

彼らは、いつも以上に疲れてるはずだ。

「よくやってくれているよ。感謝しなくては」

啓介はそう言うと、スタジオの壁にもたれかかった。

「ママの調子はどうなの？大丈夫かしら」

「たぶん」

「たぶん？」

「ああ…。俺に、本当のことはいわないだろ…心配させまいとな」

啓介は、ため息をついた。

明日香は、そんな啓介を心配気に見つめ、

「早くも帰らないとね。ママのもとに」

「まだ無理だ。もうすぐ発表がある。ノミネートされたら…帰れない」

啓介は、苛立ちと焦りがあった。

それは、音楽に対してではなく、

早く恵子のもとに帰りたいのだ。

胸騒ぎがしていた。

「とらなければ、意味がない…だけど、こんなに、長く離れていて…よかったのか…」

「ダブルケイに…ママのもとに帰ろうよ」

啓介の様子を見て、明日香が言った。

「え」

啓介は、明日香を見つめた。

明日香は、優しく啓介を見つめ、微笑んだ。

「あたしも…ママが、心配…ダブルケイに戻りたい」

「明日香…」

啓介は目をつぶり、

明日香の言葉を、噛み締めた。

自分自身に舌打ちすると、サックスを手にとり、凄まじいブロウを繰り広げる。

それは、泣き声のようだった。

啓介は、汗だくになりながら、吹きまくる。

明日香は、啓介の音を聴いていた。

啓介は吹き終わると、

「帰れない。今は」

また壁にもたれかかり、

「今、帰ったら…怒られる。例え…賞が取れなくても、許してくれる。だが、途中で帰ったら…絶対許さない。そういう母親だ…」

啓介は、サックスを置いた。

明日香は啓介の汗を、ハンカチで拭ってあげる。

「啓介は、天才だよ。だから、絶対取れるよ」

「俺は、天才じゃない」

「この国に来ても…啓介以上の音を、聴いたことないもの」

「フッ…天才なんて…自分で思うものじゃなく、他人が評価することだ」

「あたしは、あなたをそう思うわ」

啓介は、少し照れながら、明日香から視線を外し、

「俺のお袋は、天才だった。どんなに…否定的に聴いても、天才だ」

啓介は、明日香から離れ、
スタジオにある楽器達に触れる。

「安藤啓介…天才の息子…。皆、俺をそう見る。俺が、吹けるのも、

お袋の血をひいてるからだと！でも、違う！俺の音は、血なんかじゃない！母さんの愛情から、生まれた音なんだ！」

啓介は叫んだ。

「ＫＫで…いろんな人に支えられて、生まれてきたものなんだ。安藤理恵は、みんな知っている。だけど…」

明日香は、啓介を見守っている。

啓介の思いが、伝わってくる。

「速水恵子を知る者は、ほんの一部だ！俺は、母さんの息子として…母さんの音を、みんなに伝えたいんだ」

啓介は、明日香を見た。

「マリーナ・ヘインズはこの前、明日香に…和美を利用してると言ったが…利用してるのは、俺だよ」

啓介は、ドラムセットの中で座り込む。

「俺は…お袋も和美も、利用している…最低なやつだ」

明日香はゆっくりと、啓介に近づき、

ぎゅっと抱き締める。

明日香には、言葉がなかった。

抱き締めるしかなかった。

「最低じゃないよ」

やっと、

明日香は呟いた。

「最低じゃないよ。啓介は」

啓介は、明日香に抱き締められながら、

「ありがとう」

と、呟くだけだった。

CDをセットし、

恵子は、ソファーに腰を降ろした。

好きなお酒。

ワイルドターキーをロックで楽しむ。

そういえば、

このお酒を好きだったのは、健司だった。

最初は、全然おいしいと思わなかったのに…。

意地で飲んでた。

たぶん、女はお酒なんて、いつも…

意地で、飲みだすのよ。

いつのまにか、啓介もかずちゃんも、好きになってた。

音楽が始まる。

恵子は、静かに目をつぶった。

光が、恵子を包んだ。

眩しい光。

恵子の目の前のステージに、

啓介が、

阿部が、

武田が、

原田がいる。

そして、

明日香が歌っている。

明日香の声、啓介の音。

すべてがすばらしい。

観客の歓声が、ため息に変わる。

（そうか…取ったのね！）

かずちゃんに続いて。

恵子は、涙を流していた。

（あたしの子供達が！）

あそこにいるのは、

あたしの子供達なのよ。
あたしの自慢の子達よ。

次の日。
珍しく、ダブルケイの鍵が閉まっていた。
里美は、しばらく待っていたが、
恵子は来ない。
やがて、
亜希子が、車でやってきた。
里美から、店が閉まってるときいて、
青ざめた亜希子は、里美を乗せると、
急いで、恵子の住むマンションに向かう。
車で、１０分ほど走ると、恵子の住むマンションに着いた。
２人は、３階にある恵子の家に向かう。

ドアの前に立ち、チャイムを鳴らすが、

反応がない。

もしもの為に、

亜希子は、合い鍵を渡されていた。

鍵を開け、部屋に入った2人が見たものは…

ソファーにもたれて、

眠る恵子だった。

その手には、

大事そうに、ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕのＣＤを持っていた。

幸せそうな笑顔を、浮かべながら。

「姉さん…」

亜希子はその場で、崩れ落ちた。

今、１人の女が旅立った。

優しい笑顔を浮かべながら…

永遠の旅へ…。

啓介が、恵子に電話してから、

しばらくたった。

スケジュールが、詰まっており、クタクタになるまで演奏していた。

嫌な予感を忘れる為に。

ＬＩＶＥが終わり、

スタジオに戻って、休んでいたＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕに、日本から電話が入った。

サミーから…電話をかわった啓介は、落ち着いた口調で受け答えしている。

「すいません…おばさん…」

電話の相手は、亜希子だった。

「すぐに日本に戻ります」

啓介の口調が変わる。

「え？もう通夜も葬式も、すませたんですか！？」

亜希子は説明する。

恵子から、亜希子はきつく言われていた。

もし、あの子達が向こうに行ってる時に、何かあっても、

決して、すぐに言わないように。

あの子達のやらなければならないことが、終わるまでは、

絶対、日本に帰らせては、だめだと。

啓介は、静かに受話器を置いた。

「啓介…」

明日香が、そばに寄る。

「母さんが亡くなったよ。7日も前らしい…」

倒れそうになる啓介を、明日香が支えた。

明日香もまた倒れそうだったが、啓介を支えた。

「間に合わなかった…」

明日香の胸にしがみつき、啓介は泣き崩れた。

原田と武田も、声を殺して…泣いていた。

「畜生！最初から、わかっていたんだ！間に合わないことは」

阿部は叫んだ。

啓介と阿部は、知っていた。

恵子が、

末期癌であったことを…。

発見したときには、

すでに、

手遅れだったことを。

恵子は、病院で死ぬことより、
ＫＫで、最後まで過ごすことを望んだ。
例え、
病院にいたら、何日か命が延びたとしても。
医者いわく、
立ってるのも、奇跡だと…。
恵子は、痛みを感じなくなっていたのだ。
啓介は、恵子の気力にかけた。
彼女の夢だった…
アメリカでの成功を見せることで、命が長らぐことを。
死ぬ前に、夢を叶えてあげたかったのだ。
彼女の息子、速水啓介として。
阿部は、声を出して泣きながら、その場に崩れ落ちた。
「俺は…啓介とちがって、そばにいるべきだったんだ！それなのに、
それなのに…格好つけたいばっかりに」

阿部は、床を叩いた。

「俺は、ダブルケイに入りたかった！姉さんといっしょにやりたかった。ベースを始めたのも…アメリカに留学したのも、姉さんといっしょに…やりたかっただけなんだ！」

激しく叩きつける。

「今、ここにいるのだって…最後に…姉さんに、俺がアメリカで活躍する姿を…見て貰いたかっただけなんだ！そばにいることより、てめえのことしか考えてなかった…最低野郎だ！」

誰が、阿部を責めることができようか…。

ここにいる誰もが、

そばにいなかったのだから…。

四人が泣いてる。

明日香は、啓介を抱きしめながら、

阿部を心配した。

手が真っ赤になっている。

今、明日香は泣けない。

「阿部さん！もうやめて下さい」

阿部は…明日香の声で、叩くのを止めた。

そして、

明日香の顔を見ると、

「そうか…明日香ちゃんは…知らなかったんだね」

阿部は立ち上がると、

おもむろに歩き出した。

自分の鞄をあさり、何かを取り出す。

手紙だった。

阿部は、明日香に差し出した。

「姉さんからだ」

恵子からの手紙。

明日香は、手紙を受け取った。

「姉さんから預かってた…もし、あたしが…明日香ちゃんに会えなくなったら…渡してくれって…」

阿部はまた、泣き出した。

啓介も武田も原田も…
ただ泣くことしかできなかった。

明日香は、部屋に戻った。
まだ、明日香には実感がなかった。
頭が、ぼおっとしている。
恵子の病気のことも、詳しく知らなかった。
過労で倒れたとしか。

恵子からの手紙…。
しばらく…
明日香は、封を開けず、見つめていた。
開けることに戸惑う。
明日香は…
封を開けることにした。

明日香ちゃん…。

あなたがもし、この手紙を読んでるんでしたら、

あたしはもう…この世にはいないんでしょうね。

本当は、あなたが帰ってきた時、

あたしの口で伝えたかったんだけど…。

明日香ちゃん。

いつもありがとう。

あなたに出会ってから、４年近くたつわね。

初めて会った日。

あなたが、トランペットを吹いた日。

泣きながら店に来た日…。

あの時は困ったわ。

初めて、あなたが歌った日。

すべてを覚えています。

あたしね。

明日香ちゃん…。

ずっとあなたのファンだったのよ。

たぶん…あなたのファン第一号。

啓介より早いわよ。

世界中のあなたのファンに、言いたいわ。

あたしが、明日香ちゃんの1番最初のファンだって。

自慢したい。

自慢の娘だと。

ごめんね。

勝手に、娘だと思っていたわ。

たぶん、向こうの世界では、まだ知られてないわね。

向こうにいったら、あたしの娘は凄いんだって、自慢してやるんだ

から。

そう思うと、向こうに行くのも楽しみね。

いつまでも、まっすぐに素直なあなたの歌を、聴かせてちょうだい。

いつまでも、あたしはあなたのファン。

あたしの自慢。

あなたの歌を大切に。

歌うことを大切に。

いつまでも、あなたはあたしの自慢…。

あなたに会えて、幸せだったわ。

ありがとうね。

明日香ちゃん。

追伸。

啓介をよろしくね。

あいつが、ひどいことをしたら、化けてでも、説教してやるからね。

新たな光

ついにこの日が来た。

グラミー賞のノミネート作品の発表だ。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕは何と、

ジャズ部門と、ベストパフォーマー部門にノミネートされた。

ＹＡＳＡＳＨＩＳＡも、最優秀曲としてノミネートされていたが、

これは、和美が作曲者となっていることが大きかった。

ＹＡＳＡＳＨＩＳＡは、確実だといわれといた。

去年の不幸を、拭い去る為にも。

それは…実力でないと、いわれるかもしれないが、

明日香達は、気にしなかった。

ただ発表の、その日まで、

観客の前で、演奏するだけだった。

観客の反応こそが、すべてだった。

余程、危険でないかぎり、会場は選ばなかった。

確かに、差別はあったが、ライブを重ねるごとに、演奏を認める者も現れた。

あいつらは凄いと。

よければ認め、悪ければ認められない。

和美とのちがいは、ストリートに認められたかだ。

和美は、知識層や金持ちに好かれた。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕは、あくまで地域に密着し、仲間みたいになっていった。

和美も、ヨーロッパでは、そうしていた。

アメリカではそうする前に、有名になったから…できなかったのだろう。

明日香は、賞なんかどうでもよかった。

観客がいてくれることが、嬉しかった。

アメリカ中を飛び回り、ライブにライブを重ね、

明日香達は、レコード会社のバックアップよりも、観客の反響によ

り、話題となり、ノミネートされたのだ。

そのことが、明日香は一番自信となった。

だけど…いいことばかりじゃない。

疲れがたまったのか…明日香は、ここしばらく、体調がおかしかった。

早めに、病院にいくことにした。

異国の地だ。体調管理は、一番大切だ。

この辺りは、よくわからないので、サミーの奥さんといっしょにいくことにした。

涙は、手紙を読んだ日に流し終えた。

朝まで泣いた。

もう泣きたくても、涙がでないくらいに。

体がだるい。

疲れたのだろう。

今、倒れるわけにはいかない。

明日香は、病院に向かった。

診察後、病院から出ると、啓介から、携帯に電話があった。

「大丈夫か！」

啓介の心配そうな声。

恵子のことがあったから、過剰に心配している。

「大丈夫よ。まだ、検査結果はでないけど」

「いつ出るんだ？」

「来週よ」

「来週って…」

そう来週は、グラミー賞発表だ。

「大丈夫よ。絶対でるから」

明日香は、電話を切ると、ガッツポーズを取った。

元気を、振り絞らなければ。

来週。

長かった…この国の生活も終わる。

日本へ帰るのだ。

恵子のもとへ。

歌手

きらびやかな照明と、満員の会場の熱気。

そして、数多くのスター達。

その中に、場違いな日本人がいた。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕだ。

慣れない赤いドレスが、明日香には息苦しかった。

メンバーは、誰も緊張していない。

普段なら、感動するアーティスト達がそばにいても、

今の明日香達には、関係なかった。

明日香の隣には、マリーナ・ヘインズが座っていた。

次々と、発表される各部門の受賞者達。

ついに、

ジャズボーカル部門がきた。

高々と名前が、読み上げられる。

「マリーナ・ヘインズ！」

会場が興奮する。

立ち上がるマリーナは、顔を前を向けたまま、呟いた。

「お先に」

マリーナは手を上げ、歓声にこたえる。

「あたしは…来年はいないから」

そう言うと…マリーナは、笑顔のまま、ステージに向かう。

明日香は、その後ろ姿を見つめた。

去年は、和美が取った賞。

明日香は、マリーナの後ろ姿に、

和美を重ねていた。

明日香は、違和感を感じていた。

ここにいる自分自身に。

このようなエンターティメントな雰囲気は、似合わなかった。

クラブで、演奏を終えた明日香に、親しくなったＤＪやミュージシャンがきいてきた。

どうしてでるんだ。

でる必要がないだろ。

と口々に言われた。

あそこに、音楽はない。

（わかっているわ。あたしが、目指すものは、ここにはない）

歌手に、名誉はいらない。

和美の言葉が、甦る。

（あたしの音楽は、ここには似合わない）

「ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕ！」

会場に、バンド名が響き渡る。

ＹＡＳＡＳＨＩＳＡが取ったのだ。

和美と共作として。

これは、茶番かもしれない。

だけど、

曲に込めた思いと、演奏する気持ちは本当。

明日香達は、ステージに向かう。

ステージ上には、和美の写真が映し出される。

最高の茶番に、最高の思いを込めて…。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕの

アメリカでの最後の演奏が、始まる。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕは同時に、ベストパフォーマンスも受賞した。

それは、啓介に対してだった。

彼は、バンドの資金づくりにこの１年、数多くのレコーディングに参加し、名声を得ていた。

「ＫＥＩＳＵＫＥ　ＨＡＹＡＭＩ！」

のコールが響き渡った。

速水啓介。

深々と頭をさげる啓介。

彼の夢が叶ったのだ。

ステージ上に並ぶＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕ。

マイクの前に、明日香が立つ。

つたない英語。

つたない言葉で話す。

関係者にお礼を述べた後、

「この曲は…誰もが普通に経験し、本当は…とても特別で、感謝しなければならないことを歌っています。今ここに、あたし達が生きていられるのは、いろんな人の優しさ、思いやりがあったからです」

和美の写真をバックに、明日香は、心を込める。

「この世の中には、不幸なこと、分かり合えないことが、たくさん

あります。あたしも、すべてを理解していません。だからこそ、あたしとは、育った国も環境も違う人達には…あたしが、いろんな人から貰った優しさだけを伝えたい」

明日香の心に、和美の…恵子の…そして、渡り廊下での少年…去っていた人達の優しい笑顔が浮かぶ。

「誰も、傷ついたり悲しくならないように。あたしが、貰った優しさ達を…皆さんに伝えたい」

明日香は…

ミュートをつけたトランペットに口づける。

ＹＡＳＡＳＨＩＳＡを奏でる為に。

その後に

会場を後にする明日香達。

明日香は、やっと解放されて、大きく背伸びをした。

「帰ろうか！日本へ」

全員が頷く。

明日香は、軽やかに歩き出す。

「また…この国には来ることになる」

啓介は呟いた。

「お前らはな」

阿部達は、明日香と啓介を追い抜く。

「え？おじさん達は…」

「馬鹿。俺達は年だ。何度も、こんな国に来れるか」

「それに…日本には、本当のメンバーが待ってるんだろ」

「これが限界」

3人は、歩き続ける。

啓介は立ち止まり、3人の背に頭を下げた。

明日香が、そんな啓介に近づき、腕を絡めた。

「おい！」

戸惑いながら、2人は歩きだす。

「ねえ、啓介…あたしもしばらくは、ライブできなくなる」

明日香の言葉に、啓介は驚く。

「どうして？」

明日香は、啓介から離れた。

「まさか…音楽をやめる…」

「やめないわよ」

「じゃ、どうして…」

「わからない？」

啓介は焦った。

「ま、まさか」

啓介は、明日香に近づき、

両肩を抱き締めた。

明日香は、嬉しそうな顔をする。

「やっぱり、どこか悪いのか！」

明日香は、啓介を振り解くと、

「やっぱり…男の人には実感ないのかな…」

「明日香ちゃん。こいつは、だめだ」

「音楽バカだからな」

「サックスバカ…」

前で、２人の会話をきいていた３人は、肩をすくめた。

「男前で、もてるんだが…」

「俺があいつだったら、モテまくる自信があるぜ」

「サックスバカ」

３人の言葉に、イライラする啓介。

「鈍感」

明日香が、そっぽを向く。

「心配するな！俺達が育ててやるよ」

「昔ガキ1人、面倒みたしな。鈍感だが」

「鈍感サックスバカ」

やっと…啓介にも理解できた。

「えええー！！」

啓介は、慌てて明日香を抱き締めた。

「本当か！明日香」

明日香は、こくっと頷く。

「もう3ヶ月だって」

啓介は強く、抱き締めた。

「け、結婚しょう！」

「うん」

2人は、満面の笑顔になった。

3人は、その様子を見ながら、

「いつのまに…」

「まあ…野暮なことは考えるな」

「幸せが一番」

3人は、嬉しそうな明日香と啓介を見守っていた。

「あの2人なら、大丈夫だな。姉さん」

日本へ帰る日。

空港には、たくさんの人々が集まった。

「ここに、ずっといたらどうだ?明日香」

サミーが、寂しそうに明日香に言った。

明日香は、首を横に振り、

「待ってる人がいるから」

「大切な人なのか？」

明日香は頷く。

「とっても大切な人」

「そうか…」

サミーは、明日香をぎゅっと抱き締めた。

「いつでも、戻っておいで…もうお前は、俺達の家族だ」

「ありがとう」

涙を流しながら、明日香は深く頷いた。

アメリカ…。

この国も、大切な場所になった。

（また、いつか歌いにくるからね）

明日香達は、日本へと帰って行った。

なつかしい風景。

黄昏に包まれた店が見えた。

明日香は、走りだした。

ダブルケイ。

あたしが、、歌手として生まれた場所…。

大切な故郷。

まだクローズの扉を開けた。

「ただいま!」

カウンターの向こうに、いつもの

あの頃の恵子がいた。

笑顔で明日香を迎える。

「ママ、ごめんなさい」

明日香が駆け寄る。

恵子は笑顔で、首を横に振った。

「明日香！」

奥から、里美の声がした。

明日香が、里美の声に気をとられた一瞬、

明日香の前にいた恵子は、消えていた。

「帰ってきたんだ！明日香」

里美が駆け寄り、明日香に抱きつく。

「里美…さとみ！」

明日香も、里美を抱き締めた。

（ママ…ただいま）

これからの音

あれから少し、時は過ぎた。

ダブルケイは、いつものように営業していた。

ステージ上には、原田と武田、阿部がいる。

里美が忙しく、店を動き回る。

亜希子が料理を作り、

カウンターには、新しいバイトが入っていた。

ドリンク作りに、手間取っている。

「まったく…明日香はどこいったのよ！あの子の後、あたしのステージなのにぃ」

里美は、ペパーミントに戻り、音楽活動を続けていた。

「すいません、ビール」

と注文したのが、

ペパーミントのメンバーだったので、里美は切れた。

「あ、あすかあ！」

街中の小さなカフェ。

今日は、何組かのバンドが特別に演奏する。

幸子とゆうは、ユニットを組み、

順調に、活動を続けていた。

緊張している幸子に、

そっとゆうはキスした。

「大丈夫だよ」

幸子はゆうを見つめ、優しく頷いた。

今日は店に、幸子の母と兄が来ていた。

幸子達の出番が来た。

幸子達は、簡易ステージに上がる。

幸子は、

母と兄の方に向かって、頭を下げた。

母が泣いていた。

家出してから数年。

行方も知らなかった娘。

まだ今は、話すことはできないけど、

いつかは…。

幸子は、ゆうのギターに合わせて歌い出した。

子供の笑い声。

まるで…歌っているよう。

明日香は、ゆっくりとメロディーを口ずさむ。

「香里奈は…歌が好きなのね」

明日香が微笑むと、香里奈も微笑む。

小さな手で、明日香の頬に触れる。

その様子を見守る啓介。

かつての自分と恵子を、重ねながら。

「明日香。いつ活動を再開するんだ?問い合わせが、殺到してるぞ」

啓介の言葉に、明日香は、香里奈をあやしながら、

「活動ならしてるじゃない。いつも歌ってるわ」

啓介は呆れた。

「ここだけだろ。ここ以外で歌っていない」

「仕方ないでしょ。香里奈は、まだ歩けないんだから!あたしは、香里奈が歩ける範囲までしか動かないの」

啓介は肩をすくめ、

「アメリカにいくのは、いつになることやら」

「あら、いくわよ。いつか香里奈と2人で」

明日香は、啓介を見ずに、こたえた。

「お、俺は！」

「まあ、香里奈次第ね」

明日香は悪戯ぽく笑うと、香里奈の為に歌う。

香里奈は、ああっと歌に合わせて、反応している。

「香里奈は、いい歌手になるな。大きくなったら、お父さんと、新しいダブルケイを組むぞ」

啓介は、香里奈の頭を撫でる。

「そんなことわからないわ。啓介より、彼氏と組むかも」

「何ぃ！俺より、うまいやつなんていないぞ」

「香里奈。自信過剰の男はだめよ」

明日香が、香里奈に言い聞かすように言うと、

香里奈は笑った。

「明日香！いたあ！」

里美が、2階に上がってきた。

「店、大忙しなのよ！みんな、あんたの出番待ってるんだから！早くしてよ」

「わかったわ」

明日香は、香里奈を見て、

「ちょっとママ、歌ってくるからね。大人しくしててね」

明日香は、香里奈を里美に預けた。

香里奈を抱く里美。

啓介が、先に下に降りた。

「じゃあ、里美。香里奈をよろしくね」

明日香は、香里奈のおでこに口づけする。

「ちょっと待ってよ。香里奈の面倒見てる場合じゃないの！店どうするのよ」

明日香は、香里奈に手を振りながら、

下に降りていった。

残された里美の中で、香里奈が笑う。

里美も笑いかける。

「ったく…結婚する前に子育て、詳しくなってどうするのよ」

里美の頬を、香里奈がつねる。

「痛っ！まったく…彼氏もいないのに…」

里美のため息が、合図のように、下から歓声がわく。

明日香の歌が、始まったのだ。

新たなプロローグ

やっと着いた。

結構、辺鄙な所にあるんだ…。

少女は駅を降り、目指す場所を確認した。

七時オープンだけど、少し早く着いてしまった。

ダブルケイ。

少女は、カバンからＣＤを取り出した。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕ…。

大ファンだった。

特に、歌声が大好きだった。

あたしが歌えるなら、こんな風に歌いたい。

こんな風に歌えたら、どんなに幸せなんだろうか。

少女は意を決して、

まだクローズとなっている扉を開けた。

カウンターの向こうに、憧れの人がいた。

少女は興奮して、叫んだ。

「は、速水、あ、明日香さんですね！あ、あたし…あなたの…」

明日香は、準備の手を止めた。

少女の腕の中にあるＣＤに気づき、微笑んだ。

「あなた…未成年ね。コーヒーしかないけど、いいかしら？」

優しさを伝える。

こうして、人は出会い、育っていく。

いろんな人に貰った優しさを、

次は、自分が与える番だから。

黄昏に香る音色。

完。

番外編　煙草の似合う女

ストレートで、流れる川のように、きらきらと輝く髪をなびかせて、

速水恵子は、歩いていた。

高校は、もうすぐ卒業する。

大学進学も決まっていた。

日本は、好景気を迎え、

もうすぐバブルという…夢より、お金が有り余る時代を迎えようとしていた。

音楽は、打ち込みの機械的な音が流行り、

ロックなど、生音が古いとされ、

シンセサイザーなどの音が、未来的だと言われ、フュージョンという音楽も流行っていた。

何となくや曖昧…。

限り無く透明に近いなど…

その曖昧さこそが、未来だったのかもしれない。

恵子もまた…何となく、生きている者の1人だった。

ワイワイ騒ぐ癖に、熱くなることがダサい。

何となく生きていても、

世の中は上向きで、

働く所も、いっぱいあった。

でも何となく…何となくは嫌だから、

自分を持とうとしたけど、

浮かれた世の中は、

楽しげに、誘惑だけを振りまいていた。

誰もが、このままでいられる…

幻想だけ持っていた…

あの頃。

18歳の恵子には、時の過ぎ行く日々など、

気にしては、いなかった。

何となく、誘われたコンパに、恵子はいた。

人々が騒ぐ熱気と、グラスの音。

そして…タバコの匂い。

男達が優しく、女を扱い、

笑顔で誉めている。

（そう…この時代からかしら？）

男は下心を、優しさにかえて、女を口説くようになったのは…。

それまで、高校生だった女達は、

面と向かって、同年代の男にやさしくしてもらったことがない。

それが、コンパなどで会う男は、

まるで、女王様のように扱ってくれる。

それは、嬉しくて楽しいに決まっている。

高校の時より遥かに…恋人ができる確率は、上がる。

「速水さん。飲み物、おかわりする？」

愛想笑いを浮かべる男に、

恵子はタバコをつけ、
ちらっと見、
タバコを吹かす。
笑顔の男の額が、ピクつく。
恵子はゆっくりと、笑顔を見せ、
「まだ大丈夫です」
やんわりと断った。
「あっ…そう…」
男は諦めて、隣にターゲットを変える。

タバコを、奥まで吸い込むことは、できなかったけど、
年齢よりも、大人びて見える恵子は、
タバコにより、さらにミステリアスな雰囲気を、醸し出していた。
別に、愛想が悪い訳でもなく、
逆に、面倒見がよい恵子は、

女子高に通っていたが、人気があり、初めてラブレターを貰うも、
そこで経験した。

モデルでもしない。

と、町を歩いていたら、

声をかけられたこともあった。

コンパにもよく、誘われていた。

女の子は、恵子がいると安心できたし、

男は、恵子を落とそうと必死になった。

そんな時、タバコだった。

あまりにも、様になっている姿は、

男には、容易に近寄り難かった。

恵子が、短大に通うようになったある日。

いつもの土曜日のコンパ。

「ちょっと、変わった所があるんだ。少し高いけど…ボトル入れてるから」

コンパの主催者が、二軒目に連れてきたところ。

大きな木造の装飾が、施された扉を開けると、

飛び込んできた…

生音。

「うわあ〜おしゃれ」

恵子の友達が、感激の声を上げた。

世の中、打ち込みが流行っていたけど、

女を口説く店として、

こういう店が、老舗以外にもできていた。

雰囲気の音楽。

時代遅れとなったジャズや、オールディーズを演奏する店。

恵子達は、あいたばかりのステージ近くに通された。

ジャズというものは、聴いたことがなかった。

いや…

音楽というものを、意識したことがなかった。

曲が終わり、女の歌手がステージを降りると…。

恵子の目線の先にいた細身のスーツを着た男が、にやりと笑った。

恵子とステージは、離れていたけど、

恵子には、その口元の変化がわかった。

男は、トランペットの先につけていたハーマン・ミュートを、外すと、

突然、

オープンで吹き出した。

トランペットの疾走が始まる。

一瞬だけ、すべての観客がちらりと、ステージを見たけど、

すぐに会話に戻る。

ｈａｒｄ　ｂｏｐ。

恵子には、それが分からなかった。

のちに…ワーキンという曲だと知ることになる。

バラード調でなくなった演奏に、

「うるさいなあ～」

一緒に来ていた男が、ステージを睨んだ。

恵子は、自分のいるテーブルを見渡した。

（あ…）

恵子は、心の中で呟いた。

（感じないんだ…）

音に耳を傾けない人達。

確かに、無理に聴く必要はない。

だけど…。

恵子は、ステージに目を戻した。

これは真剣で、

まっすぐな心に、訴えかける音だ。

トランペットの疾走を、煽るように、

ドラムも疾走する。

「この話うけるでしょ～馬鹿みたい……って、速水さん、聞いてる？」

隣に座る男が、恵子に話かけてきた。

「速水さん！」

「あ…はい…」

やっと気づいた恵子は、愛想笑いを浮かべ、

そして、徐に、

タバコを取り出した。

静かにタバコを吹かす。

その姿に、男は黙り込む。

恵子は、壁をつくった。

すると、

男は立ち上がり、

「ここ…うるさいから、出ようぜ」

いきなり、席を離れる。

「そ、そうね」

恵子の友達も、席を立つ。

「おい！音、うるせえんだよ」

レジで、男は店員に文句を言った。

恵子は、すぐには席を立たなかった。

「ちょっと！ケイちゃん」

友達が慌てて、恵子に走り寄る。

仕方なく、席を立つと、

恵子は、ステージに振り返った。

演奏は続いている。

口元から、タバコを抜き去ると、

恵子は、灰皿にねじ込んだ。

そのまま…前を向くと、

恵子は、歩き出した。

演奏は、唐突に終わった。

店の支配人が、演奏の停止を命じたのだ。

「もっといい所で、飲みなおそうぜ」

後ろ髪を引かれながら、恵子は店を出た。

「次やったら…クビにするだってよお～。畜生が」

店の裏口から、出てきた健司達。

近くにあったダンボールを、蹴飛ばした健司に、

井守が呆れた。

「仕方ないだろ?ここでの仕事は、ムード音楽を奏でることなんだから…」

「はあ～？だったら、レコードでもかけてりゃ～いいだろ！俺達を、雇わなくても！」

健司は、井守に食ってかかった。

「阿呆があ！それが仕事だろが！」

井守も言い返す。

「仕事？こんな、カラオケみたいなことをやるなんて、きいてないぜ」

健司は、井守を睨む。

「隼人！」

井守は、一番後ろにいた武田を叫んだ。

武田は肩をすくめ、

「健司には、説明してないよ」

「な！？」

井守は絶句する。

「こいつに、言ったら…仕事やらねえもん」

武田の言葉に、井守は怒りながら近寄り、

「てめえも、てめえだ！健司と一緒に、熱くなりやがって」

井守は、武田の胸倉をつかんだ。

「仕方ないだろ？あの場合…」

「観客がいたんだ…」

健司は、3人に背を向けて、空を見つめながら、呟いた。

先ほどから、一切口を開いていない原田も、頷いた。

「真剣に、聴いてたお客がいたんだ…。1人だけな」

「観客？何だ、そりぁ？聴いてるやつぐらい、いるだろが」

井守は、呆れながら言った。

「ただ聴いてるじゃない…。魂が、震えてるんだ」

健司は、歩き出す。

「訳わからないことを…」

井守は頭をかき、ため息をつくと、歩き出した。

「健司！今度は、ちゃんと吹けよ！俺らみたいなのが、やれる場所なんて、あんまりないんだからな！」

井守の叫び声に、

健司は振り返り、

「だったら、学校に戻りやがれ！」

「な、何だと！」

怒る井守。

武田は、ため息をつき、

原田は、欠伸をしていた。

彼らは、同じ大学のジャズ研にいた。

今は、ほとんど学校にいていない。

毎日、音楽を演奏できる場所を探して、歩き回っていた。

音楽を究めるには、人生は短い。

その短い人生を、いかに過ごすのか。

音楽の終わりが、近づいていると、多くの業界人が言った。

確かに、ジャズもロックも死んでいた。

あの帝王さえ、引退して出てこない。

街中に溢れる、打ち込みの音…。

（ありゃあ…商品だ）

芸術ではない。

そう健司達が、大学という揺りかごの中で、思っていた頃、

ある歌手が登場した。

彼女は、挑戦的だった。

世間にも、音楽にも、

自分自身にも。

挑戦的であり、実験的であり、

かつ、革新的である歌手が、売れることはない。

だけど、彼女は違った。

タイミングが、よかったのかもしれない。

実力があっても、売れない天才はいる。

真の天才は、理解されない。

すぐには。

普通の…どこにでもいる天才は、理解される。

まだ理解しやすいから。

彼女は、普通ではなかったけど、

彼女の歌声は、人の意識の下を、触れることができた。

人は、心臓の音を意識しないように、

彼女の歌声は、無意識に、人達を包んでいた。

その歌手の名は、

安藤理恵。

「この歌声が…街に流れてるかぎり、俺達にも、希望がある」

健司は歩きながら、

どこからか流れてくる音に、耳をすませた。

「こいつは天才だよ…。俺達とは、違う…」

井守は力なく、呟いた。

「俺は天才だぜ」

健司は、自分を指差した。

「…俺も…そう思ってるよ…だから…ここにいる」

そう言うと、井守は足を止め、

「だけど…。これが、限界なんだよ。ちょっと演奏して、小銭を貰う。俺達は、カラオケより自由がない！」

井守は、絶叫した。

「本物の音に、本物の観客！学校での発表会みたいな…御遊戯ではなく、本物を！！」

井守の絶叫は続く。

「うおおお！どこにいるんだ！本物の観客なんてよお！ただ女を口説く為の、ＢＧＭじゃねえかよ！」

「それがどうした？」

井守の叫びに対して、

健司は、冷たくこたえた。

武田はまた、ため息をつくと、

タバコを吸おうとしたが、

ポケットから取り出した箱には、1本も残っていなかった。

すると、原田がタバコを差し出す。

武田はフッと笑うと、飛び出した1本をくわえ、

原田は、それに火をつけてやった。

「て、てめえ～」

井守の怒りを、冷ややかに見つめながら、健司は言った。

「俺らがやってる音は、ＢＧＭだ」

「健司！貴様。音楽家としてのプライドは、ないんかよ」

井守は、健司に近寄り、胸倉をつかんだ。

「音楽家って…何よ？」

健司は、右手に持った楽器ケースを握りしめ、

「なあ?井守…。アーティストって何よ?」

井守は、自分を見つめる健司の真っ直ぐな瞳に、動けなくなる。

「俺達のやってる音は、世間で流行ってる曲でもねえ。普通の人間は、聴かない音だ!だから…知らない曲なんて、ＢＧＭだ!!だけどな」

健司は、井守の腕を取った。

「だからこそ、真剣にやるんだよ!誰かの心に、少しでも訴えるようにな!」

武田と原田は、黙ってタバコをふかしている。

「音楽家?アーティスト!?…そんな言葉の、自己満足なんて、いらないだよ!!」

健司は、井守の手を離すと、

「音楽は、観客がいてこそだ!本物の観客だと!俺達が、本物の観客にするんだろうが!ボケがあ!」

健司はそう叫ぶと、

また前を向いて、歩き出す。

その後ろ姿を、呆然と見送る井守の肩に、武田が手を置いた。

武田はタバコを捨て、

「俺たちゃ…そんな奴らの集まりだろ?」

武田も、歩き出す。

そして、少し振り返り、

「まあ…お前は辛いよな」

すぐに前を向き、右手を上げた。

原田は、欠伸をすると…タバコをくわえながら、歩き出す。

「ケッ!そんなこと…わかってる…」

井守も歩き出す。

「だけど…切ないじゃねえかよ…。俺達の音が…ＢＧＭなんてよ…」

少し歩くと、理恵の歌もきこえなくなった。

終電近くの慌ただしい街並みに、

一番似合う音は、車のクラクションと、

行き交う人の足音だった。

KとK

二軒目のＢＡＲを出て、みんなと別れると、

恵子は、最終近くの駅へと、向かっていた。

タクシーの川の向こうに、駅が見えた。

信号は赤。

もう１２時前だというのに、

人は多い。

一番前で待っている恵子の横に、

誰かが立ってた。

恵子は反射的に、ちらっと隣を見た。

視線は下にしていたから、

見えたのは、手元だけだった。

楽器ケース。

恵子が、視線を上げた瞬間……信号は変わった。

動き出す人達。

楽器ケースを持った男は、真っ先に歩き出す。

黒いスーツの後ろ姿。

恵子は、歩き出すタイミングを失い、止まってしまう。

人々が、恵子を追い越していく。

「あ…」

恵子の動きは、完璧に止まった。

交差点の途中、

楽器ケースを持った男は振り返り、

恵子を見ていた。

2人の動きが止まる。

それは、ほんの数秒のことだろう。

男はただ…頭を下げると、すぐに歩きだした。

恵子は、そんな男をしばらく黙って、見送ってしまった。

信号が変わった。

渡れなかった恵子の前を、タクシーの群が、次々と通り過ぎていった。

信号を渡り切り、

駅への階段を、降りていく健司は…なぜか、ニヤニヤと笑っていた。

自分では、笑っていることに、気付かない。

階段の途中で、足を止め、

振り返って、見上げた。

さっきの女は、来ていない。

「あの子は…」

健司は、壁にもたれた。

「タバコの似合わねえ女だ」

客席にいた…本物の観客。

健司は、待つことにした。

なぜ、待つのかわからなかったけど、

健司は待った。

この駅に、向かってるのかも、わからない。

この階段を降りてくるかも、わからない。

健司と同じ時に、信号を渡った人達は、

健司を追い越していった。

しばらくの間。

見上げ続けていた健司の目に、女が映った。

ステージ上からではなく、

外で、まじまじと見た女を…健司は、美しいと思った。

驚く女に、健司はまた、頭を下げた。

女も、途中で足を止め…頭を下げた。

健司は思った。

訂正しなければ…。

この女はいずれ、

とびきり、タバコが似合う女になると。

「あっ…」

思わず、小さく声を出した恵子は、

地下鉄への階段を降りる途中に、健司がいることに気づいた。

健司は、壁にもたれ、じっとこちらの方を見ていた。

足が止まりかけたが、

恵子は、止まる理由がないことに気づき、

階段を降りていく。

もう終電が近いし、戸惑っている余裕もない。

急がず、慌てず、

ゆっくり降りていく恵子を、健司は目で追っていた。

恵子は、健司の前を通る瞬間、軽く頭を下げた。

知らない訳ではない。

だけど、自分はただの観客。

向こうが、覚えてる訳がない。

少し速度を上げようとした、恵子の背中に、

「え…演奏…どうでした？」

緊張した声を、何とかクールに抑えて、健司は声をかけた。

（あたしに気づいていた）

恵子は、足を止め、

思わず振り返った。

だけど、言葉がでなかった。

しばらく…ほんの数秒、

視線を合わせた2人。

「あ…あのお」

突然で、何を言ったらいいかわからなかった。

だから、素直な言葉を。

「曲は、知りませんでしたけど…演奏は、最高でした」

恵子は、健司の顔を見れなかった。

「初めて聴く曲なのに…心の中に響いて…か、感動しました！」

少し興奮気味に、答えてしまった恵子を見て、

健司はにこっと笑うと、

「ありがとう」

そう言うと、階段を上がっていた。

顔がにやけてしまって、

恵子のそばにはいけない。

少し、ポカンとしてしまった恵子は、

下から聞こえる最新電車を告げる駅員のアナウンスに、はっとなって、

慌てて、階段を降りていった。

逆に、再び地上に出た健司は、

もう帰れなかった。

さっきの最終は、健司にも最終だった。

だけど、

「乗れるかよ」

ニヤニヤ笑いがとれない。

健司は、ポケットからタバコを取り出した。

「わかるやつも、いてくれる」

健司は、タバコをくわえながら、

しばらく火をつけず、

ただニヤニヤと笑い続けた。

「だから…音楽はやめれない」

ずっと

ダブルケイをでて、山道を5分ほど上がると、
小さな墓地があった。
そこに、恵子は眠っていた。
明日香は毎朝、ダブルケイにいるときは、墓に挨拶に来ていた。
手を合わせた後、明日香は呟いた。
「ママの事だから、多分こう言うわね…」
明日香は微笑んだ。
「毎日来なくていいのにって」
しばらくして、明日香は苦笑した。
振り返り、
町側を見ると、数多くの人口物が広がっていた。
昔は、空襲で何もなかったというけど、今は…
みんな、頑張ったのだ。

後ろを振り返ると、広大な緑が広がっていた。

自然と人口の狭間に、ダブルケイはある。

それは、

恵子が意識していたのかもしれない。

狭間で奏でる音楽。

左下には新興住宅地が広がり、

ダブルケイのメインのお客さんは、その辺りから来ていた。

明日香は、恵子に敬礼すると、

店へと下りて行った。

店に着くと、ポストに手紙が来ていた。

招待状。

幸子とゆうからだ。

結婚式。

（遂に結婚するんだ！）

明日香は、感嘆した。

すると、突然携帯が鳴った。

出ると、アメリカからだった。

サミーだ。

今度のアルバムも、ミックスダウンは、サミーにしてもらう。

サミーは言う。

「俺はもう年だから…お前らのアルバムで、最後だ」

何度も言うから、口癖のようだ。

あとは、必ず切る前にこう言う。

「俺が電話してることは、啓介にいうなよ！俺みたいな男前と、話してたら…妬くだろ？」

明日香は、爆笑してしまうけど、サミーはまじだった。

「いつ、アメリカにくるんだ？みんな、待ってるぞ。アルバムだけだしやがって…たまには、顔をだしやがれ」

明日香は店前で、ダブルケイの看板を眺めた。
日差しの照り返しで、キラキラ輝いていた。
「もうすぐいくわ！家族みんなで」
「そうか」
サミーの笑い声で、電話は切れた。
明日香は、空を見上げた。
（それが運命なら…）
逃げずに、真っ直ぐ歩いていたら…
必ずたどり着くはず。
中から扉が開いて、
啓介が出てきた。
「おかえり」
「ただいま」

少し照れくさい。

啓介が手をのばす。

明日香がつかむ。

ぎゅと力強く。

二人は手を繋いだまま…ダブルケイの中に入った。

明日香は思った。

ずっとこの手を離さずにいよう。

ずっとこの店で。

ずっといっしょに…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1091i/

黄昏に香る音色

2010年10月10日03時40分発行